
魔王の純情

日野望美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の純情

【Nコード】

N1841L

【作者名】

日野望美

【あらすじ】

ラブラブであまあまな、恋愛ファンタジーです。

恋愛経験ゼロの女子高校生が、妖艶な美女に変身するかも？

白羽恵瑠は強くて賢くて女の子に大人気の高校三年生。

志望大学には一発合格するし、剣道の大会で優勝するし、仲間も友達も居るし、天涯孤独でも幸せだった。でも、彼に出会ってから、何かが大きく変化し始めた。ラッキーなのか、アンラッキーなのか？

それにしても、アリエルって？

1 邂逅

高々と竹刀の音が会場に響く。三人の審判は一斉に白旗を揚げた。
「勝負あり！」

剣道の甲子園などと言われて来たこの大会の女子の部の決勝戦で、
しろはねえる白羽恵瑠は見事な一本勝ちを決め、母校を優勝へ導いた。

「志望校も剣道も一発で決めたな！見事だ、白羽」

恵瑠が高校三年になっても部活を続ける事に対して反対してきた学年主任だったが、日本一の難関とされる国立大学に合格し、三月のこの時期まで稽古に励んできた事を今は高く評価している。

文武両道とは白羽恵瑠のためにある言葉だと、彼女を知る者は噂する。その上人気モデルにも有名女優にも引けをとらない容姿とくれば、同性の妬みや僻みを受けても不思議では無いはずなのだが、恐ろしいほどサッパリした気持ちの良い性格で、バレンタインのたびに女子生徒から大量のチョコをもらう人気ぶりだ。その事が男子生徒たちに複雑な意味合いの溜め息をつかせる結果となって居るのだが、恵瑠本人は全く無頓着だ。

同じ高校の同級生や剣道部員やバスを仕立ててやって来た応援団の連中が、試合の結果に熱狂するのは当たり前なことだろうが、決勝戦で戦った黒井翼が握手を求めて来たのは恵瑠も驚いた。

「あれほど見事に一本取られちゃうと、腹も立たないよ。四月から大学でもよろしく！」

「同じ大学なの？ 心強いな」

「白羽さんも剣道続けるよね？ あの大学の剣道部はこの所、成績も振るわないけれど、白羽さんが一緒に入部してくれたら、きっと立て直せると思う」

「黒井さんが一緒なら、私もがんばれそうだよ」

恵瑠と翼は四月の再会を約して、別れた。

大会直後の熱気がおさまり、着替えを済ませ、恵瑠も防具をバスに積込んだ所で、ふと気になって会場の方へ戻ってみることにする。

「白羽先輩、もうすぐバス、出発しますよ」

「うん、ほんの数分で戻るから大丈夫」

何か忘れ物がある、いや、誰かが待っている、そんな気がするのだ。

会場となった体育館入り口のベンチに、誰かが座っている。その他の人影は見当たらない。

「白羽さん」

声をかけて来たその男性は、見るからに仕立ての良さそうなスーツに身を包み、殺人的といって良いほどの艶やかさを含んだ端正な顔立ちをしている。

「まあ、こちらにおかけなさい」

「はい」

気がつくとも恵瑠は素直に返事をしてその男性の隣に腰掛け、大きな赤いバラの花束を渡されていた。そもそも、初対面のはずなのに、何だろう？ 自分はこの人を知っているのではないか？ 恵瑠は、自分で自分自身の行動が不可解だった。

「優勝、おめでとう。四月からは大学でもがんばってね」

「……あの」

「私の事が思い出せない？」

「はあ……」

「去年の十一月の大会で、私に一生懸命拍手してくれただろう？ 嬉しかったよ」

「あ！ 馬飼野七段でいらっしやいますね」

武道館で行われた全国大会の優勝者だ。あの時は恵瑠たち剣道部

員もOBの応援や、剣道の勉強もかねて熱心に観戦していた。馬飼まかい野治のさむは近来稀に見る試合巧者で、名だたる強豪を次々一本勝ちで討ち取った凄い剣士なのだ。

「まあ、それはこの世界での仮の姿だけど、他には何も思い出せないの？　アリエル」

馬飼野治は警察官でも教員でも無い。剣道の世界では珍しい事、実業家のはずだ。それも、すこぶるつきの大金持ちだと聞いた記憶がある。それにしても、ありえるって誰？　何？

気がつくと思瑠は男の膝の上に抱きかかえられていた。え？

「大丈夫。誰にも見えはしないようにするから」

確か、そんな事を言われたような気がする。そして一瞬、馬飼野治の背中あたりで巨大な黒い翼が見えたような気がしたが……

「？」

「こう言う時は鼻で息をすればよいんだよ」

ええ？　私のファーストキスが！　それもいきなり、べろちゅうですか？

余りの衝撃で思瑠が言葉を失っている……

「アリエル、君は本当に無垢で愛らしい。大学に入学したら、ここに連絡をおくれ。待っているよ」

いかにも大切に仕方が無いといった手つきで髪をなでると、赤いバラの花束と名刺を残して男は姿を消した。

「思瑠！　もう出るよ」

「白羽先輩、急いでください！」

その声に正気ついて、思瑠は花束を抱え、名刺を握り締めてバスの方へ向けて走った。

1 邂逅（後書き）

恋愛ファンタジーと言つつもりで書いてます。

2 もつすぐ四月(前書き)

四月から大学生です

2 もうすぐ四月

恵瑠は天涯孤独だ。

両親は幼い頃に交通事故で亡くなり、父方の祖父母に育てられた。しかし祖父が中学入学の年に、祖母が高校に入学してすぐに亡くなって以降は、祖父母の残した家で一人暮らしをしてきた。祖父母は自分たちが恵瑠を残して死んで以降の事を真剣に考えてくれていたようで、きちんと公正証書遺言の形で細かな事まで決めておいてくれた。後見人もすっかり決まっただけで恵瑠の通う高校の理事をしている人に頼んだらしい。

「あの人はお祖父ちゃんの剣道の御仲間で、大きな会社の社長さんなんだよ」

祖母がそんな事を言っていたが、実はあまりよく覚えていない。祖母が亡くなった後、その理事さんの代理だという弁護士と高校の校長先生が来て、相続の面倒ごとや進学の費用や生活費について、不自由が無いように細やかに取り計らってくれた。

「白羽さんは元々特待生で高校の学費は免除だから良いけれど、剣道の遠征費用や大学の受験料や学費もこれから必要だ。白羽家の田んぼや畑のかなりの部分が国の開発計画で買い取られたのだが、その代金が結構な金額なので、これで間に合うだろう」と言う風に校長に聞かされている。色々手配をした理事という人は校長によれば「信頼できる立派な人」らしい。

後から知ったのだが、法律上は今、恵瑠の住んでいる家をその理事さんが借りている形になっていて、固定資産税や光熱費を全部負担してくれていたらしい。

赤いバラを貰って帰った翌日、恵瑠は高校の校長先生に呼ばれた。「大学進学後の住まいなどについて理事さんから御提案が有るそうだ」との事だった。恵瑠の住む家から電車を乗り継いで通えないことも無いので、下宿やアパートを借りるつもりも学生寮に入寮する予定も無かったのだが……

「なるほど、そうですか」

「ええ、ぜひ大学でも剣道をやって頂きたいですね」

校長室のドアをノックする寸前にこんな会話が聞こえた。

「どうぞ」

一礼して、部屋の中を見ると驚いた。あの、赤いバラをくれた馬飼野七段が居る。

ええ？ あのべろちゅうは何なの？ 脳内パニック状態の恵瑠に對して、馬飼野サンは涼しい顔だ。

「紹介するよ。こちらは君のお祖父さんの剣道での後輩に当たられる馬飼野理事だ」

「昨日、私、白羽さんの試合を観戦させて頂きましてね、少しお話もしました」

どうも恵瑠の祖父と馬飼野サンは、同じ剣道場での先輩後輩に当たり、剣の師匠の紹介で馬飼野サンが後見人を引き受けた、と言う経緯らしい。

「馬飼野理事がおっしゃるには、君の今の住まいは大学から一時間半以上かかる。でも理事の御屋敷から君が通学すれば、徒歩で十五分程度なのだそうだ」

「無駄に広いし、部屋は余っている。執事や家政婦は居るから、君は家事から開放されて勉学と剣道に集中できる。家具も揃っているから、大学で使う物以外は特に何も持って来なくても大丈夫だ」

（どうか承知してほしい、アリエル。決して悪いようにはしないから）

あ？　ありえる？　最後の方は会話じゃない？　テレパシー？

「是非、入学式にも出席させて欲しいな」

「私たちのころでは考えられませんが、最近は大学の入学式に親も出席するようですね」

「ええ。私は法的な後見人ですし、あの大学の卒業生ですし、一応親代わりという事で。記念写真も欲しいですね」

じつと恵瑠を見つめるまなざしが甘い。なんだか知らないがベタベタに甘い気がする。

「だめだろうか？」

何だろう、この、心臓に来る色っぽい声は……

気がつく、うやむやの内に四月一日から恵瑠は馬飼野家に住む事になってしまった。

「十二日の入学式に着る物はプレゼントさせて欲しい」とか、

「パソコンや携帯も新しいものが良いね」とか、

「運転免許は取っても良いけれど、実際の運転はまだダメだよ」とか、

恵瑠本人よりもあれこれ考えているようで、驚いた。

校長室を出てから考えてみたが、うまく考えが纏まらない。そもそも、ありえるって、何を意味するのだろうか？　なぜ、あの人はテレパシーのような能力が有るのだろうか？　自分を見る視線が強烈に甘ったるい気がするが、気のせいだろうか？　いや、キスされちゃったんだから……

あのキスの事を思い出すと、顔が赤らんできて脳の思考回路がショートする。

「そんな、頭の中身がうまく働かない状態で考えてみてもしようが無いよね」

剣道部の春休み期間の練習が今体育館で行われている筈なので、顔を出してみる事にした。

「白羽先輩！四月から馬飼野七段のお宅から大学に通われるんですか？」

え？幾らなんでも情報の伝達が早すぎる。どうしたんだろう？

「私も今日はここの練習に参加させて頂こうと思ってね」
「うわっ、いつの間に？」

何とすでに着替えて防具も付けた馬飼野治の姿が、そこには有った。

3 落ち着かない（前書き）

相手を好きになったと自覚する瞬間から恋愛が始まるんでしょうか？

3 落ち着かない

「あの名刺を渡した時点では君が大学に入学した後に、まずは『お友達から』お願いしようと思ったのだが、よくよく考えてみれば私は君の後見人の立場じゃないか。成人するまでは親御さんの代わりに、出来る事を何でもさせて貰おうと思ってね」

高校の体育館での剣道の練習が終わってから、恵瑠はまたまた断りきれずに馬飼野治の運転する車に乗せられていた。防具を持って帰るのが大変だから、送るとか何とか言われたのだった。それにしても、体を心地よく包み込む極上の皮のシートと言い、見るからに高級そうなフロアマットと言い、さすが超高級外車は違う。自動車マニアの男子生徒たちが噂していたこの車の値段は、気が遠くなるような途方も無い金額だった。

それにしても『お友達から』？ええ？何だろう、どう言うつもりなのだろう？年が親子ほどとは言わないが、十五歳も離れているし、大会社の社長で大富豪のはずだ。そんな人が……『この世界での仮の姿』とか何とか言ってなかっただろうか？

「とても、難しい顔をしているね。いきなり送るなんて言い出して不躰だったろうか」

酷く悲しげな声を出されると、恵瑠は何をどう言えば良いのか困り果てた。

「いえいえ、決してそんな風には思っていないせん」
「そう？ならば良かった」

「さあ、着いたよ」と促されて車を降りると、馬飼野^{まかいの}サンは甲斐甲斐しく恵瑠の防具を下ろして、当たり前のように家の中に上がり込んだ。

「是非、お祖父様とお祖母様に御挨拶させて頂きたい」と言うので、仏間に案内すると、何事か思う所が有るらしく熱心に手を合わせていた。

「君は幸せだったのだね。それがわかって、ほっとしたよ」

冗談抜きで本当に本気らしい。どうしてそこまでこの人が心配したのか分らない。

「どうして……そんなに心配して下さったんですか？」

「君が大切だから」

「なぜ、大切なんですか？」

「後見人の話をお受けした時は、人助けというかお手伝いと言うかその程度の感覚だったが、その後見する相手が君だったと知って嬉しかったよ。どうやら、まだ自分自身の事も思い出せないようだけど、その内きつと思いつけるようになるだろう、アリエル」

「アリエルって、何なのですか？」

「君自身の名前だ。根本的な存在としての」

「根本的な存在？そう言えば御自分の事も『この世界での仮の姿』とか仰ってましたね」

じつと無言で見つめる男の目は酷く優しい。

「もつと知りたいの？」

「ええ」

「ならば、君の方から私にキスできるかい？」

目が開いているとやりにくいかな？と男はつぶやき、目を閉じた。目が開いている時は、艶めいてドキドキさせられる感じが強かったが、目を閉じると端正な面差しの美しさが強く意識させられる。なんて綺麗なのだろうかと恵瑠は思った。思っただけでなく、どうやらそのような事を無意識の内に口走ったらしい。

「昔も君はそんな事を言ったな。何だか懐かしいよ」

声の響きの優しさ、懐かしさに胸がキュンとする。切なくて泣きたいような気分になる。でも……

「わ、私にはまだ無理です。スキルが足りません」

べそをかきながら、恵瑠はその男に抱きついた。

「その内、きつとしてくれると思って良いだろうか？」

抱きしめられながら恵瑠が無言でうなずくと、男は髪を撫でながら「今日の所はこれで帰るよ」と言っただった。

「四月から同じ家に住むのだし、気長に待とう」と言い残して恵瑠の家を出て行った。

男の車が去ってゆくのを見送ると、酷く寂しかった。

「恵瑠ちゃん！恵瑠ちゃんてば！」

裏の家の真知子が恵瑠を夕食に誘いに来た。真知子は恵瑠と同じ年で、幼稚園から中学までずっと一緒だった。「私は短大を出て幼稚園の先生になるの」と言っていたように、地元の短大に進学を決めている。彼氏は高校の同級生で、ずっと付き合っている。「将来はたぶん結婚する」らしい。恋愛スキルゼロの恵瑠からすると、フランスが取れた女の子だと思うのだ。

「ねえ、さっきの人、すごくカッコいい人だったね。ダンディな大人の男性って感じ」

「去年の剣道の全国大会で優勝した人なんだ。うちのお祖父ちゃんが頼んで、あの人の後見人になって貰ったみたいなの。私の高校の理事もしてる人で、大学の先輩なの。四月からあの人のお宅にお世話になるんだ」

「高そうな車に乗ってたけれど、お金持ちなんだろうね」

「執事さんや家政婦さんが居る御屋敷に住んでいるみたい」

「奥さんや子供さんは？」

「さあ、全然まだそんな話はしてないからわからない」

そうか……妻子が居て当たり前の年なのに……。なぜ勝手に独身のように思っていたんだろう。と言うか、そんな話は全くしないで

「キスできるかい」なんて……。

「恵瑠ちゃん……」

真知子は、驚いた。なんと恵瑠の目から涙が流れていたのだ。

4 新生活

「昔から忠実に仕えてくれる者たちはいるが、私には家族が居ない。誰も居ないのだよ。だから、君が私の家族となってくれれば、非常に嬉しい」

「あの……婚約されている方とか、お付き合いなさっている方はおいでにならないんですか？」

「居ない。そんな風に聞いてくれると言う事は、私は期待しても良いのかな」

微笑んだその瞳がまっすぐ自分を見つめているのを感じて、恵瑠の心臓は大きく脈打つ。自分はこの人を恐らく好きだし、この人も憎からず思ってくれているようだ。どうもよく分からない複雑な過去の経緯^{いきさつ}は有るようだが、その内に理解できるようになるだろうか？

なにはともあれ……この数日、心配でならなかった事が単なる取り越し苦労だったと知って、恵瑠はほっとした。相手に確かめもせず取り越し苦労するのは馬鹿げている、とあの日幼馴染の真知子^{まかしの おさむ}にも言われたし、もっともだと思ふのだが、どうも相手が馬飼野治だと、こういう風に話を切り出せば良いのかと言う事から始まって色々考えてしまうのだ。どうやって確かめようかと考えあぐねていた事を、本人からはつきり聞くことが出来て安心できた。

「食事は口に合うだろうか？」

「はい。とても美味しいです」

恵瑠の祖母が健康で気力があつた頃は「めでたい事」が有ると作ってくれた具沢山の散らし寿司、その寿司に良く似た感じのものと、恵瑠が大好きな茶碗蒸しに、これまた好物の竹の子の煮物、ほうれん草の和え物、胡麻豆腐……どれも懐かしい優しい味だ。食べているうちに、気持ちがあくつろいでくる感じがする。

今夜から、恵瑠はこの邸で暮らす事になる。当主である治の部屋と恵瑠の部屋は隣り合わせだ。

「鍵をおかけになれば、完全にプライバシーも保てます」と、案内してくれた恵瑠の親ほどの年に見える家政婦は言った。

「馬飼野さんは、鍵はどうされてますか？」

「旦那様は、一切鍵をおかけになりません。家の者は皆心得ておりまして、よほど重要な御用でも無い限りこちらに伺う事はいたしませんから、必要無いとお考えのようです」

恵瑠が使う事になる部屋にも独立したトイレ・バスルーム・ミニキッチンがついている。ベッドルームのほかに、テレビを見たりパソコンを使ったり出来る書斎兼リビングと言った感じの部屋が有る。「何でも御自由に御使い下さい」と言われたが、どの機器も最新型で操作は難しいかもしれない。部屋自体は機能的なのにゆつたりとした贅沢なつくりだ。

「お嬢様へのご進学のお祝いとして」大きなクローゼットに春物の服がたくさん納められ、ドレスサーには化粧品や道具類も揃っていた。

「私どもが選ばせていただきましたが、御入用なものは何なりとお申し付けください」

大変な金持ちだとは聞くが、これは余りに過分なのではないだろうか？ はっきりとは分からないが、ずいぶん高級品ぞろいのように見えるし……

夕食は美味しいが、まだ会話が弾むと言う具合にはいかない。聞きたい事は色々有るのだが、どう切り出すべきか、やはりしばらく考えてしまふ。

「あのパソコンは私が勝手に使って構わないのですか？」

「ああ、うちの会社の製品なのだが、設定などで分かりにくい事が有ったら、何時でも言ってくれ。殆どの事は私でも出来るはずだが、手に余る事があれば会社の技術系のものをすぐ呼び寄せるよ。最近パソコンが使えないと、大学の授業にも差しさわりが色々あるからね」

大学から送られてきた入学の準備のための案内にも、パソコンが必須だと書いてあった。自分用のものが無い場合は、大学生協で取り扱うものが有るらしい。費用に関して困る場合は学生課に申し出て資金援助を受けるように、ともなっていた。

「あの……洋服や化粧品まで、ずいぶんたくさん、ありがとうございます」

「気にしないで、気軽にどれも使って欲しい。ああ、後は君自身が居ないと合せにくいから、靴がまだなんだ。明日は幸い私も休みだから、買いに行こう。それとも何か予定があったかい？」

「いえ、何も無いですけど」

「じゃあ、良かった。キチンと君の足の木型を作ってもらっておくと、後は気軽にデザインや色を言えば、オーダーしやすくなるからね。それに入学式に着てゆく服の最終フィッティングもしておこう。空恐ろしいほどの金額を自分に使ってくれているようなのだが、どう考えるべきだろう？」

「あの……こんなにしてく頂くと、どうしたら良いのか途方にくれま
す」

「余りこだわらずに、受け取ってくれないか？」

「なぜ……ですか？」

「君は私の家族で特別な人だから、と言う答えでは納得できないかい？」

夕食の後、最新型の携帯電話を渡された。輝く乳白色のボディに細い金色のラインが入っている。デザインからすると特注品なのかも知れなかった。

「私のものと色違いなんだよ」と言ってみせた艶の有る黒いボディの携帯も、同様に金色の細いライン入りだった。

「お揃いなんですネ」と言ってから、なぜか恵瑠は急に恥ずかしくなった。

「ああ。そうだよ。君からのものなら、メールでも通話でも二十四時間何時でも大歓迎だ。このアドレスは本当にごく限られた人間しか知らないプライベートなものだよ」

何だか、さらっと結構すごい事を言われたような気がする。

廊下での別れ際に、肩を抱かれて「私の部屋の鍵は何時でも開いているからね。では、おやすみ」と言われたが、どう考えるべきなのだろう？恵瑠の方からキスをするべきなのだろうか？

中学や高校時代の仲の良い連中に、新しいメアドを知らせなくてはいけないが、そのついでに、自分の今の悩みを相談してみようかとも思う。結婚を前提で付き合う彼氏が居る真知子なら、どう考えるのだろうか？自分一人の考えでは到底正解にたどり着けそうも無いと恵瑠は思っていた。

5 独白（前書き）

ええ、色々な神話と伝承を勝手に切り貼りして作ったこの話限定の
独自世界観ですが、こんな形で皆様に御提示するのはどうかたと、
書いて見ました。

魔王さんの独り言です。苦勞してきたんです色々。

5 独白

本来私は大地の神、豊穰の神、神の中の神、すべての神の王であった。天候を司り、翼が無くとも自由自在に空を駆け抜けることが出来た。あの唯一絶対神と称するものが、すべてを奪い去り、私を闇の世界に落とすまでは。

私から奪われたものは余りに多かったが、最も耐えがたかったのは愛しい妻が奴の「天使」などと言うものに転生させられたと知ったことだった。

私は闇の世界で力を蓄え「魔王」と呼ばれる存在となった。そして天の結界を破り、かつての妻を捜し求め、ついに見つけた。

アリエル、私の天使。

だが、アリエルは魔界では私の築いた結界の中でしか生きる事が出来なかつた。魔界の気は天使にとっては猛毒なのだ。私にとって最もいとしき存在でありながら魔界の諸侯・貴族には正当な后とは見做されず、女奴隷という形でしか手元に置けない。

天使から魔物への転生は不可能だ。しかし人には転生できる。人は天使にも魔物にも転生しうる存在だ。アリエルは自らの意思で人となった。いずれは私の后として共に並び立つ存在と生まれ変わるために。

アリエルは彼女の存在自体を認めない魔物たちの多くの妨害を切り抜け、人の世界での転生を繰り返す事に成功した。

私は彼女を見守り助けるため幾度か人の姿をとり、人界に彼女の

魂を求めたが度々反対派の魔物どもに阻まれた。彼らは魔王である私が、天使であつた者を后とする事がよほど我慢ならなかつたようだ。

だが、思わぬ救いの手が現れた。自らの意思で天界を飛び出し、魔界にやってきた十二枚羽の墮天使ルシファアだ。双子の兄弟である天使ミカエルと幾たびもの死闘を繰り返しながら、自らの意志を貫こうとする彼を私は後継者として迎えた。この時も魔界は大揺れに揺れたが、ルシファアは強大な力で反対派を打ち砕いた。

幾たびか魔界と天界の争いを繰り返すうちに、私自身の戦闘能力や魔力も変質していた。向上したとも言われたが、敵とはいえ、完膚なきまでに粉碎し殲滅するのは私の性分に合わない。元来はもつと穏やかでのんびりした世界の神として私が存在していたからかもしれない。それに、私が滅した天使の中にはアリエルのように元は別の世界の神であつたものも含まれていた。

ルシファアにはライバルであり双子の片割れであるミカエルとの戦いの決着をつけると言う強い動機があるが、私には無いのだ。正直、戦いには飽き飽きしていた。

「賢き王よ、貴方が望むなら貴方の妻を探しに行かれるが良い。魔界はその間、私が治めよう」

ルシファアの申し入れは有り難かつた。

「一層のこと君に正式に王位についてもらえば良いのではないか？」
私は本心からそう思ったのであつたが、事はそう単純でもない。
「いや、私はあくまで代理だ。そうでなければ治まるものも治まらない」

古くからの魔族の中には、元が天使で転生もしていないルシファ

「王位につくのを嫌うものは確かに多かった。妬みや嫉妬は彼らの本質と深く結びつく性格だけに、さすがの私もどうしようもなかった。確かに、ルシファアの申し入れをそのまま受ける方が現実的だったのだ。」

「王よ。貴方の心よりの願いが成就することを私も願う」

偉大なる堕天使ルシファアの祝福を受けた途端、私の背中にも大きな十二枚の羽が出現した。

「その羽はやがて貴方をアリエルの元に導くはずだ」

ルシファアもアリエルと共に金星の導きを得ている。私は元来羽根を持つ事を好まなかったが、力は十分に満ちていたらしい。羽の守護の力を得た事を素直に喜ぶ事にした。

幾千年もの時が流れ、その間実質的にはルシファアが魔王の役割を果たしている。時折求められて私が帰還する事もあるが、せいぜい隠居仕事と言った程度のことで済んでいる。

アリエルが神から天使、天使から人と言う無理な転生を矢継ぎ早に繰り返した事による傷は、ただでさえ大きいのに、時折魔界の頑迷固陋な連中の悪意にさらされ、毒や呪いを身に受けたこともあり、なかなか魔界に転生できる条件は整わない。既に人界で十度生まれ変わりを遂げているが、今回はどうだろうか？

私はその十度の人としての死に立ち会ってきた。転生が出来るを知っている、また彼女の魂を完全に修復させる事はできなかったと言う挫折感は大いいたく有る。ただ希望は、転生するたびに確実に傷は塞がって来ていると言う事だ。

これで、後は、魔界や天界の予期せざる妨害が無ければよいのだが。

今回の転生は十一度目だ。平和な時代の平和な国に転生できたか

ら、無残な目にはあわずにすむはずだと思っていたが、どうやら今回も妨害者の痕跡がある。白羽家の人々の死が些かどれも不自然なのだ。特に両親の死は明らかに何物かの介在があったと思われる。油断は禁物だ。無垢で穢れ無き魂を望むものは天界にも魔界にも居る。アリエルは未だ自分の力を自覚せず、過去の記憶も封じ込められたままのようだ。

私は人界に存在するものなら元が天使だろうが魔物だろうが、その思念を読み取る事ができる。これは私だけの特別な力だ。ただ、たった一人だけ思念を読めない存在が居る。

それが他ならぬアリエルの転生者、白羽恵瑠だ。古き世の大いなる女神で私の妻であった頃の力の名残が、些か皮肉な形で生き残っているわけだ。

恵瑠が己の過去生を知り私との絆を繋ぎ直す為には、まだ多くの難問が立ちはだかっている。

6 入学式（前書き）

外部の施設を借りて入学式を行う大学は、相当多いみたいです。

6 入学式

大学の入学式は、武道館で盛大に行われた。

先生方の話はさすがに感動的だった。つまらない型どおりの訓示ではなく、目からうろこが落ちるような思いで聴いた話ばかりだ。熱い応援部のパフォーマンスを見て、大学の歌を聞くと、自分は本当にこの大学の学生になったのだな、と言う実感がわいてくる。自分もこの大学のメンバーとして、精一杯頑張って行きたいと心から思った。

「私はやっぱり、勉強も剣道も目いっぱい頑張る！」

恵瑠がこぶしを握り締めてつぶやくと、同じ専攻グループと一緒に剣道部に入ろうと誓った黒井翼が、そうそう、そうだよ、と同意する。

「でもさあ、そのエレガントなアンサンブルに、こぶしは似合わないなあ」

恵瑠は治にプレゼントされた淡いブルーのワンピースと紺のジャケットのアンサンブルを着ているのだが、リクルート系のスーツが多い中でやはり目だって居た。この服はオーダー品だが、連れて行かれた店はどうやら園遊会などに出席する財閥令嬢などが、服を依頼するような所だったらしい。

「こんな大人っぽい服は着るのが初めてで、緊張しちゃう」

「でも、すっごく似合ってるよ。品が有るのに華やかで良いねえ」

すると、その場に居た男子学生が数名「そうそう。いいよねえ」とか「白羽さんみたいに綺麗な人と一緒に勉強できるなんて、嬉しい誤算だ」とか「まさに、才色兼備だね」とかい始めたので、照れて真っ赤になってしまった。すると「純情可憐って感じでいいな

あ」と言われて、どうすれば良いのか困り果てた。

この服の最終フィッティングをしに行った日は、いわば治おさむとの初デートであった。どちらもそんな言葉は使わなかったが。でも、重大な申し入れが有ったのだ。

「恐らく君も私の気持ちは薄々承知してくれていると思っっている。大学に入れば色々な男連中との絡みも出来てくるだろうから、私としてもある程度はつきりさせたいのだが、君を必要以上に困惑させたり悩ませたくは無い。だから、きっかけを作ろうと思う」

剣道の『都道府県対抗の優勝大会』が今月末に大阪で行われるわけだが、『十八歳以上三十五歳未満で、警察職員、教職員、高校生、大学生を除く男子』と言うカテゴリーで治は地域の代表チームの一人として出場することが決まっていた。忙しい仕事の合間に熱心に稽古に励む社会人剣士はかなりの数に上る。その中で代表チームに加わると言うのは、それだけでも凄い事なのだ。

「チームが優勝できるかどうかは微妙だが、私個人が『敢闘賞』の第一席を獲得できたら、君に私の気持ちを伝えたい。その方が私の真剣な気持ちも受け止めてもらえるだろうから」

どう答えるべきか悩む恵瑠に向かって「返事を急ぐつもりは無い。私の気持ちを聞いて、君の迷いや悩みも含めて教えて欲しい」と言う風にも治は言った訳だが、ともかく真剣に考えて欲しいと言う事なのだ。

その後は、妹を慈しむ兄のような、保護者のような、そんな穏やかで優しいまなざしを向けて来るだけで、他愛も無い話を続けるのだった。それでも……愛車の助手席に恵瑠を乗せ、フィッティングが済んだ後は珍しい季節の花が咲く庭園に連れて行き、その後は洒

落たレストランでランチ、そして夕日を見に景色の良い海岸線をドライブした。

その夜、恵瑠は真知子に電話をして、その日のことを報告してどう思うか聞いた。

「どうって、それ、パーフェクトなデートじゃない。食事もだし、花を見て夕日を見るなんてそれ以外の何なのよ」

「やっぱりそうか」

「恵瑠って今どき珍しい男女交際の経験値ゼロの人だもんね。でも、あれ、手ぐらいつないだ？キスした？」

「キスはあのバラをもらった時に、一回だけした」

「はあ……その時の恵瑠の反応があんまりうぶだったから、路線切り替えたんじゃない？」

「切り替えって？」

「超ハンサムなおじ様に女性経験が無いはずないもん。恵瑠が全くの初心者だから、合わせてくれてるんじゃないの？それに、その試合結果を見てくれて言うのも誠意の表れじゃない？大阪に試合を見に行った後、これはもう、おいしく食べていただくしかないわ」

「食べていただくって……」

「恵瑠がイヤじゃなければ、あの人にバージンをあげちゃえって事。私と彼みたいにお互い初めて同士が試行錯誤で三年目、って言うのも悪くないと思うけれど、年上の上手な人に大切に抱いてもらえるって言うのも良いよねえ。そっか……恵瑠もいよいよ女になるのか」

電話を切った後、大阪での試合の後、自分は治とどう付き合っていくのかハッキリしなくてはいけないと言う事に、イヤでも考えが向かう。

「食べられちゃうのか」

真知子に言われるまで、そうした事を思いつかなかった自分は、やはり恋愛スキルが低すぎる。

「食べていただくしかない……のかな」

その夜は何かとんでもなくエッチな夢を見たような気がしたが、朝になると思い出せなくて、また落ち着かない気分になった。以来入学式の今日まで、そんな具合の夜が続いている。

入学式の式典が終わると、どの学生も家族と合流して記念写真を撮っている。会場に入場が許される付き添いの家族・親族などは、二名までに制限されている。それ以外の親族が待っている場合も多いようで、祖父母や甥や姪まで付いて来ている者も居た。治もカメラを持って恵瑠を待っていた。

「素敵な方ね、白羽さんのお兄様？」と幾人かの女子学生に聞かれたが、治の男ぶりの良さはやはり際立っている。この人が自分を見つめてくれると嬉しい。自分は恐らくこの人が好きなんだ、と恵瑠は思った。大阪に行った後は、全部お任せして、良いのではないか？超初心者なりに、頑張る決意を固めた恵瑠だった。

7 剣道部入部（前書き）

にこやかなのに、怖い眼差しして有ると思います。

7 剣道部入部

大学の講義はなかなか大変だ。どの先生方も深い学識に基づいて興味深い話を聞かせてくれるのだが、自分の背景知識が貧しいとちゃんと内容が理解できない。講義の担当の先生が誰なのか分かった、なるべくその先生の著作は目を通すように努めるのだが、これが結構大変だ。

「でも、やればやっただけのことは有るよね」

恵瑠が言つと、黒井翼も「そりゃあ、そうだ」と同意する。

創立百年以上の歴史を持つ大学の剣道部はどうも余り振るわない。その昔は優れた剣士を多数輩出したと言われている名門中の名門の部で有るのだが……

明治時代の文豪の作品にゆかりの深い池のほとりの風情有る建物が道場で、設備も整っているし、顧問の先生も超一流の方なのにと、うも今ひとつだ。男子部員の数はそのなりに居るが、将来にそれぞれ目標があつて、本当に勉強が忙しい人や就職活動で大変な人が多いようで、練習する時間が十分取れないらしい。それでも、一人二人全国的な大会でしかるべき成績を治めた経験の有る先輩は居て、時折ライバル大学との試合で競り勝つたりはする。だが、やっぱり今ひとつと言う他無い。しかも女子は二人の先輩が卒業してしまつて、在籍しているのはたったの二人だけだった。その上二人とも大学に入って剣道を始めた初心者で、全国大会の出場経験は皆無と言う状態だ。そんなわけで恵瑠と翼が入部を決めると、「大いに頼りにするね」と言われてしまった。

「君ら、一年生とはいえ連盟との付き合いは長そうだし、大会出場

経験も豊富だし、いつそのこと中心になってまとめてくれていいよ。合宿のプランとか、他の部やその大学の剣道部との付き合いなんか、全面的にお願いしたい。入部式は一応五月だけど、ぜんぜん気にしなくて良いよ。いやあ、僕も院試を控えてるし、学会で色々あるし、剣道部の機関紙やOB関連の仕事もやってるけど、人手不足で仕方なくやってるだけなんだよ」

四段で高校時代は結構活躍した先輩も、今は研究者としての将来に向けての準備のほうが大切で、剣道どころでは無い、らしい。

「皆さん、センスはいいんだけど、ハングリー精神が不足気味よね。たまに有る人は、単位が危ないらしいし上手く行かないねえ」と黒井翼が言えば「素質は優れた方が多そうなのに、稽古不足が目につくよね」と恵瑠が応じる。まあ、そんな所なのだ、今のこの大学の剣道部は。何だか色々な意味で勿体無いと言うのが、正直な二人の感想だ。

それでも「ライバルの他の大学には負けられない」らしくて、全国大会などより、そういった大学相手の対抗戦になると、付け焼刃でも何でも結構燃えるらしい。

練習に顔を出すOBの人も多い。皆、この大学出身である事を強く誇りに思っているようだ。中央官庁の役人や、学者・弁護士・国際的に活躍するビジネスマンなどが多い。今まで治は余り大学では練習をしなかったらしいが、恵瑠の入学以来、ほとんど毎日寄ってくれるようになった。週二回は夜八時過ぎまで稽古する日だが「私が迎えに行くから待っていて欲しい」と言われる。

「白羽さんは、やっぱり王子様が居るんだな」

「王子様って言うより大王様って感じだけだな」

「新歓の飲み会、今年は馬飼野^{まかいの}さん出るらしい」

「いつも資金負担だけで顔は出さない人だったのにな」

「やっぱり白羽さんのガードだろう」

「やけに今年から練習にも顔を出すしな」

「まあ、確かに指導も上手いし、強いし、部の活動にとっても結構な事だけど」

「動機がなあ……」

男子部員たちは、こんな噂をしている。だが、当の恵瑠は気が付いていない。治ははつきり意識しているようで、男子部員たちになこやかな牽制の眼差しを向けて来たりするのだが、「それが震え上がる程怖い」と言っのが専らの評判だ。

8 決断の時

大阪市内の大きな体育館で行われるその大会は例年四月の末から五月の頭にかけての時期に行われるもので、各地方の予選はおおむね二月に行われていた。必ず下は高校生から上は五十歳以上の年齢のメンバーを含み、五人の社会人と大学生・高校生一人ずつと言う七人構成のチームで戦う事になっている。

恵瑠と黒井翼も連れ立って新幹線と地下鉄を乗り継ぎ、この大会を見に来ていた。大会が済んだ後は、翼は西宮の叔母の家に泊まるらしい。

「恵瑠はどうするの？」

「治さんにあわせるけど、東京に戻るんじゃないかな」

「そうなの？ てつきりリッツ・カールトンホテル辺りでお泊りかと思っただ」

恵瑠は、それを聞いて真っ赤になった。真知子に以前この試合観戦の話をした時、「関西の高級ホテルのスイートにでもお泊りじゃない？」と言われたが、翼も恵瑠と治がそういう具合に一緒に『お泊り』する仲だと見ている事になる。

「おや？ 違うの？」

「私は法律的に後見人をして貰っているだけなんだけど」

「恵瑠がそうでも、向こうさんは違うと思うな。そうじゃなきゃ連日大学の稽古に来ないよ」

「そ、そんなものかな」

「今夜辺り、覚悟したほうがいいんじゃない？ 食べられちゃうかもね」

「私、そう言う経験ないもの、わかんない」

「なら、一層の事、食べられれば？ 悪くないよ。あの人。恵瑠がよっぽど大切みたいだし」

そんな事を言う翼は、高校時代の担任と付き合ってもうすぐ三年で、二十歳になったら、結婚の予定らしい。その所為か恵瑠から見ると凄く大人だと思える事が多い。

今日の治は、社会人枠の五将と言うポジションで出場する。他のメンバーの力の差などを考え合わせると関西の幾つかのチームの方が試合には勝ちそうで、恵瑠から見てもチーム優勝は難しい。優勝チームのメンバーでも無いものが『敢闘賞』を個人的に受けるのは非常に大変らしいのだ。

「馬飼野さんほど強そうな五将は居ないけどね」とは翼の見方だが、たとえ自分自身が勝つても其れだけで『敢闘賞』が転がり込んでくるわけでは無い。マナーとか佇まいとか、微妙な所で剣道連盟の重鎮たちの受けが悪いと駄目なのだ。

「マナーや立ち居振る舞いは完璧だよ。大丈夫じゃない？」
恵瑠は、その翼の観測が当たって欲しいと思った。

治のチームは順調に勝ち進み準決勝まで来たが、優勝候補の大阪チームに負けてしまった。

「でもさ、馬飼野さんの逆胴は、凄かったね」

治個人は相手が面を打ち込もうとした瞬間を見事にすり抜け、逆胴で一本勝ち、という素晴らしい勝ち方ではあったが、『敢闘賞』の行方までは分からない。

やがて決勝戦も終わり、各チームの順位が決定した。

「ほら、やっぱり、馬飼野さん、『敢闘賞』第一席じゃない」

翼が指し示した張り出されたばかりの表には、確かに他の優秀選手の名前に先駆けて、一番先に名前が出ている。「五将 東京都 馬飼野治」と有るのを、恵瑠は幾度も確認した。各賞の授与が終わ

ると、そろそろ皆が帰り支度を始める。

「おや、おいでなすった。じゃあ、恵瑠、素敵な週末を過ごしてね」
翼は向こうからやってくる治に会釈だけすると、さっさと居なくなってしまうた。

治は恵瑠の肩にそつと手を置くと「急いで着替えてくる。ここで待っていてくれ」と言った。

着替え終わった治はタクシーに乗るところ言った。

「リッツ・カールトンホテル、お願いします」

冗談抜きで、翼の言ったような展開になるのかもしれない。治は何も言わないが、恵瑠の手を握っている。一体全体こう言う時は、何を言えがいいのだろう？

「あ、あの、敢闘賞おめでとうございます。素晴らしい逆胴で、感動しました」

「うん。ありがとう」

その後も、沈黙が続く。だが、重苦しいと言うわけでは無く、甘く切ない感じだ。

「部屋はダブルのスイートを取ったんだが、不味かったらうか？」
その言葉の意味する所を考えると、恵瑠は到底平静では居られない。数分の沈黙の後「いえ、大丈夫です」と蚊の鳴くような声で返事をするのがやっとだった。

「君に後悔はさせないよ」

耳元で囁く治の声は、酷く艶めいていた。

8 決断の時（後書き）

さて、次回は、大人の階段を上る話？！

9 特別な夜（前書き）

ええ、濡れ場前半です（笑）
R15で、どこまで行けるか頑張ります！

9 特別な夜

タクシーを降りて、チェックインすると最上階まで上がった。

「このホテルは、落ち着くので気に入っている。ここから見る大阪の夜景もなかなかのものだよ」

美しい絵やシャンデリア、華やかだけど落ち着いた感じの花柄のソファ、瑞々しい季節の花、キッチンにミニバーまで有って部屋と言ふより、独立した家のような感じを受ける。

「グランドピアノまであるんですね」

「弾いてみる？」

「ねこふんじやったしか、弾けません。治さんはお弾きになるんですか？」

「うん。ちよつとね」

「わ！ 素敵です、是非弾いてください」

狂おしい熱い感情が迸る様な感じがする曲が始まった、陰鬱なのに情熱的で魅力的で強く惹きつけられる演奏だ。力強い打鍵と繊細なタッチ……ともかく見事なもので「ちよつと」などというレベルではないのは恵瑠にも分った。

「凄く、熱い物を感じました。何だかまだ、ドキドキしてます。何と言ふ曲なんですか？」

「ベートーヴェンの『熱情』の第三楽章だよ」

後は、恵瑠にもわかる曲を弾いてくれた。『愛してる』『Love Love Love』は知っていたが、最後の曲は何だろう？ 治に曲名を聞くと『Endless Love』だと言われた。

一々心臓に悪い。

その内、ルームサービスで夕食が運ばれてきた。フランス料理の

コースらしい。まず、冷やしたシャンペンがサーブされる。

「一応、未成年の君に公の場で酒を飲ませるのは気が引ける。でも、このくらいは許されるだろう」

恵瑠を見つめる眼差しは、あのピアノ演奏を聞いた所為だろうか、酷く情熱的に感じられる。

「私たちの特別な夜に、乾杯」

治は自分との事を真剣に考えているのだと思う。でも、子供っぽい自分はこんなに大人の彼とちゃんとやってゆけるのだろうか？……「ゴチャゴチャ考えても無駄。最後は好きか嫌いか、勘で行くしか無いの」と言うような事を真知子も翼も言っていた。それならば、やはり答えは一つだが……その、自信が無いのだ。

「とつても、美味しいですね」

「君は本当に美味しそうに食べてくれるから、食べさせ甲斐が有るよ」

のど越しの良いシャンパンの所為で、恵瑠の口も、いつもより滑らかになって来た気がする。和やかな雰囲気の中で、前菜・スープ・メインと進み、恵瑠は最後のデザートをいかにも嬉しげに食べていた。その様子を見つめる治の視線はあくまで優しい。

「その、真知子や翼が私に『食べられちゃいなさい』って言うんですけど」

「……ほう？」

治は、面白そうに恵瑠を見つめる。

「え？あ！私なんて事を！」

もう我慢できないといった感じで、治が爆笑すると、恵瑠は全身真っ赤になってしまった。

「食事も終わったことだし、風呂にでも入っておいで」

ああ、いよいよなんだと妙に緊張する。

「そんなに緊張するなら、今夜は何もしないでおこうか」

「……いいえ、いいんです。自分でもちゃんと決めたことですから」
そう言いながら声が震えているのが情けないと恵瑠は思っていた。

治は恵瑠を抱きしめると、耳元で囁いた。

「それなら本当に、食べてしまっようよ、君の事」

強烈にセクシーな声で、何だか恵瑠はくらくらしてくる。

ならば、いつそのこと一緒に入ろうと言って、治はバスルームの準備をしに行ったようだ。その間、恵瑠は目の前で起こりつつある事が、現実離れたものを感じられて、ぼんやりしていた。窓から見渡せる夜景は酷くきれいだ。

「おいで。私に全部任せてくれれば、悪いようにしないよ」

体がふわりと浮いた。治に抱き上げられたのだ。恵瑠は決して小柄なほうではない。でも、その体を軽々と運ぶ頼もしい腕に、自分の全てを委ねてみて構わないと恵瑠は思う。

「本当に、なんて可愛いのだろう。そんな目で私以外の男を見てはいけないよ」

深々とキスをされて、恵瑠はぎこちないながらも、自分の舌を治の舌と絡ませようとする。気がつくと、自分も、治も裸になっていた。

「こういう趣向は、どうだろう？」

白いゆったりした浴槽の中はバラの香りのバブルバスに、赤いバラの花びらが散っている。

「何だか淒く、ロマンティックです！」

一瞬、今の状況を忘れて、手放して喜んでしまった後で、恵瑠は子供っぽかったなと思った。

「あの……私なんかで、いいんですか？」

「何で、そんな風に思うの？ 私は君が欲しくて堪らないのに」

恵瑠の手をとると、自分の硬くそり立った物に触れさせた。その熱さと大きさに恵瑠は驚いた。

治は後ろに回りこんで、湯の中で恵瑠を抱きかかえた。尻に治の物が当たり、イヤでも強く意識させられる。恵瑠の乳房を揉みながら、治は首筋から耳朶にかけて、キスを落とす。

「震えているね。今ならまだ、ギリギリ止めてあげられるよ。如何する？」

止めて貰っても、治は怒ったりしないだろう。でも、自分がどうしようもない子供だと思われるかも知れない。そんなのは嫌だと恵瑠は思った。

「……私は、子供っぽいですが、治さんが好きです。だから……だから、止めないで下さい」

その言葉を聞いた瞬間、治の体は熱くなった。後ろに寄り添う体全体が熱を放っているみたいだ。

「わかった。では、もう止められないよ」

恵瑠の体には未だかつて感じたことの無い、甘い疼きが生まれていた。

10 初めての覚醒（前書き）

濡れ場後半です。R15の範囲だと思ってるんですが……

10 初めての覚醒

明かりを落とした寝室の大きなベッドの上に恵瑠を横たえた治は、瞳に艶めいた強い光を浮かべて噛み付くようなキスをした。深く唇を合わせると口腔内の全てを蹂躪するような激しさで舌を蠢かせ、脳髓が焼き切れそうな激しい快感を引き起こす。ただキスをしているだけなのに、もうすでに、腰がガクガクしている。息切れするギリギリまで貪られた後、唇が離される。恵瑠の零れ落ちた唾液を治は舐め上げた。

「怖いかい？」

大きな手の動きは優しく繊細で、恵瑠の唇を指でそつとなぞり、髪をなでる。

「緊張してますけれど、頑張ります」

「おや、まあ。頑張るのかい？」

くすつと笑って恵瑠を優しく抱きしめなると、首筋から胸にかけて幾つものキスを落とす。

「なら、私も頑張ってみようか」

乳房を緩やかなリズムで揉み上げられながら沢山のキスを落とされると、恵瑠は荒い呼吸を繰り返し甘いあえぎ声を零す事しか出来ない。

「愛している。愛しているよ……本当に君は何て綺麗なのだろう」

まるでやかなウエストからヒップのラインをなぞった手が、秘められた場所に入り込むと、敏感な芽を刺激し始める。自分でも余り触れたことが無い場所から齎される未知の快感に戸惑い、恥かしくて足を閉じようとすると、「力を抜くんだよ」と言われた。太股からウエストにかけて微妙なタッチで撫でられると、緊張がほぐれる。

「いい子だ」

治は恵瑠の足を抱えて大きく広げると、その部分を舐め上げた。敏感な芽を吸い上げながら丁寧にも内部を探り、快感を紡ぎ出して行く。恵瑠は体中が浮かび上がってしまいそんな強烈な感覚に、意識が飲み込まれる。自分でも聞いたことが無い甘く淫らに濡れた声が、二人きりの空間に響く。

「何て可愛い声なんだ。もっと聞かせておくれ」

その後、幾度も意識が薄れ、甘い声を搾り取るようなキスをされた後、治の熱くそそり立つ物が宛がわれた。いつの間にやら、ちゃんと避妊具を装着している。

「では、行くよ。私に噛み付いても引つ掻いても良い。でも、もう、止めてあげられそうにない」

生まれて始めて味わう鋭い痛みに呻き声を漏らし、呼吸が乱れる。思わず恵瑠は、治の背中に爪をつきたてたが、治は声一つ上げない。激しく強い光を宿した眼で恵瑠を見つめると、乳房を揉み敏感な芽を刺激しながら、中に突き進み、やがて、しっかりと恵瑠と繋がった。

「君の中に、ようやく納め切ったのがわかるだろうか」

「やっと、一つになれて、嬉しい」

治は気づかわしげに恵瑠の涙を唇で吸い上げる。大きな男らしい手は絶妙なタッチで動き、快感を引き出して行く。やがて激しかった痛みは甘い疼きに変化し、苦しいはずなのに酷く心地良い感覚が恵瑠を満たす。ああ、自分は女になったのだと言う実感で一杯になり、突き上げられる毎に治に与えられる快樂が体の隅々まで行き渡って行くようだった。

「愛している……心から」

「……私も、治さんを愛しています」

大切な言葉を交わした後は、しばらく互いに互いを貪るような激しいキスの応酬が続く。律動はやがて火を噴くような激しいものへと変化し、二人の肉体は同時に弛緩し強かに爆ぜた。

恵瑠の意識が再び浮上した時、暖かい湯の中で心地よいマッサージをされていた。治はいつもの優しい表情に戻っていて、向かい合わせになってひざの上に恵瑠を乗せている。意識の無い間も、どうやらじつと恵瑠の顔を見つめていたらしい。

「さつきと別の入浴剤を入れてみたが、どうだろうか？」

「さわやかで、ほんのり甘くて、好きですこの香り」

「どうも美肌効果が有るらしい。考え無しに沢山跡をつけてしまったな。すまない」

「ううん、謝らないで下さい。治さんのものになれた印みたいで嬉しいですから」

「君は本当に可愛いことを言うね」

治は、乳房を持ち上げると、一つまたキスマークを増やした。

「こんな風に、ちゃんと着ているもので隠れる場所につけるように注意しよう」

「あ、あの……わ、私も治さんの体に印を付けて良いですか？」

「ああ。構わないよ勿論。私の心も魂もずっとずっと昔から君だけのものだし、今のこの肉体も当然君のだけのものだ」

幅の広い胸、逞しい肩はしっかりとした筋肉で覆われている。この男らしく魅力的な肉体にキスマークを一つだけでよいから付けたいと思ったのだが……

「何だかうまく行かない」

しょんぼりする恵瑠を、治は甘い視線で見つめると、まぶたに軽くキスを落とした。

「別に、そんなことを気にしなくても良いのに。むしろ付けずにおれないその事自体が幼稚な嫉妬心と独占欲の表れなのだから、社会人としては問題だ。分ってはいけるけれど、恵瑠は自分のものとマ―キングして置きたい。どうやら、私は自分で思っていたよりかなり幼稚なのだろう」

「その幼稚な事をしたがる私って……幼稚ですね」

「何もかも一足飛びに大人にならなくて良いじゃないか。私は今の君が大好きなのだし。でも、自分がどれ程周りの異性の心に波風を立てているのか、無自覚なのはいけないな。罪深いし、場合によっては君自身が危険になる。……そうだな。君はもっと男の欲望に対して、敏感になったほうが良い」

「友人達にも言われてきたんです。私は鈍いって」

「男の欲望は暴走すると恐ろしいよ。君のわずかな身のこなし一つ、声一つが引き金にもなりかねない。だからって、君を閉じ込めるわけにも行かない。お願いだから、十二分に注意してくれ」

その夜、恵瑠は治に抱きしめられて眠ったのだが、奇妙な光景を夢に見た。

恵瑠の背中には白い羽が生えていて、その事に酷く戸惑い困惑しているようだった。

「君は余りにも無防備だったから、ずっと心配だったのだ。とんでもない事態になってしまったが、こうして再び君を見つけ出した以上、誰が何を言おうが連れ戻す。嫌かい？」

恵瑠は、その言葉の主に手を伸ばし、自分を二度と離さないで欲しいと懇願しているようだった。

朝目覚めると、自分を気づかわし気に見つめる治の顔が間近に有った。

「何か、思い出したかい？ アリエル」

ああ、自分はその、アリエルなのだ。初めて恵瑠はその名前が本来の自分を指すのだと実感した。

11 秘密の名前

人間としての白羽恵瑠と私は契りを交わした。その後に恵瑠はアリエルであった頃の記憶を夢に見たようだ。恵瑠の語った事に従えば、どうやら、天使にされてしまったアリエルを私が見つけ出し、魔界に連れて行く直前のやり取りの一部だと思われる。

「あの何かおどおどしていた白い羽の生えた天使って、私なのですか？」

「そうだろう。羽なんか無くても自由に飛べたのに、浚われて無理に天使に転生させられたから、天界ではいつも泣いてばかりいたんだよ。あの時は転生させられても、私が誰かすぐ悟ったようだ」

「その後、いったい何が有ったのですか？」

「君自身の力が目覚めれば、自然に分かるようになる」

「どうすれば、目覚めるのでしょうか？」

「たぶん、私との絆が深まれば極自然に目覚めるだろう。教えたいのは山々だけど、それではいけないのだよ」

「私はアリエルだったとして、あなたの名前は何だったのですか？」

「

「それこそが一番の秘密なのだ。だが、アリエルなら必ず思い出せる。天界でも魔界でも真名を知られるのは色々と危険が大きい。もう長い間、私は『名も無き者』として在り続ける事で、縛られる事無く存在できた。私の名を知る者はもう、君以外誰も居ない。だからこそ、君に思い出して欲しい」

「でしたら……それまでの間、私は貴方を治さんと呼びすれば良いのですか？」

「こうして、愛し合う時は是非『治』と呼んでくれ」

「えっと……その……」

「私は君と愛し合う恋人同士になれたのだと思っているのだが、違

「うのだろうか？」

すぐに恥かしがって、顔を赤らめる。白い裸身が薄桃色に変化する様子が、なんとも愛らしい。

「がんばってみます」

「期待しているよ」

朝の光の中で、また、愛し合ったが、極々控えめに抑えた。

これから残念ながら東京に戻らなければいけないのだから、致し方ない。今では新幹線はグリーン車両でも個室が存在しないので、実に不便だ。多くの人が行き交う駅の雑踏で、彼女を抱えて移動するのは目立ちすぎる。私は別にそれが嫌なのではない。一向に平気なのだが、天界・魔界・人界を問わず誰が見ているか分からないのだ。余りに目立つ行動は控えたほうが良いだろう。万事控えめな方が安全なのは確かだ。

「何とも、物足りないが、昨日の今日だし、無理はさせられない。

ルームサービスの朝食を頼みである。もうすぐ届くと思うよ。そろそろ身支度をしようか」

私が身支度を終えても、アリエルは、まだ、うまく立って歩けない様子だった。

「何だか、脚に力が入らないみたいで……」

下着から全部、世話を焼くと、しきりに照れていた。私に触れると、濡れてしまうようになったようだ。溢れる物を指で掬い取って、舐めるような悪戯をついしてしまいたくなる。

「東京まで戻るのにショーツがぐしょぐしょだと不都合だね」と言う、

「生理用品を使うことにします」と答えた。なるほど、良い考えだ。

朝食がダイニングテーブルのほうにセッティングされたので、ア

リエルを抱いて、運んだ。

「歩けないと駅で困るから、朝食後ゆっくり休んでから出発しよう」
ゆっくりと朝食を食べ、食後の紅茶を楽しむと歩く力が戻ってき
たらしい。やれやれ。

「昨夜は、無理をさせてしまったね。君が余りに魅力的だから、つ
い我を忘れてしまった」

リエルは、それでも、自分としては嬉しかったのだから構わな
いと言った後、

「私は、治さんが初めての人ですけど、治さんは……」

そう言ったきり、リエルは顔を真っ赤にして黙ってしまった。
私が過去どのような女達と関係を持ったのか興味を持つのは、当た
り前だろうが……勝手な思い込みをされたり、誤解されては敵わな
い。

「うんと昔の事だが、君と私はとても幸せな若い夫婦だった。それ
が、私の最初の経験で、幾度君が生まれ変わろうと、いつも君こそ
が私の一番大切な存在で有り続けた。そしてそれは今も変わらない。
悪意を持った誰かが、私と別の誰かがあたかも愛し合ったかのよう
な話を君に信じ込ませようとするかもしれない。君と私の離反を願
うものは、今も昔もしつこく付きまとっている。迷いを感じたら、
必ず私自身に尋ねてくれ。出来うる限り真実を伝えるよ」

これで、リエルは一応納得できたのだろうか？ 彼女の心だけ
は、私でも読み取れない。酷くもどかしいと同時に、だからこそ彼
女に惹きつけられるのだとも言えそうだ。気がつけば私はいつも、
彼女の思いを知りたいと考えているのだから。

「貴方は、生まれ変わっているのではないのですか？」

「宿る肉体はその時々的情勢にあわせて、多少は変化させているが、
魂自体は全くずっと同じものだ。ああ、でも、思わぬ影響を受けて

変化している部分は有るな。人類の思想や科学の体系は興味深いし、芸術の中には素晴らしいものも有るからね」

こうした話を、アリエルが実感を持つて受け止めてくれるまでには、人間の世界の時間ではまだまだかかりそうだ。だが、自分の魂の過去について、意識出来るようになったのは大きな前進だ。

チェックアウトを延長してゆつくりと部屋で過ごし、ルームサービスで軽いサンドイッチを中心にしたランチを取ってから新大阪発の『のぞみ』に乗る。全十六両編成で、グリーン車は中ほどの三両だ。どうやら東京には日の有る内に着けそうだ。到着時刻を予め東京の自宅に電話で伝え、駅のホームに誰かが迎えに来るように手配した。

東京まで二時間少々の間、私は彼女の手を握り締め、テレパシーで話しかける事にした。体に触れていれば、彼女の発しようとする言葉も恐らくは読み取れるだろう。何しろ、これからの事について、相談したい事は山ほど有るのだ。

（私としては婚約をして、いずれは結婚と言う形をとりたいのだが、どう思う？）

（学生結婚でも構いませんが、大学は出たいです）

（未成年のうちは色々法的にややこしいから、とりあえず婚約と言う事にして、二十歳になったら結婚しよう）

体の関係が出来た所為か、彼女の伝えようとする内容は読み取れるようになった。

（……）何事か迷っているのだ。

（それとも、もっと私は我慢強く待つべきだろうか）

（いえ！ そんな。ただ、私で本当に良いのかとふと思ってしまつて。自信が無いのです）

（私は君を愛している。そして君は私を愛すると言ってくれた。その言葉が真実なら何も怖くない）

「ああ、ら、馬飼野さん、お久しぶり。随分お若い方とご一緒ですね」

不愉快な波動を放つ穢れた魂の女が現れた。どうやら席が斜め後ろらしい。

（あの方はどんなお知り合いですか？お綺麗だけど、毒々しい雰囲気の方ですね）

（財産の有る男に自分の体を与え、金品をせびり取るのを生きる手段にしている女だ。かつて私も絡まれた経験がある。酒を飲ませてホテルの部屋に放置してきた。どうやらそれが、こいつのプライドと言うやつを傷つけたらしい。まあ、それでも、一番の目的は金だろっが）

「一体、どちら様でしたか？」

私はまず、木で鼻をくくった様な言葉を女にかけて様子を見る事にした。

12 親密な会話

恵瑠は手を握り合う事で交わす事のできる秘密の会話に惹きつけられた。確かに、多少恥ずかしくはあったが……

これならば東京までの『のぞみ』の車中でも、一向に退屈はしないだろうと思われた。すぐにでも婚約したいと言う治は、やはり自分を大切に思ってくれて居るのだろうか、ただそれだけではない何らかの必要性が有るのかも知れないと恵瑠は思った。

「君と私の離反を願うものは、今も昔もしつこく付きまとっている」と言う言葉は、過去の経験に基づいているのだろう。『悪意を持った誰か』が自分たちの間を引き裂こうとする……治は大きな企業グループのトップだから、自分のような一介の学生が婚約者となる事を良しとしない人は多いのかもしれない。と、そんな事を考えていた時、京都から乗り込んだ女が通路を挟んで一つ後ろの席に座ったが、通路側の席の治に気がついたようで、わざわざ席を立て話しかけてきた。

「あゝら、馬飼野さん、お久しぶり。随分お若い方とご一緒ですね」

確かに、自分は治のような大人の男性からすると子供っぽくて不釣り合いかもしれないが……などと考え始めた所に、治は手をしっかりと握り直して、恵瑠に伝えて来た。こんな邪まな波動を放つ女と関わるのは御免だが、幸いにして、名古屋で下車しそうだ……と。だから、

（あの方はどんなお知り合いですか？お綺麗だけど、毒々しい雰囲気の方ですね）と、思った通りの疑問を投げかける事が出来たのだ。

治はかなり本気で、この女を嫌っているようだった。それを分っているのか居ないのか、ずうずうしくその場所に居るので、治は苛立ったのだろう。（財産の有る男に自分の体を与え、金品をせびり取るのを生きる手段にしている女だ）などと言言葉は真実にしても、相当キツイ表現だ。

（ふうむ。名古屋で下車して……東京には明日戻るようだ。二度と顔を合わせたくないが、財界関係の会合では嫌でも顔を合わせそうだ。可能な限り距離を取りたいものだが……）

治の不機嫌な気分が、直接に伝わって来る。この女とは何でも無いし、それどころか大嫌いなのだとはつきりすると、恵溜としては安心出来た。

「一体、どちら様でしたか？」

「まあ、ずいぶんなおっしやり様ですのね」

（どうせホテルで一晩一緒に過ごした仲だとか、何とか言うだろう。ふん。見え透いている）

「先月、一晩御一緒に仲じゃありませんか」

「酔っ払いが部屋に戻る手助けをした事は有っても、一晩過ごした女性は居ませんよ。それともあの酔っ払い女が貴女だったとでも？一晩？とんでもない、せいぜい十五分程度ですよ」

声は小さく呟くようだったが、その女の耳には十分届いただろう。「昨夜は京都で病院長の方と、今日は名古屋で宝石商の方とお過ごしになるようだが、今後一切、私には構わないで頂きたい」

「ちよつと、なぜ、それを……」

「私の情報網を見縊らないほうが、貴女のためだと申し上げておく」

凄まじい怒りの波動が女を直撃する。

女は驚いたと言うよりも、恐怖を覚えたらしい。ふらふらと席に戻り、やがて名古屋駅にまもなく到着すると言うアナウンスが入る

と、あわてて出て行った。

「京都と名古屋が思いのほか近いので、良かった。もう邪魔は入らないだろう」

「ほっとしました」

「ああ言う手合いは、まだまだ結構居るのだよ。こちらが独身だとそれだけで付きまといが激しくて困る。まじめに剣道の稽古をしていれば、勘違い女とは接触しないで済むのもありがたいんだ」

「なるほどそうなのですか」

「練習場所を主に大学の方に変えたのは、君が居るからだけだね。あんまり分つてくれないみたいだから、一応念を押しておこう」

治は、くすつと笑った。

「子供っぽいけれどね、君の事となると、好きな子を追い回す中学生のレベルになってしまふよ」

恵瑠は、ごく自然に治の方に身を寄せた。治が肩に回した手は、恵瑠の髪を撫でている。愛されているのだと実感できて、幸せだ。でも、色々相談事が有ると治は言っていた。そうした場合やはりテレパシーが具合良いのかもしれない。新幹線の中は、秘密の会話をするには不向きだ。

（婚約は、皆さんにお知らせするのでしょうか？）

（そのつもりだが、不都合かい？）

（いいえ、そんな。嬉しいですけど、何だか照れます）

（結婚を前提だからね。大半の人は、私たちが体の関係も有ると見るだろう。でも、そうしないと心配なんだよ。他の男は牽制しないと……大学の連中ですら、君を時折物欲しげに見つめているからね。そう言う連中は一刻も早く諦めて貰わないと、後々厄介だ）

（そうなのですか？ そんな視線はまるで感じませんでしたか……）

（君は剣道の攻撃の気配には敏感なのに、そう言った方面はまるで

子供みたいだ。まあ、そう言うアンバランスな所も魅力では有るんだが、これからはもう少し気をつけてごらん)

(そういう視線の気配が読めるようになるでしょうか?)

(私ともっと愛し合って、女としての成熟味が増したら、きっとわかるようになる)

恵瑠は、やはり照れてしまう。治にもっと愛して欲しいとは思っているが……

(おや、昨夜は散々恥ずかしい事を一緒にした仲なのに、まだ恥ずかしい?)

恵瑠が頷いて、顔を赤らめると、治は唇に軽くキスを落とした。

「東京に着いたら、すぐに指輪を作るよ。良いね?」

「婚約指輪ですか?」

「そうだ。まだ若くて学生の君にも似合うような普段使いのエンゲージリングと、私の婚約者として公の場に出たりする時のための大振りな石を使った物と、両方必要だな」

「そういう場所にも出なくてはいけないんですね」

「何、必要最低限で良いのだが……いずれは、お願いすると思う」

「あつ! 富士山ですね!」

車窓から見える霊峰富士は、今日はことさらに美しく見えた。

他の乗客たちも、今日は良い感じだ、綺麗に見える日で良かった、などなど口々に感想を述べながら携帯やカメラを取り出して撮影する。恵瑠も三ショットばかり撮ってみた。

「何だか、縁起が良い感じがしませんか?」

(本当だね。幸先が良い感じがする。今夜から君と一緒に眠つてくると、私としては非常に嬉しいのだが……聞き届けて貰えるだろうか?)

「はい」

恵瑠は、真っ赤になりながらも、どうにか返事をするのだった。

12 親密な会話（後書き）

綺麗な富士山を見ると、何だか幸先が良いと言っ気分になります。

13 婚約

「お帰りなさいませ」

執事の横島瞳よこしまひとみが深々と頭を下げる。それにあわせて、十名ほど居る使用人たちが一齐に礼をする。

この邸の者は、皆、治に心底忠誠を誓っているらしい。特にこの執事は、幾千年もの時をずっと離れず仕えて来たと治に聞いた事がある。

「このたびは、御婚約おめでとうございます。使用人一同、お祝いを申し上げます」

「確かに、親も居ない者同士なら、当人同士の意思がはつきり固まれば婚約だろうが……やはり何らかの形で披露する事が必要だろうな」

「旦那様の部屋は御命令のように、手を入れました」

「そうか。では、まずは部屋で着替えよう」

恵瑠は指輪を貰って、もう早速左の薬指に一つはめて居る。パーティーや会合で使う大きなダイヤの指輪のほうは、来週にでも出来る上がるらしい。新幹線を降りて、帰りに立ち寄った高級な宝飾店でそんな話をしていて、家に戻ったので、自分の部屋ではなく治の部屋に一緒に入るのかと思ったのだが、いつも通り、治は自室のドアに一人で入ってしまった。

そこで仕方なく、恵瑠も、自室に戻ったのだが、張り詰めていた気が緩んだのかして、ベッドに倒れこむと、そのままとうと眠りこけ始めた。

「おやおや、眠ってしまったのか。ん？サリエル、お前、気を利かせたつもりか？」

離れた部屋に居る執事に治は話しかけた。恵瑠の些か不自然なほ

どの深い眠りに彼の力の痕跡が認められたのだ。横島瞳の正体はかつて邪視で恐れられた墮天使だ。

「眠っているアリエル様を洗って差し上げたら如何でしょう？ そうなされると御自分の氣と馴染みやすいとずいぶん昔ですが、伺ったと思います」

「良く覚えているな」

「それでも、御一緒にアリエル様の御臨終に十度立ち合わせて頂いておりますから」

「風呂の支度は出来ているのか？」

「大浴場のほうに、赤いバラの花びらを浮かべさせました」

惠瑠の意識はバラの香りと心地よい暖かさに包まれて浮上した。抱きしめている治は、じつと惠瑠の顔を見つめていたのだろうか？「気分はどう？これから夕食は食べられるだろうか？」

「あの、あの、私」

「自分の部屋で、熟睡していた。私が風呂に連れてきて髪も体もすっかり洗ってもまだ目が覚めないんだから、よほど疲れていたのかもしれない」

「えっと、ここは、どこなんですか？」

「この邸の中で一番大きい風呂だ。一緒に風呂に入って、同じ寝床で眠るだけでも君と私の氣は馴染みやすくなる。出来れば毎日そうしたいのだが、イヤかい？」

髪も体も洗われたと言うのは驚いた。確かに体中汚れが取れてさっぱりしたと言う皮膚感覚が有るが……幾ら身も心も委ねて居る相手とは言え、知らない内に全裸にされて、体の隅々まで洗われると言うのは恥かしい。全て治任せにしておいて今更だが、思い浮かぶ光景の恥かしさに体中真っ赤になってしまった。

「テストや試合の前は、疲れるような事はしないから、承知してくれるだろうか？」

「はい」

「真っ赤になってしまつて……今になって恥かしくなったのかな？」
「はい」

「恥かしいついでに、私が体を拭いて髪も乾かしてあげるよ」

それだけでも、十二分に恥かしいのに、耳朶にキスをされたり軽く舐めあげられたりしながら囁かれた言葉は、もっと恥かしかった。
「アリエルは恥かしいと真っ赤になって、そのたびに沢山の蜜を吐き出すんだね。可愛いな」

た、確かに、言われた通りでは無いか！

恵瑠は、自分の恥ずかしい体の反応に驚いて、戸惑う。

宣言どおり、手早く体を拭かれてバスローブを着せられ、座り心地の良い籐の長いすに座らされると、流れるような手つきで髪の毛が始まつた。酷く気持ちが良い。

「うわあ、まるでヘアサロンでして貰ったみたい！『天使の輪』が出来てますね」

「こういう艶を『天使の輪』と言うのは、私として不本意だが、うまく行つたようで良かった」

浴室を出ると、庭の側の通路からすぐに治の部屋に入る事が出来た。

ずいぶんと大きなベッドが有つて、そこに白いニット素材のワンピースと下着が一そろい置かれている。ガーターベルトのつけ方が良く分らない。

「ショーツよりも先に身につけるのだよ。そうしないと用を足すとき困るよ」

そのショーツも真っ白で美しいレースが使われている。そろいのブラジャーを身につけると、治がいきなり手を突っ込んできて、乳房のずれを直したのには、驚いた。

「こうして、寄せて上げるようにカップに入れてごらん。そのほう

が楽し、ラインも綺麗だ」

事実そうなのだろうが、心臓に悪い。

なんと、ベッドの隣の壁は隠し扉になっていて、あけると恵瑠の部屋のベッドと隣り合わせになるのだった。前からそう言う構造で有ったらしい。

「君が私を受け入れてくれなかったら、開けるつもりは無かった」らしいが……驚いた。

「必要に応じて閉める事も鍵をかける事もできる。そんな必要がない事を祈っている」

食事の後で、改めて全ての使用人たちが一人一人、挨拶に来た。

「どうかお二人で末永くお幸せに」などと一々言われてしまうと、改めて婚約したのだという実感がわいてきた。

「明日は、大学の剣道部の新入生歓迎会だろう？OB枠で私も出るよ。その席で皆に婚約したと報告しよう」

実を言うと、そんな事はすっかり恵瑠の頭から飛んでいたが、係りの先輩が宴会場を押さえるのに、色々苦労していたのは知っている。確か気軽な居酒屋風の店で決まったはずだ。

「あの店は去年買収した外食チェーンの内の一つだ。出席者から頂く御代金は然るべき所に寄付させて貰う事にして、あの店で用意できる一番良い酒と料理を出す事にしたよ」

もっとグレードアップした店にしようとは治は提案したらしいが、例年と店のレベルが違うのはまずいと剣道部から拒否されたらしい。

使用人たちが引き下がると、二人も部屋へ戻る。

「さあ、おいで。新調したベッドの寝心地を君にもチェックして貰わなくては」

明日は大学に顔を出すし、歓迎会もあるから無理はさせない……
とは言う物の、本当に自分の体は大丈夫だろうか？心配しながらも、
恵瑠の胸の奥に広がる期待感は自分でもはしらないと思うほど、大
きいのだった。

13 婚約（後書き）

婚約って、これをしたから決まりつても無いようで、二人で結婚の約束が出来たら一応成立、らしいですね。

14 マーキング

「おはよう」

朝目覚めた時に男の顔が有ると言う状況に、恵瑠はまだ慣れない。昨夜は「無理はさせない」と言う言葉通り、治は「可愛がつて」くれて、抱きしめられて眠ったが、あれでは治は辛いのではないかと心配にもなった。

「別に必要なら何十年でも禁欲状態を保つ事が出来る」

そんな答えが返ってきた。やはり人間離れしているのかも知れない。

「おはようございます」

ベッドの脇の隠し扉から、自分の部屋に行き、シャワーでも浴びてから服を着たいと思ったが、背後から治の視線を感じる。

「とても綺麗だ」

艶やかな治の声は、恵瑠の心臓に強い刺激を与えるようだ。動悸が止まらない。気がつくが遅しい熱を帯びた体が背後に張り付いていて、両方の手で体の脇のラインを摩り上げられた。それだけで声を放ちそうに心地良い。

「ちゅっ」と高い音がして、首の後ろの付け根付近にキスが落とされた。

「私も身支度をするよ。名残惜しいけどね」

シャワー室に向かう治の体を、つい物欲しげな視線で追っている自分に気がついて、恵瑠は酷く当惑する。これが、相手に執着すると言う事なのだろうか？

朝食は和食だが、季節の果物が必ずつく。今朝は大粒のイチゴだ

った。甘くて香りが良くて、何もかけなくても、いや、これほど美味しい実ならコンデンスミルクも砂糖も要らない。どんどん食べられる。お替りが欲しいくらいだ。

「本当に可愛い」

どうやら一部始終を治に観察されていたらしい。皿があつという間に空になってしまつて、はしたなかつたかも知れない。

「気に入つたのなら、私の分も食べておくれ。そのイチゴだって、君みたいな可愛い人に食べてもらった方が本望だろうよ」

要らないと言うのも、失礼だし、実際倍量ぐらい食べたいとは思つたのだし……でも、やっぱり恥ずかしい。

「……ありがとうございます。頂きます」

その様子を、治は溶けそうな甘い視線を向けて見つめている。恵瑠はその視線の意味する所の全てが分るわけではないが、大切にしているのだと言う事は実感できる。

執事の横島は極上の煎茶を主人と恵瑠に注ぎながら、言った。

「旦那様は本当に、お嬢様が大切にいらつしやるのですね」

「今更だろう」

「これから、ますます美しくおなりでしょうから、お気持ちの休まる時がございません」

「ああ。多少のマーケティングも必要だな」

「牽制はあくまで素早く効果的に、でございますね」

「それでもなお、諦めの悪い輩やかいも居るのでね」

「旦那様を正面切つて敵に回す者が、そうそう居ると思えません
が」

「掠め取ろうとするものは居るさ。正面切つてと言う奴も現れるかも知れんな」

恵瑠は当惑した。治の以前語つた通りなら、横島は自分の過去生を知っているのだ。かつて色々と自分にかかわる厄介事が有つた

かもしれないが、今の平和な日本で、気持ちの休まるときが無いほどの心配の種に自分になるとも思えない。

「これは、不調法を。お嬢様が戸惑われるのも当然でございますね。要らざるおしゃべりは、いつの時代も慎むべきものでございますのに。どうぞ、お許しください」

「いいえ、その……」

「確かに今の日本は平和ですが、お嬢様に心奪われる男は沢山おりましょうし、旦那様の御心配もそれなりの理由も根拠も有る物だとお考え遊ばして、どうぞご用心くださいませ。では、ひとまず私はこれにて失礼いたします」

執事は悠然と部屋を去っていった。

「あの……横島さんは私の考えが読み取れるのですね」

「顔が見えて会話できるような近距離に居る時だけだな。あの男は距離をつめる事が可能なら、地球上の大半の存在の内面が読み取れる。だが、私の考えだけは読み取れないのだよ。行動や言葉から察する事は出来るにしてもね。私はあいつの頭の中身は読めるが、恵瑠の思いは読み取れない。恵瑠自身が伝えようとしている考えや言葉はどうか読み取れるが……」

恵瑠の力が大きくなれば、横島に内面を読み取られるのをブロック出来るようになるらしい。

（横島さんに頭の中身を全部読み取られるのは、勘弁して欲しいです）

（私がアリエルに触れていると、読み取れないのだよ）
（それが分かってちよっとほっとしました）

午前中はそれぞれ真面目に仕事や勉強の為の読書や調べ物をしてから昼食を食べ、二人で一緒に大学の道場に出かけた。治が会社に出る時に使う運転手つきの車の後部座席で目的地に向かったのだが、互いにびったり寄り添って秘密の会話を交わしていた。

真知子と翼には「婚約した」事実だけ手短かにメールで伝えた。すると二人からは「おめでとう！ がんばれ！ 今度詳しい話、聞かせてね」と言う、ほとんど同じ内容の返信が有って笑ってしまった。

それを治に見せると、（どんな風にデートしたとか愛し合ったとか言う話は別に構わないが、転生や特殊能力の話は注意深く秘密にして置くように）と念を押された。天界か魔界の者なら、彼女たちの意識を探って攻撃の材料とされかねない、と言う。

（白羽家の方たち、特に御両親は天界か魔界の力が作用して引き起こされた事故で亡くなれたと思う。十二分に用心するのだよ）初めて聞く意外な話に恵瑠は驚いた。そして、重大な秘密に関して用心深くなるうと改めて思うのだった。

稽古着に着替え防具をつけて道場に出ると、OBの数は非常に少なかった。今日は練習の後、新人生歓迎の飲み会だと分かっている所為かも知れないし、家族が居る人は連休中は出て来にくいと言う事かもしれない。治は初心者を相手に丁寧に指導している。翼も来たので、今日はお互い思い切って稽古できた。

練習後、服を着替える時に、翼が「おやまあ、こんな真後ろに付けるなんて、絶対わざとだな」と言うので何かと思つたら、首の後ろの付け根にキスマークがしっかり付いている。鏡で注意深く確認しないと自分ではまず気が付かない場所だ。

服を着てみると、見えそうで見えない微妙な位置だ。髪は普段はポニーテールで纏めているが「神戸のお土産」と翼がくれた白い力チューシャをすれば、髪を縛らなくても良いので首筋が隠れる。今日来ているワンピースが紺の艶のある生地、白い襟の清楚な感じのデザインなので、良く合う。

「その指輪も普段使いさせるつもりで石が小ぶりなんだろうけど、ダイヤと赤の鮮やかなルビーの取り合わせが可愛いね。ねえ、でっかいダイヤの別の指輪も有ったりする？」

「もうすぐ出来るみたい。レセプションとかパーティー用らしいよ」「さすが、財界のプリンスだねえ」

飲み会の出席率は在校生に関して言えば百パーセントだった。

「まずは、馬飼野君から目出度い発表があるので、皆聞いてくれ」剣道部の顧問からの一声で、治は一礼して、こう言った。

「私、馬飼野治と白羽恵瑠は婚約致しました。挙式その他は彼女が二十歳になってからの予定ですが、現在は結婚を前提とした真剣な交際の最中です」

一瞬、なんともいえないどよめきが起きた。

14 マーキング（後書き）

やっぱり、主張したいかもしれませんね。自分の物だって

15 気配（前書き）

翼ちゃんの正体、判明です。すみません。苗字は黒井です。

15 気配

婚約をしたことを発表したとたん、男達の上げたどよめきは、大
体が下世話な興味によるものだった。そういつた連中の内心考えて
いる事は治からすれば想定内では有った。しかし、実際に耳にする
と恵瑠が傷つくのではないかと気がかりだった。

（同じ家ならねえ。大邸宅とは言え、強引に事に及ぶ事もできるだ
ろうさ）

（人の機先を制して攻撃するのが得意な人らしい早業だなあ）

（入学したときは初心なお嬢ちゃんだったが、やられたな。残念だ）

（恵瑠ちゃんと馬飼野さんて、十五歳も離れてるんだよな。何か淫
靡って感じ）

実にろくでも無い。ここは『力』を行使して口を塞いで置く事に
した。

「何だろうな、今日の酒は旨いだけじゃなく、回りが速いな」

「今日は料理が旨すぎて、しゃべって食べ損ねるのも勿体無い」

どうやらうまく行ったようだ。

ともかく、下世話で下品な噂話をして恵瑠を傷つけなければ良い
として置く。

後は酒豪で堅物の顧問やクソ真面目な主将に、連休が明けて最初
の週末に武道館で行われる学生剣道選手権大会の話振っておく。

「その次の週は、女子の大会だなあ。白羽君、黒井君には一年生だ
が早速に出場してもらおう。どうか頼むから馬飼野君、フィアンセを
可愛がるのも程々に願うよ」

堅物の顧問でも、考える事は似たり寄ったりらしい。

一応、治としては大阪で開かれた大会での結果を踏まえて、まじ

めに交際を申し込んで承知してもらったのだと伝えると、

「おお、そうだったな！ 婚約の話で驚いて、すっかり忘れておった。『敢闘賞』第一席を勝ち取った逆胴は見事だったそうだな。是非この目で見たかったよ」

その後は、剣道談義に終始してくれて、助かった。

だが、しかし、男達の意識を『力』で操作した瞬間を誰かに覗かれた気がする。天界のものが魔界のものが判然としない。ならば中間的な性質を帯びた堕天使かもしれない。

高位のものなら、あのように露骨に気配を晒したりしないだろう。ならば、小物こものだろうが、小物自身は大した事が無くても大物の手先として働いている場合は、面倒だ。

小物の堕天使？ 居るではないか。テレパシーで呼びかけてみる。

（君は何者だ、黒井翼君）

（ルシファー様に拾って頂きました六枚羽根でございます。魔界ではかの方の結界から外に出た事が有りませんし、身分も御座いますので、王が御存知無いのも当然かと）

（ほう？ 結界の中に匿われて居たのか。人に転生したようだが？ 黒井と名乗る割りに羽根はまだ白いようだな）

（初めての転生で御座います。魔物としての転生を願っておりますので）

（と言う事は、ルシファーが人界に有る時は身近に姿を見せるのかな？）

（はい）

（なるほど。クツ……まさかこれほど近くで、いけない高校教師の役を楽しんでいるとは思わなかった。君の任務は何だ？）

（アリエル様の護衛です）

（それだけではあるまい）

（それは、直接主からその内申し上げる事になろうかと）
（まあ、良い。気配を悟られては厄介だ。今日は此のあたりで止めておこう）

口さがない男どもが飲み会のあと、自分達をどの様に噂するか承知はして居るが、その内下火にはなるだろう。黒井翼の素性とルシファーの動向の一部が知れたのは思わぬ収穫だった。これらの事実を恵瑠に知らせるのは、まだ時期尚早だ。大きな潜在能力を秘めているとは言え、まだ並の人間と能力的には大差無い状態で『力』の介入に大しては無防備なのだ。現状は六枚羽根の墮天使である黒井翼にも大きく見劣りする。

「アリエル、今夜は愛し合っても構わないか？」

飲み会が終わって、迎えの車を待つ間に治は熱っぽい声で恵瑠の耳元で囁いた。無言で頷く恵瑠の呼吸が、荒くなった。良い兆候だ。携帯を取り出し、横島瞳ことサリエルに浴室の準備を命じておく。

会合が終わったばかりの頃は、まだ緊張が残っていたのだろうが、家に戻った瞬間から、恵瑠の緊張は解れた様だ。

「抱いて、抱いて下さい」

どうやら、アルコールの副作用のようだが、悪くない。

「この世のものならぬ最高の快樂を君に与えよう」

「治さんって、表現がラテン系ですよ。見た目がもつとクールだから意外！」

「ラテン系って、当たり前さ。かつてはローマの元老院のメンバーだったのだから。可愛い女奴隷の君をやきもきさせる悪い主人だった」

ローマ^{ローマ}の放蕩者であり、皇帝の悪友であった頃を思い返して、幾度もキスを落としながら、美しい体を窮屈な衣類から開放する。

真珠色に輝く肌は、うつすらと赤みを帯びている。

「イヤイヤ！」

「いやなのかい？」

「イヤじゃないけれど、恥ずかしい」

「こつやつて、湯に漬かれれば余り気にならないだろう？」

「女奴隷さんは、御主人様とお風呂に入ったのかしら？」

「花の中でも、特に赤いバラが好きで、庭の花園から沢山摘んで来てこんな風に沢山の花びらを浮かべて昼間から私と一緒に風呂の中で戯れ、ベッドの中で情熱的に愛し合ったよ。女の愛情というものに懐疑的だった私の疑念を打ち砕くほどに、強く深い思いで私を包んでくれた。見た目は愛らしい少女だったけれどね。今の君なら、妻に出来る。それが酷く幸せだと感じているよ」

「赤いバラには特別な意味が有ったのね。小さい頃から大好きな花だったのだけど」

「記憶の何処かに残っていたのだろうね。あの頃のバラはこんなに大輪ではなかったけれど、香りは良かった」

夢見心地らしい恵瑠は自分の欲望に素直で、若い女神であった頃や愛らしい女奴隷であった頃を思い出させた。どの様な恵瑠でも愛していると言い切れる自信は有るが、楽しかった時代の思い出はまた特別なものだ。辛かった時代を共に乗り越えた思い出もまた、特別では有るのだが……

ふと、庭に大きな『力』の気配がした。激しく愛し合った後なので恵瑠はすっかり眠っている。

「ルシファア、どうしたのだ？」

スーツ姿の彼は初めて見た。羽根をしまいこんでいても、その存在感の大きさは見るものが見れば感じるものだろう。

「王よ。天界の者の介入に備えられた方が良さそうだ。黒井翼が先

日洗脳されかかったのだ。私の命を狙ったようだ。恐らくは八枚羽根クラスの天使の仕業だが、もっと上の存在が何事か企んでいると見るべきだろう」

「ミカエルか？」

「その可能性は高いが、奴の痕跡はまだ見出せない」

「墮天使の可能性は無いのか？」

「考えた事が無かったが、なるほど検討に値しそうだ」

「ルシファーよ、あの六枚羽根の娘を時折は抱くのか？ 人間界では結婚という形を取るようだ」

「あれのおかげで、どうやら愛するという感情を理解するようになった」

「それはそれは、大したものだ。高校教師としては褒められたものでは無いがな」

「ホウ？ 貴方がそのように道德じみた事を仰るとは、意外だ。貴方もアリエルにずいぶんと色々な事をしでかしたはずだが、違うのか？」

「そうだな。鎖に繋いだまま犯し尽くした事も、意識を失うまで鞭打った事も、まだ幼い体に無理に受け入れさせた事もある。それぞれ、事情は有ったのだから。それでもずっとアリエルだけを愛して来たよ」

「いやはや、凄まじい。『事情』と言うのは、何者かの介入の結果か？」

「例外無く、そうだったな」

「貴重な時間に、御無礼した。お許し頂きたい」

「それこそ、そのような侘びなど珍しい。いや、初めてではないか？」

ルシファーも愛を知って、色々目覚めたらしい。

部屋に戻り再びベッドに入ると、恵瑠が体を摺り寄せてくる。無

意識のこうした反応は嬉しいものだ。愛されているという実感が沸く。

「ゆっくりお休み。目覚めたら、また、愛し合おう」

忍び寄る怪しい気配に対する警戒だけは怠らずに、居なくてはならぬまい。相手が天使であれ魔物であれ。結界を張り巡らせてから、治は恵瑠を抱きしめて穏やかな心持で眠った。

15 気配（後書き）

うわっ、すみません。某世界的名作の設定、勝手に使ってます。あの美少女奴隷さんの御主人様に対する愛情表現は胸キュンものですよね！

16 何事も修行（前書き）

ええっ、実は私が温泉に行きたいんです。

16 何事も修行

恵瑠は五月に武道館で行われた関東地区の学生の大会で、大方の予想通り優勝した。準優勝は黒井翼で、恵瑠は翼の攻撃の起こり頭を面で討ち取ったのだ。二人のおかげで母校は他の大学を圧倒する好成績だった。

「何だか戦い方が馬飼野君に似て来たな」

「そうそう、機先を制して勝つて感じですよね」

顧問や部長にまでそんな風に言われた。

「恵瑠の見切り方は神業の領域だよ」

練習試合では三本に一本は翼が取るし、日によっては五分五分と言つ日も有るから、ひよつとしたら勝てるのではないかと思つていたが、本番に俄然強い恵瑠に鮮やかに一本取られてしまったのだ。以前から見切りの凄さは定評があつたが、婚約してからより一層勘が冴えている様だ。

当初は部員不足で九月の五人制の団体戦の大会には出場を見送る予定であつたのだが、嬉しい誤算が有った。高校時代に大会に出場経験の有る女子が、恵瑠や翼の試合を見て参加を申し出てくれたのだ。

「すごい試合だった！ 私も二人と一緒にまた剣道がしたい！」
剣道が忘れられないで見学に来ていた者も多かったのだ。一挙に女子部員は四名増えて、総勢八名。新入部員は全員二段以上でその内一年生が六名と言う変則的な構成だ。

治も無論見に来ていて、剣道部の機関紙の撮影を手伝っていた。

「や、これが一番恵瑠ちゃんの凄さが伝わってきますね」

決勝で面を決めた瞬間を的確に捉えた一枚は、プロ並みの出来栄

えだった。

「そりゃ、馬飼野さんは愛が違ってもんな、愛が」

治はやつかみ半分、からかい半分の言葉を涼しい顔でスルーしたが、恵瑠がやって来るとヒシッと抱きしめて「おめでとっ」と囁いた。恵瑠は花のような微笑を浮かべて、治をじつと見る。

「おうおう、二人の世界を作っちゃって」

一人の四年生男子が騒いだので、周りが袖を引き、口を塞いでやめさせる。

「こら！ やめろ！ 度が過ぎると馬飼野さん、怖いぞ。お前や俺の内定先だつてあの人の会社じゃないか」

「お前みたいな考え無しの馬鹿のあおりを食らって、俺が所属してる研究室の研究費が削られたら事だよ。お前ね、もうちょっと立場をわきまえる立場を」

治はごく普通にOBとして剣道部の中に溶け込んでいるが、よく考えれば、巨大な企業グループの総帥なのだ。大学も卒業生も様々な面で、治の持つ資金力・財力に支えられている。

普段の道場の雑巾がけから、様々な雑務まで気軽にこなすので、そう言う大立者だと言う事はいい忘れがちだが、本当に忘れたら大変な事になるかもしれない、と思っっている者は多い。

「馬飼野さんのお立場で、有りえないような事までずうずうしくお願いしまして……」

冷や汗をかく主将や部長に対して、治は至って気軽な明るい調子でいつもこう言う。

「何事も修行ですから」

主席師範の八段などはその言葉に甚く感動^{いた}して、「君らも見習い給え。広く世に認められる人物はやはり心構えが違っ」などと言う

のだったが……

「恵瑠ちゃんとやるのも修行なんだよな、きつと」

「実際、恵瑠ちゃん、強くなったし、色っぽくなったな」

「何と言うか、引く手差す手……」

「互いの呼吸のタイミング、とか？」

「全部修行になってるんだろうな」

「畜生！ そんな修行なら僕もしたいぞ！」

男子部員の中には馬鹿な盛り上がり方をする者も結構居て、翼に竹刀ではたかれたりするのだ。

「ちよつと！ あんた達、そんな事を恵瑠に言うんじゃないわよ？ 分かった？」

その翼の怒る顔が、また萌えるなどと悶える男子も居るが、本人はスルーしている。

「それにしても……」

どうしてこうも恵瑠は自分に向けられる男達の眼差しに鈍感なのか、翼から見ても実に不思議だ。いつもクールな女子の先輩達が翼に言ったような分析が、或いは正しいのだろうか？

「とりあえず危険が無ければ、馬飼野さん以外の男の視線なんて、恵瑠ちゃんには何の意味も無いんじゃない？ たぶん、そこらを飛んでる羽虫程も気にしてないのよ」

「命の危険を感じるような殺気を帯びてるか、自分よりも明らかに強そうか、馬飼野さんよりハンサムでセクシーか、そのどれかに当てはまらない限りどうでも良いんじゃない？」

美男美女で様にはなってるけどさ……馬鹿ツプルって言われても仕方ないかな。ぼんやりと翼が二人の様子を離れた位置から見ていたら、いきなりテレパシーで言葉が脳内に飛び込んで来る。

（わかった。自重しよう。ルシファーと君は馬鹿ツプルでは無いらしいな）

（あ、あはは、まあ、お二人とも人目につきますから、続きはどうぞコッソリなさって下さい）
（そうしよう）

大会が終わると治は公園内のパーキングに止めた車に恵瑠の防具を積んだ。

トランク内に収めたクーラーボックスに恵瑠が気に入っているミネラルウォーターと、一口サイズにカットしたオレンジにさくらんぼが入っていた。どちらも恵瑠の好物だ。二人で公園の涼しい木陰に座って水分とビタミンを補給してから、車に戻る。

「昼飯はどうする？ 既に少し遅い時間だが。近くに悪くないイタリアンレストランがあるが……実はね、これから温泉に行こうと思うんだよ。せっかく良い宿が取れたのでね。そのボストンバッグに女達に纏めさせた着替えや小物が入っているが、一泊なら足りるかな？ 何か不足なら取りに戻るが」

恵瑠が促されて中身を確かめると、下着に化粧品その他もろもろが手際よく纏められていた。

「私の分は大丈夫です。治さんの分は？」

「昨夜の内に用意したよ」

「いきなりでびっくりです。良く宿が取れましたね。どこまで行くのですか？」

「厚木のちよつと先だ。大して遠くない。食事をして高速に乗るか、さっさと行って早めの夕食から酒も追加してのんびりするか悩むな

……」

「道路が混まない方が良いでしょうね」

「じゃあ、もう、まっすぐ行く事にするよ。そのほうが安心だ」

「お夕飯は温泉でゆつくりですね」

「檜作りの露天風呂が部屋についている。庭も風情があって部屋は

ゆったりしている。君もきつと気に入ってくれと思うけどな」

五月の昼下がりに、二人でドライブを楽しむにはもってこいの良い天気だった。

17 目指せ湯煙美人（前書き）

恵瑠は大人になろうと結構がんばってるんですが、空回り気味かも。

17 目指せ湯煙美人

宿泊する部屋は、その旅館の貴賓室だと言う。もともとは明治期にとある華族が皇族などの賓客を迎えるために作ったものらしい。風情の有る庭に面した明るい広縁、今では余り見かけなくなった本格的な床の間、精緻な細工の欄間などなど、恵瑠には細かい事は良くわからないが、非常に贅沢な作りだということは分る。

「まあ、綺麗なツツジ」

「早めの夕食の前に、その風呂に入らないか？」

湯量がたっぷりの部屋専用の露天風呂は、風雅な庭を見渡せる。

「仲居さんが来ませんか？」

「来るだろうけれど、こちらは新婚だと言ってあるから此処を覗きには来ないだろう。床の間が有る向こうの部屋に配膳してくれるさ」

正直な話、治が結界を張ればよほど力の有る魔物か天使でもなければ、だれも覗き見など出来ないし、音も外には漏れないが恵瑠にはそうした力については、説明してない。まだ人間のレベルにとどまっている恵瑠には、知らせるべきかどうか微妙な事柄が多い。

「新婚？つって……」

「ちよつとフライングなだけじゃないか？それとも不味いのかい？」

「何か、恥ずかしくて……」

「それだけ？別の気になる男でも居るのかと心配になった」

「……そんな、別の人なんて居ません！」

「怒ったのか？」

「……私には治さんだけです」

そう言った直後、恵瑠は真っ赤になった。

「なら、何の問題も無いじゃないか。フツ、真っ赤になって可愛い

な」

気がつくと思瑠は裸にされていた。いつも思うのだが、どうしてこつも手際が良いのか？ 思瑠は逆に治の服を脱がせようとした事があるが、シャツのボタンを外すのにまごついたり、ベルトを外すのに手間取ったり、全然うまく行かなかった。

やっぱり、経験の差なのかな……。自分は幾度も生まれ変わっているらしいが、そんな記憶がほとんど無いのに、治の方は全部覚えているらしい。自分は転生しているが、治はずっと生きてきて姿を変えているだけだというのが、本当は一体何歳なのだろう？

「さあ、入ろう」

抱えあげられて、二人で一緒に檜^{ヒノキ}で出来た大きな浴槽に入る。次から次へと透明な湯が流れ込み、肌に心地よい。

「治さんて、一緒にお風呂に入るのが好きですね」

「そうだね。風呂に入れないと、ストレスを感じる。君と初めて夫婦になったばかりの頃は、風呂じゃなくて清らかな泉での沐浴だったけれどね」

「以前話してくれた、一番最初の結婚の頃ですか？」

「そう。あの頃は暖かい場所で生活していた所為も有って、君も私も上半身は何も着ないで、腰布だけで暮らしていた。魅力的な胸を堂々と見せてくれていたわけだ」

「半分、裸のような格好ですね」

「人も神も皆がそのような格好だったから、別に変だとも思わなかった。君の豊かな乳房に煌びやかな胸飾りが良く似合っていたよ」

「……泉の中でもこんな感じでしたか？」

治は思瑠を後ろから抱きかかえ、胸を揉んでいる。気持ちは良いのだが、恥ずかしいのだ。

「いや、あの頃の君は私に裸をさらしても恥らったりしなかった。あつげらかんとしたものだったが、無邪気で可愛らしかった。服を

脱がすと真っ赤になる今の君の方が、もっと魅力的だけどね」

「……よ、良い景色ですよ」

「ああ、絶景だ。君は本当に綺麗だ」

膝の上で器用に恵瑠の体の向きをひっくり返して、恵瑠の唇にキスをする。恵瑠も懸命に舌を絡ませて頑張ってみるのだが、脳髓が焼ききれるような激しい快感を齎す治のような具合には行かない。

「……はう……」

口が離れると、つい間の抜けた声が不用意に漏れてしまう。口の周りに垂れてしまった涎は治が舐め取るが、それでまた恵瑠は昂ぶってしまう。

「あの頃は、清らかな泉の中で幾度も幾度も口付けを繰り返したものだ。私が君に口付けると、次は君が私に口付ける、そんな事を延々と繰り返し一向に飽きる事がなかった」

恵瑠は白い腕を治の体に回して、抱きついた。

「治さん……」

ツツジだろうか、甘い花の香りがする。源泉かけ流しだという湯の湧き出す音に混じって、川のせせらぎの音がする。治の心臓の鼓動が聞こえ、いつもよりも荒い呼吸が感じられる。

「！」

恵瑠の腹で情けない音が響く。こんなタイミングで鳴らなくても良いのに……治は、笑い出した。

「さあ、食事の用意も出来たようだ。上がるうか。ん？」

恵瑠が涙目になっているのに気づくと、治はまぶたにキスを落としたり。すると、それが引き金になって、恵瑠はぽろぽろと涙をこぼし始めた。

「私、私……何だか情けなくて……」

「試合であれだけ活躍したんだし、君は健康で若いのだから、空腹

になって当然じゃないか。……ああ、笑ったりして、悪かった。ごめんよ」

治は手際よく体を拭き上げると、自分自身と恵瑠の浴衣の着付けを済ませる。浴衣姿は又いつもと違うしつとりした雰囲気で、悪くない。近い内に恵瑠の着食物も買おうなどと治は思った。

「さあ、ご機嫌を直して食事しよう。季節の会席料理らしいが、此処は肉の料理もうまいんだよ」

配膳された山海の珍味は恵瑠を喜ばせた。全部で十品以上の豪華な料理は彩りも美しい。

「これ、フォアグラとお味噌が合わさって、斬新ですね。とても美味しい」

フォアグラの西京焼きと言うオリジナルメニューの他、和牛の焼き物、鴨の味噌漬と言った肉類が恵瑠は殊に気に入った。茗荷・三つ葉・筍と言った素材の香りや風味も楽しんだ。最後に小さなケーキとアイスクリームの盛り合わせが運ばれてくると、つい笑みが零れてしまう。

「美味しいかい？」

「はい！」

変に蘊蓄を傾けられるより、こんな風に素直で簡潔な返事を返される方が、治は好ましく感じる。

「さて、腹ごしらえが済んだわけだが、どうする？この宿自慢の灯籠で照らされた庭を散歩するかい？それともゆっくり酒でも飲む？ああ、別にケーキを頼んでお茶と言うのも出来るそうだよ。私としてはさつさと寢床に入るのも悪くないと思うが」

「じゃあ、お散歩をしてからお酒を飲んで、寝ましよう」

「確かにそれが賢いかもしれないな」

手をつないで、灯籠で照らされた庭を巡るのは悪くないが、旅館の下駄の鼻緒が恵瑠の足に食い込んで、途中から歩くのが辛くなっ

た。

「大切な足なんだから、我慢してはいけないよ」

治はすぐに気がついたようで、下駄を恵瑠に持たせると、肩の上に抱きかかえて部屋に戻った。傷薬を借りてきて手当てをすると、宿の方から「お詫びのしるし」として、季節の果物が出された。

それを食べて、上機嫌になった恵瑠に治は「そろそろ寢床に入ろう」と促す。

続きの部屋に二組並べて敷かれた布団は、行灯風のデザインのフロアスタンドに照らされて艶めいて見える。恵瑠はそれを見ただけで、呼吸が荒くなってきた。

「たまにはこうした布団の上で愛し合うのも、悪く無さそうだろう？」

池の鯉が跳ねたのだろうか、水音が聞こえる。ずっと流れている露天風呂の湯の音……控えめな明かりの中で治はいつもよりも更に艶めいて見える。

恵瑠は、自分から治に抱きついた。

「抱いて下さい」

自分でも声が裏返っているのがわかる。それを聞いても治は笑わなかった。

「わかった。うんと、可愛がつてあげよう。夜は長いのだし……」

帯を解く衣擦れの音が響き、治の大きな手が浴衣の前を寛げる。

これから始まる陶酔と激情のせめぎ合いを告げるように、幾度も幾度も啄ばむ様なキスが繰り返され、互いの熱が次第に高まって行くのだった。

18 浴衣美人の愛し方（前書き）

温泉シリーズ最終（苦笑）

18 浴衣美人の愛し方

アリエルは、まだ恵瑠としての意識しか持ち合わせていない状態だが、それでも徐々に自分自身の過去生の存在を受け入れるようになって来た。露な乳房に煌びやかな胸飾りを着けた女神だった頃の姿と、今の有様は些か趣が違うが、素直な気性と真っ直ぐな愛情表現は一致している。

透明で湯量も豊富な温泉は肌に心地良い。

言われるまで意識した事は無かったが、確かに私は何かと言うと彼女と一緒に風呂に入る傾向が有る。風呂に入ると美しい肌がより一層みずみずしくなるのも良いが、入る前後に服を脱がせたり着せたりするのも楽しい、それに何よりこれから愛し合おうと言う時の導入としては、悪くないからだ。

試験やレポートで忙しい時、月の物の時など、致すまでに至らない日も案外普段は多いのだが、それでも同じベッドで体温を分け合うようにして眠る事を、大阪から戻って以来ずっと続けて来た所為か、このごろの恵瑠の愛情表現はバリエーションが増えて来て、より積極的になって来ている。

私にすれば、実に嬉しい変化だ。

恵瑠の腹の音が聞こえた時に、笑ってしまったのは不味かった。私としては若い健康な食欲が微笑ましかっただけなのだが、珍しく積極的になっていた彼女の気分を挫いてしまった様だ。せっかく彼女が好きそうな献立の食事なのだし、伸びやかに楽しく食べて貰いたかった。幸い料理は口に合ったようだったが……

浴衣も良く似合う。難を言えば豊か過ぎる胸が着付け次第では零

れやすいと言う事ぐらいだろうか。これは本格的な着物を早めに用意した方が良さそうだ。園遊会などに出るには格式の高い着物が有ったほうが具合が良いだろう。本格的なローブデコルテも作る必要があるし……

「お前さんの婚約者、凄く美人だそうじゃないか。しかも剣道では知られた選手だし。振袖を着せて園遊会に出てくれれば場が華やくお前さんだって、婚約者の晴れ姿、見たいだろう？」

実を言えば総務省に居る剣道仲間からこんな風に持ちかけられている。確かに私も恵瑠の振袖姿が見たい。こちらの事情と私の性分を心得て話を持ちかけて来たと言うわけだ。

「氣心が知れていて、場合によっては警護もお願いできる人材なんてお前さんぐらい」とは以前から言われていたのだが気が進まなかったのだ。こうした催し物は「招待を断らない人間」でなければならぬ。秋の園遊会の場合、招待客は夏の内に決めてしまうものらしい。

「お前さんの剣の師匠も今度は呼ぶぞ。それならお前さんも婚約者を連れて行きやすいだろう？」

そうまで言われれば、さすがに出席せざるを得ない。

食後、手をつないで庭を散歩をしながら「近い内に振袖を買いに行こう」と話すと、彼女は唐突な話に感じたようだったが「成人式の振袖って、かなり前から用意するみたいですね」と言った。

「成人式よりもかなり前になるが、或る催しに剣道の関係者が招待される可能性が高いんだ。君も是非に言う話も出ているので、正式な晴れ着が必要だと言うわけだ。君が行く場合は私がエスコートするよ」

「それって、どんな催しですか？」

「国が行うと言うか、皇室関係の催しだよ。かなり前に招待者を固

める必要が有るらしい」

「あの二ユースで見た事が有るんですが、園遊会か何かですか？」

「ああ。春と秋の年に二回有るわけだが、招待客リストに乗ったら出席は可能だと答えたよ」

びつくりしたのか緊張したのか、その時、下駄の鼻緒で足の指をどうかしたようだ。これ以上痛めたら厄介なので、彼女を抱きかかえて部屋に戻り、傷薬を宿の方で都合してもらった。すると、氣を使わせたようで宿側の「お詫びのしるし」だと言う果物が運ばれて来た。

「園遊会だって、君はそんなに話す必要も無いから、美味しいものを綺麗な庭で楽しく食べれば大丈夫だよ。私も居るし」

どうやら落ち着いて来たようだ。美味しい果物のおかげか機嫌も良くなって、ほっとする。

それから二つ並んだ布団に入ってたわけだが……

「抱いて下さい」と彼女の方が私の布団に入ってきた。緊張しすぎて、声が裏返っている。毎日寢床を共にはしているが、確かに彼女の方から言い出しにくいのだろう。それでも、思い切って私に伝えてくれた訳で……愛しい気持ちが胸の底から湧いて来るのを感じる。

口付けというのは不思議なものだ。テレパシーなど抜きで自分が相手を、相手が自分を欲しいと思っているのかどうか、やけにはつきり判ってしまう。アリエルは懸命だった。どこか焦っているように感じる。性的な欲求を抱えているのはごく当たり前の事なのだが、私に抱かれるまで無垢で経験の無かった彼女は、自分の事であつても受け入れるのに難しさを感じるのかもしれない。彼女のまだどこか不器用で、それでいて何かに憑かれたような舌の動きが私の熱を煽る。

「私は、いつだって君のものだよ。欲しいと思えば、素直に口にしておきたいんだ」

よっぽど「抱いて下さい」の一言を口にするのに勇気が必要だったらしい。私の言葉でアリエルの中に張り詰めていた物が砕けたらしい。無垢な美しい瞳の中に見え隠れしていた、おびえた子供のよくな表情が消えうせ、昔々の女神であった頃のように健やかな欲望を私に向けてくる。

「そう、それでいいんだよ。自分の気持ちに正直になって」

真珠色に輝く滑らかな肌、瑞々しく伸びやかな肢体、素直な欲望に濡れた声……ああ……むしろ、私の方が君を何時も欲しがっているのだ。君は私がどれほど君を欲しがっているか、分っていないのかもしれない。私はずるいから、それを君に悟られないように時折小細工もするし。今の君はまだそれを見透かす力は無いようだが、その内しつかり見破られる事になるのかもしれないね。

まだ、しばらくはこのままで良い。君が私を本気で欲しがっていると言う実感を噛締めたいから。

それにしても、二つ並べられた布団の上で、浴衣の前をはだけ艶やかな黒髪を乱して喘ぐ姿は、実にそそられる。初めて抱いた日からまださほど経過していないのに、どこか子供っぽい青さを感じさせた肩先から胸元のラインが、日を追うごとに成熟度を増している。零れ出る乳房の瑞々しさはどこか新鮮な果物を思わせる。

幾度も追い上げて、意識を失う程の激しい快感に二度三度引きずり込む。此処までしておかないと、どうも自分は安心できないらしい。彼女が欲しがるのは私だけでなくてはいけない。彼女の欲望に

濡れた瞳の先に居るのは何時も私で無ければいけないのだ。

丁寧に彼女の体に飛び散ったものを拭き清めてやり、乱れ放題の浴衣もしっかり襟元を合わせて着せ直す。それでもアリエルは目覚めない。随分と無理をさせた。君が私を欲しがってくれたのかこつけて、思いっきり貪り食らったのは私の方だ。

「私が、私の気持ちに正直になると、君を壊してしまいそうだ、アリエル」

鳥の声が聞こえる。空が白んできた。

私は風呂に一人で入り直し、きつちりと浴衣を着て彼女に寄り添った。まだ一眠りする時間はありそうだった。

19 異変（前書き）

浮かれてばかりも居られないようです。新メンバー登場です。

19 異変

私は治さんを愛している。

出合った時からとても気になる人では有ったけれど、男と女の関係になつてから体だけではなく、紛れも無く私の心が治さんを必要としている。もう離れたら、多分生きて行けない。こんなに誰かに執着するのは生まれて初めての経験で、自分の中で目覚めた激し過ぎる感情をどうすればよいのか、まだ子供の私には分らない。

「抱いて下さい」

こんな事を言うなんて、はしたない、と思う反面、治さんはその言葉を待っている……そう思ったのは、余りに自分勝手な希望的観測だったかもしれない。でも、たとえそうであつたとしても、治さんは私を受け入れてくれた。

「私は、いつだって君のものだよ。欲しいと思えば、素直に口にしておいて良いんだ」

私の中で駄々をこねて泣き喚いていた子供は、一番欲しいものを貰つたのだ。

大きくて器用に動く治さんの手は、私自身も知らない快樂のポイントを幾つも幾つも知っていて、私の体を自在に操る。彼の腕の中で私は私自身が聞いた事もない濡れたいやらしい声で喘ぎ、呻き、涙を流し、乱れ、わななき、弛緩して、意識を失う。私はこんなに欲張りだつたなんて、知らなかった。欲張りで我儉な私を満たしてくれる人……人ではないのかもしれないけれど、かつて私の夫だつたと言う彼は、私の欲望を「健康的だ」と言う。

彼は、今朝も優しい穏やかな笑みを浮かべている。静かで落ち着いた雰囲気は、昨夜私を翻弄し狂喜させた人とはとても思えない。

「私って、治さんのお役には立てないのでしょうか？」

人間として必要とする全て、全ての欲求と欲望を治さんは満たしてくれている。

治さんは私に多くを与えてくれているのに、私は何も治さんに与えられない。

「それは違う。君が私の傍に居てくれるだけでも嬉しいのに、君が僕を愛してくれている、必要としてくれていると伝えてくれて、恐ろしいほど幸せだ」

伝えようとしてくれた事は、ある程度理解はした。でも……何かもつと、具体的に役に立つ事は出来ないのだろうか？大切な人の役に立ちたいと言う気持ちには、愛している人に愛されたいと言う欲求と同じくらい強い物なのかもしれない。

「では、私の妻になる為にちょっとがんばってくれるかい？」

「私に出来る事でしたら、何でも」

「じゃあ、とりあえず、ダンスと茶道辺りから始めようか」

これまで財界関係のお付き合いは「見た目が年寄り」の部下達に任せて来たのだそうだが、そろそろ人間としての肉体が限界に近いそうで、治さんとしては私が妻になったらそのあたりの事を自分達でやる事にしようと言う心積もりらしい。

「部下達の中には、私とアリエルの息子達も含まれているのだが、その内会ってくれるかい？息子達は非常に会いたがっている。まあ、見た所はあっちの方が今のアリエルのお祖父さんに見えてしまうんだけどね」

「ええ？私の息子達なんですか？」

「ああ。一人は君が女神であつた頃に生み出した子で、もう一人は君が天使にされてしまつてから産んだ子だよ」

「えつと、二人とも日本で人間やつてるんですね？」

「ははっ、面白いなその言い方。そうだよ。二人とも表向きはしかるべき企業のトップを務めている。アリエルの人間界での十回目の死の後、あの子らは世界中に残る気配をたどり、君が次はどこに生まれるか探り出してくれた。日本で待てば良い事は分つたんだが、ピンポイントでいつとか、日本国内のどの場所とかと言う程の精度は期待できないから、後は私も手探りで探していたんだよ。割合と早い時期にこうして又めぐり合えて、本当に良かった」

「と言う事は、二人とも結構有名な会社の社長さんとか会長さんとかなんですか？」

「まあ、そうだな。私との親子関係は秘密事項だし、私の企業グループとは見かけ上は無関係に見えるように色々細工はしてある」

二人の『息子』の今の状況だけど、一人は世界的な自動車メーカーの創業者で会長、もう一人は大銀行の頭取をやっているらしい。経済新聞やビジネス関係の専門誌で結構写真を見る人たち、それも財界の大御所？そんな年頃の人たちの正体が、過去に私が生んだ息子達って……

「ちよつと理解しきれ無い？」

「はあ……正直な話、訳が分らないです。……本当なんでしょうけど」

「会つてすぐに息子達の真名まなが閃く様なら、アリエルの力も大きく伸びるだろう」

「閃かなかつたら？」

「私とのなじみ方が不足している訳だから、もつと頑張ろうか、ね？多分、あいつらが会いたいと言うんだから大丈夫だと思うよ」

なじみ方？なじみ方って、前、何か言っていなかったっけ？あ！

「ほら、せっかくの美味しい味噌汁が冷めるよ。なに、あれだけ昨日は愛し合えたから十分なじんだはずだよ。だから大丈夫だ」

あはは、やっぱり、そうなんだ。思い出すと恥ずかしい。それにしても、治さんはさうと大人な話も出来てしまっただなあ。これも経験の差だろうか？

「一体私達の子供って、何人居るんですか？」

朝食が終わって、ゆっくり食後のお茶を飲みながら話を続けた。帰り支度は大方治さんが手際よくやってくれて、荷物を積んでチェックアウトしたら後は帰る予定だ。治さんは朝風呂を楽しんだみたいだけど、私は正直な話、ちよっと体がついて行かない感じ……幸せだけど、だるい。

「それは、力が目覚める段階で段々分ってくるはずだよ」
人の力を超えた力と、秘密の知恵に関わるから、力の覚醒が不十分な内は知らないほうが良い事らしいのだけど……ちよっと、寂しいかな。仮にも子供だって言っただから。

これで、後は無事に治さんの車で東京に戻れば、何の問題も無いはずだったのだが……

東名高速をもうすぐ降りようと言う時に、異変が起こった。

「あれ？くそっ！ブレーキが効かない！やられた！これは……天界の者の仕業だな」

ええっ？

「エンジンブレーキで今はとりあえず無事だが、まずいな……」

「携帯でロードサービスの会社に連絡を取ります？警察でしょうか」

？」

私は治さんの判断を待った。

「アリエル、息子達に呼びかける。私の体に触れて、君が知っている姿、名前で構わないから、強く思い浮かべるんだ！力を貸せ、我々に仕掛けられた罠を打ち砕けと！」

私は治さんの腕に触れて、言われたように思い浮かべてみる。

（富原創一さん、羽根山太郎さん、お願い、治さんが大変なの！高速道路で車のブレーキが効かないの！助けて、力を貸して！）

目を閉じて、必死に願う内、どこかでなじみがあるような二人の男性の声が聞こえた。

（承知しました、我が力をお役立て下さい）

（母上、力をお貸しします）

その声を聞いた瞬間、背中のにどりに、強烈な熱気を感じた。冷や汗が流れ出る。

「よし、いいぞ、成功だ！」

治さんのその声を聞いたとたん、私は助手席のシートで意識を失った……らしい。

気がつくと、私は又、治さんに抱きかかえられて、バラの花びらが浮かべられた家のお風呂に浸かっていた。バラの花びらには、治さんと私の気をなじませる力があるそうだ。かなり慣れたけれど、気がつくといきなり全裸と言うのは、やっぱり恥ずかしい。

「頑張ったね、アリエル。もうちょっとしたら息子達がこっちに会いに来るって。二人とも会社は休みで、一緒にゴルフをしていたらしい。ちょうど帰り道だし、寄らせてくれて事だよ」

「富原創一さんと羽根山太郎さんが？」

「ああ。二人に会えば、きつとすぐに、真名を知る事になるよ。さつき、車の中で羽二枚分の力が覚醒したようだし」

「羽根つて、天使の羽根？」

「アリエルの場合は墮天使なんだろうがな。余り愉快な言い方じゃないが、女神だった君が無理に天使に転生させられた時点で、力の覚醒パターンが天使と同じような形になってしまったのだな。私も今では似たような状態だから、そのほうが力の合成もしやすいんだが」

治さんの話してくれている事の、半分も私は理解できていない。多分力と言うか能力不足なんだろうと思う。

「私、少しは治さんのお役に立てました？」

「ああ。あのまま衝突していれば、君も私も再び別れ別れだ。本当に良かった。助かったよ」

例によつて、治さんは私の体を丁寧に拭いてくれて、上手に髪をブローしてくれる。とても気持ちが良いのだけれど、やっぱり恥ずかしい。でも、嬉しい。幸せ。

「些か年寄りじみた息子達だが、せっかく来てくれるんだし、少しおしゃれしようね」

治さんが「それが良いだろう」と言う、真っ白いニット素材のワンピースを着る。ごく薄くだけど、手抜きはしないできちんとメイクをする。アイメイクにチークもルージュも治さんがやってくれた。確かに。ちよつといつもと雰囲気が違うかな……落ち着いて、穏やかな雰囲気。

「今日は穏やかで優しい感じになるように、色を選んだよ」

出来上がりを鏡の前でチェックしていたら、ドアがノックされた。横島さんだ。

「富原創一様、羽根山太郎様、お着きになりました」

「さて、アリエル、息子たちに会いに行くよ」

何だか奇妙な感じだけど、治さんの嬉しそうな顔を見ると、二人に

会うのが楽しになった。

20 交流の始まり

「お二人ともご無事で！」

「本当に良かったです！」

声を弾ませた、六十代と見える男性二人は、子供のように感情をあらわにして喜んだ。

「ベルゼバブ！バルベリト！今日は本当にありがとう！」

恵瑠は、跪く二人の頭を抱きかかえた。事情を知らぬものが見たら、成人前の若い娘が身なりの良い老人二人の頭を抱きかかえるなど、一体何が何やら訳が分らないだろう。

「アリエル、この子らの名前をちゃんと思い出せたね」

「ええ！」

富原創一を名乗るベルゼバブ、羽根山太郎を名乗るバルベリトそれぞれ額の額にキスをした。

「あ！」

一瞬にして人間としての意識に戻ったため強烈な羞恥心に駆られた恵瑠は、急に二人から離れ、治の後ろに隠れた。

「アリエル、急にどうしたの？」

「……ごめんなさい」

恵瑠は治のジャケットの裾を握り締めている。その姿は親に助けを求める幼児のようだ。

「母上は、まだ人間の意識に縛られておいでなのでしょう。妙齡の女性が我々のような年恰好のものを抱きしめられるのは、確かに奇妙でしょうから」と富原創一が言えば、

「二枚羽根の覚醒だけで、あれほどの力を示されるとは、さすがです」と羽根山太郎が言う。

「それにしても、父上、天界の者達は何処までつかんでいるのでしょうか。父上の正体まで掴んでいるとは思いますが」

「ベルゼバブの分析は甘いのではないか？父上のお車のブレーキに仕掛けをしたのは、魔界にかかわりがあるのなら、この事だろうが、先ほどの件で我等の力と母上の力の合成を感知したものが居るかも知れない。下手をすると父上の真の姿を悟られかねないと思うが。父上はいかがお考えで？」

治が話をし始めようとしたところ、庭に大きな力の気配が降り立った。当然のような顔をして、スーツ姿の青年が部屋に入ってきた。

「ルシファー」

「王よ、御無事でしたか。御子息らも力を貸されたようですね」

「ああ。アリエルの力添えで、無事に此の子らの助けを呼ぶ事ができた」

「それは重畳。ほう？羽二枚分の力は覚醒されたのだな」

禍々しいほど整った美貌の青年にじつと見つめられて、恵瑠は体が震えた。凄まじい力の差を感じた所為なのか、どうか、自分でも理由は分らない。ともかく、声も出ない感じがした。取りあえず、会釈をすると、思いの他優しげな微笑が浮かんだので、ほっとする。

「ルシファー様、首尾は如何でしたか？」

ちよつと神経質な感じの声で、羽根田太郎と言いかバルベリトは尋ねる。

「王の車に悪さをした四枚羽は、抜かり無く捕らえたが、奴に命じた者をまだ突き止めていない」

「その、四枚羽、人間界にまだ居りますか？」

やや太目の富原創一も心配げだ。

「いや、魔界の我が城に捕らえてある。人間界では危険が大きすぎ

る。王よ、まだお伝えするべき事は多そうだ。残りは又日を改めてお知らせに伺う。では」

又、いきなり、青年は姿を消した。

「直接手を下した小者は押さえられたにしても、黒幕が不明と言う事は、やはり注意が必要です」

「バルベリト、ならばこれから如何すべきだと考える？」

治はバルベリトを信頼しているようだ。

「私は母上のお力の覚醒を急がれるべきかと思います。此の日本には我等の他の魔族も居りますし、表立って天界を追放はされてはいないものの、意見や主張の違いから墜天使に近い存在と見なされる者たちも来ております。何しろ、日本は安定した近代的な国家でかの『唯一絶対神』の締め付けがほとんど無い珍しい国ですから。これらの者達の力を借りましょう」

「バルベリトの申しますように、彼らの力を借りれば母上のお力も早めに覚醒するでしょうが、出来ましたら、天使どもの目には留まりにくい形がよろしいですな。茶道など始められては如何でしょうか？その方面でしたら、私もかなり母上にお力添え出来ましょう」

富原創一としてのベルゼバブは財界有数の茶人として通っており、その人脈を辿ると思ひもかけない超大物との付き合いが出来たのだと言つ。

「かの三十六枚羽の双子の兄弟は、今の天界の有様を良しとしておらぬようでした。その主張は天界にも言論と思想の自由が必要と言った所のようです。父上・母上に対する数々の許しがたい行為については、完全に私とも意見が一致しております。あれは、神としておよそ最大級の過ちであり、とてつもない愚行・蛮行で有った……と」

「ほう、それは又力強い話だが、その双子殿を信じてても大丈夫だろうか？」

「嘘を見抜くのはバルベリトの得意技ですが、なあ、どう感じた？あの双子殿は」

「私もベルゼバブの見立ては正しいと感じました」

「ふうむ」

治は何か決断しかねて居るようだ。

薄々事情は飲み込めてきたものの、恵瑠にはまだわからない事が多すぎる。

「その三十六枚羽だと言う双子さんは、どなたなのですか？」

「サンダルフォンとメタトロンとおっしゃいます」

富原創一の言葉は穏やかで柔らかい。

「ルシファーと言う方は、あの有名な堕天使？」

「そうだよ、アリエルもそこまでは一応理解してくれたようだね」

しばらく治は考え込んでいたようだが、決心したらしい。

「では、富原さん、私と婚約者・白羽恵瑠に、茶道の御稽古をお願いします」

来週から早速、稽古をする事になった。

サンダルフォン・メタトロンの双子天使は、どうやら芸術家の百目鬼兄弟^{うめき}として、日本に存在していると言う。他にも魔界・天界の友好的な交流が可能な存在たちが、茶道を愛好しているらしい。

「では、私は家に急ぎ立ち返りまして、妻にも此の嬉しい知らせを伝え、早速準備を始めます」

富原は大張り切りだ。

「そう言う事でしたら、私も富原家に毎週通います」
羽根田も嬉しそうだ。

訪問客が皆居なくなると、恵瑠はため息をついてソファーに座り込んだ。

「今日も色々有ったね。疲れたかい？」

「ええ……何か、色々びつくりしたし……治さんは魔王様なのよね」

「そうだな。一応。大半の事はルシファーに任せっぱなしだが」

「ルシファーさんの力は大きすぎて目が回りそうな感じがしたのに、治さんからは、あんな力を感じ取れないの。本当の力は隠してるの？」

「アリエルが傍にいて心地良いと感じる程度に、此の肉体と波動を同化させているのだよ」

「あんな風に敵から攻撃された時は、不便でしょ？きつと」

「肉体を捨てる決心がつけばめったな事では負けないが、それではアリエルの転生にも大きな差し支わりが有るから、そうも行かない」
「来週から、茶道の御稽古なのね？」

「一緒に出かけられるのは嬉しいけれどね、と言ってから、治は恵瑠を抱きしめた。

「これできつと、アリエルの覚醒は早まるだろう。私としては少々寂しいがな」

恵瑠はその意味を十分には理解できては居なかったが、治の感情は感じ取れるのだった。

20 交流の始まり（後書き）

こっそり内緒で重大な事について語り合うのに、茶道って都合が良
いようです。

21 二枚の羽（前書き）

あくまで、この話は独自の設定で、リアルな神話や伝説とは大きく違っています。

21 二枚の羽

二枚の羽根が発現したその夜、アリエルの眠りはいつにも増して深かった。

私が体中にキスを落としても、乳房を揉み上げても目覚めなかった。背中を撫でると、普段の滑らかな人間の女としての背中に、力の有るものなら感じる微妙な波動を感じ取れる箇所が出現していた。あの二枚の羽根は黒くなかったが、あれで魔界の大気と馴染めるのだろうか？正直言って、非常に気がかりだが、そんな話はまだ、アリエルにするのは控えておこうと思う。

かつて私が天界にアリエルを連れ戻しに初めて侵入した時、その背中には真っ白い六枚の羽根が有った。その愛らしい顔は私の良く知る顔と同じであったが、瞳に力が無く、悲しげであった。

「アリエル、迎えに来た。このような所から出よう、一刻も早く」私の呼びかけに躊躇う事なく手を差し出す様子は、女神の時と同じだったが、その後魔界に辿り着いてから、アリエルは様々な苦しみ味わう事となった。

魔界の大気は心ならずも天使となってしまうたアリエルの体を蝕んだ。

常に微熱があり、咳が続き、体中に湿疹が出るのだ。私が自らの結界にくるみ、愛してやると、少しは症状が軽くなるのだが……魔界の者達はそれを許さなかった。

「父上、母上を魔界から解放して、人間界に置いて差し上げた方が良いのではないだろうか」

私とアリエルの子にしてはズンぐりむっくりとして器量は今ひとつ

だが、賢い息子であるベルゼバブが言った。

「魔界に置かねばアリエルは私の妻とは認められないだろう」

「どの道、魔界の者どもは父上と天使となられた母上が夫婦である事自体、認める気が無いのです。それに、他の者がどの様に言おうとも父上のお気持ちは母上お一人に有るのでしょう？」

「そうだ。私の妻はお前の母上だけだ。『天界の捕虜は奴隷として鎖に繋げ』などと言う連中とは縁を切りたいし、顔も見たく無い」

「ならば、母上をまずお健やかな状態にして差し上げてから、長期戦で望まれた方がよろしいのでは無いですか？命短い人間共も申すでは有りませんか『命あつての物種』と」

「一つ問題がある。母上は子を成したようなのだ」

「と、申しますと、魔物の王である父上と天使の母上の子は……やはり、天使の子のような形で生まれるのでしょうか？天使が子供を成すのは極めて珍しいと聞きますが、卵の形で生まれるのでしょうか？」

「私にも確かな事は分らない。何分予想していなかったのな。母上はこれほど弱っていても、私との絆を形にとどめたいと強く願っていると言ふ事なのだろう」

物も言えぬほどに衰弱しきったアリエルが不憫で、不覚にも涙が零れた。すると、アリエルが目を開き、微笑んで、こう言った。

「どうか私を人界に置いて下さい。そうすればきっと無事に卵を産めると思います。きっと男の子が生まれると思いますが、人界で育てるか魔界で育てるか、お任せいたします」

ベルゼバブと相談して、かつては私を祀る大神殿が有り、繁盛を極めた町であった面影を残す廃墟にアリエルを置いた。まだ、清らかな水を引き込んだ神殿の奥庭の一部の建物が使える状態だった。私は大きな白い繭を紡ぎ出し、内部に柔らかな羽毛を敷いた。羽根の痛んだアリエルが卵を生む時に、生じるであろう大きな苦痛を和

らげるための工夫だった。

「我が眷属共に、母上を守らせませう」

ベルゼバブは全ての昆虫類を意のままに従わせる能力を持っている。アリエルの為に虫たちに味の良い果物を持ってこさせた。時には人間が供物として捧げた滋養のある料理を調達する事もあった。建物の周りは毒のある虫、蜂などに取り囲ませて守った。いかなる虫もアリエルに危害を加える事は無かった。アリエルの微熱は治まり、体の湿疹は無くなった。だが、咳は止まず、余り話も出来ない状態で健康の回復はまだ、不十分だった。

それでも、しばらくしてアリエルは真珠色に輝く卵を生んだ。どうやら力を使い果たしたようで、アリエルの羽は二枚に減ってしまっていた。それでも、アリエルは満足気だったので、私は何も言えなかった。

私とアリエルが共寝して卵を暖めていると、三日目に黒い小さな六枚羽根の有る男の子が生まれた。更に十日ほど私とアリエルが交代で、時には共寝して抱いてやっている、言葉を話すようになった。

「お前にバルベリトの名を与えよう」と私が告げると、恭しく頷き、礼を述べた。そして、赤ん坊らしい愛らしい顔に決意の色を浮かべて、こう言ったのだ。

「ベルゼバブ兄上と共に此处を離れます。母上は次は人として転生されましょう。その時に、父上が母上を探し出されるお手伝いが出来ますように修行して参ります」

覚悟はしていたが、此の時のアリエルの天使としての死から、初めての間としての転生まで、相当長い時が過ぎた。その間、人の世は移り変わり、新たな国が興り、又滅ぶ事を繰り返した。様々な

魔女や墮天使や人間の女との付き合いも有るには有ったが、ただ、欲望に任せて体をつなぐだけで、女の愛情と言うものを信じられなくなる程に実りの少ない、心を満たされない関係ばかりだった。

やがて、私に執着する魔女サキユバスの毒気の所為で、アリエルの記憶が薄れてしまい、魔界に居るのも嫌気がさして全てをルシフアーに委ね、忠実なサリエルを連れて人界で過ごす事にした。その頃にはアリエルの転生を信じきれなくなってはいた。だが、既にかなり修行を積んでいたベルゼバブとバルベリトは諦めなかった。彼等の力添えが有って、私は人となったアリエルと漸く巡り合う事ができたのだった。

今回の日本での生まれ変わりの際も、ベルゼバブとバルベリトは協力してアリエルの気配を探り出してくれたのだった。

「今度はきつと、父上と母上に、人として初めてのお子が出るでしょう。今から楽しみです」とベルゼバブは言う。

「母上とお子の為に、これまで疎遠だった非主流派の天使や墮天使、魔物・妖怪・妖精達とも御縁を繋がれたほうがよろしいでしょう。これは、日本だからできることです」そのためにバルベリトは、「ベルゼバブを助け、私も出来うる限りの手を尽くします」と言うてくれた。

「私を生んで下さったために、母上の羽が二枚になってしまった事を、私はずっと忘れません。母上の御恩に報いるためならば、私は何でもいたします」

六枚の羽根を生やした赤ん坊であった頃とはずいぶんと姿かたちは違うが、バルベリトは母親思いなのだ。そして、兄のベルゼバブも彼に負けず劣らず母親思いなのだ。そして、兄のベルゼバブも彼に負けず劣らず母親思いなのだ。

アリエルは神としても、天使としても良い息子達を産んだ。人として生む子はどの様な子なのだろうか？きつとすばらしい子に違いない。

「いつになったら子供を作るか、近い内に相談しなくてはいけないな」

明日は大学で体育実技だと言うから、肩口の微妙な所に一つキスマークを付けて置く。これ見よがしではないが、気にかけて観察する者には私の意図が伝わるだろう。

「治さん、抱いて下さい」

やけにはつきりしたアリエルの寝言が微笑ましくて、嬉しい。すっかりと愛しい存在を抱きしめて、私も眠る事にした。

22 視線

最近、治は必ず恵瑠の体のどこかにキスマークを残す。昨日は襟ぐりから見えるか見えないかと言うような微妙な位置の左肩の部分で、今朝は半袖を着始めると見えてしまう上膊部の外側だった。

「恵瑠ちゃん、虫にでも刺されたの？」などと言われてしまう事もあるが、その声に釣られて小さな鬱血を確認する人間の大半はそれがキスマークだと分るようで、恵瑠は恥ずかしかった。

以前「恵瑠は自分のものとマーキングして置きたい」と治が言った通りなら、治が自分を独占したいと思っている証拠なのだし、それを主張する必要があると思つての事なのだろうから、訳も聞かないで「見える所にマークなんてつけないで」と言うべきでも無いかもしれないのだ。少なくとも、キスマークが着いているのは、何時も見え無い様でいてそれでも無い微妙な場所なのだし、治が繰り返しつけるしかるべき理由が有るはずだと、恵瑠は思っている。

「魔王様なのだから、何か、気がついていかなのかも知れないし……」

そう言えば恵瑠は虫には刺された事がまるで無い。以前その話をしたら、治が「やはりな」と一人合点して、「この世の虫全てを治める者が、アリエルに危害を加える事を禁じているのだから、当たり前だな」と言つた事が有る。その「虫全てを治める者」も前世から恵瑠と深い関係にある存在らしい。

「力が目覚めれば、自然に分かる事だ」と細かい事は教えてもらえ無かったが……

治には「男の欲望に対して、敏感になった方が良い」と幾度か指摘されている。確かに、以前の自分は鈍すぎたかもしれない。キスマークを確認すると、自分に向けられていた男の物欲しげな視線の威力が、かなり下がるのを実感する事が有るが、ああした効果を狙っているのだろうか？

キスマークを見て左の薬指の指輪を確かめると、そう言う連中は忍び足で去って行く。と言う事は、キスマークと指輪が無いと、とんでもなく鬱陶しい男達との絡みが発生したかもしれない。

「……でもねえ」

同性の面白半分の視線も、恥ずかしい。意地の悪い物は少ないが、余り良い感情を持たれないのは確かだ。やはり気が重い。

「どうしたの？何か言いたい事があるのなら、口に出して言ってらん？」

沢山の赤いバラの花びらが浮かぶ大きな浴槽の中で、こうして治の膝の上に乗せらるのも、最近は慣れた。この頃は、治に触れられて無いと寂しく感じる。

「キスマークなんですけど……」

「この所、見えなさそうで見える位置を狙ったけれど、そろそろ止めようか？」

「男の人で、不愉快な視線を向けてくる人には、確かに効果が有るようなんですが……」

治の目は怒っては居ないようだ。

「素直に思った通りの事を言っただけなん」

「同性の視線が、ちょっと痛いというか……後は、先生方に気づかれたら、印象が悪くなりそうで心配です。何処につけたか知ってい

たら、予め隠せるんですけれど……」

治の沈黙が続くと、気分的にあせる。やはり言わないほうが良かっただろうか？

「私がアリエル以外の大半の人間の思念が読める、と言う事は知っているね」

「ええ」

「教える立場の人間にも色々居るからねえ。牽制したい人間に一応の効果を与えようとは思ったのだよ。アリエルも、もう少ししたら嫌でも分かるだろうが」

「牽制したくなるような人が居るのですね？」

「ああ。一人居るよ。実に気分が悪くなるような事を考えている男が」

ひよつとして、あの人だろうか？

「黒井君に聞いてみたら？多分本当の事が分かるのではないか？」

「翼ですか？」

「彼女も文字通り翼が有るのだが、今まで気がつかなかった？」

「ええ……全然」

「ふうむ……まだ、力の覚醒が及ばないのかな」

「翼は、治さんの事に気がついてますか？」

「最初から気がついていたようだ。遠巻きに見ていたしね。テレパシーでなら話した事も有る」

「翼の力は、私より大きいのですね？」

「今、顕在化している力は確かに大きい。だが、アリエルの潜在能力は息子達が言っていたように非常に大きいはずなんだ。並みの天使や魔物とは比較にならないほどね」

「本当ですか？」

「翼が既に有った彼女に、君が剣道の試合ですつと勝ち続けて来たのも、その潜在能力の大きさのおかげかもしれない」

ベッドに入ってから「今夜はキスマークをつけないで置くよ」と言われる。平日は大抵そうなのだが、ごく穏やかに控え目に愛し合った。

その夜、恵瑠は治らしき男が羽根の有る自分を抱きしめて、涙を零す夢を見た。ずっとずっと昔から、自分は愛されて来たのだと言う事が、実感できた。

「どうか私を人界に置いて下さい」と、夢の中の自分は微笑を浮かべて言っていた。

目覚めてから朝食の時、恵瑠は夢の話をした。

すると「アリエルがバルベリトを生む時に、ベルゼバブが大いに助けてくれた」と治に教えられた。

「これから恐らく息子達との縁が深まると言う暗示だろう」とも言われた。

「この週末から、茶道のお稽古ですね」

「そうだね。今日は早めに仕事を切り上げる。夜になるだろうが、一緒に着物を買に行こう」

「はい。今日は剣道の稽古が休みですから、早めに家に戻って待ってます」

「ああ、頼むよ。これから、思いがけない事が起こるかも知れないな。身の安全を図る上でも黒井君に色々聞いてみなさい。もしかしたら、互いにテレパシーで話が出るかも知れないぞ。夢のおかげなのかして、アリエルの力が又少し、強くなったようだから」

大学に到着してすぐ始まる講義で、恵瑠と翼は隣同士に席を取った。いつものように挨拶をしてから、試しにテレパシーで話しかけてみる。

（ねえ、翼って……翼が生えているの？）

（？あつ、びつくりした。恵瑠もテレパシーが使えるようになったんだね。うん。生えてる）

（何枚生えてるの？）

（六枚だよ。まあ、普通かな）

翼は自分の羽根のヴィジョンを恵瑠に見せた。

（六枚が普通なの？じゃあ、二枚はまだまだ不完全なんだ……）

（恵瑠の羽根は二枚だけど、大きくて綺麗だね。枚数が増えると凄い力を発揮しそうだなあ）

（そうなの？ああ、翼の羽って白くて可愛らしいなあ）

（これが多分標準サイズ。何か治さんに言われたの？）

（危ない男が居るから、翼に色々教えてもらえって）

（とりあえず、この先生、危ないよ。恵瑠をチラ見しながら勝手な妄想してる。そうだ。気分は悪くなるかもしれないけれど、この先生の思念を読んで見てよ。こう言うのが他にも居るから用心して）

「……………」

吐き気を催しそうだと恵瑠は思った。理知的な整った顔と落ちて着いた物腰で、女学生にも結構人気がある准教授だが……自分をネタにして、これほど胸糞悪い妄想を思い描いているとは知らなかった。ショックだった。

「先生！白羽さんが、気分が悪くなったようなので、保健センターに行つて来ます」

翼の言葉を聴いた途端にその准教授は（恵瑠ちゃん、近頃急に色っぽくなったから誰かとよろしくやって妊娠でもしたのか？）と思つたようだ。返す返すも腹立たしい。

（恵瑠も私も必修科目じゃないんだから、今度から受講を止めよう。）

確かにそれが良さそうだった。

翼は、恵瑠に肩を貸してくれた。

大きな木の下でベンチに腰掛けて深呼吸したら、吐き気は収まった。

「本当に、お目出度^{めでた}って事もある？」

「治さんは、気を使ってくれてるわ。一応結婚も子供も、まず二十歳になってからの予定だけど……ねえ、他にも用心しなければいけない人って結構居るの？」

「うん。残念ながら。大半がただ妄想してるだけだけど……噂をすれば影だね。まあ、そこに居るアイツの妄想の中身は、恵瑠にメイド服を着せて、世話を焼かせる程度だけど」

その地味な目立たない、どちらかと言えば野暮^{のぼろ}たい男子学生の妄想も、愉快な物では無かった。

翼によれば……他にも同類が居るらしい。

「あーあ、こんな事なら、何もわからずに居たほうが幸せだったな」

「でも、もう、後戻りできない。それに、やっぱり『力』は有ったほうが良いと思う。これからきつと、色々大変だろうから」

「やっぱり、そうなの？」

「そう。及ばずながら、私も恵瑠、いや、アリエル様の為に頑張ります」

その翼の言葉を聞いて、自分も覚悟を決めなくてはいいけないようだと思った恵瑠だった。

22 視線（後書き）

朝一番に、誤字チェックしましたが、まだ有ったら、教えてやってください。御指摘大歓迎です。

23 天使とさくらんぼ

「ああ、こちらはどうか、透明感の有る美しさがより強調される気がする」

「この紺地の方が、若さと気品が際立つ気がするが」

アリエルの初めての着物を買うから、もしも時間が取れそうなら見立ててやって欲しいと富原創一を名乗るベルゼバブ、羽根山太郎を名乗るバルベリトの二人に声をかけたのだが、いやはや、私や本人より熱心を選んでいてありがたいやら、あきれるやらと言った所だ。二人が熱心に見ているのは、夏用のフォーマルな着物だ。余り一般的な着物ではない。やはり紹^ろの訪問着^り辺りが無難だろう。

店は応仁の乱の頃に京都で創業した日本一歴史の古い呉服店だ。

この店の商品なら、宮中関係だろうが財界関係だろうが、まず大丈夫だとされている。振袖もそろそろ見繕う必要があるが、ベルゼバブが言うには、今度の週末は新しい茶室の披露も兼ねて、サンダルフォン・メタロンの大柄な天使の兄弟を招待したというのだ。この兄弟はそもその生まれは砂漠の傍の乾燥した国だが、水の豊かな日本の風土と、多神教的な緩やかな宗教観が気に入って、此処数百年は日本に住み着いているのだそうだ。

今はあの大柄な天使たちは百目鬼という苗字を名乗っている。兄のサンダルフォンが画家、弟のメタロンが彫刻家の芸術家兄弟として、かなり有名だ。

「あの天にも届くという巨体を普通の人間の大きさに納めるだけでも、恐らくは相当な力を必要とするのだろうな」

そもそも、なぜそのような巨体なのかも不思議だが。

「それはそうなのでしようが、実際お会いしてみると、これがもう拍子抜けする程、純朴で真っ直ぐな御気性のお二人でして」とベルゼバブが言くと、バルベリトが相槌を打ち、こう言った。

「ああ見えて、日本の細やかな四季の変化を非常に好んでいらつしやつて、和服もお好きです。そして和服を着た美しい女性を見るのが心楽しいと仰るのですよ」

ただ単に、和服を着た美人を見るのが好きただけだと言う。二人の芸術のインスピレーションが湧いて来やすくなるのだそうだ。だから紹介者のベルゼバブが「母上には和服で美しく装って頂きたい」と言う事になるらしい。

結局は薄紫の地に扇面散らしの訪問着に、夏用の有職柄の袋帯をあわせる事で落ち着く。

仕立ては業界で最速スピードだとかで、特に依頼すればわずか三日で出来上がるらしい。それならば今週末には十分間に合うので良かった。

「後は着付けですな」とベルゼバブは細かい所に気がつく。

「父上の所でやっておいでの、あのホテルの美容室は着付けも結髪も上手いですよ」とバルベリトがいうので、土曜の午後の予約を早速入れた。

「それにしても、息子と言うより親父様が二人と言う感じだったが、助かったよ」と私が言くと、アリエルもにこやかに「お忙しい中、本当にどうもありがとうございます」と言つて、丁寧に頭を下げた。かつては息子でも、今の二人はそれなりに忙しい財界人なのだから、時間を割いてくれた礼は言うべきだと言う事なのだろう。

「きつと、あの百目鬼の御兄弟と父上・母上はお話が合うと思うのです。週末が楽しみです」

「ベルゼバブの所の菓子も料理も、中々に旨いですよ」

「旨いと言えば、父上、そのうち又ニスロクの料理を食べさせて下さい」

「ああ、分った。何時でも歓迎するから、気が向いたときに予定を知らせてくれ」

二人と別れた後、アリエルに聞かれた。

「ベルゼバブと言うか富原さんが言ったニスロクって？」

「家の厨房を取り仕切る大西録太郎の真名だ。おっ、横島からメルだ。アリエル、今夜の夕食は外にするか家で食べるか、どちらがいい？」

「ニスロクさんのお料理にする」

「では、家に戻るか。旬のさくらんぼがつい先ほど、届いたらしい」

この時期の日本産のさくらんぼは、アリエルの大好物らしいのだ。「今晚食べられるかしら？」

「横島がわざわざメールをよこしたのだから、大丈夫だろう」

家に帰り着くや否や、アリエルはさくらんぼを請求しに行った。ちょうど夕食が整ったところだったので、さくらんぼは、食後に出してもらう事になったようだ。

「わあ、今日のサラダ、水菜かな。シャキシャキして美味しい！ちっちゃい筍、可愛い」

「これはさくらんぼと同じ所から届きました根曲がり筍です。どんな様がお好きなので、毎年取り寄せております」

横島は色々細かい事まで記憶している。

皮ごと丸焼きした根曲がり筍に、オランダースソースを添えたものはワインに合う。

「このお魚は？」

「太刀魚でございますよ」

若いアリエルの食欲は旺盛で、見ていても気分が良い。

「ご馳走様でした！あ、そうそう、水菜のサラダの作り方を大西さんに聞かなくちゃ」

「そのうち、アリエルが料理してくれるのかな？」

「治さんが食べてくれるなら、がんばります。水菜のサラダはね、今ちよつと流行なんだって真知子が言ってたんです。美味しい作り方が知りたいって言ってたから、教えてもらおうと思って……」

「どうやら、ニスロクに水菜のサラダの件を質問しに行ったようだ。」

「そのうち、アリエル様が何か作って下さるかもしれませんな」

サリエルも何か楽しそうだ。

「そろそろ、さくらんぼか？」

「そうでしょうな。この時期の山形産の佐藤錦はやはり美しくて美味しいですからなあ。アリエル様のお気持ちも分ります」

しばらくすると、小鉢にいっぱいさくらんぼを入れて抱えて来た。

「やっぱり、山形の佐藤錦って、最高！」

余りに幸せそうなので、私まで気分が和む。

「あ、治さんもうござ！」

ちよつといたずら心を起こして、キスをしてアリエルの口の中のさくらんぼを一粒掠め取った。アリエルの吐息が甘い。

「……治さん……」

「私は、この方が旨いな」

アリエルはそれこそ、さくらんぼのような顔色になってしまったが、それでも口を休めない。

「アリエルは、本当にこのさくらんぼが好きなんだね」

私が髪を撫でても、見つめても上の空で、さくらんぼに夢中だ。

「さくらんぼに、やきもちを焼きたくなる……」

「……ご馳走様っ？治さん？どうしました？」

「いや、私はさくらんぼ程には欲しがって貰えないなど、些か寂しく感じていた所だよ。どうも私の押し売りしている率が高すぎるよ

うだからねえ」

「……えっと……えっと……」

アリエルの顔がさくらんぼよりも、更に赤い色になった。

「ちよっと、苛めすぎたかな」

こくりと、頷いたそのしぐさが、また、愛らしい。

「今からゆつくり風呂でもどう？」

返事の代わりに抱きついてきたアリエルを、抱きかかえる。今の所、一緒に風呂に入る事はどうやら嫌がられてはいないらしい。

「週末には髪を結うから、いつもより丁寧にトリートメントしよう」
素直な髪はさらさらとした指通りで、艶やかだ。了承した印なのだろう。アリエルは、愛らしいしぐさで、また頷いた。

24 度を越えた話（前書き）

天に届く身長って、どうもビジュアル的につまぐイメージが湧きません。

24 度を越えた話

「そう言えば、白羽さんの通っておいでの大学は来週あたり学園祭でしたな」

「そう言えば、秋にも学園祭がありますな。どう言った違いが有るのですかな？」

百目鬼兄弟は瓜二つで、サンダルフォンである兄の巖いわおとメタトロである弟の岳たけしは共に、ひよろつとした独特の風貌で、片方がしゃべると、必ずすぐ後にもう片方が話すのだった。二人の声の調子がそっくりで、二人が同時に声を出すと、風変わりなハーモニーを奏でる。

「五月の祭りの方が、三年・四年の専門課程の人間が参加する確率が高いです。研究展示も多いですね。どちらかと言うと大学全体の祭りと言う感じでしょう」とバルベリトが説明する。

「秋の方は一・二年生が中心です。一年生のうちから実行委員などになると大変ですが、人脈は広がりますな。あの時の人脈はいまだに役に立ってますよ」とベルゼバブが言う。

「随分前ですが、落語研究会の寄席が面白かったです」

「落研おちけんの寄席は、秋にもありましたかな」

又、ハーモニーになっている。

「落研はトンと不案内ですが、その祭りの後は、また剣道部は試合です。大学対抗戦ですが」

治が言うと、

「此処数年は負けている相手なので、今年は勝ちたいと言う話になつてます」

と恵瑠も説明する。

「おう！お二人そろって剣道ですか？」

「昔も仲良く剣で戦っておられた」

又ハーモニーで本当に、面白い。

「私はOBとして練習に参加する程度ですけど」と治は説明する。

「きつとお強いのでしょうか」

「昔もお強かった。悪さをしていた大きな龍も、あっさり討ち取られましたからな」

どうやら随分大昔の思い出話が出てきた。

「失礼ですが、お二人はあの龍との戦いをご存知でしたか？」

「私もメタトロンも」

「あの戦いを拝見しました」

「おや！そうでしたか。お目にかかるのは私は初めてだとばかり思っていました」

治は、一体どこで二人と会ったかまるで記憶にないのだ。

「アリエル様も御一緒に、雲に乗り、凄い速さで龍に向かわれましたな」

「我々は背が高すぎるので、山か何かと勘違いされてましたな」

「我々の目の前で、いやもう仲睦まじげに抱き合っておられたな」

「仲の睦まじい夫婦は、実にうらやましいと感じました」

「本当にうらやましいですな。同じ一対でも、この弟では何とも」

「この兄では何とも、つまらないですよ」

と、言っていると、二人揃ってハハハと笑う。

ベルゼバブが新しく作った茶室は、椅子に座って茶を味わえる作りになっている。戦前に、関西のとある財界人が作った茶室を手本にしたらしい。

「これなら、正座が苦手な方や海外の客人もお持て成ししやすいですからな」

足がしびれる事を覚悟していた恵瑠は、ほっとした。

「食事も旨かった」

「とても綺麗で、目でも楽しませて頂きました」

最初に八寸と呼ばれる前菜の盛り合わせが、色鮮やかで目を惹いた。特に青い梅の蜜煮のさわやかな味が恵瑠を喜ばせた。伏見唐辛子も甘みが有って柔らかかった。まるで肉のような利休麩は面白かったし、賀茂茄子のあんかけも、天然鮎の塩焼きも、鰯も、じゅん菜も、物珍しくて皆美味しかった。

献立も亭主のベルゼバブの腕前の見せ所で、皆の満足した様子にほっとしたようだった。

「美しい方の幸せそうな笑みは、見るものも幸せにしますな」

「お着物が又、良くお似合いだ。眼福です」

百目鬼兄弟も終始ご機嫌だ。

「七月に兄弟で合同の展覧会をします。是非おいで下さい」

「音楽と我々の作品のコラボレーションです。楽しんでいただけると嬉しいです」

「是非、」

「ぜひぜひ」

「アリエル様もおいで下さい」と、二人でハモって誘われた。治は思わず吹き出しそうになった。

再会を約して、和やかなムードで帰宅する。

今日は運転手に送り迎えをさせているので、二人は後部座席で手

を握り、時折キスをすると言う具合で、治は上機嫌だ。

「本当にその着物、良く似合うね」

「でも、これの、たたみ方とかお手入れとか」

「幸い家には専門の係りが居るから、任せればよいのだよ。脱ぐのも一仕事だろう？」

「ええ。帯なんかどうすればよいのかな……」

「私に任せなさい。ちゃんと脱がせてあげるから」

恵瑠は真っ赤になる。

「ああ、着付けも出来る事は出来るが、飾りを見立てて髪を結うのまでは無理なんだよ、私では。この髪飾りは小さな星なんて、しゃれているな」

帰り着いて、横島の出迎えを受け、又再び二人きりになる。

「脱がせてしまうのが、惜しいな。帯は苦しくなかったようだね」

「ええ……」

脱がせる気、満々の治を見ると、目を伏せてしまう恵瑠だった。

それでも、気がつくと、帯の擦れる音がして、胸が楽になり、脱がされた着物は衣桁にかけられた。

「ああ…… 良いねえ、長襦袢姿」

じっと観察されると、恵瑠はどうすれば良いのか、途方にくれてしまう。それだけではない……

ベッドの上に乗せられてしまって、激しいキスが始まった。自分でもギョツとする様な艶めいた声が漏れる。襟から胸元を探られ、補正に巻いていた物を取り外された。

「胸が豊かだから、やはり補正してるな。この和装用のブラがなかなかの優れものらしいね」

「…… 何だか汗っぽくて」

「アリエルの汗は良い匂いだ」

何だか今夜の治は、いつもと勝手が違う。

「このショーツは楽しいな」

和装用の股割れタイプのを薦められて穿いたのだが、それを悪戯されてしまっている。殊更に大きな音を立ててキスを落とすのも、恥ずかしい。

「ああ、ごめん。困らせるつもりは無いんだよ。アリエルが泣くとすぐく悪い事をしたような気分になる」治は涙をぬぐいながら、困ったという表情を浮かべる。

「今夜も、やっぱり寝る前に風呂に入るか、どう？」

「はい。あの……恥ずかしくて、泣いたちゃっただけです……イヤだったって訳じゃ無いです」

その言葉を聴くと、治はほっとした表情になる

「アリエルは本当に、良い子だなあ」

再び、キスが降ってきた。

結局の所、いつも通り、二人で一緒にバラの花びらを浮かべた浴槽に漬かった。

「泣くのなら、感じすぎて泣いてくれ」

やっぱり、今夜の治は、言う事が変だ。

「着物を着た姿が、本当に艶やかで、素敵だったよ」

褒めて貰えれば、素直に嬉しい。

「明日は休みなのだし、多少の事は構わないだろう？」

多少の事って、どのくらいだろう？ 恵瑠は少しばかり、不安だ。

25 朝のひと時（前書き）

これからの布石も……ですが、私は美味しいブリオッシュが食べたいです。

25 朝のひと時

朝日の差し込む部屋の中で、私はアリエルを腕に抱きしめていた。僅かずつではあるが、こうして気をなじませる度に、無垢で清浄な魂の波動は大きなものに育ってゆく。まだ深い眠りの中にある私の天使は、艶めいた吐息を吐いた後、私の胸に体を摺り寄せてきた。休みの日には、互いに一糸纏わぬ姿で体を寄せ合って気を巡らせ合うのが、互いの申し合わせだが、昨夜は些か私の方が強引であったかもしれない。

サンドルフオン・メタトロンの兄弟に言われたように、かつての私は別の神気や魔力を纏った存在が身近に有っても、のんびり構えていた。自分は「最も優れた神」「主なる神」と当時の人間に認められていたが、それは多くの神の存在を自明の理としていて、身近に別の神気や魔力を纏った存在が居ても当たり前と言う事だったのだ。

後に私やアリエルに危害を加えた「唯一絶対の神」を名乗る無慈悲で激越な存在とは、基本的な神としての有り方からして違っていた。

あの、洪水と暴風雨をもたらす龍との決戦の日の様子を、あの巨大な兄弟達につぶさに観察されていたとは、まるで知らなかったのだ。

「仲睦まじい夫婦を引き裂くのは、間違っている」とか、「自分だけが正しくて他の神は神ではないという態度は、やはり間違いだ」とか、あの百目鬼兄弟は自分達の立場からすると随分と思いつた発言をしたが、ミカエルを初めとする過激な連中との軋轢はかなりのものなのではないかと思われた。

「ルシファー殿が貴方の方に行ってしまったからなあ、ミカエルはイヤでも忠誠をアピールせざるを得ない立場に置かれているのでしょうが、それにしてもやり過ぎだ、天の使いにあるまじき悪逆非道だ、と思うような行いも多いですなあ」

「ミカエルは何かと言うと、すぐに剣を振りますから。力無い者は逆らえません」

あの兄弟の考えに賛同するものが、密かに増えているのだと言う。ベルゼバブとバルベリトも色々と大天使と呼ばれる連中の動向は探っているようだ。昨夜も百目鬼兄弟を見送ってから、その話が出た。

「あのご兄弟はあつさりのんびりした御気性ですから、あのねちっこいミカエル一党と正面切ってやり合うのには向いてないですな」

「やはり、双子のルシファー殿が一番適任でしょうか？でも、あの方だけではなかなか荷が重い。ミカエルと多少の見解の相違が有るにしても、あの横暴な『唯一絶対』を強制する神に忠誠を誓うガブリエルも強いですから」

「この所ラファエルの動向について、何も聞こえて来ないですが、どこで何をやっているものやら」

「ウリエルは魔界に居るといふ話もありますぞ」

あの無慈悲な神のそばに常に控えているのはミカエルで、ガブリエルはやや遠巻きにしている。ラファエルは行方知れずで、ウリエルに至っては魔界の住人となったと言う噂すらある……とまあ、こうした所か。

「いずれは魔界に探りに行くにしても、まだ無理だな」

やはり、私の場合、番の^{つがい}アリエルと一緒になければ、最終的な目

的は果たせないだろう。それ以前に、ラファエルやウリエルとの接触も難しいだろう。

アリエルは、まだまだこの人間界の取り決めに縛られているし、あの共に龍退治に赴いた時のような私に対する真っ直ぐで強烈な感情は発動していない。人としてならば今のアリエルの愛情表現でも十分だろうが、人を超えたものの番として互いの気を養い交わす存在としては不十分なのだ。昨夜はいささか早急ではあったが、それだけ自分は彼女に癒される事を、そして真の深い歓びを共有する事を渴望しているのだ。

人としての自分は、瑞々しく愛らしく照れ屋で情熱的な白羽恵瑠としての想いの現れ方に、強く惹かれてはいるのだが。

「泣かせてしまったし、無理もさせてしまった」

昨夜のように真珠色に輝く肌を羞恥の色に染め上げ、悲鳴を上げさせ、涙を流させ、その全てを搾り取りたいという暴力的な衝動に突き動かされる事も有る。

その事自体、弁解する気もないし、後悔もしていないが……

「私と居る事に、アリエルが幸せを感じなければいけない」

それだけは確かなものでなくてはいけない。

せめて、羽根が後四枚覚醒してくれたら、事情は違ってくるだろうが……

「一体、いつの事になるかな」

美しい二つの眼が開く。幾度見ても見飽きない。美しい星の出現より、愛らしい蕾が花開くより、心を引かれる。これからもずっと、朝一番に彼女が眼にするものが、私の顔であれば良い。

「おはようございます」

「おはよう」

私は、その愛らしい唇に軽くキスを落とす。

「今、夢を見たのです。貴方と私が剣を持って、虹色の雲に乗って二本の大きな柱のようなものの傍を通る所でした。何だか不思議な気を帯びた柱だと思ったけれど、あれは、きつとサンダルフォンとメタトロンのお二人だったのね。私は貴方に体を摺り寄せ、貴方の耳に何か囁いていた。ああ……貴方の本当のお名前を思い出したと思ったのに……もう、思い出せないの。残念だわ」

本当に残念そうな表情で、軽く顔を顰める。

「焦らなくても良いからね」

「でも何だか悔しくて」

美しい顔は、眉を顰めても額に皺がよっても魅力的だ。でも、幸運に見放されたら困る。

「眉にも、額にも、皺が寄ってる」

私が指で皺をなぞると、アリエルは愛らしく微笑んだ。

「昨夜は無理をさせてしまったね。ココアとブリオッシュに果物ぐらいなら此处に持って来るよ」

滑らかな腰を摩り上げながら尋ねると、愛らしい顔にさっと紅が刷かれる。このような表情は、女神の頃のアリエルには見られなかったものだが……実に魅力的だ。

「ああっ、ふわふわでおいしい!」

我が家の料理長ニスロクの腕前のおかげで、焼きたてのうまいブリオッシュを食べさせる事が出来る。メロン・オレンジ・さくらんぼ・ベリー類を取り合わせたフルーツサラダにオムレツ、好物のココア……アリエルの表情は和らぐ。

しばらく、彼女がまだ、一糸纏わぬ裸で居る事は黙っておこう。

折角、楽しみに朝食を食べているのだから。

26 真名の秘密

私は朝食に夢中だった。

ベッドテーブルと言うらしいが、病院で見かけるような代物より、もっと優雅な感じのベッドで使う小さなテーブルを治さんが出してきて、その上に朝食のトレイを乗せた。

「ブリオツシユは焼き立てだよ。ココアの甘さはこのぐらいで良いだろうか？」

黄金色に輝くブリオツシユ、まるで宝石箱をひっくり返したような彩り鮮やかなフルーツサラダ、ふわふわのオムレツ、薫り高いココア……大げさでもなんでもなく、一つの理想の朝食がそこに有ったのだ。きっと、私はよっぽど嬉しそうな顔をして食べていたのだと思う。

「私は先に済ませたよ。特に予定も無いのだろう？ ゆっくりお食べ。私も食後のコーヒーを貰うよ」

そう言う治さんの声は、優しく、穏やかだった。

「御馳走様でした！」

すっかり食べ終わった私の口元に、何かついていたらしい。治さんはずっと近づいて来て、私の唇を舐めた。こう言うさりげない間合いの詰め方は、中々出来るものではない。この絶妙な間合いの詰め方も、治さんが剣道でも強い理由の一つなのだった。

「甘いね。ヘアとメイクを手伝うから、シャワーを浴びておいで」
そう言われて初めて自分が裸である事に気がついた。下半身はそれでも寝具の中に隠れていたけれど、上半身は裸で剥き出しだったのだ。

「……わ、私」

今更だが、恥ずかしくてたまらない。

「私以外、誰にも見られていないよ。結界も張って有るし。君が愛らしい無防備な姿で、楽しそうに食事する様子は、見ているだけで幸せだった。今の恥ずかしがり屋さんの君は可愛いけれど、たまには昔のようにごく自然に美しい体を見せるのも悪くない」

「で、でも」

「豊かな乳房を日の光にさらして、明るく笑う君も大層魅力的なんだよ。もう良い加減、私に体を見られる事に慣れても良さそうだけどね」

慣れても良いのかもしれないが、やっぱり慣れない。

食器を下げるために治さんが部屋を出たので、と言うか、出てくれたのかもしれないが、大急ぎでシャワーを浴びに行く。今寝ている部屋の付属のバスルームに有る洗面台は、大きな鏡があり、コンセントもつなぎやすい機能的なつくりだ。棚や引き出しには私のためのメイクの道具や化粧品が揃っている。

「ブローしうか」

タイミングを計ったように治さんが入ってきた。何時も思うが本職並みの手際の良さだ。どこかに出かけるとか、大事なお客様がいらっしゃる時は、治さんがアイメイクやチークやルージュまで面倒を見てくれる事が多い。

「今日は、バルベリトの所で午後のお茶と夕食でもって、誘われている。ルシファーが黒井君を連れて来るようだよ」

「え？翼の付き合っている方って、ルシファーさんなんですか？」

「そのはずだが、黒井君から聞いてない？」

「高校の時の担任の先生としか……」

「確かに真名は口にしない方が安全だ。特にルシファーの名前は用心して出さないように気をつけるのだよ。この邸の人間と、息子達以外の前では秘密にするべきだろう。アリエルと言う真名についても、同様に秘密を守るべきだ」

「治さんの真名が、思い出せそうで、思い出せないのは悔しいです」
「私の真名は魔界・人界・天界全ての生き続ける存在の中で、知っているのはアリエルだけの筈だ。尤も、ルシファーやその双子で激しく敵対しているミカエルあたりは、見当を付けているかも知れないが。だが、正確には知られて居ないのだろう。あの無慈悲な唯一絶対を名乗る神の干渉も受けずに済んでいるからね。私の過去は私が決めてきたし、未来も私の意志で決める。あの神の勝手にはさせられないからな」

「私だけが治さんの真名を知っているって、誰かに知られてますか？」

「あの神には知られているな。だからあの神は、私の真名を知ろうとしてアリエルを拉致して無理やり天使に転生させたのだから」

「私は秘密を守れたんですか？」

「立派に守りきってくれたよ。思いの全てを傾けて、強固な封印を自らの記憶にかけたのだ。私の最も愛しく近い存在であつた偉大な女神の力の全てを傾けてね……さあ、出来た」

メイクが終わると、私は自分が澁刺とした明るく強い女性に変身できたと言う気がした。

「今月末の学園祭には、ジーンズで行くのだね。下らない男とは縁が出来ないように、こんな風に眉を意思的に仕上げ、鼻筋をハッキリさせたらどうかな。今日、息子達やルシファーの意見も聞いてみるが」

お化粧の仕方一つで、かなり人付き合いのパターンが変化するのは聞いた事が有る。魔王である治さんのメイクだから、余計そうした効果が強いのかも知れない。

「今日は若く瑞々しい感じを強める服にするが、学園祭の時は『働く』と言う雰囲気的大事かな」

学園祭で剣道部も模擬店を出す。やっぱり食べ物関係はキビキビして清潔な感じが良いのだろう。

治さんが着るように言ったのは、白い麻のレース素材のワンピースだった。

「首筋を見せるのは、癪だから、襟の詰まったデザインだよ」

「夏の初めのお出かけて言う感じがしますね。好きです。こう言う服」

すっきりしたハイネックにAラインの身頃、ロマンチックなフレアスリーブで、中にレースがたつぷりのパニエを穿いた。

「明るい日差しの似合う、夏のお嬢さんと言う感じだな。うん。可愛い」

治さんの満足げな表情を見て、ほっとする。

「イギリスのブランドで着心地が良いんだ」と言う黒いポロシャツを治さんは自分用に選んだ。襟に赤いラインが入って、木製のボタン……何だろう、さりげないのにカッコいい。チャコールグレーの細身のパンツをはくと、脚の長さが際立つ感じ。

「さあ、出かけよう」

ごく自然に腕を取ってくれる。ふわりと立ち上るコロンの香りにドキツとする。治さんは普段は冷静なビジネスエリートと言う感じが強いのに、時々ラテン系の伊達男と言う雰囲気に変貌する。「遊び人で知られたローマ帝国の貴族だった時期も有るから、当たり前かも知れない」と言われた事があって、納得した。

羽根山太郎を名乗るバルベリトさんのお宅は、数寄屋造りのベルゼバブさんの所とは違う雰囲気の日本風のお邸だった。そう、武家屋敷って感じかな。その中に、明治時代の洋館みたいな感じのリビングが有って、そこで本当の人間だと言う奥様御手製のサンドイッチや、ベリー類を使った焼き菓子、季節の果物類を頂いた。

「翼さんと母上が友人同士と伺いましてね、どうせなら御一緒の方が話も弾むかと思ひまして」バルベリトさんの母上って、奥さんの

手前どうなのかと思ったが、どうやら了解事項みたいだった。この人間の奥さんは、と言うのも変な言い方だが、蝶子さんと言うお名前前で、結婚してもう半世紀近いらしい。

「この人は星先生と翼さんの関係をどうも理解してなかったようですよ」と、治さんが言うつと、

「翼の婚約者の星^{ほし}暁です」とルシファーさんが妙に折り目正しい挨拶を、私にしてくれたが、何だか悪戯っぽくニヤツと一瞬笑った。

（翼の真名は私が嚴重に封印してます。貴方が魔王陛下をお守りになったやり方をまねただけの事です。ろくでなしの下っ端天使に攻撃されましたが、真名が知らなかったおかげで、無事に助け出せました）

ルシファーさんのテレパシーは明瞭で、強力だ。

（しつこく付け狙われる事は無いのですか？）

（事件の後、翼を天界の者に偽装しましたから、これからは下級から中級程度の階級の天使たちに狙われる心配は無さそうです）

（ミカエルさんあたりの大天使クラスだと感知しているのですか？）

（ミカエルの奴は、おそらくまだ感づいて居ませんが、時間の問題かもしれません）

事情を知らない蝶子さんが、夕食の話が始めたので、そこでテレパシーの会話は途切れた。

「もうすぐ、彼女達が通う大学の学園祭で二人とも模擬店の仕事があるようだが、結構性質の悪い男も居るから何かと心配だよ」

治さんは私のメイクの話始めた。

27 良縁と悪縁

アリエルは来週は首都圏内の某大学との剣道の対抗戦、その次は初夏の学園祭で模擬店の仕事と中々に忙しい。私は無論多少の無理をしても、両方に顔を出すつもりで居る。ルシファーは用心深く、どちらも直接的な訪問は避けるらしい。

（王よ、貴方の魔力はよほど力の有るものにしか感じ取れないように、巧妙に秘められているが、私の力は生憎と剥き出しで、よほど気をつけないとすぐに天使どもにマークされてしまう）

（翼君の場合と同様にいつその事、天使に化けるか？元が天使なのだから容易いだろう）

（技術的にはその通りだ。だが、感情が着いて行けない。天使どもに対する激しい嫌悪が、私を魔界の住人に変えたのだから）

（確かに強烈な感情は力の源だ。だが、双子の兄弟に強烈な憎悪を抱き続けると言うのは、正直な話、私には理解できない。むしろあのミカエルの方が無慈悲な神の手前、元の身内に厳しく当たらないと格好がつかない、と言うだけの事なら話は分るのだがな）

（そのような生ぬるい話では無い。奴は石頭だから私がなぜ天界を飛び出したかも理解していないし、しようもしないのだろう）

（ミカエルが石頭と言うのは、その通りらしいな。些かでも彼の目から見て、天界にふさわしくないものは直ちに粛清するらしいからおかげで魔界には有能な堕天使が増えて、結構な事だ）

（魔界に組するまでの決断は出来なくても、サンダルフォン・メタトロンのようにミカエルの命令に従うのを良しとしない者は着実に増えている）

私としてはこの際、行方不明の大天使ラファエルとウリエルについて、ルシファーが知る事を聞いておきたかった。

（サンダルフォン・メタトロンの兄弟が長く人界に留まっているのは、知っていたが、この日本に居たというのはつい最近知った。ラファエル・ウリエルの行方について確実な情報を掴んでいるか？）
（共に人界に居る可能性が高い。日本で待てば会える可能性は高いと推測する。多神教的な価値観がしつかり息づいていて、かの神の力がほとんど及ばない先進国と言うのは他に無いからな。王よ、あの大学は注意深く監視する必要があると感じる）

（そうか。日本を代表する有能な人材を纏めて観察できる場所の一つだと思って、繋ぎを付けたが、魔界であれ天界であれ、それなりの力を持った存在が集う可能性は高いな）

基本的にはルシファーと私の見解に大差は無さそうだ。

（アリエルも翼も、危険な存在に既に目を付けられていると見るべきだ。あの大学に居る研究者あたりに危険な存在が紛れ込んでいる可能性があると、私は見ている）

（奇怪な妄想に囚われてアリエルを見る准教授の存在は、翼が掴んだようだ）

（奴は唯の肉欲に囚われた人間だ。その不道德で不純な願望を利用して彼女達を束縛する道具にしようとした存在が、あの准教授の身近に居るはずだ）

やはり、あの准教授は唯の傀儡だったらしい。

（学園祭は色々な人間が動く。あの准教授を利用しようとした存在も動くだろうか？）

（少なくともアリエルと翼が講義を受けなくなった時点で、あちらは大いに警戒しているだろう。外部との繋ぎをつけるにしても、教官が休みで学生達が動く学園祭の時期は好都合だろう）

（二人が講義を受け続けた方が良かったのだろうか……）

（翼が馬鹿なことをしでかした所為だな。アリエルの能力は貴方と

共にあれば、イヤでも高まるはずなのだから、しばらくはあの男の妄想を無視すればよかったのだ)

(だが、私の感情は二人の行動を受け入れている。戦術としては甚だ愚かだったにしても、あの汚らしい男の妄念にアリエルを晒すのは私も耐え難い)

(クツ、王よ。貴方のそうした正直さが私は好きだ。御自身が監視の役を果たされるにしても、無理をなさらぬ範囲で願いたい。まあ、貴方なら抜かりはないと信じているが)

(さあ……私はアリエルの為なら、どんなに愚かな事でもしてのける。だからあまり、当てには出来ないだろうな)

(足を引つ張らずに居てくださいれば、十分だ)

私は昔から平和を望んで来た。ルシファーはミカエルに打ち勝つ事を目指している。だが、近頃はルシファーも天界との平和的共存の可能性を模索しているようだ。

「それが結果的にミカエルの力を弱める事になる」からと言うのは実にルシファーらしい理由だが。

私はアリエルと翼の演出の仕方、具体的に言えば着る物と化粧の力を借りて、我々「共存派」に共鳴する魔界・天界の存在と繋ぎをつけるきっかけを作れないかと考えたのだ。特に学園祭は大きなチャンスだと思う。唯の大学ではない。様々な意味で日本一とされる大学に出入りする者は、この日本において、何事か特別な存在であるうとするものも多いのだ。

私とルシファーのテレパシーによる先ほどの会話は、この家の主のバルベリト、および同等の能力を持つベルゼバブには受け止められたはずだ。唯の天使レベルの翼や、まだ人間に近いアリエルには知られようが無い。

「そうですね、おかしい妄想に囚われて、母上と翼さんに迷惑をかける男や、悪縁を持ち込んでくる存在とは最初から縁が無い方が安全ですからな。古来から化粧の力を借りて、悪しきものを絶ち、良きものを迎える力を増幅しましたから。父上の仰せも尤もで」

世話焼きのベルゼバブは、既にあれこれ頭で考え始めているようだ。

私もアリエルを美しく魅力的に演出する為に色々考えるのは好きだが、息子二人もそうした事が好きだ。美しく魅力的で、悪縁を絶ち良縁を招く化粧方とは何か、相当白熱した議論が続いた。

「私は悪縁を絶つ尤も重要なポイントは目元だと思いますぞ」とベルゼバブが熱く語ると、

「良き縁を迎え入れるのは唇ではなかるうか」とバルベリトも熱心に応じる。

アリエルと翼はあつけに取られているようだ。

「ククツ、翼もあのぐらい熱心に考えた方が良さそうだなぞ」

ルシファアは面白がっている。だが、息子達の熱意がそれなりに良い結果を生む事を期待しないでも無いらしい。

（私には貴方のご子息方のような熱意は無いが、それでも議論の有用性については認めている）

（愛しい者を魅力的に演出したいと思う事もあるだろう？ルシファア）

（殊更に演出せずとも十分にあれば魅力的だが、悪縁を絶ち良縁を得る化粧は実用的だ）

（ほほう？いや、驚いたよ）

（私自身も驚いている。おかげでアリエルを求め続ける貴方の事が、一層理解できるようになった）

蝶子さんがバルベリトに言われて、メイクボックスを運び込んで

きた。彼女はヨーロッパの有名ブランドの化粧品販売部門の責任者として、長らく仕事をして来たらしい。日本人に馴染む色やメイク方法については、大変な専門家のようだ。

「夫がどこの誰であれ、海外メーカーは蝶子本人の能力と手腕で雇ってくれますからな」

バルベリトが大手企業の社長でも、関係無いと言うわけだ。

目の前で若い二人の顔が様々な演出で変わって行くのを興味深く見ているのは、私や息子達だけではなく、ルシファーも同様なのだった。

「やはり、女は魔物だな」

自分こそが魔物の中の魔物とも言つべき存在の癖に、彼の感心の仕方はまるで理屈に合わない。

28 大学対抗戦

正確に言えば大学校と呼ばれるその学校は、恵瑠の知っているいわゆる大学とはちよつとばかり毛色が違っている。その学校は、と或る海沿いの町の中心的存在だった。そこには特殊な事情があつて、全学生が必ず何かの体育会系の部活動に入ることが義務付けられている。そして大半が男子部員で、女子部員の少なさは恵瑠の大学と良い勝負だ。

だが……

「何と言つか、気構えが違うよね」

「うん。勝負に対する執着が違う」

良くも悪くも「日本一」とされる恵瑠達の大学より、将来の進路を見据えてしっかり修行に励んでいる感じがする。女子部員も少数ながら健闘している。

「迷う事が許されない、とも言えるだろうけどね」

剣道部機関紙のカメラマン役を勝って出た治の言う事も一理有ると感じるが、未熟なうちはやはりがむしやにでも、もっと稽古する必要が有るように恵瑠は思う。

今日の試合会場となった大学校側のOBと治は、どうやら旧知の仲のようだ。試合の後の合同練習には参加する予定らしい。既に稽古着に胴を付けている。前垂れのネームからすると広田と言う名前らしい。

「馬飼野さんみたいに選択肢が多すぎる人も大変なんだろうとは思うが、やっぱりそちら様はトップエリートの集団で、学食の飯一つとってもレベルが違う。国の予算もまるで違う。我々はせいぜいがむしやにやらねば、勝機は見出せないと思ってますよ」

「稽古風景を拝見した限りでは、非常に良い雰囲気の一部だと感じます。部員全体の一体感が凄い」

治は、両校の試合前の練習の様子を撮影している。時間を分けて、両校が軽いウォーミングアップをするのだ。

「そちら様は突出した部員が頭脳戦で切り抜けるという感じで、初心者の部員は社会見学というか一般教養の一つみたいなノリの方が多そうですね」

この広田と言うOBは特に悪気があるわけでは無く、率直な感想を述べただけだろう。それだけに、傍で聞いていた恵瑠も翼も耳が痛かった。自分達はそれなりに真剣だが、部全体の一体感は乏しい。初心者もそれなりに優秀な人材なので、在学中に段は取るし、そこそこ試合もこなすようにはなるのだが、この学校の連中のような熱気は無い。クールなのだ。

「さあ、お嬢さんたちも練習に行っておいで」

「馬飼野さんは、練習には加わりませんか？」

「今日はカメラマン兼荷物持ちですよ」

「お綺麗なお嬢さん方だ。婚約なさったというのは、あの髪の長い方の方ですか？前垂れのネームが白羽となっていましたな。ひよつとして……」

「ええ。高校時代華々しく活躍していましたよ」

「私も『見切りの白羽』の名前は知っていましたが、あんなに美しい方とは知りませんでしたよ」

「もう一人は『鉄砲玉の黒井』こと黒井翼君です。彼女の婚約者は今日は来てませんな」

はあ……と広田はため息をついてから、苦笑いした。

「お宅は女性も凄い方がおいでですな。才色兼備などと言う枠を超えている。黒井さんのお相手も、さぞかしエリートでいらっしやるんでしょうな」

「高校時代の担任ですよ。学校にひた隠しで付き合ってたようです」

「うらやましいですな、その方が」

「広田さんにも、良いご縁が有ると思いますよ」

「有るでしょうか？」

「あの、あそこで汗を拭いて今ジュースを飲んでいる彼女、どうですか？貴方を見てますよ」

「いや、あの子は！」

治が読み取った情報ではこの大学の『マドンナ』らしい。優秀な人材のようだ。広田にかなり強い好意を抱いている。

「是非、デートに誘われる事をお勧めします。あの視線は大いに脈ありですよ。試合の後の合同練習で良い所を見せて下さい。それから道場の片付けの時に、荷物なんか持ってあげたら如何です？」

治はちよつとした親切心で、縁結びの呪いまじなをかけた。

「婚約が決まったら、教えて下さいよ」

広田は今は冷や汗を流しているが、恐らくうまく行くはずだ。

試合はやはり当初の予想通り、男子は会場となった大学校側、女子は恵瑠・翼・有段者の新入部員で戦ったこちらが勝った。ちなみに例の『マドンナ』個人に限って言えば対戦相手に勝っている。

一応痛み分けの格好となり、試合後の両校合同の練習も良い雰囲気以て終わった。

「来週、学園祭で模擬店をやります」

食券つきの案内を多めに渡すと、反応は悪くなさそうだった。

試合の後、治が自分の車に女子部員全部の防具を積み込んでいると、植え込みの向こうで広田が『マドンナ』に語りかけている様子が見て取れた。

「デートの約束、成立か」

（王よ、貴方が縁結びの役を果たされるなど、珍しい）

やはり、ルシファーは此処の様子を覗いていた様だ。

（ルシファー、それは認識が違う。私も昔は似つかわしい男女の縁結びを頻繁に行っていた）

（貴方が仰る平和な時代の神としては、当然と言う事か）
（防具を大学の部室に納め終えたら、君の住処に向かうよ）
（お待ちしている）

いつもは助手席が恵瑠の定位置だが、今日は翼と一緒に後ろに座る。

「二人とも、今日は奇妙な気配を感じなかったか？」

「こちらに干渉する事を、あえて避けている気配を感じました」と翼が言えば

「試合中観客席の方に、気になる気配を感じましたが、後で見直すと気配が消えていました」と恵瑠も言う。

「学園祭で、接触できると良いが……」

ルシファーの住まいは翼の住む学生用アパートの隣だった。大学へは地下鉄で一駅と言う場所だ。

「つまり私がアパートの大家なのだよ」

見かけ上の祖父から遺産を受け継いだという事にして有るようだ。見た目は地味に冴しているが、中に入ると中々モダンで機能的な住まいだった。

「結構金をかけてるな。とても高校の教師の収入では住める家では無い」

「遺産で左団扇と言う訳だ。貴方のような実業家は色々面倒そうだな」

「確かに、面倒が無いのはうらやましい」

恵瑠と翼は風呂を借りた。決して大きくは無いが、天窓から日の光が差込み、清潔で使いやすい。このサイズの風呂にしては珍しく、シャワーが二口有る。

「あら、何時も此処でお泊りなの？」

風呂から出た恵瑠は、歯ブラシとコップがペアになっている事に気がついた。

「実質こっちで暮らしてる。親の手前、別の部屋は必要だけどね」

「親御さんたちは、普通の人間でしょう？」

「母は自覚してないけれど、転生した四枚羽根の天使なの。父も色々記憶を失っているけれど、一応魔物」

「御両親の事はいつ分ったの？」

「星先生に会ってから。それまでは天使も魔物も自分とは関係ない御伽噺だと思っていた」

翼は普段ルシファアを『先生』と呼んでいるらしい。高校教師・^{ほしあきら}星暁としてルシファアが出現してから、翼は急に過去生を思い出したのだと言う。

「前世ではしもべに過ぎなかった私を、大切にして下さいけれど、何のお役にも立ってないし、何だか時折申し訳なくなるの」

恵瑠は、自分も似たようなものだと言った。

「力を目覚めさせて、大切な方のお役に立ちたい」

「そのためには深く愛し合わないといけないらしいわ」

翼の言葉に、恵瑠も赤くなりながら頷いた。

28 大学対抗戦（後書き）

黄色いバナナを、ぽちっとお願ひします。執筆の励みになります。

29 気配（前書き）

またまた（爆）入浴シーン有りです。その前にベッドシーンも。
一応R15です！

29 気配

ルシファアの家でアリエルと翼が昼食を作り、皆で一緒に食べながらまずは学園祭について話し合った。そして、対抗戦の会場で感じられた、あの不可解な気配が話題になる。

「やはり、あの気配は相当な力を持つ者だろう」

この点は皆が私と同様な感想を持っているようだ。

「私は離れた場所からあの大学校に出入りする力の気配を観察していたが、一瞬強大な力が入り込み、すぐに抜け出したのは確かだ。それがいかなる性質のものかは見極められなかったが」

この恐るべき墮天使でも見極められない存在とは、何か？

「翼も私も気配は感じたけれど、それだけで、気がついたときにはあの場所から消えてました」

「私は……ルシファアの物と近い性質の波動ではないかと感じた。確認できたわけではないが」

「あの異様な素早さは天使なら大天使、魔物なら大貴族クラスだな」
ルシファアの推測は正しいだろう。

確かに、一瞬しかあの場に存在しなかった。

「そいつの目的は何だろうな」

「我々と敵対する者か、曖昧な立場に有るものが偵察に来たと見るべきではないか？」

力有る者なら、こちらの力の大きさや基本的な属性を推し量る程度の事なら、あの短時間でも可能だろう。

「その存在が来週の学園祭に接触を図る、ないしは攻撃する気である……と考えるべきですか？」

「公衆の面前で派手に攻撃する事はないだろうが、人目の届きにくい場所、死角、物陰、そうした場所での奇襲なら無いとは言えまい。

翼は一度やられているしな。よくよく気をつけてくれ」

以前翼君が襲撃されたときは、物陰からマインドコントロールされた男達にやられたようだ。能力が全開している状態ではないので、相手が四枚羽レベルでもマインドコントロールを破れないのだ。同じ事はアリエルにも当てはまる。

私なりルシファーなり、大きな力の存在を嗅ぎ当てて、彼女達を拉致しようとするものが居るかも知れないと覚悟した方が良い。

「そうした危険な勢力が存在する事は常に念頭に入れる事にしますが、でも、あの一瞬だけ存在した気配の主には、邪悪な意図を感じられませんでした」

アリエルに話した事はなかったが、『見切りの白羽』と呼ばれるような相手の戦闘のタイミングや攻撃意図を推し量る力は、特別なものだ。私が相手の思念を読み取って先手を打つのはまた違う、より反射的で素早い正確な感覚だ。後にも先にも彼女の見切りを無効化できたのは、あの神の直接的な後方支援を受けたミカエルだけなのだ。逆に言って彼女の感覚を欺ける存在は、そのクラスの超大物と言う事になる。

「邪悪ではなくても、状況によっては何がどう転ぶかわからない。用心するのだよ」

低レベルの魔物や天使の能力でも、多数集まれば何が起こるかわからない。それに彼女の存在は既に天界で認識されている可能性は高いのだから、リアルタイムで現在位置を割り出されるきつかけともなりかねない。ミカエル達の思惑が読めない今は、特に注意が必要だろう。だが、しかし……

「私の勘では、あれはミカエルでは無いと思う。」

ルシファーに初めて会った時、アリエルは体を震わせた。あれはミカエルによつて齎された過去の苦痛と恐怖の記憶が一瞬よみがえった所為ではないかと思うのだ。激しく対立する双子は波動の基本が実はほぼ同じなのだから。それぞれの方向性と、吸い上げるエネルギーの志向性が正反対だが。

「アリエルが震えなかったからね」

私の思念を読み取ったルシファーは、眉をひそめて考え込んでいる。

「ならば、ラファエルか、ウリエルか？」

「そう断じるのはまだ、時期尚早だろうな。判断材料が少なすぎる」
確かな事は何もまだ言えない。

アリエルと翼はキッチンでの片付けを終えて、戻ってきた。

「ともかくも、単独行動はお互い避けますね」

アリエルのその判断は妥当な所だが、卑劣なえげつない手段に訴える輩も居る。

「とつさの時は、大声で助けを呼ぶのが基本だ。無理に自分達で片付けようなどと思わない事だよ」

なまじ、腕に覚えの有る二人だけに私も心配なのだ。

「翼、以前の失敗は繰り返すなよ。早めに私を呼べ。いつどこであろうとも助けに行くから」

おや、また随分と感情的な言葉だ。実に面白い変化だ。私の眼差しを受けたルシファーは、些か照れたらしい。

「貴方だつてアリエルの為ならそうなさるだろう？」
違いない。

ルシファーの住まいを辞して、我が家に戻ると、アリエルが言った。

「私達の事はどの程度、天界の側に知られているのでしょうか？」

「最悪、全て感づかれているという覚悟もした方が良くかもしれない。流石にこの邸やルシファアの家で交わされた会話や、それぞれの行動まで覗かれているとは思えない。だが、相当正確な情報を握っている可能性は有る。だから、私は天界の中でも私達に敵対意識をあまり持たない連中と、手を結ぶ道を探っているのだよ。息子達はその方面で頑張っている」

アリエルは私の腕に体を預けた。ごく自然な信頼と親愛の表現だろうか？

「いつもと違うシャンプーの香りも、新鮮だね」

翼と一緒にルシファアの家の風呂で髪を洗ったシャンプーは、柑橘系の爽やかな香りのものだった。私は髪を一房取って香りを楽しみ、軽くキスをした。するとアリエルは察して欲しいと言いたげな眼差しで私を見てから、体を摺り寄せてきた。

「夕食まで、しばらく有るね。ベッドに行くかい？」

アリエルは顔を真っ赤にさせながらも、はつきりと頷いた。

「よしよし。私もシャワーでも浴びてくるか」

「いいえ、このままで……」

「待ちきれないの？」

「あ、あの！」

「いや、赤くなるアリエルが可愛いから、つい意地悪な事を言いたくなってしまった」

ベッドにアリエルを置くと、私はさっさと裸になる。アリエルが私を見つめる視線が心地良い。

「アリエル、私が欲しい？」

「ほ、欲しいです」

震えながらも、はつきり口にした。大した進歩だ。私はアリエルの服も脱がせる。今日のブラウスとスカートは確かに清楚で良く似合っているが、互いの素肌を妨げるものは愛し合う時には障害物で

しか無い。一枚ずつ剥ぎ取ることに、アリエル自身の蠱惑的な香りが次第に濃くなって行く。

「早く、君の素肌に触れたい」

胸を締め付けていたものが取り払われて、豊かな乳房が柔らかに波打つ。少女の面影を残す桜色の乳首に舌を這わせ、口の中で転がすと、幼さを残した清らかな美貌には不似合いな、獣じみた呻き声が漏れる。私の欲望は一層燃え上がる。最後の一枚を取り去ると、そこは既に十二分に潤っていた。

互いが互いを狂気の淵^{ふち}に追いやってから、どの程度の時間が過ぎたものか。部屋は完全に暗くなっていた。内線で食事を遅らせるように指示をしておく。サリエルは気を利かせて、風呂の準備もして有るらしい。「今日は新鮮な薔薇を浮かべました」との事だった。

確かに今日の風呂は、何時にも増して香りが瑞々しい。

私の腕の中のアリエルは小さく身じろぎすると、パツチリと目を開けた。

「少し遅めだが、風呂から出たら夕食にしよう。今日は冷たいバジル入りのポタージュと海老のフリッターが出るらしいよ」

メニューを聞いた瞬間、笑くぼが浮かび愛らしい唇が魅力的な力ীবを描く。今夜は食事の後もう一度愛し合わないと、収まりがつかないかもしれない。そんな気がした。

30 心惹かれる香り

朝食後すぐに家を出る治を見送ってから、恵瑠はレース越しの日差しが柔らかい窓辺に、小さな青紫の花が沢山咲いている鉢を飾った。

「直射日光を避けるって、この程度で良いのかな？」

大学の近所のフラワーショップの店員がしてくれた説明では、「この花はアラビア原産ですけど、夏の直射日光は苦手なんです」との事だった。

治の夏物の衣類をクローゼットに納めに来た執事のサリエルに、心配だったので見てもらう。この邸の植物全般の面倒を主にしているのが彼で、大層花にも詳しいのだ。

「夏の直射日光も苦手ですが、強い雨もいけません。花がらの始末をきちんといたしますと、次々咲いてくれますよ。うまく行けば十月ごろまで咲くのではないでしょうか。これはまた、良いバラ咲きの鉢ですね」

こんな風にこんもりと咲く八重咲きは貴重品らしい。普通はもっとあっさりした感じの一重咲きが多いそうだ。

「この香りが、何だか凄く好きなんです」

「ならば、このように」と、サリエルはアイロンの効いた白い麻のハンカチを花の上に広げた。

「半日ほどハンカチを広げて置かれると、香りが移ります。それをバッグの中にも忍ばせておかれたら、香りをお楽しみになれますよ」

薄紫のこんもりした花の鉢は、薄い白いベールをかぶった花嫁に似ている。

「何だか楽しみ」

サリエルが出て行った後も、しばらく恵瑠は花を見つめていた。

今日は午前の講義が休講で、午後遅くの講義の後、剣道の練習をする予定だ。明日から本格的に学園祭の用意に入る。講義の予習をして、昼食は部屋に持ってきてもらった。ベーコンレタスサンドにトマトベースの冷たいスープ、モッツアレラチーズとスモークサーモン・ベビーリーフのサラダ、ヨーグルトムース、と言う献立だ。

「美味しい！」

彩りも美しい。食後のコーヒーも遠慮なく楽しんだ。

健康な食欲を十分に満たしてから、恵瑠は身支度を整え、最後に花の上に置いていた麻のハンカチを綺麗にたたんで、紺色のサマージャケットの胸ポケットに入れた。

「うん！いい香り」

見送るサリエル達に手をふって、木々の緑も鮮やかな閑静な住宅街を歩いて大学に向かう。邪眼などと恐れられる非凡な眼力の持ち主である執事が、忠誠を誓う主の最愛の人を油断無く見守っているなどとは、思いもよらない恵瑠だった。

（旦那様、アリエル様は本当に旦那様が大好きでいらっしゃるのですな）

（そうではなくては、私としては立つ瀬が無い）

（あのエキザカムの花の香りが、大層お気に召されたようです）

（そう言えばお前がその花の事で、昔、何か言っていたな）

治はオフィスの中からサリエルの思考を読み取って、噴出した。

（お前の考えどおりなら、確かに嬉しいが……アリエルに言うわけにも行くまい）

「今日の恵瑠、何だか仄かに甘い良い感じの香りがする。いつものバラっぽい感じも悪くないけど、これもいいな」

翼が講義が終わった後で、そんな事を言った。

「花の香りをこのハンカチに移したんだよ。青紫の小さい花で、この通りの花屋さんで買ったんだ。花屋さんがアラビア原産の花だって教えてくれたけれど……あれ？名前忘れちゃった」

「ああ！エキザカムでしょ。今頃から秋まで咲くんじゃない？」

「そうそう、たぶんそれ」

花言葉が『貴方を愛します』と言うのだと翼に教えられて、恵瑠は照れながらも喜んだ。

夜の稽古の最終の時間帯にどうにか治は間に合った。最後の後始末まで付き合うと九時近かった。

「もうシャワーも浴びないで着替えてきた。家に着いたら風呂に直行だな」

治の運転する車で帰宅したわけだが、車の中は、あのエキザカムの香りが漂っていた。

邸に戻ると二人で同時に風呂場に駆け込み、服を脱がせあう。こうした行為に次第に恵瑠も慣れては来たが、治のように余裕綽々とは行かない。

ふと、恵瑠が手を止め、顔を真っ赤にする。

「ほら、夕食を食べなくちゃいけないから、急ぐよ」

この時点では、治は恵瑠が照れた理由がはつきりとは分らなかった。軽く勃ち上がった部分を目にした所為なのかと漠然と思った程度だ。

恵瑠はいつもと同様夕食は美味しそうに食べたが、治はその口数の少なさが気になった。

（アリエル様は、私の昼間申し上げた事に気がつかれて、照れておいでなのだと思います）

果たして執事の考え通りなのだろうか？

ベッドと一緒に入ってから、様子が変だ、と治は感じる。平日なので互いに寝巻きを着て大人しく眠る申し合わせだが、別に絶対の規則と言っわけでもない。

「何だか車の中でも、風呂や夕食の時も、どうしたんだい？顔を赤くするし、あまり話さないし」

「私、そこに飾ったエキザカムの花が良い香りがすると思って、花屋さんで買ってきたんですけれど……」

昼間にサリエルが伝えてきた通りなのかも知れない、と治は思った。

「何かの香りに似ていたのかな？」

ますます真っ赤になって惠瑠は頷くと、蚊の泣くような声で言った。

「治さんの汗の香りにそっくり……その……」

「その、何かな？」

耳朵を舐め上げ腰のラインを指で辿ると、惠瑠は喘いだ。

「愛し合う時の、治さんの汗の香りにそっくりなんです」

見当はついていたものの、改めて惠瑠に言われると、治は昂ぶりを覚えた。

「アリエルの香りは朝露に濡れた新鮮なバラのようだよ。知っていた？」

幼い女の子のように首を振る様子が愛らしい。

「すまない。今夜はどうにも歯止めが利かなくなったようだ」

そう宣言した治は、平日の夜は控え目と言う申し合わせを完全に無視する行動に出る。

惠瑠は惠瑠で、まるでエキザカムの花のような香りに包まれて恍惚としていた。

「ああ、治さんの香り、素敵」

おかげで恵瑠は、翌日、学園祭の準備を始める約束の午後真近までベッドから上手く立ち上がれなかった。更には大学でも、友人たちにならつく足元を危ぶまれたのだった。

30 心惹かれる香り（後書き）

黄色いバナナを、ぽちっとお願ひします。更新の励みになります。

3 1 模擬店（前書き）

学園祭の模擬店は？そして、不思議な子供は？

31 模擬店

剣道部の出し物は焼きそばとイカ焼きとスーパーボール^{すく}掬いだ。

「ソース焼きそば三人前！」

「塩焼きそば二人前」

昼時になって、殺人的な忙しさになってきた。

こんな時も恵瑠と翼のコンビは息がぴったりで、調理経験が浅いはずなのに、レストランの厨房でアルバイトをしているイカ焼き担当の男子二人より、うんと多くの客をさばっていた。

「あの焼きそばを作っている二人組、何だか可愛くない？」

「ここの大学の子にしては二人とも垢抜けてるね」

「あれ、剣道部の模擬店だよ。と言う事は」

「下手な男なら、ぶちのめされる？」

よその大学の男子学生の一団も色々勝手な噂をしながら、焼きそばを食べる事に決めたらしい。

二人の容姿に惹かれる男の客ばかりか、食欲をそそる香りに誘われた女子学生も結構いて、そうした客達が「これ、うまい！」とか「何これ、超イケル」とか言いながら食べているのを見て、又別の客が列に並ぶと言う感じだった。

結果、焼きそばは売れに売れて、恵瑠と翼の担当した初日の昼だけで本来二日分の予定で仕入れられていた材料を使い切ってしまった。予想外の展開に学園祭担当責任者の先輩はホクホク顔だったが、すぐその後で「じゃあ、もう後はスーパーボール掬いに専念して」とシビリアな表情で言い渡されたのは、スーパーボールの人氣がさっぱりだったからだ。企画を出したのは三年生の先輩二人だったが、なぜか恵瑠と翼が又売り子をする羽目になった。皆、それぞれデパートや待ち合わせがあつて、集まりが悪かったのと、焼きそばが売り

切れたと知った他の一年生が、もう模擬店の仕事は無いのだと早合点して仕事を引継ぎに来なかったりしたのだ。

「皆、携帯の電源切ってるな。すまん。白羽・黒井。やっぱり次を引き継ぐ奴がみつからん」

すると、様子を見に来た顧問が、怒った。

「君！あれだけ昼時働いた二人を、まだこき使うのかね。ほかの連中はどうした！」

「はあ……」

「馬飼野君の手前も不味いだろう？」

「あ、それは、そうですね」

「馬飼野さんがいらしたら、部長と僕でどうにかします」

「じゃあ、今すぐ、交代したまえ！」

顧問のおかげで二人はようやく解放されて、遅めの昼食を取ることにする。

「開放してもらえたのは治さんのおかげね」

「そうだね。だけど先輩達も無責任だよ。企画したくせに様子を見に来ないって、酷くない？」

まずは隣のイカ焼きを頼張るが、もうちょっとせめて、食事っぽいものが欲しい。

「ねえねえ、君たち、お茶でもどう？」

何とまあ分りやすいナンパだろうか。同じ大学の学生らしいが、心当たりは無い二人組みだ。

「まだ、私達食事をしていないのです」

そう翼が言っても、まだ食い下がる。

「ならさ、大学を出てすぐそばのカフェに行かない？」

「いえ、あの……待ち合わせの都合がありますから、御一緒できません」

恐らく本当に後三十分かそこらで、治が来るかもしれない。

「彼氏と待ち合わせなの？」

「はあ。まあ、そんなところです」

「君たち、お昼を食べ損ねたのだろう？」

治が何か包みを持ってやって来た。助かったと恵瑠も翼も思った。鬱陶しい二人組みは退散した。

「治さん、お仕事は？」

「月曜日にがんばるからって、秘書に許してもらった。ウチの大西が作った弁当だが、どうだい？」

御丁寧にレジャーシートまで用意してあって、木陰で美しい幕の内風の弁当を恵瑠と翼は食べた。

「もう、何と言つか料亭のお弁当みたいですね」

翼は驚いている。

「大西さん、何でも美味しく作ってくれるの。デザートなんか凄いいんだ」

「それにしても、私達が食べはぐれたって、良くご存知でしたね」

不思議がる翼が、恵瑠としては不思議だった。治の力を知らないのだろうか？

「星先生と横島がそれぞれ教えてくれたからね。弁当は横島の気遣いだ」

「横島さんが？」

今度は恵瑠が驚いた。

「ああ。何時も彼は気を付けて見ているよ。それはそうと、何か気配は感じなかったか？」

「私は何も。翼は感じた？」

「感じなかったけれど、何か有るんですか？」

治はスーパーボール掬いすくをやっている一人の男の子を凝視している。恵瑠もその子をじっと見た。すると、一陣の風が吹いてその子が被っていた白い帽子が飛ばされた。治は飛んできた帽子を受け止

めた。あたかも帽子が意志を持って飛び込んできたようにも見えて、奇妙だった。

パタパタと軽く響く足跡をさせて、やって来た子供は年の頃は小学校の低学年と言う感じで、少しカールした茶色っぽい髪とパツチリした琥珀色の瞳の整った容貌をしている。

恵瑠が治から帽子を受け取って、「どうぞ」と言って渡すと、その子は深々と一礼してから無言で帽子を被り、パタパタと走り去った。気がつくと、視界から完全に消え失せている。

「翼君、我が家に寄らないか？彼のところでも良いのだが、ウチの方が近いからな。ウチの料理長が上手い焼き菓子を作ったはずだから、三人で午後のお茶でも一緒にどうだろう」

「はい。お邪魔させていただきます」

治は、わざわざ用心してテレパシーを使わないように恵瑠には見えた。翼も緊迫した雰囲気を感じたようだ。原因はあの子供？そうとは思えない。

治が部長に断ってくれて、恵瑠と翼は治の車に乗った。治は無言だ。だが何かを用心している。

邸に戻ると横島が出迎えたので、恵瑠と翼は弁当の礼を言うと、「お口に合いましたか。ようございました。大西に伝えておきます」と答える。

屋内に入ると表情を改め、「大物ですな。あれは。このドアの外でテレパシーをお使いになるのはしばらくは用心された方がよろしいでしょう」と言った。

「あの子供は何なのですか？」

「そんなに大物なんですか？」

二人は驚いた。

「星先生のお住まいか、この邸以外で、あの子供について話すのはお気をつけなさいませ。旦那様が詳しいお話をなさいましょう。さ、あちらへどうぞ。午後のお茶の用意をいたしましたので」

執事の丁寧では有るが断固とした調子に二人は気圧されながら、
その後につき従った。

32 謎の子供（前書き）

次回は大阪風のイカ焼き？其れだけじゃない筈ですが……

32 謎の子供

「あの子供だが、間違いなく大天使そのものか……大天使が人に転生したもののか、二つに一つだ」

マドレーヌにパウンドケーキ・クッキーといった美味しい菓子類と、薫り高い紅茶が出されて治さんと翼と私は午後のティータイムを共に過ごしている。些か雰囲気は重苦しい。治さんは眉を顰めている。

「そのものと、転生したものの違いって分らないのですが」

以前治さんに私は「十一度目の転生を果たした」と教えられたけれど、その辺りの事情がどうも良く理解できていない。

「一概には言えないが、普通は精神も含め前世を全てリセットする為に転生するわけだ。だが、神とか悪魔とか天使とか呼ばれる人類より寿命がずっと長い生命体は別に転生し無くても、相当長い間生きて行ける。霊体だけが同一性を保ち、必要に応じて肉体だけ作り変えたり別の生命体を利用したりするケースも多い。時には波動の合う人類の肉体に共鳴して同化する場合もある」

「共鳴するのですか？」

「私のこの肉体は帝政ローマ時代のプリムス・クラウディウス・プルケルと言う男のモノがベースになっている。戦闘で死の淵をさまよっていた若い大貴族の男の肉体に、魔界を離れた私と言う霊体を引き寄せられたのだ。それ以降は私の意識はその男と同一化しながらも、過去の記憶・意識を持っているという感じだった。政治的な陰謀で追い詰められてプリムス・クラウディウスはローマで毒を煽って死んだ。だが後にその肉体を幾度も再生させて、別の場所、別の社会に紛れ込むという形を取って私は人として過ごして来た」

「ローマで死んだ時は、死んだのではなくて、仮死状態ですか？」
「いや、確かに一度は完全に死んだ。だが、サリエルに言わせるとこの体は霊体である私自身となじみが良いので、捨て去るには惜しい、と言う事だった。私もこの肉体は気に入っていた。だから秘密の墓穴に丸一年遺体を安置して人目を欺いた後、浮遊している霊体と呼ばひ込もうと申し出てくれた。女奴隷として仕えていたサリエルも私の後を追って毒を煽って死んだので、同様に一年後霊体と呼ばひ込む予定だった」

当時は火葬が一般的だったが、サリエルさんは替え玉を用意して人の目を欺いたと言う。主との申し合わせ通り一年後に地下室に安置した遺体に、無事に再び霊体と呼ばひ込めたらしい。

「だが、私の体の隣に安置したはずのサリエルの体は、跡形も無くなっていたのだ」

それから「転生したサリエルを捜し求める長い旅が始まった」と治さんは言った。

おかしい話だが、私自身は全く記憶が無い。あるいは、私の力の覚醒が不十分で思い出せないと言う事なのだろうか？

「あの時のサリエルの肉体の消滅は、天界の力の介入の所為だったのか、肉体と霊体の結び付きが私のように強くなかった所為なのか、ハツキリはしないのだが……サリエルは天界の介入が有ったと見ている」

治さんは私の場合、最初に女神から天使にされた時の精神的・霊的なダメージが大きかったので、肉体もリセットしないと癒されない事が一番の原因では無いかと見ている。それでも、サリエルさんが言うような天界の力の介入が無かったとも言いきれないらしい。

サリエルさんは全然生まれ変わる事も無く、それこそ、ローマ帝国が発生するよりずっと以前の時代から今ののような姿形らしい。時

代と地域により、髪と目の色を変える程度の事はするらしいが。

「あれは歴史の中で、あまり目立たない役どころを慎重に選んで来たのだ。私が神であった頃から仕えていてくれたが、魔界で一度はぐれて、長い間離れ離れだった。その後、ローマで再びめぐり合って私の家宰かさいとなつて以来、ずっと私の元を離れずにいてくれる。或る時は小さな公国の宰相、ある時は商家の番頭、あるいは貴族の執事、と言つ具合だな」

翼がルシファーさんとの関係について尋ねると「私が魔界で王になり、連れ帰つたが魔界になじめず衰弱し続けるアリエルをどう救うか途方にくれていた頃、彼は天界を追放されて、魔界にやって来た」と答えた。「彼が魔王になれば良いと私は言つたのだが、彼の申し出やいくつかの事情の所為で、彼は代理で私は王のまま、と言つ形をとっている。まあ、実質の魔王はルシファーだがな」

その間にどういう事情があつたのか、良く分らないが、魔界の実質的な権力はルシファーさんに渡したという事らしい。それでも、あの「王よ」と言つ呼びかけは、ルシファーさんが今も治さんを魔王だと認めていると言つ事なのだろう。

「あの大天使だが……ハッキリ敵とは言えないが、だからといって味方と言つ訳でもなからう」

「サリエルさんは敵だと考えているみたいですね」

「ああ。あれは元来大天使であつたのに不当な理由で天界を追われたから、天使の気配には敏感だ。私はあの子供は転生している、つまり、天使としての行いや記憶をリセットする必要が有つたものだと考えている。あの帽子のやり取りは、我々の力を見定めに来たのだろう」

「対抗試合の日に現れた不可解な力と波動は似てましたが、同じ存在でしょうか？」

翼もそこが気になるようだ。

「私は同じものかどうか、分らない。ルシファーはどう考えるかな」
すると庭に、星先生と言うかルシファーさんが現れた。ものすごい瞬間移動の力だ。

「おう、来たか。一緒に茶でもどうだ？」

「王よ、あの子供の形の天使は、ウリエルだ。直に会って話をしたから間違いない」

「穏やかに話し合えたのか？」

「ああ。平和な日本の穏やかな家庭で暮らす子供としての自我が、天使だった頃の性質に大きな影響を与えている。面白かったぞ。無邪気にアイスクリームを食いながら話をするんだからな。昔の堅苦しい調子とは大違いだ。今ウリエルが住んでいる家が、何と我が家の近所だったよ。ウリエルは幾度か人間の肉体を纏って、地上で人として生きた経験が有る。もともと人間になじみやすいのだ。天使としての記憶が覚醒したのは、つい最近らしい。あの試合の日に一瞬だけ気配を示した存在は、ウリエルの話では、自分ではなくラファエルなのだと言う」

「ラファエルか。やはり人として存在しているのか？」

「ウリエルは違うのではないかと思う、と言ったが、力の覚醒が不十分だから自信は無いようだ」

「それにしても、やはり大胆だな、ルシファー」

「勝手にあれこれ推測を垂れ述べても、真実には辿り着けまい」

ノックして執事の横島さんが新しくコーヒーを持ってきた。ルシファーさんはコーヒー党だ。

「ようこそ、いらつしゃいませ」

横島さんと言うかサリエルさんは、ちょっと機嫌が悪い。何時もルシファーさんがいきなり邸の中に現れるかららしい。

「サリエル、ルシファールの見解をどう感じた？」

治さんはサリエルさんの見解が気になるようだ。

「ウリエルは、過去幾度か人に転生しても常にあの神の忠実な僕でした。まあ、今はアイスクリームを嬉しそうに食べる可愛げが有るようですが、油断は出来ませんな。要観察、と言う所ですか」

「確かにいかなる時も観察は重要だがな。恋愛においても然り。王よ、そうは思われぬか？」

ルシファールさんは、何時もちよつとばかり横島さんを刺激するようない方をする。

さてどうなるかと、ヒヤツとした瞬間、翼の携帯が鳴った。メールの着信を知らせている。

「え？イカ焼きも？ひつどい！」

翼が見せてくれたメールは、明日はイカ焼きを売ってくれと言う依頼だった。

「何だか私達ばかり、働かされてるねえ。あのイカ焼きは硬いし、しょっぱいし美味しくないから売れないと思わない？」

確かに、醤油だれを付けて焼いた硬すぎる丸焼きは、余り美味しくない。

「いつその事、小麦粉とコーンスターチを使って大阪風の『イカ焼き』でも作るか？」

ルシファールさんが何だかクールな美貌に似合わない提案をした。

「ああ、良いねえ。私も好きだよ、大阪風の『イカ焼き』は」

治さんがそんな風に言ったのには、もっと驚いた。本当に明日は大阪風の『イカ焼き』を作る事になるかもしれない。

32 謎の子供（後書き）

黄色いバナナをぽちっとお願ひします。更新の励みです。

33 イカ焼きと天使（前書き）

学童保育サークルが存在する大学も有るみたいです。

33 イカ焼きと天使

大阪式の『イカ焼き』はイカの姿焼きとは全く違う。粉もの系のメニューだ。

「卵入りの方が美味しいですが、たくさん焼く時は、無い方がやりやすいです」

邸の料理長である大西録太郎の助言もあつて、卵は使わない。小麦粉は実は昨年秋の学園祭以来の物が残っていた。他にコーンスターチとだし粉が欲しい所だったが、農学部先輩がメーカーの試供品らしい物を仕入れてきた。量は十分だった。

本来はイカを鉄板に押し付けるようにして焼くものだが、無理なので、イカの一部をミンチ状態にして仕込んだ。

昨日のうちに翼が「ソースは買っても良いでしょう？」と主張したおかげで、関西のメーカーのイカ焼きに合うソースを先輩が問屋からちゃんと買ってきた。

「そもそも、冷凍のイカを大量に買いすぎたのが失敗だったんだよな」

「でも美人コンビが売れば、完売も有るかもしれんぞ」

「ソースを買ったんだから、それなりに結果が出ないと困る」

先輩達は勝手な事を言っている。翼は怒っていた。

「何よ！昨日も今日も。私たちがばかりこき使って」

怒った勢いで、秋の学園祭のほうは仕事を免除してもらおうと言う言質を部長と学園祭担当の先輩から取った。恵瑠は怒りもせず、のんきなものだった。

「恵瑠ちゃんて、穏やかでほのぼのしていて、癒しの天使だよな」

「翼ちゃんは不機嫌な女王様って感じだな。いや、悪魔系か？」

相変わらず先輩たちは勝手な事を言っている。

今日焼くのは関西出身の男子が三人がかりだ。恵瑠と翼は売り子専門だった。

昼時、ものすごい勢いで行列が出来た。飛ぶように『関西風イカ焼き』が売れる。

「何これ、お好み焼き？」

「違うみたい。イカ焼き？関西風なんだ」

「ソースの香りが、そそるねえ」

すると、列の最後の方にあの子供がいた。

「一枚下さい」

美しいボーイソプラノだ。

「百五十円です」

ほぼ売り切ったので、恵瑠と翼も最後のイカ焼きを食べる事にした。「ねえねえ、一緒に食べない？ジュースぐらい奢るよ。御家族の方がいらっしやる？」

恵瑠は、ルシファーとアイスクリームを食べたと言うこの子が気になる。

「学童保育の先生とお友達と一緒に来たんだ。あっちで、みんなと一緒に食べるの。お姉さん達も来たら？後でおやつが出るって」

「ちよ、ちよっと、馬飼野さんか星先生がいらっしやるまで動かない方が良くない？」

翼は警戒している。

「じゃあ、一緒に行って見る？弁当も多めに持ってきたよ」

星暁ことルシファーが、包みを持ってそこに立っている。治も一緒だった。

転生したウリエルらしいその子供が案内した場所には、大学内の

有志で作った学童保育グループのメンバーが居た。噂だけなら恵瑠も翼も聞いたことが有る。このグループを作ったのは医学と教育学専攻の大学院生達だと言うのは、結構有名だ。メンバーは学生結婚した大学院生のカップルや、子供がいる若手の研究者などが多いが、中には学外のメンバーもいるらしい。今日は日曜だが、色々仕事のある親が多いのだろう。大学内の芝生の上で小学生達が家から持ってきた弁当や学内で買ったものを食べていた。

「弁当、食べないか？箸ならここに有るよ」

治が呼ぶと、えらく素直にその子供は来た。人間としての名前はウリエル・ヤングらしい。父親はこの大学に籍を置くアメリカ出身の研究者で、母は日本人の医者だと言う。

「なんだ、君の名前は全くそのままと言う感じで捻りが無いな」

治が言うのと、ウリエルはちよつとむくれてこう言った。

「だって、僕が生まれる日に父さんが夢で天使の姿を見たからだよ」

「クツ、昔から捻りがないのは変わらん」

「昔の事って、全部は覚えて無いもん」

ウリエルはもつとむくれる。イカ焼きのソースが口もとについているのが御愛嬌だ。恵瑠は持っていたティッシュで拭ってやった。

「ありがとう。このイカ焼きって言うの、美味しいよ」

「そうか、私も一口欲しいな」

恵瑠がごく自然に治に食べさせるのを見ると、ウリエルは驚いたような顔で目を見開いた。ルシファーは面白そうにその顔つきを見て言った。

「この二人はこれでも年季の入った夫婦だぞ。まあ、今生じゃまだ婚約者同士だが」

「ふうん、話には聞いていたけれど、変わった波動の二人だね。全然魔物らしくないや」

「まるで魔物らしく無い。この方はずっと愛する妻を守って来ただ

けなんだしな」

「仲良しなんだね。仲良しはずっと一緒に居るべきだよな」

「ミカエルとあの神は、なぜか私達を無理矢理引き離したかな」

治は昔の不快な思い出の所為で、つい眉を顰めてしまう。

「何でなんだろうね。貴方達を見ると、引き離すのはやっぱり間違いだと思う」

ウリエルは、やけに真剣に考え込んでいる。何か話し掛けたその時、子供らしい声が響いた。

「ウリエル君、お昼食べた？」

これまたなかなか愛らしい女の子だ。小学校低学年と言う感じた。

「まだ食べかけ。お姉さんやおじさん達がお弁当に誘ってくれたんだ」

ルシファアは「おじさん」と言いながら、治の肩を叩いて笑う。

治はむくれている。

「これ食べない？」と恵瑠がカットしたフルーツ類を差し出すと、女の子は喜んで幾つか摘んだ。やがて、ウリエルと女の子は、集合が掛ったらしくて、手をつないで走っていった。

「ご馳走様、またね！」

「また、会っのだろうな、あの幼いウリエルに」ルシファアは楽しそうだ

「何を言おうとしたのだろうか？」治は非常に気になるようだ。

「すみません！」

学童保育サークルの運営に当たっているスタッフらしい。協力者の近所の和菓子店から提供されたと言う花見団子を持って来てくれた。「剣道部の関係者の方達ですよね。僕は教育学部の四年生でこのサークルの運営に携わってます」

「いやあ、私などはOBだし、フィアンセが模擬店をやってるから応援に来てただけなんだが」

「メンバー全員にいきわたって、ちょうど四本残ったんです。旨い団子だから、出来立てをどうぞ」

団子を遠慮なく食べていると、また声が掛る。

「馬飼野さん！」

先日、あの大学校で話をした広田五段だった。あのマドンナと一緒にだ。

「広田さん、今日は学園祭にいらしたのですか？」

「この人の姉さんの子供が今日はここに来てまして、向こうで弁当を食べてました」

「剣道部の模擬店、大盛況でしたね。私達、今様子を見てきたら、もう食べ物売り切れだったので食券でスーパースポーツボール投げやって来たんです。姪っ子はボールを喜んでました」

すると、さっきの可愛い女の子がウリエルと手を繋いで、パタパタとやって来た。本当に二人は仲良らしい。

「裕子姉ちゃん！あっちで大縄跳びするから、縄回すの手伝って」

「ええ？さっきまでやってた人は？」

そう言えばマドンナは確か望月と言う苗字だった、と治は思い出した

「えっと、お菓子屋さんに御挨拶と何か御用が有るみたい。あとは大人が一人だけなんだもん」

「じゃあ、ちよつとだけよ」

「縄回すの手伝います」

翼が申し出ると「一緒にお願いします」と言うことになり、一行四人は広田・望月ペアと一緒に学童保育の子供らと遊ぶ事になった。

「私は教員ですから慣れてますけどね、貴方は色々勝手が違って面食らっておいででしょう」

ルシファ―はニヤニヤ笑う。

「君は高校教員だろう。それでも私は父親なんでね。まあ、縄跳びは初体験だが」

四人とも運動神経が良く子供らとのやり取りにもなじみ、教育学部のスタッフが戻った頃にはすっかり打ち解けて明るく楽しい雰囲気だった。

「良い人と呼んできたでしょう？」ウリエルが言くと、スタッフの四年生男子は頭を撫でながら、

「うん。本当だね。良い人を連れてきてくれてありがとう」と言った。

33 イカ焼きと天使（後書き）

黄色いバナナをポチっと思います。更新の励みです。

3 4 油断は禁物だけど（前書き）

R 1 5 遵守のつもりです。

34 油断は禁物だけど

「あのウリエル・ヤング君はやけに友好的だな」

私もそう感じるが、昔よっぽど酷い事をされたみたいで、横島さんと言うかサリエルさんなんかは、「御油断なさいますな」と言う。これがルシファーさんとなると「奴なりに色々考えて人として生きて見る事にしたのだろうよ」と言う。

「酷い事をされたのは私と言うよりは、アリエル、君自身だったのだがね。無理やり天界に君を連れて行った連中の中にあのウリエルも居たはずだが、全くその記憶は無いのかな？」

「全く思い出せないんです。天使の姿で泣いてばかりいた事は思い出せませんが」

「まだ、私とのなじみ方が足りないのだな」

なじむためには、もっと愛し合わなければ。その事自体が愛し合う理由と言うのであれば、寂しいけれど、私はただ、治さんが好きなのだけなのだ。そんな理由にかこつけて抱いて欲しいだけなのだ。

何はともあれ、私は治さんに夢中なのだと思う。

治さんの姿形が「ギリシャかローマの彫刻みたい」と思う事が度々有るけれど、「パトリキ（貴族）の中のパトリキ」と呼ばれたローマ帝国の大貴族だった人の肉体が今の体のベースになっているらしいから、あながち的外れな印象でも無いみたいだ。

「プリムス・クラウディウスさんと出会う以前の貴方は、どんな姿だったんですか？」

最近時折、私の夢に出てくる昔々のこの人は、胸に宝石の飾りを付けて腰布をつけて居るのだが、どう言うわけか今の顔立ちとあまり違いが無い。

「実は大差無いんだ。瓜二つと言うか。非常に似通っていたから引

き寄せられたのだと思う」

その言葉を聴いて、疑問が解決した。

優美なのに彫りの深い男性的な顔立ち。太くすっきりとした眉、高く形の整った鼻。世界中の美味と美酒を知り尽くしているらしい、少しぼつてりして愛らしい感じの肉感的な唇。決して傲慢には響かないけれど命令する事に慣れた声。でも、この声がとろけそうに甘く響く瞬間も私は知っている。

穏やかな光を湛えた瞳は、強い意志を感じさせる事も有れば、酷く淫蕩な色を帯びる事も有って、どうかすると、その変化にドキドキさせられっぱなしだったりする。

「アリエル、如何したの？とても情熱的な眼差しで、私を見つめるのだね」

既にお互いに一糸まとわぬ姿で寄り添っているのだから、それは当然かもしれない。私は彼が欲しいから。彼を愛したいし、愛して欲しいから。

月の光に濡れたベッドの上で、ふわりと最初のキスが降って来る。すると彼の穏やかで知性的な雰囲気は、一挙に貪欲で淫らなものに変わる。

「ついこの間まで青い果実のようだった乳房が、今はふつくと柔らかに実っている」

確かに、このごろ胸が大きくなった。こうして彼に揉まれるからだ。自分で胸を触っても何とも無いのに、大きな手で握りこまれて乳首を摘まれたり軽く捻られたりすると、体中が熱を帯び意識が遠のいてしまいそうになる。もっと、もっと欲しい……気がつく、私は自分で腰を振りたてて彼にもっと可愛がって欲しいと催促している。でも、恥ずかしくて言えない。

「キスして、下さい」

「キスだけで良いの？」

クスツと笑われてしまう。啄ばむ様なキスを幾度も幾度も繰り返し、やがて舌と舌が激しく絡み合い、互いの呼吸を奪うような、噛み付くようなものになる。

「これで終わりにしようか？」

「イヤイヤイヤ」

「イヤか」

彼の手は、肝心な所を外して背中や腰のラインを焦らす様に煽る様に動く。

「下さい、いっぱい、いっぱい」

「何を欲しいの？ちゃんと云ってごらん」

時々こんな意地悪をする。今まではべそをかいて恥ずかしいお願いをしていたけれど、私だって……私だって……

「おや、ちよつと驚いたよ……悪くないな」

初めて私から彼の物に触れたのだ。その熱さに煽られて拙いながらも必死で手を動かす。

「これを下さい。私の中に、お願い！」

「ちよつと反則だが、熱意は認めてあげよう」

ようやく指で触ってくれた。巧みな刺激はそれだけで意識が遠のく。自分でも恥ずかしいような声を上げて、身悶えさせられる。私自身が知らない快樂のポイントを彼は知り尽くしているのだ。体中に熱気が溜まっても、まだ欲しいものはもらえない。

「ちようだい、おねがい、いっぱい、いっぱい、ちようだい」

甘ったるい舌足らずな声で恥知らずな願望を口走る。彼が欲しくて欲しくて堪らない。

「気が早いな、もっとゆっくり楽しみなさい」

熱い息が足の付け根に感じられたかと思うと、次の瞬間音を立て

て私の中から溢れ出た物を吸い上げる音が部屋中に響く。軟体動物のような彼の舌が這い回り、私の脳髄は焼ききれそうになる。体中が汗ばみ、獣めいた呻き声以外出ず事が出来なくなつて初めて、彼のものが与えられた。

「じっくり味わつてごらん」

憎らしいほど彼の声は落ち着いている。それでも密着している肌から感じられる体温はいつもより高い。ゆっくりとした抽送は激しくリズムカルなものに変化する。粘着質な擦れ合う音、肉同士のぶつかり合う音、淫らな音の響きに合わせて体が溶け出しそうな気がする。私は口を閉じる事すらできず唇の端から唾液を垂れ流すと、彼が舐め取る。

「気持ち良いかい？」

言葉がうまく口から出てこない。壊れた操り人形のように首をかくがくと振ると、こうした時にだけ見せる美しい魔界の王そのものと言つた笑みが彼の顔に浮かぶ。

「綺麗だ、アリエル、とても綺麗だ」

優しい手つきで私の額の汗を拭つたかと思うと、決り取るような狂暴なまでの腰つきで私を極限に追い上げる。

「あぁっ、はぁっ、うっ……っあぁ」

手を伸ばし、たくましい彼の胸にすがりつこうとした瞬間、意識が飛んだ。

水音で目が覚める。いつものようにバラの花びらを浮かべた湯船の中で、私は彼に抱きしめられている。婚約してから幾度も経験している事なのに、まだ慣れない。でも、酷く幸せな時間だ。

「明日が代休で良かったね。また無理をさせたかな」

「とても嬉しかったから、良いの」

私は自分から彼の胸に体を摺り寄せる。思い切り甘えたい気分なのだ。

「愛しているよ、アリエル」

「愛してます……ああ……なのに、貴方の本当の名前がまだ思い出せないの」

真名を誰にも握られない事が、この人の安全を保障してきたとは言うけれど、でも、私が思い出せないのは悔しいし、残念。

「ならば、かりそめの名前だって構わない。君が想いをこめて呼んでくれれば」

「治さん……」

「天使は真名がむき出しでも平気らしいが、私は天使ではない。誰かに真名を握られたら、私の力は消え失せてしまいかも知れないからな。油断は禁物なのだよ」

私が呼んでも治さんに何の危険も及ばないようにするには、私が強くなければいけないのだろう。

「私に十分な力が無いからですね」

「油断は禁物だが、焦りも禁物だよ、アリエル。君の力が十分戻ったとき、自然に君は私を真名で呼んでくれると信じている」

ほつれた髪をかき上げる彼の手つきが酷く優しかった。彼は私を信じてくれている。待っていてくれる。だからきつと、大丈夫なのだ。そんな気がした。

34 油断は禁物だけど（後書き）

黄色いバナナをポチっと思います。更新の励みになります。

35 立てば芍薬（前書き）

芍薬の花が満開なのを見ました。しばらく見とれてました。
茎が真っ直ぐで切花にもし易いですよね。相当花は大きいですが。

35 立てば芍薬

「お墓参りに行こうか」

私が言つとアリエルは驚いたらしい。

「あ、今日はおばあちゃんが亡くなった日です。私、ついさっきまで忘れていた……」

彼女も一昨日までは、覚えていたのだ。忘れた原因は私が作ったようなものだ。

「菩提寺の方には話を通してある。朝食を食べ終わったら行こう」

今は二人で置きぬけのシャワーを浴びてから、バスローブの他には何も身に付けていない状態で部屋に運ばせた朝食を食べている所だ。そうした雰囲気の中だから、余計に私の言葉は意外に響いたのだろう。近頃の彼女は快感に対する感受性が鋭くなって反応も多彩だ。昨夜は私も気は配ったが、回復力が強くなってきたお陰だろう。足腰が立たない状態にはならずに済んだ。すぐ近くまで車を使うのだし、恐らく墓参りぐらいは大丈夫だろう。

「御住職の話では三回忌までは済んでいるので、今日はお墓にお参りしてお経をあげてもらおう事にしたよ。服装は黒いアンサンブルにしない。私も黒いネクタイをして行く」

彼女には細かい話はしていないが、高校三年生まで暮らしてきた家は二日に一度この邸のものが出向いて、手入れと点検を行っている。半月に一度は横島が総点検をしていたから、庭から仏壇までそれ相応に手入れがなされているはずだ。今日は既に仏壇の準備はさせてある。菩提寺に行った後、家にも立ち寄って来ようと思ったからだ。

作らせておいたワンピースに薄手のボレロの夏らしい黒の一揃い
がよく似合う。髪をブローして黒いリボンで束ねる。口元はグロス
だけで仕上げ、素顔に近い薄化粧にとどめる。仕上げに一連の真珠
のネックレスをすると、うら若い乙女にふさわしい喪の装束になっ
た。

家を出る間に横島が「お供えのお花でございます」と渡したの
は、彼が丹精した見事な芍薬の一对の花束だった。「御祖母さんは
芍薬が大好きだった」と言う彼女の言葉を記憶していたからだろう。
純白と淡い桃色の花が幾本も惜しげもなく使われていた。

「横島さん、ありがとう！」

感謝の気持ちを明らかにするのは、良い事だと思う。

彼女の両親と祖父母の墓は、菩提寺の管理する霊園の一角にあっ
た。

「横島さんが丹精されただけ有って、これはまた見事な芍薬ですな」
御住職は園芸マニアで我が家の横島とは同好の士だ。このごろは
互いに花の苗や種をやり取りする仲らしい。人の好き嫌いがハツキ
リしている横島にしては珍しい事だ。

「祖母が芍薬が好きなので、用意して下さったみたいです」

「そうでしたなあ。恵瑠ちゃんのお祖母様は芍薬がお好きでしたな。
お宅の庭に珍しい紅白の絞りや、黄色い花もありましたな、確か」

さすが園芸好きだけあって、御住職は良く覚えておられるようだ。
「お参りが済んだら、仏壇の方にも御参りしよう。そうしたら丁度
その花も見られるね」

アリエルはパツと嬉しそうな表情を浮かべた。やはり、懐かしい
のだろう。これからは、折を見てこちらですぐす事にしようと思っ
た。

読経の後で、御住職心尽くしのお斉ときを頂く。よく有る仕出しでは

なく、気持ちのこもった御手製の精進料理だった。どれもなかなかの味わいだったが、御住職が大本山で典座てんそを勤められた時に覚えられたと言う胡麻豆腐が絶品だった。どうやら私が土地関連の厄介事や本堂の修繕などで力添えさせて頂いた事を、多たとされたかららしい。禅寺らしい簡素だが趣の有る庭を前に、最後に一服薄茶を頂いてアリエルと私は外へでた。

菩提寺からアリエルの元の住まいは、車で五分程度の距離だ。車を止めてまずは家に入り、仏壇にお参りする。

「あ、綺麗にして下さっているんですね」

アリエルは驚いたようだった。仏壇は祥月命日にふさわしく灯明・線香・供物・花がきちんと整えられていた。サリエルは目配りが細かい。二人で仏壇の前で手を合わせると、一瞬祖母らしき人の気配が感じられたが、ふっと消えた。

「庭を見てみましょうか。芍薬は咲いているのかな……」

見事に白に赤の絞りが入った大輪の花と、やや小ぶりな山吹色の花が咲いている。

「見事に咲いているね」

「切って横島さんに持って行きましょうか」

「いや、横島がこの庭の面倒も見てくれているのだから任せておこう」

「この黄色いのはあのお庭には無いですね。植替えとか出来るのかな？」

「私は詳しくないが、これほどの大株なら株分けもしやすそうだ」

「株分けっていつするんでしょうね？」

「秋じゃないかな。戻ったら横島に聞いてみなさい」

芍薬の前でそんな話をしていると、門から呼びかける声がする。

「あ、真知子！」

この家のすぐ裏に住むアリエルの幼馴染が尋ねてきた。

「今日、おばあちゃんの命日だね。橋本屋の薄皮饅頭、ちよつとだけ持ってきた。お供えして」

故人の好物を持って来てくれたようだ。アリエルは彼女を呼び入れて仏壇に備え、三個だけ取り分けて茶を入れて薦める。私も当然のように同席した。

「横島さんて執事さんなんですか？ 恵瑠がそちらに移って次の日だったかな、ご挨拶にいらつしました。手入れのために人をよこしますってお話だったけれど、家の中もお庭も綺麗な状態ですね」

「横島は有能な男です。目配りも細かいですしね」

「うん。びっくりした。私が住んでいたころより綺麗だね」

「恵瑠の掃除、結構大雑把だもんね。あ、ごめん」

若い彼女達の会話が楽しげに続くのを耳にしているのは、悪くなかった。アリエルも私と二人きりのときは又違った、快活で弾むような笑い方をする。

「じゃね、又、戻ってきたらだべろうね！」

ひとしきり話が終わって、友人は帰った。

「あの、ごめんなさい。二人で勝手に喋り捲ってて……」

「私は楽しかったよ。でも、二人きりの方が気兼ねが無いだろうね。夏休みにでも、ここにしばらく戻るかい？」

「えっと……その間治さんは？」

「私は仕事も有るから、休日以外は邸の方に居る事になるが」

「じゃあ、お休みの日にここに一緒に泊まって下さい」

「それは無論構わないよ」

「やっぱり一人きりでこの家で寝るの、もう無理みたいです。寂しくて我慢できそうも無いから」

可愛い事を言ってくれる。いつの間にやらアリエルが私の膝の上に乗っていて、潤んだ瞳と艶めいた唇が私を誘っている。

「私も肌寂しいのは辛いな」

愛らしいアリエルの舌を舐め上げ左右に転がしてやると、息が荒くなり体温が上がって来る。

「随分、キスが上手になった」

「先生が上手だから……」

それだけを言うとは悩ましげな呻き声を漏らし始めた。スカートを捲りストッキングの内側を悪戯し始めた私の手の動きに反応しているのだ。

「さすがにここはまずいね。アリエルの部屋はどこなの？」

「廊下の突き当りです」

熱を孕んだアリエルを抱え上げ、襖を開けて言われた部屋に入る。簡素なシングルサイズのベッドがあった。恐らく私はこの部屋に入った最初の男と言う事になるのだらう。それでも口に出して確かめなくなるのは、独占欲だらうか？

「ここに入って君を抱くのは私が最初だよな」

「も、勿論です」

「君のバーズンを貰ったのだから当然か……アリエルが余りに魅力的だからつい心配になってね。自分でも呆れるよ」

服を脱ぐのも脱がせるのも、もどかしく感じる。一枚一枚取り去ることに互いの体臭が濃くなり、まだ明るい日差しの中で全てを脱ぎ捨てた二人の体は絡み合う。昨夜は彼女の早急さをたしなめたはずなのに、どうしたものだらう。あわただしく互いの欲望を弾けさせた後、しばらく身を寄せ合ってどちらも動かなかった。

「何だか、照れます」

「私もだ。思いがけず気がせてしまった」

「高校時代に逆戻りしたみたいで……」

「確かに、そうだな。女子高校生の部屋で、淫らな行為にふける悪い男になった気分だった」

「お泊りする時は、仏間の隣の和室に布団を敷きましょう」

「ほう、それは良いかもしれないな」

互いに部屋に有ったティッシュで拭ける所だけを、簡単に拭いて、すっかり皺を付けてしまった服を着なおす。

「裸にパールのネックレスだけと言うのも、良い眺めだったよ」

すっかり服を着てしまつてから、そんな事を思いつくままに言つたら、彼女は赤面した。外はもう夕日が射している。庭の芍薬の花は相変わらず美しかったが、傍らのアリエルは更に魅力的だ。

「立てば芍薬とは、上手い事を言つたものだな」

芍薬の枝分かれせず真っ直ぐな姿を美人の立ち姿になぞらえたものだろうが、出会つた頃は固い蕾・青い果実と言つた風情だったアリエルが、時折垣間見せるようになった妖艶な美しさにふさわしい言葉のように感じた。名残惜しいが私は彼女の手を取り、車に向かった。

35 立てば芍薬（後書き）

黄色いバナナをポチッとお願ひします。更新の励みです。

36 会社訪問（前書き）

就職活動ではありません。

36 会社訪問

「明日の予定は？」

夜、ベッドに入ってから治さんに聞かれた。

「一番早い時間帯から講義です」

自分でこう答えながら、残念がっていた。午後の講義は一こまだけで剣道部の練習は休みだ。

「練習が無くて終わりが早いのなら、明日はアリエルが僕を迎えに
おいで。夕食と一緒に食べて欲しいな。ついでに秘書や主だった会
社の連中に紹介するよ」

そう言えば、私はただの一度も治さんの会社に出向いた事が無い。
「表立って活動しているのは先代が創業した家電メーカーだけど、
元々は江戸時代以前からの呉服商で、幕府御用商人となり明治期か
ら銀行を営んで来た家がルーツだ」

その銀行は今はいくつかの銀行と合併して、別の名前になってい
ると言う事は私も知っている。色々な業種の有名企業が全部その企
業グループに含まれるらしい。商社・生命保険・証券・化学・鉱山・
製鉄・石油・造船・繊維・製紙・自動車・放送・鉄道・建設・警備
保障・コンビニなどなど、数え上げたらキリが無い。それら全
ての筆頭株主が治さんなのだ。何だか眩暈がしてくる。

「普段はそれぞれの企業の人間に任せているが、何か有ると私も出
かけて行かざるを得ない」そうで、治さんが普段仕事をしている家
電メーカーと系列の放送局が組んで、プロジェクトチームを立ち上
げて何かやるらしい。

「今夜は夕飯も会社で食べるんだ。アリエルは一度帰宅して横島と
一緒においで」

横島さんとメイドさん連中が、会社の人たちのお目見えに相応し

い服装を用意してくれるらしい。

「夕食のメニューは何が良い？近所の系列ホテルから運ばせるから大抵の物は用意できるよ」

「治さんのお勧めにします。きっと美味しいでしょうから……」

その後は手を繋いで、おとなしく眠る事になった。やっぱりちょっと寂しい。私の祖母の命日のために一日時間を割いてもらった所為で、お仕事のスケジュールが立て込んでいるみたいだ。我慢するしかない。それでもやっぱり寂しくて治さんに擦り寄ったら、優しく抱きしめてくれて髪をなでながら「おやすみ」って言われる。その後は覚えていないから、どうやら朝まで眠ったみたいだ。

早めの朝食の後、治さんは急いで出て行った。私も大学に向かう。後はいつも通り翼と合流して、昼食も午後の講義も一緒だった。

治さんに会いたくて、私は急いで帰宅した。

古参のメイドさんたちが見立ててくれた服に着替える。パールピンのシルクツイードのジャケットに白いレースのブラウス、たっぷりフレアの入ったシルクシフォンのスカートと言う格好だった。リクルートスーツとは随分と感じが違う。

「指輪もどうぞこちらを」と言われて、大きなダイヤの方を嵌める。治さんが出社用に使う黒塗りの車の助手席に横島さんが座る。私は後ろの座席だ。

車が吸い込まれるようにして入った巨大なオフィスビル。某タワーよりはちょっと低いそうだけど、それでも地上五十二階地下五階の堂々たる構えだ。すごい威圧感がある。中には本社と関係会社のオフィスばかり入っているらしい。その所為で、マスコミの話題には上らないみたいだ。

「放送局も新聞社も雑誌社も勢力範囲ですので、まあ、報道させな

いと言うのが正しいでしょうね」

横島さんの話を聞いて納得する。なるほど。一種の報道管制を敷いている感じなのかな。

「社員食堂や、社員の為のスポーツ設備もなかなかの物ですが、旦那様にはプライバシーは伏せておいた方が安全と言うお考えも有るようですから、今日は真っ直ぐ会長室へ参ります。幾人かグループ内の方や直属のスタッフの方とご挨拶なさる事になると思います」
何か緊張してきた。横島さんは「皆さん、気さくな気持ちの良い方ばかりですから大丈夫です」って言うけれど……

ともかく、横島さんの後についてゆく。地下駐車場から滑らかにぐんぐん上昇する感じのエレベーターで上って、着いた先は五十階だった。特別な受付って感じの受付があつて、そこに三十代ぐらいのスーツ姿の男性が一人いる。横島さんを認めると、立ち上がった深々と礼をした。

「ご苦勞様です。本日は旦那様の御希望で御婚約者の白羽恵瑠様を御連れしました。生体認証は私の方で登録させていただきます」

「初めまして。白羽恵瑠です。どうぞよろしくお願いします」

「本社会長室所属の小沢昌幸と申します」

「御仕事中の旦那様に急ぎの御用があるときは、この方を通されると話が早いかもしれません」

小沢さんの名刺を貰っておく。名刺には本社の総合受付の電話番号しか出ていないけれど「会長室の小沢昌幸さん」と言う内線をつないでくれるらしい。携帯で治さんに直接連絡しても上手くつかまらない時に試してみるようにと、横島さんが教えてくれた。

深々とお辞儀をする小沢さんの横を抜けて、奥に進むと、生体認

証のセキュリティでロックされたドアに出る。何だかよくわからないが「ここに、しっかり左手を広げて押し付けて下さい」と言われるのでその通りにすると、私の指紋やら掌紋やらが登録されたらしい。今度からは、私の掌を押し付けると認証されて、このドアから先に進めるようになったようだ。

とても広いオフィスに三十人程の人がいる。仕切りが無い大きな会議室プラス談話室みたいな感じで、皆さんノートPCを前に一人で作業する人、集まってミーティングしてる人、色々みたいだ。

正面の壁面を見ると、この会社の組織図が掲げられていた。本社組織だけでも、グループ経営本部・情報セキュリティ本部・法務本部・知的財産権本部・調達本部・技術品質本部・環境本部などなどざっと見ただけでも二十以上の部門が有る。他に研究所所属の部門や、海外の諸部門も有って、それぞれの分野の専門家が日夜お仕事をし、この巨大企業を支えているんだろな、なんてちよつと柄にも無く考え込んでいると、向こうから見慣れた人がやって来た。バルベリトこと羽根山太郎さんだ。あ、そうか羽根山さんはグループの銀行の頭取って事になるのか。

「お久しぶりです。父上がお待ちかねですよ」

バルベリトさん、すごく嬉しそうだ。父上って？公言してOK？

「皆、母上に御挨拶を！」

「母上ようこそ」

「どうぞ僕の事も思い出してください」

「やはり母上はお綺麗だ」

もしかして？

「母上、ここにいるものは皆、母上が女神でいらした頃の子供らの生まれ変わりです。都合がつかずここに居ないものも居りますが、おいおい御紹介できるのでしょう」

そのバルベリトさんの説明を聞いて納得した。

「父上のお出ましだ！」

「父上、おめでとうございます」

「本当に良かった」

治さんが、にこやかに登場した。

「今生でも無事に愛する妻にめぐり合えた。今は一応婚約者と言う形をとっているが、この人が二十歳になったら籍を入れる。まだ、彼女の力の覚醒がわずかなので子供であるお前達を思い出せずにいるが、辛抱強く待ってやってくれ。人として子を成せば、恐らく能力は大きく開花するはずだ」

御婚約おめでとうございます、と言う言葉と共に拍手が起こる。

「母上は優れた剣の使い手だが、まだまだ覚醒されていない。ついでは、君たちも母上をお守りし、お力添えするように願いたい」バルベリトさんの言葉に呼応して、歓声が上がった。

「お任せあれ」

「おかしい男は全て撃退いたしますよ」

それから私と治さんの前に行列が出来て、一人ひとり名前と所属を言って名刺をくれた。

「では、皆、ありがとう。私は力の元である彼女と一緒に奥に居るから、必要があれば秘書を通して申し出てください」

「なるべくお邪魔をしないように頑張ります」

「もっとお二人の力が馴染みます様に、僕らも応援しております」

「話の分る子供らで良かった。では、失礼するよ」

え？邪魔をしないとか、力が馴染みますようにとか？やっぱりそう言う事？

「はあ。そう言う事でございます。私もお邪魔ですので、此处で邸に戻ります」

横島さんは、帰っちゃうれしい。

「アリエルはちゃんと私と一緒に帰るんだからね」
腰をがっちり抱えられた。

専用エレベーターで五十二階の会長室に行くと、男性の秘書さんばかりが三人居る。さっき入り口で迎えてくれた小沢さんは第三秘書で、第一秘書は富原信一郎さんだそうだ。

「あのもしかして……」

「うん、富原創一の長男にあたる。前世ではベルゼバブの弟のマンモンだ。マンモンも一度無理やり天使にされたが、自分で逃げ帰ってきた。君を探し出せたのは、このマンモンの力も大きい」

マンモンさんは筋肉隆々のマッチョタイプだけど、目が可愛らしい。

「母上、どうぞ宜しくお願い申し上げます。本日の夕食ですけれど、季節のイタリア料理のアラカルトにいたしました。どうぞお楽しみ下さい」

何でも、すぐ隣のホテルに腕の良いイタリア料理のシェフが最近来てくれたのだそうだ。

「さ、おいで」

そう言われて、入った奥の部屋はオフィスと言うよりは書斎と言う感じ。すぐ奥に通常の億ション程度の大きくは無いけれど、最新設備の整ったキッチンもバスルームもベッドルームも有る。

「ベッドルーム脇の小部屋にPCが有る。必要なら使いなさい」と言われた。

「夕食まで、しばらく有るからね」

まだ、治さんは仕事だから、私は奥の部屋でPCを使う事にした。

36 会社訪問（後書き）

黄色いバナナをポチっとお願いいたします。
更新の励みです。

37 気晴らし（前書き）

次は……事件かもしれません。

37 気晴らし

昨日は白羽の御祖母さんの祥月命日のために一日割いたので、些かスケジュールがタイトだ。だがそれで良かったと思っている。アリエルは喜んでくれたようであつたし、忙しいからと言う理由で、今度からはオフィスにアリエルを呼び易くなつた。此処だと子供達と顔を合わせやすい。子供らと馴染む方が彼女の力も早く回復するはずだ。無論一番なじま無くてはいけないのは、夫である私だが。

彼女が女神だつた頃に生じさせた神霊は五十柱に上る。人とは違つて気が高まり、愛し合い、私と二人の記念となる子供が欲しいと思えばすぐ生じるので、子供であつても印象は薄いかも知れない。私とアリエルが人界に降りたので、大半が人の魂と同化するなり、人として転生するなりして人界で過ごすようになった。彼らは並の人よりも知的にも身体的にも能力が高く、皆私とアリエルを親として記憶している。

大きな魂の傷の所為でアリエルは色々な事を転生するたび忘れるが、父親の私は子供らの事も全て記憶している。子供らは人界における信頼できる仲間として、大いに力になってくれた。こうした良い子供達を生み出してくれたアリエルに大いに感謝している。だが、皮肉な事に今のアリエルはこうした事情をキレイさっぱり忘れているのだ。

「早く思い出してもらわねば困るな」

とりあえずキリが着いた。夕食を食べて、風呂に入つてベッドで三時間程度仮眠を取つてから、時差の有る海外拠点とネット会議だ。「アリエル、もうすぐ食事が届くよ」

どうやら、大学のレポート提出は終わったようだ。後ろから抱きしめて首筋にキスを落とす。手をもぐりこませて乳首を弄つてやる

と、甘い呻き声を上げる。膝に抱き上げてひとしきりキスをする、

「夕食どころじゃなくなりそう」と言われた。

「夕食の後、気晴らしに付き合ってくれ」

「何をすれば良いの？」

「一緒に風呂に入って、一緒に寝てくれれば良いさ」

「着替えも下着も無いけれど……」

「ちゃんと用意してあるよ。見なかったの？ほら」

手をとって、クローゼットの中身を確認させる。下着類も実的なものから装飾的なもの、セクシー系まで揃ってる。衣類は厳冬期以外、ほぼカバー出来る品目が有る。邸に有る衣類の色違いや、同一シリーズで揃えてあるはずだ。

「まあ！いつの間に」

驚いていたが、当分必要なものが全部有るのは確認できたようだ。「アリエルのボディーサイズなら、知り尽くしているからね」と言う、酷く恥ずかしがる。余りに可愛いから、もうちょっと弄りたくなる。

「是非、これを風呂上りに着てみてよ」と、透ける素材で出来た赤いベビードールとそろいのセクシーなショーツをベッドの上に並べてみせる。アリエルがショーツを手にとって確かめて「これ、どこがどうなって居るんですか？」と聞くので、着用方法を説明したら真っ赤になった。

「……が、がんばります」

なかなか健気だ。ここは素直に「ありがとう」と礼を言うておく。

食事が届いた。今までここでの食事は多少味気なかったが、アリエルが居れば楽しい。前菜から全部コースどおりに頼むと、最後のドルチェ（デザート）が外せないアリエルには重いだろ、剣道の練習が無い日にしてはカロリーオーバーな気がして、第一の皿を

アンティバースト

プリモビッシュト

飛ばした。ワインは辛口の白だ。

「このパンの上に載っているの何でしょう。お野菜系でしょうけど美味しいですね」

アリエルは茄子のクロスティーニ（カナッペ）が気にいったらしい。前菜は彩の美しい四種類の盛り合わせでワインとの取り合わせも良かった。旬のイサキを丸ごと使ったアクアパッツアを前にして「えっと、どうやって食べれば」と戸惑っているの、フオークで中心の骨を抑えてナイフを使うコツを教えながら、少し手助けしてやる。

「美味しいですね。えっと、残りはどうやって……ひっくり返すんですか？」

「和食・洋食・中華に共通するマナーだが、魚は裏返して食べない事になっている。背骨と下の身の間こんな風にナイフを入れて、頭から尾の方へナイフをずらして骨を持ち上げるんだよ。ほら」

「あつ、本当！上手く行きました」

真面目な良い生徒は教え甲斐が有る。

「二人きりなんだから、多少御行儀が悪くても構わないさ。ただ、リハーサルで慣れておくと、どこかで魚に遭遇しても緊張しないで済むだろう？」

コントルノと呼ぶ野菜の付け合せは、ズッキーニのローストだった。シンプルだが風味豊かだ。

「ズッキーニって治さんと暮らすまで食べた事が無かったんです。美味しいけれど、キュウリともまた随分違いますね」

「これでカボチャの仲間だからね。私はオリーブオイルで揚げたのも好きだ」

「カボチャの仲間なんだ……ふうん」

「ワインはどう？もう少し」

アルコールに強いわけではないアリエルに勧めるのは、いささかの下心が有つての事だ。

「頂きます」

最後は彩り華やかなマチエドニアだった。旬の国産のもののほかに目新しい熱帯のフルーツも使われている。小ぶりのティラミスが添えられていて、エスプレッソと共に楽しんだ。

「わく綺麗ですね。果物がいっぱい！フルーツポンチみたいですね」
マラスキーノが効いている。サクランボのリキュールだから結構アルコール度数も有るはずだ。

「イタリア風のフルーツポンチだよ」
ティラミスもしっかり平らげて、アリエルは幸せそうだ。

アルコールの効果は風呂に入ると現れ始めた。

いつもより狭い浴槽に一緒に入ると、アリエルは自分から私の膝の上に乗って来て、向かい合わせの格好になり、頭を私の胸にもたせ掛ける。普段なら私が抱きかかえるのだから、違いは大きい。

酒の勢いとは言え、大胆になって自分から私に迫ってくれるのが新鮮だ。

その白い腕で私を抱きしめうわ言の様に「キスして、キスしてください」と繰り返す。請求する内容がキスどまりなのが、何とも彼女らしくて愛らしい。この際さつさと上がって、先ほど用意した赤いベビードールと揃いのショーツに着替えさせようと考えた。赤いベビードールは完全に透けているし、ショーツのクロッチ部分は前から後ろまで全部スリットが入っている。つまり……肝心な部分はパツクリと丸出しになるわけだ。こうしたオープンショーツと呼ばれるセクシーランジェリーも、最近は多彩なデザインが有るが、これはフリルが何とも愛らしい。愛らしいのにイヤらしい。

「素敵だ」「可愛い」「よく似合う」そんな言葉を振りまきながら、さつさと目的のものを着せてしまうと、ベッドへ抱え込んだ。
すると……

「私、頑張ります」と言つて、アリエルが私の体に沢山キスをしてくれる。時折舐めたりするが、まるで子猫みたいで可愛い。私のそれに辿り着くと、えらく頑張つて舐めたりキスしたり、悪戦苦闘している。技巧としては実に拙いが、逆にそれがそる。色々動くたび、赤いベビードールに包まれた胸が揺れ、ぱっくり割れたショーツの底が見え隠れする。気晴らしに付き合えと言つたが、これはそれ以上だ。

「ありがとう。そろそろ私がアリエルを可愛がる番だね」

そう言つて彼女の体をベッドの上に置いて、じっくり鑑賞しながら愛撫を施すと実に艶めかしく悶える。いつもより激しく甘つたるい喘ぎ声をあげて、時折潤んだ瞳で私を見つめる。こうした様子を見たかった私の作戦は、そこそこ上手く行つたと言つ訳だ。

「ください、いっぱい、いっぱい」興奮している時の舌足らずな言い方で、アリエルは私を煽る。

「じゃあ、受け取ってもらおうか」と言つと「うれしい」と言いながら身を振り、しとどに濡らす。

その後は思いつきりとは行かないが、出力七十パーセント程度で埒を明けた。私はもうすぐ始まるネット会議に参加するし明日も互いに忙しいからと言う配慮で、そうしたわけだが……思い切りやつた方が実は良かったかもしれない……と思うような事がこの後起きてしまうとは、さすがに私も思つても見なかったのだった。

「アリエル？アリエル！どこだ！」

魔王は焦っていた。海外拠点とのネット会議が済んで、また一眠りしようとしてベッドに戻ると彼女が居ない。セクシーランジェリーにあからさまな情交の跡をとどめる様な有様で、一体どこに消えたのだろう？常に冷静だと言われる彼だが、珍しく酷く取り乱している。世界中の大半の人間の思念が読める彼だったが、皮肉な事に彼の最愛の存在の思念は、二人が神であつた太古の昔から読み取る事が不可能なのだ。

（アリエルが居ない！姿が見えないのだ！）

彼がその思念波を最大級のパワーで放出するなど、いまだかつて無い事だった。すぐに五十人の子供らと眷属たちの思念が覚醒し、呼応する。

（父上！母上は御一緒では？）

（ネット会議のために二時間ばかり寝床を離れた。その間に姿を消した）

（そちらのビルに外部からの侵入者は無いようです）

（母上の意識が感じられません）

（意識を失つておられるのかもしれませんが）

（我等が母上に呼びかけましょう）

ネット会議で二時間程ベッドを離れる事は一応アリエルに伝えただが、アルコールの所為で正常な判断力や注意力が無くなっていたかも知れない。更に部屋の鍵をかけて置かなかった事が災いした。

（専用エレベーターが作動しているが、何故か各階停止モードになってしまっている）

（ならば、各階の警備担当者や夜勤のものの意識を探りましょう）

（引き続き母上に呼びかけます）

地下五階地上五十二階の全フロアを探し回る事になるのだろうか？最も早く仕事を始めるオフィスが開くまで、あと三時間程度しかない。場合によってはビル全体を封鎖する事も考えるべきだろうかと、悩む。秘書を除けば、夜勤の者や警備会社の者はアリエルが何者か、いかなる存在か、知らない。何よりもまず、あのように扇情的な姿の彼女を、自分以外の者に見られなくなかった。

（父上！母上が目覚められたようです）

（痛い、寒い、ここはどことおっしゃってます）

（アリエルに向かって、落ち着いて今いる場所の様子を教えるように伝える）

一方で、恵瑠は打ちっぱなしのコンクリートの床の上に居た。時折規則的に機械が作動するような大きな音がする。だが、真っ暗だ。なぜ何も考えず闇雲にベッドから出て来てしまったのか、自分でもわけが分らない。

「ああ、隣に治さんが居なかったから、探しに行くつもりだったんだ」

出鱈目にボタンを押してエレベータに乗って、何回か止まった階で降りたように思うけれど……

ちゃんと思いつけない。

（母上！今おいでの所はどのような場所ですか？）

（すごく大きな機械の音がする。床はコンクリートみたい。真っ暗

で、ちょっと寒い)

テレパシーが使えるその誰かは、母上と言うからには昨日紹介された「子供」の内の誰かだろうか？

(母上、周りを見渡してみても、何か明かりは無いですか？)

(あ、非常口って灯りは見える)

(どのような所についているか、教えて下さい)

恵瑠が非常口の表示の見える方向に向かって、歩き始めていた頃、魔王に連絡が入った。

(セキュリティシステムで、地下の発電所を探りますと、生体反応があります。非常口に向かって移動してますから、母上の可能性が高いようです)

それだけ聞けば、居ても立っても居られなかった。

(私は地下発電所に向かう)

恵瑠は出鱈目にボタンを叩く内に、エレベーターを各階停止モードに勝手に切り替えてしまったらしい。発電所の隣は、夜間でも少し明かりのともっている地下駐車場だ。そこから発電所に迷い込んだものか？

地下三階から五階は地下駐車場だ。地下五階の約三分の一が駐車場で、後は発電所だ。あんな格好を誰かに見せるわけに行かない……恵瑠が無事とハッキリすると、次に気になるのはその事だった。魔王は夜目が利く。暗闇でも明るい場所と変わり無く見渡せるのだ。

エレベーターが地下五階に止まり、彼は走った。地下駐車場を横切り、発電所に入る。

「アリエル！どこだ、アリエル！」

「ここ、ここです！」

完全に正気に戻ったらしい恵瑠を見つけや否や、抱きしめた。

「そんな格好を人に見られたら、どうするんだ」

「あつ」

「君は全く、考え無しだな。言いたい事は色々あるが、まずは戻るよ」

自分の着ていたスーツのジャケットで恵瑠をくるむと、肩に抱えあげ、歩き始める。

「私は夜中にネット会議に出ると言っただが、聞いていなかったのか？」

珍しく自分の婚約者が怒っているのを感じて、恵瑠は「ごめんなさい、本当にごめんなさい」と繰り返す。

（無事にアリエルを見つけた。今から部屋に連れ帰るよ。みんな、協力に感謝する）

魔王のほっと安堵した気分は、たちまち皆に伝わった。

（良かったです！）

（何か訳が有るのでしょうか、余り怒らないでいてあげて下さい）

後は無言で恵瑠を抱えたまま、発電所を出て駐車場に戻りエレベーターに乗る。部屋に辿り着くと

「怪我は無いか？」と尋ねる。気遣わしげに体に出来た痣やすり傷を確認して、大した事が無いと確認できると、魔王は表情を少し和らげた。

「酷い格好だな。風呂に入り直した」

もう、夜が明け始めている。浴室の窓から明け行くビル街が見渡せる。

「一体、何がどうなったらあんな馬鹿な事になったのか、説明して

欲しいものだ」

「ベッドで気がついたら隣に治さんが居なくて……そうしたら、何だか頭に血が上ってしまって、治さんを探さなきゃ、また、離れちゃったらどうしようって、思ってしまったんです」

「ネット会議の話は、忘れたのかい？」

「さっき言われて、ああ、そう言えばその話を聞いていたなっと思っただんですが、あの時は全然頭に思い浮かばなくて何と言うかその……」

「パニック状態になった？」

「そう、そうなんです。ものすごく焦って、エレベーターに乗ったのは覚えてるんですけど、気がつくと、あそこに居たんです」

「エレベーターが各階停止モードに切り替わっていたよ。ある特定のボタンを七回続けて叩くと切り替わる構造なんだが、それをアリエルが知るはずも無いから、よっぽどボタンを乱打したんだろう。」

全部の階で止まって、一番下の地下五階まで降りたと言う事のようにだな。私を探してあんな所まで行っただけなのかな？」

「いつも隣に治さんが居るって思い込んでいたのに、居なかったから焦ってしまったんです。落ち着いて話を思い出せば良かったのに」「皆を起こして大騒ぎになったのだよ。セキュリティセンターの連中にも迷惑をかけた」

「ごめんなさい……」

恵瑠は涙をポロポロ零す。

「話をちゃんと聞いていないお馬鹿さんで、呆れたよ」

酷く悲しげに泣く姿を彼は無視できなかった。自分の言葉が彼女に与える大きさを自覚しないでは無かったのだ。そもそも、昨夜アルコールに酔った状態になる前に、きちんとネット会議の事を伝えたとさえ言えば怪しいものだった。既に酒に酔い始めていた彼女には、正しく自分の言葉が伝わっていなかった可能性が大きい。ならば、彼の配慮不足も原因の一つなのだ。

「もう、泣くのをやめなさい」

膝に乗せて、涙をぬぐってやる。啄ばむ様なキスを二つ三つ落とすと、漸く涙が止まった。

「酔っ払うとアリエルは情熱的で可愛らしくなるから、つい多目にワインを勧めたのが良くなかったんだろ。デザートにもしつかりマラスキーノが使ってたしね。私もいけなかったな」

風呂を出てから、一時間ばかり一緒にベッドで寝なおした。

目覚めてすぐ携帯のメールチェックを始めた恵瑠が「よかった」と言うので、理由を彼が尋ねると、午前中の講義が休講になったと言う話だった。昨日は大急ぎで家に帰りこのオフィスに来たので、夕方に学内の掲示板に張り出された休講の知らせを見落としたのではないかと氣遣った翼や剣道部の連中が、メールで知らせてくれたらしい。

「今日は剣道部の練習を休まないか？午後のお茶の時間より前に家に帰り着けるはずだよ」

二人は朝食も昼食も一緒に食べた。仕事は順調に片付き、その間恵瑠は体を休めたり、パソコンで調べ物をしたりして過ごした。

「厄介ごとは一応片付いた。では、家に帰ろうか。大西がオレンジのタルトを焼いたらしい。横島が準備万端整えて待っていてくれるだろう」

魔王は最愛の彼女と手を繋いで部屋を出た。

38 騒動（後書き）

黄色いバナナをポちっとお願ひします。更新の励みです。

39 お仕置きについて

大西さんのオレングタルトは素晴らしく美味しかった。クッキーも、それに小さなクリームチーズとハーブのサンドイッチも、どれも香りの良い紅茶との相性が良くて、何だか夢中で食べてしまう。

治さんは……あれから何事も無かったようなもの静かな表情だが、つい今しがた、何か言いかけてやめたみたいだ。横島さんは治さんの顔を、いつもよりチラッと見る回数が多いように思う。

まったくもってどうなっちゃったのか、自分でも呆れたのだが、治さんがいないとパニック状態になるほど、私は治さんに頼りきりなんだなと初めて自覚した。

お酒に弱い私に飲ませすぎたって、治さんは言ったけれど、無理強いされたわけじゃないんだから自分でペースをちゃんと考えればよかったのだ。ちょっと口当たりが良いからとワインをがぶ飲みしすぎたみたい。

何と言うか、子供だな、馬鹿だなんて思う。

「反省なさっているようですよ。お仕置きはどうぞ手加減して差し上げて下さい」

皿やお菓子を盛っていた三段重ねのスタンドを手際良く片付けて、淹れなおしたお茶を注いだかと思うと、横島さんはそんな事を言い置いて部屋を出てしまった。

「横島はお仕置きが必要だと思っているようだ。さて、どうしたものかな」

治さんはちょっと意地の悪そうな声で言った。でも、本当に今日の未明の大騒ぎは私自身が引き起こしたもので、治さんにも会社の

皆さんにも御迷惑をかけた。

「本当に、ごめんなさい」

「こっちに来なさい」

私は言われるままに治さんの前に立った。

「美人の大学生を膝に抱え上げてお尻をぶつのはマニアックな楽しみだろうし、ふさわしいお仕置きなんて思いつかない。お仕置きにはならないが、そうだな……仕事を手伝って貰うか」

お中元の習慣は治さんの企業グループでは、とっくの昔に廃止しているけれど、他所の企業からまだ色々な物が届くので、そうした相手には送らないわけには行かない。対外的に色々差しさわりの無いものを選んで送っては来たが、できれば費用対効果の高いものが好ましい。秘書さんたちと相談して、企業名で送るものと治さんの名前で送るものの選定をしてちゃんと滞りなく届くように手配をすること。それが、手伝うお仕事の内容だった。

「秘書達は本来の業務の方で、色々今年は有るから、アリエルはちゃんと補佐役に回って手助けすること。きちんと仕事が出来たら、ご褒美も考えるよ」

これから、たびたびあのビルに通う事になりそうだ。

「アリエルには正面の総合受付を通過しなくても駐車場から五十階以上に行ける様に、エレベーターに入力できるパスワードを教えておこう。裏の通用口の守衛室前のパネルでも入力できるよ。秘書達はここを主に使うから、アリエルも大学の帰りに寄る時は通用口經由が良いかな」

総合受付は「私の正体も子供らとの絆も、無論アリエルの事も何も知らない些か自意識過剰なお嬢さんたち」の縄張りだから、刺激したくないそうだ。

「五十階以上に出入りする若い女性と言うだけで、噂に上りやすい」
ので、セキユリティー上好きくない。「天使、特にミカエル一派
の動向が掴めない今、慎重にしなくては」とも言われた。

「社会勉強になりますね」

「結婚したら、財界関係の人間とも会う機会が増えるから業界の事
情や人間関係についても予備知識が有るほうが良いね。ま、修行だ
な。学生としての本分をわきまえて、それぞれ支障が出ないように
自分でちゃんとスケジュール管理もしなさい」

夕食の後、入浴の時に治さんは、お湯につかって何か考え込んで
いる。

「どうしたんですか？」

「いや、女性のお尻をぶつのが好きな男の気持ちも分らないでは無
いなと思ったのさ」

大きな手でお尻を撫で上げられると、奇妙な感覚が這い登ってき
て、ドキドキする。

「アリエルの尻は叩くと音が響きそうだ……ふっ、本当に叩いたり
はしないよ」

何だろう、酷く恥ずかしく感じた。

「子供のころ、親御さんにはどんな風に怒られた？それとも怒られ
た事なんて無いかい？」

「遊んでいたおもちゃを出しっぱなしで誘いに来た友達と遊びに出
たら、戻った時にはそのおもちゃが全部捨てられちゃってました」

「それはまた、随分と厳しいな。私にはとても出来そうにないよ…

…それにしても、今朝は驚かされた。私はもう、君と離れては生き
てゆけないのだと思い知らされたよ。お願いだから、もっと用心深
くなくなっておくれ。闇雲に走り出す前に、落ち着いて考えて欲しい」

抱きしめられて、治さんの体が震えているのを感じた。どれほど
心配をかけたのか、良く分った。

「はい。もっと、ちゃんと考えて動くようにします」

「それにしても、一つ悪い事を思い浮かべると、次から次へと縁起でもない事ばかり思いつくものだと、自分でも感心したよ。どうやら、私もパニック状態に陥っていたようだ」

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

「謝って欲しいわけではないんだ。ただ、君が居なければ私も生きてはおれないのだと言う事を、君にも十分認識して欲しい」

そう言うのと、治さんは幾つもの小さなキスを私の上に落としたりした。

ベッドに入ると、私達は手を繋いだ。

「横島にお仕置きといわれた時、私はローマ帝国の貴族プリムス・クラウディウスだった頃の事を真っ先に思いだした。あのころの私は、自分の前世を今のように明確に認識していなかったし、女奴隷として売られていたアリエルを手に入れても、それが前世の妻だったとは理解していなかった」

「横島さんは、前世でのいきさつを知っていたのですか？」

「横島、当時は普通にサリエルと呼んでいたが、彼だけが私とアリエルの因縁について理解していたのだ」

「いつから治さんは自分の前世を思い返せるようになったんですか」

「私が君に与えた酷いお仕置きが、引き金になったのだよ」

そう言うのと、治さんは私を抱きしめて語り始めた。

「当時の貴族は、いや、貴族でなくても奴隷の主は、命令に従わない奴隷は鞭打つのが普通だった。私は奴隷だったアリエルに賓客の身の回りの世話をするよう命じた事があった。そうした場合、女奴隷は客に抱かれても拒否は出来ない。何時も従順なアリエルが私の命令に従わなかったのは初めての事だったから、驚き呆れ、些か怒りも感じた。我が家の賓客に美しく気の利いた世話を付けたいと思うのは、面目を重んずる貴族としては当然の事だったからだ」

昔々の私達の事を、どこか御伽噺でも聞くような気分で、私は聞いていた。でも、治さんは違うのかもしれない。全ての記憶を失わないと言う事は、嬉しい事も辛い事も全部鮮明に覚えていると言う事だろう。それは、とても大変な事かもしれない。

「私は裸にして壁に繋いだアリエルを、鞭で三度打った。鞭は本格的な拷問用で、随分つらいはずだった。思い切り打てば、男の奴隷でも命を落としかねない。その時、息も絶え絶えな中で、私以外の男に抱かれるのは嫌だと言う事をアリエルは口にしたのだ。私は迂闊な事に、その可能性については丸で考えていなかった……だから、本当にすまない事をしたと、心から後悔した。そして奴隷とはいえ、これほど美しい女が自分を本気で愛してくれていると分って酷くうれしかった」

今の私の姿は、その女奴隷と似ているのだろうか、違うのだろうか？ 知りたいような、知りたくないような少し複雑な気分になる。

「それから、私はアリエルを心から愛するようになり、朝も夜も共に過ごすようになった。次第に私は前世の記憶を取り戻し、君がいかに自分にとって大切な存在か改めて知った。三本の鞭打ちの跡は深く刻まれてしまって、白く美しい尻を見る度すまないと思う気持ちと、それ故に知る事のできた真実に感謝する気持ちを毎日感じていたのだよ」

「心から愛するものを、本当に罰する事など出来はしない。罰したら罰した分の痛みは己に帰るのだと私は知っている。だから、お仕置きなんて、そもそも無理な話だ」

少し長めのキスをした後、治さんは、クスツと笑った。

「でもね、正直な話、しみ一つ無いアリエルの綺麗な尻を思い切り

平手打ちしたいと思っている、と言ったら呆れるかい？」

酷く恥ずかしく隠微に感じられたけれど、その言葉が嫌ではないというのはどうしたものか、私は自分自身の感情が良く理解できずにいた。

39 お仕置きについて（後書き）

黄色いバナナをポチッとお願ひします。更新の励みです。

40 梅雨入り前（前書き）

海老は冬が旬のものが多いようですが、淡水の川海老は夏が旬みた
いですよ。

40 梅雨入り前

「お中元かあ」

私が難しい顔をしてごろんとキャンパスの芝生の上で転がっていると、翼が「え？何？」と聞き返した。沖縄は梅雨に入ったらしいが、このあたりはまだのようで、連日良い天気だ。午前も午後も急に講義が休みになった。こんな事は珍しい。夕方に剣道の練習が始まるまで特に予定も無い。

「お中元！治さんの会社と、治さん個人のお中元について、悩んだの」

「そんなの、会社の人の仕事じゃない？秘書とか」

「そうなんだけどね……」

そこで、あの日の未明の行方不明事件について、掻い摘んで翼に説明した。

「へえええ、地下に発電所なんてあるんだ」

翼の反応ポイントは何かズレている気もする。

「確かに財界の人の人間関係とか、会社同士の付き合いとか知る事の出来る良い機会かもね。もうさ財界の大立者の奥さんになる事が確定なんだから、そのつもりで色々勉強しといった方がよさそう」

「特に何が必要なのかな」

「私の素人考えじゃ、ますます国際化するビジネス社会に対応できる語学力とか？テーブルマナーとか、ダンスとか？そんなもの？」

翼の言った程度のことは私も意識はしていて、夏休みから英語とフランス語の特訓をする予定は立てていた。テーブルマナーは治さんと言う完璧なマナーを身に着けた相手と一緒に毎日食事しているので、この所飛躍的にレベルアップできたと自分では思っているのだが……

「ま、さ、下手の考え休むに似たりって言うじゃない。講義が終わったら、さつさと会社に行って、色々秘書さんたちに教えてもらう方が話は早いんじゃない？」

確かに、それは尤もだと感じた。悪いけれど剣道の稽古は休んでさつさと治さんの居るオフィスビルに向かう事にする。

「来週はさ、例の七つの大学の対抗戦だけど会場はうちの大学だし、男子は団体戦が有るけど、女子は個人戦だけだからさ、いいんじゃないの？聞かれたらフィアンの御仕事のお手伝いらしいよって言うて置くわ」と言う翼の心遣いに甘える事にした。

「まずは横島さんにメールっと」

直接オフィスに行っても良いか、確認を取る。すぐに返事があつて、地下鉄の駅が一番出口すぐの守衛室経由で通用口から入るようにとの事だった。総合受付のお姉さん達は口が固いようで、そうでも無い人が居るので近寄らない方が無難だと言う話は秘書の皆さんから聞いている。治さんに言わせれば「自意識過剰なお嬢さん方」らしい。

女の子同士で仲良くなるのは私は得意な方だと思うけれど……あれだけの大騒ぎの後だから言われた通りにしなければ、いけないんだろうと思う。安全対策上の配慮も有るんだろうから。

地下鉄を降りて、守衛室前のパネルでパスワードを入力して、五十階以上専用のエレベーターを作動させる。それに乗って降りたら、また受付に小沢さんが居た。

「横島さんから連絡を貰いました。さ、こちらへどうぞ」

この前、通過した大部屋を通って、会長室とは違う部屋に出た。社長室？

「社長、白羽恵瑠様をお連れしました」

そこには、ちょっといかついけれどもなかなかのナイスガイと言う風情の白髪の男性が居た。そう言えば、経済新聞に写真が出ていたかな……

「社長を勤めさせていただいております、大河亜門です。私はルシファーと同じ時期に魔界に参りました」と言う事は、堕天使さん？「社長は会長と境遇が似てらっしゃいます。元は神でいらしたのですよ。ルシファー様とは古くからの御友達で、魔界でも皆の信頼と尊敬を得ておいでの方です」

「会長はどちらかと言えば研究開発と資源確保と言った方面を担当されて、私は販売・流通・広報と言った方面を担当してます。御中元はまあ、会社の付き合いと言うか他社との交流に関わる部分なので、私についている秘書たちと話を詰めていただいた方が良かろうと思います」

「皆、貴方の子供・あるいは孫に当たるものばかりです」

「ま、孫ですか？」

そこに真紅のスーツに身を包んだ三十代かと思われる女性が立っている。

「こちらは富原麗子、富原創一の娘で、ベルゼバブの娘・ラウムです。つまり貴方の孫と言う訳です。私同様ルシファーの盟友です。財務に精通し、財界の人間関係についても熟知しておりますので、色々と手助け出来るでしょう」

この、いかにも頭脳明晰っていう感じの女性が孫？何だか戸惑ってしまう。

「本社社長室所属・第一秘書・富原麗子でございます。会長室の富原信一郎は兄です。マンモンは私ラウムの叔父なのですが。どうもややこしいですね」

にこやかで友好的なので、ホッとする。

「他のお子様方は母上とお呼びしますが、私が御祖母様と申し上げるのはためられますので、恵瑠様あるいはアリエル様と御呼び致しますね」と言われた。確かに、御祖母様なんてピンと来ない。母上だってピンと来ないが。

本当は、様つきも苦手なので普段は「恵瑠さん」にしてもらう。

まずはこの五年間で、どこ会社、あるいは個人が何を贈って来たか、推定金額と品目を纏めた。実はワードでしか表を作った事になかったので、エクセルの使い方を覚えられたのは良かった。

「そうそう、良い感じですよ」

麗子さんは教え方がうまい。

昼食は社内食堂の一番人気だという『日替わりA定食』を部屋まで運んでもらって食べた。

「ご飯に雑穀や豆が入ってるんですね。おいしい！この魚も私好きです」

ちよつとはしゃぎすぎて、幼稚だったかもしれない。でも、麗子さんは優しい。

「推定金額って、どうやって出すんですか？」

「デパート・スーパーなどの流通部門でギフトの取り扱いをしてきた人や、その他各社のギフト関連に詳しい人物を百人ばかりピックアップして、それぞれに商品名と画像から価格をざっと割り出してもらいます。百円未満の差は同一とみなして、大きく評価が分かれたものだけまた、ギフト関連の専門家十人ばかりに調べてもらいます。まあ、作家の一点ものなんかは評価不能ですけどね」

ある会社の贈ってくるお中元の金額が下がる傾向にあったら、要注意らしい。

「私達との縁を切ろうと考えているか、業績不振か、大体二つに一つですから」

なるほど……お中元も色々デリケートな問題を含んでいるんだなと納得した。

「そうした兆候は、小さな内から早めに把握しておくに越した事は無いですからね」

多分、日本的な習慣をこんな風に分析してデーターを蓄積している会社はほとんどないだろうと言う話だった。

「こんな風にデーター化する事を考えたのって、誰ですか？」

「会長です」

私はまた、治さんの新しい一面を見たような気がした。

仕事が終わると、小沢さんが「会長がお待ちです」と呼びに来た。会長室で、まだ治さんはPCに向かつて海外とのメールのやり取りを続けていたようだったけれど、「もうすぐ終わる。一緒に飯を食おう。待っていてくれ」と言われた。

夕食は中華風だった。そういえば、中華料理って久しぶりだ。しつこいのは嫌だけど、味にうるさい治さんが選ぶんだから、きっとおいしいのだと思う。お酒は冷えたビールと紹興酒。

「やっぱり、夏になって来るとビールがうまいね」って治さんが言う。本当は良く分ってないかもしれないけれど、このビールは何だか美味しい。

最初に冷たい前菜が四種類出た。蛸と茗荷やベビーリーフとあわせた和え物が爽やかだった。冷たいナスのゴマソース和えとか、クラゲとか豚肉のゼリー寄せも面白かった。

シウマイが三種類。金魚みたいな、綺麗な緑の、ウサギみたいな、どれも綺麗で美味しい。

「旬の川海老を唐揚げにして食いたかったから、中心にしてメニューを組んでもらった」それで、四国から空輸されてきたと言う清流

に棲息する川海老は、殻もカリッと香ばしくて美味しい。

「ちゃんと今夜は傍に居るから飲んでも大丈夫」とすすめられちゃうと、ついつい飲んでしまう。今日の紹興酒は五十年ものだそうだが、普通は三年程度のものらしいから、特別なんだろう。

「うまいだろ？」と聞かれると、美味しいとつい答えてしまうから、また注がれてしまう。

フカひれと冬瓜のひんやりしたスープも美味しかった。何これ、中華風のパイ！美味しい！

何だか美味しいゼリーにきんもくせいの香りのシロップがかかっているのも好きだった。あは、気がついたら全部すっかり食べて、結構お酒も飲んじやったみたい。

それにしても、「アリエルは私以外の男と一緒に酒を飲んじや駄目だよ。どうも危なっかしい」って言われてしまうのは、何だか情けない。あれ？何だか、ふわふわしてる気がする。

「紹興酒はアルコール度数が高いからね、その辺も考えて飲んだ方がよいよ」

良いよって、もう、手遅れです、治さん……

40 梅雨入り前（後書き）

黄色いバナナをぽちっとお願ひします。更新の励みです。

41 酔っ払い娘の躰け方について

やれやれ、また飲ませすぎてしまったか。

今日は北京の釣魚台で国賓を迎えての晩餐会に出されたと言う五十年物の紹興酒が手に入ったし、四国の清流で捕まえた川海老が空輸されたので、共に楽しみにしていた。アリエルにも美味しい味を学習させるのは悪くないと思うのだが、飲むと色っぽく崩れる。非常に無防備になり、自分から性的な話題を振るようになる。まあ、楽しいと言えば楽しいが、どこで飲んでもこの調子では、無防備極まり無い。かなり飲んでも吐いたり、二日酔いと言う事は無いようなので、酒が合わない体質と言うわけでもないようだ。そもそも良い酒は二日酔いを興しにくいものだが、それでも本当に酒に弱ければ酒をうまいとも感じられないだろう。

「もう手遅れです」などと言って、ニコニコニコしているのは可愛い。普段はねだらないキスを自分からねだるのも可愛い。風呂に入るときも私の服を脱がせようとするし、まあ、実際はベルト一つうまく外せはしないが、下着越しに頬ずりされるのも悪くない。私のそれをいきなり口に含むのは年頃の娘としてどうかとも思うが、頑張っている様子を見るのは嫌いじゃない。風呂に入ったら入ったで、私の乳首を猫の子みたいに舐めるのも新鮮だ。だが……私が居ない時、酒に酔うとどうなってしまうのか、酷く気がかりだ。

外でアリエルが酒を飲んだのは、私の知る限り剣道部の新入生歓迎会だけだ。あの時は家に帰り着いた直後に「抱いて下さい」と言われた。他の人間にはその様子は見せていないわけだ。私と二人きりかどうかで乱れっぷりに差があるのだろうか？あの歓迎会の際は、たいした量は飲んでないから、他人の目が有る所では平静だったの

かもしれない。

折角だから……取り敢えずは可愛く乱れたアリエルを堪能させてもらった。その、何と言うか、やはり破壊的に愛らしい。「いっばい、ちょうだい」とか「すきすきすき！だいすき」とか甘えた声で言われてしまうと私自身、ついつい行為にのめり込んでしまう。大体何かにのめり込む事自体、めったに無い新鮮な体験で、自分で自分の感情の激しさに驚いてしまう。

事が果ててよくよく見れば、盛大にキスマークを付けてしまっている。やはり私も酔っ払ったアリエルの奔放さにつられてしまうのだ。首に付けたのはまずかった。ハイネックの首周りが隠れる服を着て行くように進めよう。一方で私の胸にはアリエルの付けたキスマークが有る。ちゃんと付けたのは初めてではないだろうか？これはこれで、なかなか嬉しい。

正直な話、どうもまだ私は収まりがつかないが、アリエルは完全に熟睡している。このまま眠るとどうも……いや、それでも構わないかと思ひ直して寝てしまう事にした。

目覚めると時刻は五時三十分少々と言う所だった。朝風呂に入れるように浴槽に湯を張り直す。気持ちよさそうに眠っているアリエルの体を改めて朝日の中で鑑賞していると、やはりそれだけではすまなくて、ついつい……朝からと言うのも悪くは無いと思うが、まだ平日だから程々にしよう。

「あ？治さん？」声がまだ眠そうだ。これはこれで実に愛らしい。「おはよう。眠かったらまだ無理に起きなくて良いよ。すぐ終わらせるし。後は朝風呂に入っさっぱりさせようか」

良い所を摩りあげてやると、腰にぐつと来るような艶めいた喘ぎ

声が漏れた。

事が果てると、ようやく目が覚めたらしい。仲良く朝風呂と言うのは、初めてのはずだ。大阪では朝はシャワーだったし、この前の温泉は私だけが朝風呂に入ったのだし……何と言つか、親密な雰囲気嬉しい。

互いにバスローブだけのしどけない姿で、スモークサーモンのベールサンドとスクランブルエッグとグリーンサラダとオレンジジュースと言う朝食を食べる。酔っ払った割にはアリエルは朝から食欲も十分にあるようだ。

「キスマークを付けあいっこしたね」と言うと、アリエルは私の胸のキスマークを見て喜んだ。

「わあ、ちゃんと付きましたね、マーク。何だか嬉しい」

「私も嬉しかったから、いつもより沢山つけてしまった。済まないが、首周りが隠れる服を着てもらえないだろうか？」

「剣道の練習の時、見られちゃいそうですね」

「早めに邸に戻るから、練習はもう一日休んだら？週末の試合対策は特に必要とも思えないが」

「面をつけていれば見えないし、私にマークをつけるのは治さんだつて剣道部員は皆知ってますから。練習は早めに切り上げて来ます。お帰りは何時ごろですか？」

「六時ごろかな」

「じゃあ、きつと大丈夫です」

剣道部員は皆知つていと言われてしまうと、気恥ずかしいものだ。それはそうにしても、地下鉄にも乗るし講義も有るから、ハイネックで七分袖のワンピースを着せた。たっぷりレース使いのパニエを下にはくと、華やかで愛らしい雰囲気だ。

「体中にキスマークが有る様には見えないな」

「治さんもキスマークが付いているようには見えません」

私は夏用のスーツに、アリエルが選んだダークブルーの地に幾何学模様状に細かなハートが織り込まれたシルクタイをする。「ハートがいっぱいなのにシック」という理由で選んだらしいが、これならビジネスの場でも違和感が無い。

アリエルは機嫌良く大学に向かい、私は仕事に入った。

サリエルと言うか横島と、あの酔いつぶりについて話したのだが、こんな提案をされた。

「信頼できる方を御夕食に招かれたらいかがですか？そこで皆さんでお酒を召し上がってアリエル様に適度に緊張していただくのです」

「ならば、アリエルが知り合って日の浅い者が良いかな」

「そのほうが効果が高そうです」

「アモンとラウムのペアにしておこう」

アモンこと社長の大河亜門と富原麗子は、ああ見えてプライベートでもカップルなのだ。事実婚と言うべきか。社内ですれを知るものは五十階以上に入出入りできるメンバーでも余り居ない。人類としての見た目の年の差が二十五歳ほどもある。アモンは今まで特定の相手を作った事も結婚をした事も無いので、ラウムが結婚したいと言いつたままに時間が過ぎたと言う事らしい。ラウムはラウムで、秘密の関係の方が気楽だしスリリングだと思っているようなのだ。

父親のベルゼバブは無論承知していて「結婚して孫でも作ってくれた方が自分としては嬉しい」と言っている。だがアモンはベルゼバブから見て言わば格上の神であった存在だ。説教も出来ない。

アモンとラウムの場合、人間としての肉体を離れてから共に魔界

で暮らし、魔族としての子を成す事だつて出来るので、人間である内から結婚する必要性を感じないかもしれない。私とアリエルのように人間である子供をなす事が必要な者とは事情も違うのだ。

「人としての孫が欲しいのですがねえ。魔界にのみ存在する者は、どうも自我のバランスが宜しくないと思うのです」

バルベリトの言いたい事も分るが、アモンとラウム程の高次元の魔族が互いに納得しているのならば、他の者が出る幕は無い。それがたとえ親であろうとも。

話が決まれば、後は早い。アモンとラウムを自宅での夕食に招待すると即座に了承された。二人とも「お邸での御食事に招いていただくのは初めてです」と喜んでくれた。「酔っ払い娘の躰けに関して知恵を借りたい」と言うのと面白がつてくれたみたいだ。

「アリエル様がお酒を召し上がるスピードを、微調整する必要があるですね」とラウムに言われたが、「酔ったか酔わないか微妙な段階」を保つて観察できるようにしたほうが良いと言うのは、確かに正しいかもしれない。

「味わいの違う酒を複数用意して、ゆっくり一つ一つ確かめて飲むようにしたら」と言うアモンの提案を取り入れて、前菜・スープ・肉・魚・デザートの基本的な構成のフランス料理のコースにシャンパンと三種類のワインを出す事にした。

サリエルやニスロクも、アモンの提案は試す価値が有ると感じたようだ。特に料理長の大西と言うかニスロクが「お客さま方にも御満足いただけるように頑張ります」と言ってくれたので楽しみた。アリエルにも今夜は自宅に二人を招待した事をメールで伝えた。

うまい夕食のあてが出来ないと、どうも仕事が捗らない。

「旦那様は昔から、そうでいらつしやいましたね」

サリエルに言われるまで自覚はなかったが、いつの時代も私はそのように食い意地が張っていたようだ。何はともあれ、仕事の能率が上がるのは悪くないだろう。

42 恵瑠大いに奮戦する

アモンとラウムを招いての食事は和気藹々としたものだった。アリエルが楽しめるように余りテーブルマナーが難しく無いメニューを選んだ。酒のリストや料理の素材はアモンとラウムの好みを考慮してある。

まずはシャンペンで乾杯。

前菜はチーズ風味のシュー生地菓子・グジェールと詰め物をしたプチトマト、アボカドとスモークサーモンのカクテルと言った所。スープはこの時期らしく冷んやり舌に心地よいヴィシソワーズ。魚料理は旬の赤舌平目の骨を外した切り身をソテーしてハーブ風味のソースを敷いてある。

肉料理は子羊のショートロインで柔らかく臭みも無く実に良い味だ。更にチーズ盛り合わせ・ケーキとアイスクリームと続く。

アリエルは最初はラウムのセクシーダイナマイトボディに圧倒されていたようだ。上半身は露出度が非常に高いホルターネックでマーメイドラインの真紅のドレスは迫力がある。首のチョーカーには見事な大粒のルビーが輝いている。どうやらアモンのプレゼントらしい。ともかく、フェロモンが凄まじい。次にアモンの甘いムードにも驚いたようだ。後から聞いてみると「大人のラブラブカップルは迫力が違う」と思ったらしい。

皆、ゆつくりと会話しながらそれぞれの酒、それぞれの料理を楽しんだ。アリエルはほろ酔いだが崩れなかった。客の前だという事を十分意識しているようだ。最後のコーヒーまでにこやかに節度ある態度を保つ事ができた。

「やはり御二人きりだと、酒のピッチが早すぎるのかも知れません

よ。まだ未成年でいらつしやるのだし、徐々になれて行かれたら恐らく大丈夫でしょう」

アモンの言う通りならあまり心配は無いかもしれないが、まだしばらくは外で飲ませるのは安心できない。この週末は七つの大学の対抗戦で、試合の後は全国から集った学生同士の親睦会がある。やはり用心に越した事はないだろう。私も理由を付けて顔を出すつもりだ。

我が家のリムジンで送らせたが、まだ今夜は夜中にネット会議の予定があるらしい。二人は仲良く本社に戻って行った。私とアリエルが寝泊りするスペースとほぼ同じ物を、社長室の続きに用意してあるから、まあ、二人で宜しく過ごす事は出来る。あのカップルのすごい所は、長い付き合いになってもビジネスとプライベートがきちんと区別されていると言う点だ。

「秘密のオフィスラブは、燃えますよ」とアモンが言うのも分る気がする。まあ、私の性分には合わないが、二人が良ければそれで良いのだ。

二人の姿が見えなくなつて、部屋に戻った途端、アリエルの態度が豹変した。他人の目の有無が鍵らしい。私の胸に飛び込んできてハスキーな甘えた声で話し始める。

「早く、一緒にお風呂に入りましょう」

酷く上機嫌で鼻歌交じりだ。私としても一向に異存は無いので、全てアリエルの望みどおりにして、その夜は過ごした。

土曜日は北は北海道から南は九州までの七つの友好関係に有る大学の剣道部員が集つて、試合が行われた。試合結果は予想通り男子の団体戦も個人戦も惨憺たるものだった。カメラマン役を引き受けた身としては、もう少し見せ場が欲しかったが、所詮無理な話のよ

うだ。

これが女子の個人戦となると、アリエルと翼君が他を圧倒する強さで、最後の決勝戦はアリエルがまた、翼君に一本勝ちした。これもまた予想通りだ。自分の婚約者の写真ばかり撮ると言われるのも不都合なので、最後に面を決めた一枚以外は、色々な学生の写真を入れるように気を使った。

さて、問題は飲み会だ。全員の飲み食いの代金を賄えるカンパをしてから、アリエルには余り酒をすすめないで欲しいと部長や主将に頼んでおいた。

「白羽さん、お酒駄目ですか？」

「駄目と言うより、弱いようだ」

「酔っ払っても愉しそっただけだなあ」

「馬飼野さんとしては、フィアンセが他の男の前でどうかなっちゃ御不快ですよね」

剣道は弱いくせに、こう言う読みだけは鋭い。まあ、そんな所だと適当に言い繕ったが……

酒は学生が飲むような店だから、ビール・発泡酒・チューハイ辺りが主力だった。アリエルは座をしらせせない範囲で最低限の酒量で乗り切るように、と言った私の注意は一応守っているように見える。取っ組み合いやジャンケンして飲み比べなどと言う馬鹿な事が横行していた一昔前より、今の学生は格段に大人しくて、行儀が良い。

私も各地から集まったOBや顧問・師範と言った人たちと、落着いて剣道談義が出来た。

すると、どうしたのだろう？店の出口に近い方向が騒がしい。

「ちょっと貴方達、この人達は嫌だと言っているのよ。いい加減付きまとうのはよしなさい！」

珍しい。アリエルが怒っている。

「ありゃあ、綺麗なお姉ちゃん！威勢が良いねえ。あんたがその子の代わりをしてくれるんなら、それでも良いぜ」

見るからに柄の悪い若者だ。多少は腕に覚えが有るのだろう。総勢で五人のようだ。おや？あの女の子三人組は……うちの会社の総合受付の子ではなかるうか？一番華やかな顔立ちの子が絡まれていたようだ。まずい、実にまずい。そこで翼君にテレパシーを送った（すまない、あの女の子三人は私の会社の子だ。身バレしたくないので、ちょっとアリエルを手伝ってやってくれないだろうか）

直に翼君は女の子たちを女子部員の中に座らせ、アリエルと背中合わせの位置に立った。

「お相手しますから、外に出ましょうか」

酷くアリエルは怒っている。男達に囲まれる格好で外に出た。

（アリエル！相手はナイフ持ちだぞ。気をつけなさい）

（分かりました！気をつけます）

卑怯な男達のように心配だ。割り箸を一掴み持って、私は暗がりに戻った。

ナイフを抜こうとした卑怯者の眼球めがけて、割り箸を投げた。すると命中したようで、肥満体のそいつが地響きを立てて倒れると、それを合図にアリエルと翼君が手刀を打ち込んで他の連中を気絶させた。

直に警察を呼ぶと、やって来たのはうちの大学の顧問が毎週教えている巡査が三人だった。

「こいつらヤクの売人です。まあ、小者ですが。かたぎのOLさんや大学のお嬢さん方に迷惑をかけるとは許せません。しかもナイフ

を使うとは！お任せ下さい、きつく締め上げてやります」

こんな風に顧問に説明していた。

（その三人はうちの会社の総合受付の子達だ。お礼は断りきれなかったら、部の方にお願いますとでも言っておきなさい。住所は内緒だよ）

アリエルは「是非お礼を」と食い下がる三人をどうにか遣り過ごした。やれやれ。

「どうやら、連中は覚せい剤だけでなく、不特定多数の女性に怪しからん事をしてきたみたいですね。女子トイレを出た所で治さんの会社の子に絡んでいた男が色々不愉快な連想をしていました」

「アジトが有るみたいです。うんと締め上げて欲しいですね」

翼君も幾つか情報を読み取ったようだ。

早速、携帯から警察に匿名で情報提供を出来るサイトにアクセスして、奴らのアジトと分る限りの犯罪歴を書き込んだ。当分、娑婆に出てきて欲しく無いものだ。念には念を入れて、この件に関しては、うちの警備会社から詳細なデータを改めて送った。覚せい剤の取引で外国からの出稼ぎ組ともめて、一人殺していたようだ。しかも、婦女暴行事件も相当な件数起こしている可能性が高かった。奴らの娑婆への復帰は当分無いだろう。

どうやらあの五人組は、どこで自分達の殺人や婦女暴行事件がばれたのか、まるで見当がつかないで大いに戸惑っているようだ。ざまあ見ろと言ってやりたい。

それは良いのだが……問題は総合受付のお嬢さん達だ。アリエルは中元の件で、まだしばらくオフィスに通ってもらうつもりだが、一度、お嬢さんの一人に遭遇して後を付けられそうになったらいい。二駅先でわざと降りて撒いたと言うが、危なっかしい話だ。

「やっぱり当分は一度帰宅して、車で送ってもらいなさい」

「地下鉄は確かに危険かもしれませんがね」

「あの子達は良い子なんだろうが、口が軽めでどうも困る」

「業務命令とか守秘義務って事で、厳重に言えば大丈夫ではないです
すか？」

「内部の人間同士で、色々うわさするのだよ」

「だから、あの三人だけの秘密って事にすればどうでしょう？」

「効果が有るだろうか？」

「私は効果は有ると思いますが、当分は車で送ってもらいます」

車でもばれる時はばれるもので、結局アリエルの言う様な方法を取らざるを得なくなるのだが、それはもう少し後の話になる。

43 噂（前書き）

女の直感と情報収集能力を舐めてはいけないと言ってお話？

43 噂

「ねえねえ、この前助けてもらった綺麗な人、剣道の達人みたいね」
「うちのお兄ちゃんが白羽恵瑠って人は、剣道の世界じゃ強くて美人で有名なんだって言ってた」

「綾子のお兄ちゃん、中学の先生で剣道部の顧問だっけ。日本一難しい大学の学生なんだよねえ、あの白羽さんて」

「なんか天は二物も三物も与えるって感じだねえ」

治が会長を務める会社は世界的な大企業で、企業城下町とも言うべき自治体が日本中にいくつが存在する。

本社の総合受付の三人娘、康代・綾子・俊美は、別々の地域の出身だが、それぞれの出身地はどれもこの企業の城下町とも言うべき町だった。その地域では一番の『進学校』を程々の成績で卒業して都内の短期大学に進学したと言う共通項が有る。三人とも出身の短大ではトップクラスの成績で、それなりに容色にも自信が有ると言うのも共通している。

三人の父親は皆、各地の工場や子会社・系列会社の社員だったし、母親や親類縁者もかつてはその系列の企業に勤めていたのだ。そうした家庭環境で育てば、自分も身内も東京の本社採用で総合受付と言え、大した出世で、良縁を得る早道と信じている。事実、従来この部署の女子社員は本社のエリートの子になる確率が高かったらしい。

先輩のかなりきついしごきも、三人は結束して耐えて来て、二年目の今年は新人をトレーニングしつつ自分も『華やかなOL生活』

を満喫している所だった。設備も整い、会社から程近い女子寮住まいなので住宅費もかからない。学生時代、都内の住宅費の高さの所為で親に負担をかけた身としては実にありがたい。

週に二度ほど、こうしてとりあえずデートの約束が無ければ女三人で夕食を外で食べるのが習慣化して居る。賄いを利用すれば一食わずか二百円で栄養バランスも取れているが、豪華さは無い。

「あの人の洋服もバッグも、超高級品だったよね」

職業柄他人の服装には敏感で当然だが、康代はモード系の雑誌をチエックするのが趣味だった。

「私は良くわからないけれど、確かに素材がよさそうだった」

兄が教員で父が理系の技術者の綾子は、余りそうした事は詳しくないが、古風なしつけをされて育った所為かお辞儀の仕方や名刺の受け取り方、電話の受け答えを先輩に注意された事が殆ど無い。

「あ、私もあの人が持ってたバッグが百万円するのは知ってるよ。テレビで芸能人のファッションチェックをしてた時に見た」

小柄で美人と言うよりは可愛い俊美は、芸能界への憧れをまだ捨てきれない。口にした事は無いが買いたくもしている時にスカウトされるかもしれないなどと密かに思っている。

「それでね、お兄ちゃんが気になる事を言っただよ。うちの会長さんて、あの日本一難しい大学の剣道部のOBだって。七段で強いらしいんだけど、最近後輩で剣道の強い人と婚約したらしい」

「へええ、じゃあ、あの白羽さんはその条件に当てはまるんだよね」「うちの会長さんて、本当は日本一のお金持ちじゃないかって言われてる人だね。若くは無いでしょ？社長よりは年下らしいけれど」

「お兄ちゃんが言うには整った顔立ちで、威厳と迫力が凄いつて。三十代らしい」

治は通常の新聞や雑誌に顔写真を出す事は皆無だったが、剣道関連の人脈には比較的個人情報もオープンにしていた。それが回り回って、このような形で情報を探り当てられるとは予想していなかった。

「三十代で大金持ちで、剣道が強いんだ。どんな顔なのかな？」

「私、今度剣道の専門雑誌、お兄ちゃんに貰って来る」

「それより、今からすぐそこの都立の図書館に行ったら、そういう雑誌も有るかもよ？」

「夜は九時までやってるんだよね、見てこよう！」

図書館司書に相談したら、一発で目指す雑誌を見る事が出来た。

「このページだけコピーしてよろしいですか？」

綾子が尋ねると、館内のコピー機を使って雑誌を持ち出さないので、OKだと言われた。

問題の記事は治が大阪で『敢闘賞』第一席を取った時のものだった。インタビューの内容と共に面を取り、汗をぬぐう瞬間の顔がかなりアップで出ていたのだ。

「カラーコピーできるねえ。三部コピーしよう」

コピーを持ち帰り入浴を済ませメイクも落としてから、三人は康代の部屋で『謎の多い会長』について話していた。

「なんか、美形だね。びつくりした」

康代はもつと中年オヤジっぽい顔を思い描いていたので、驚いた。「あ、この記事、見た？喜びを誰に真っ先に伝えたいですかって聞かれて、『今回の勝利を或る女性に捧げます』だって！何これ！何これ！」

まるで芸能記事みたいだと俊美は悶える。

「あああつ、ホンと。意中の人が居るんだね、やっぱり。プロポー

ズしたのかな？て、言うか大学の後輩で美人で剣道強いから、相手は白羽さん？」

綾子も興奮気味だ。

「そう言えばさ、私、白羽さんらしき人を会社に来る途中の地下鉄で幾度か見たような気がするんだよね。一度追いかけたら、撒かれたけどさ」

「えええっ？撒かれた？それ怪しくない？」

「綾子もそう思う？」

「私もそう思う。白羽さんは勝利を捧げられちゃって、代わりにバージンを捧げちゃったりして」

俊美の脳内はもう妄想モードに入りつつあった。

「あの難しい大学の学生だから、高校時代は剣道と勉強だけだったと私は見た。だったら、バージン捧げたって言うのも、あながち俊美の妄想じゃ無いかもよ」

康代はいつもなら、俊美の妄想話には冷ややかに応じたが、今夜は勝手が違うようだ。

「いいなあ〜！大富豪の美中年！私も食べられたい！」

「綾子は彼氏がいるじゃない」

「居たって、ちよつと食べられたい！」

「綾子って、お堅い家の子の割りに貞操観念って余り無いんだね」

「何よ康代ったら人を淫乱女みたいに言って！あんただって美中年な会長には興味有るでしょうが」

「そうだよ、都立図書館に行こうなんて、康代だって興味津津じゃない」

「康代が一番沢山、男、食ってるくせに！」

「綾子、やめなよ。康代も貞操とか何とか言い過ぎだって」

「はいはいはい。綾子様、私が悪うございました。私もちよつと美中年な会長に食べて貰いたいなってチラッと思いました」

「ほら〜」

『女三人寄れば姦^{かしま}しい』とは言うが、深夜までポテトチップスと缶チューハイだけで盛り上がり、『美中年な会長』と『強くて美人の白羽さん』は非常に怪しいと言う結論に到達した。

一方で、横島は奇妙な波動をこの女子寮に感じ取り、使い魔を屋根に張り付かせていたが……

「これはまずい。旦那様とアリエル様に明日の朝、御報告しなくては」とあせっていた。

だが、さすがに睦みあっている二人の邪魔をするわけには行かないと、判断したのだ。

朝食時に、横島ことサリエルの報告を聞いた治と恵瑠は、溜息をついた。

治が早速三人娘に意識を向けてみると、色々と勝手な妄想も巡らせているのがわかり、頭を抱えたい気分になった。幸い恵瑠の魔力では距離の有る対象の意識を読み取れないのは、まだ救いだった。

「確かに旦那様は『大富豪の美中年』でいらっしゃいます。お嬢さん方の眼力は鋭いですな。お二人の関係をおおよそ探り当てられてしまったようですから」

「ああ。驚いた」

治は「白羽さんは勝利を捧げられちゃって、代わりにバージンを捧げちゃったりして」と言う推測が真実を突いた鋭いものだったので、シヨックを受けていた。

その、毒気を抜かれたというか、放心したような治の表情から、何がそんなにシヨックだったのか聞きたいと恵瑠は思ったが、聞ける様な雰囲気でもなかった。最近相当以前よりテレパシーも意識を

読む事も出来るようにはなったが、高次の魔物や神霊の意識までは読み取れないのだった。

治は治で、恵瑠の心配そうな視線を向けられる度、何か言おうとはするのだが、シヨックで立ち直れない気分だった。しばらく無言でコーヒーを飲んでいたが、気を取り直すところだった。

「お嬢さん方の情報収集能力を甘く見ていたようだ。アリエルの言ったように、あの三人を呼んで、直接秘密を守るように言い渡すより他に無さそうだ」

「言い渡すより、お願いするほうが良くないですか？頼むから、結婚するまでそつとしておいて欲しいって」

「そのほうが良いかな」

「あの、お嬢さんたちは味方になって貰った方が良いと思います」

そう言う訳でその日の午後、総合受付の三人は会長室に呼び出しを受けたのだった。

43 噂（後書き）

黄色いバナナをポチっとお願ひ致します。更新の励みです！

44 会長は大魔王？

「ちょっとちょっと、貴方達、何をしでかしたの？会長室の小沢さんから呼び出しがかかったわよ」

朝のミーティングの時、三人娘は内線電話に受け答えしていたお局様格の先輩から聞かされた言葉に仰天した。

「小沢さん？会長秘書の？」

「ねえ、何かまずい事でも私達やったかな？」

「さあ……私達三人だけで噂話してただけだし……」

「ちょっと！貴方達、わかったの？昼休みに小沢さんがいらっしやるから、付いて行きなさい」

先輩の剣幕からすると、どうやら不味い事態なのかもしれない。

「内部の人間の個人情報垂れ流すのは厳禁だけど、それには当たらないしね」

「噂したのも、昨日夜だけだし」

「私達、この三人でしゃべってたただけだものね」

どう考えても、なぜ会長秘書が自分達を呼びに来るのか見当もつかない。

時計が正午を知らせるとほぼ同時に、会長の第三秘書だという小沢昌幸がやってきて「会長が呼びです」と言った。三人とも緊張の余り、口の中がカラカラで何も話せない。普段ならハンサムな小沢のような男と一緒にいて、無言のままと言う事など、まず、有り得ないのだが……

普段乗りなれない役員専用の五十階へ行くエレベーターに乗った。更にそこから、会議室のような場所を抜けて、専用のエレベーターで五十二階についた。小沢の後を着いて行くと、たくましい目つきの鋭い男が二人いる。仕立ての良いスーツを着こなしているから、秘書なのだろうか？

正面を見ると、確かにあの美中年が座っていて「おや、来たね」と言うと、ノートパソコンを閉じた。

「まあまあ、そう、固くならず、良いからそこにかきなさい」と傍らのソファをすすめられた。

「コーヒーでも出してあげて。何時も君たちのご家族にも、君たち自身にもお世話になっているわけだけど、今日は少しお願いがあつてね、来てもらったんだよ」

やがてコーヒーが運ばれてきたが、三人ともとてもじゃないが飲む気分ではなかった。

「頼みと言うのは、他でもない。僕の婚約者の白羽恵瑠に関してなんだけど、まだ、彼女は大学の一年生だから未成年でね。二十歳になったら、すぐに結婚する予定では有るけれど、セキュリティ上の問題も有って可能な限り今は秘密にしておきたいのだ。僕は見ての通りの中年男で、会長なんて言う仕事も慣れっこだが、彼女はまだまだ若いので、必要以上の重圧をかけたくない」

うわあ、来た！と三人とも思った。そして、ひよっとしたら昨日の内緒話が盗聴でもされたのだろうかと思つた。

（盗聴なんてしないさ。私は読もうとすれば君たちの考えている事は全て読み取れるのだから。ともかく、私と彼女の噂話は君たち三人以外の人間には絶対にしないでくれ。たとえ家族でも、禁止だ。良いか？これは会長命令だ）

三人は脳裏に飛び込んできたテレパシーによるメッセージに、仰天した。

「だから僕と婚約者の噂話は勘弁してくれ。特に彼女の事は出来れば忘れて欲しい、とまあ、用事はそれだけだ」

口から出てくる言葉は、さほどきつくは無いが、脳裏に流れ込んできた言葉の厳しさはただ事ではない。

（会長が直々に仰った事をまさか無視するつもりじゃあるまいね？）

（芸能人のゴシップ記事のように興味本位で噂するなんて、とんでも無いよ）

（自分の言葉と行動に十二分に気をつけたまえ）

三人の秘書のものらしい厳しい言葉も、脳裏に飛び込んでくる。

「そうそう。頼んだ事をきちんと守ってくれたら、決して悪いようにしないよ。鈴木康代さん、加藤綾子さん、田中俊美さん、君たち自身にとっても、御家族にとってもね」

三人とも毒気にあてられたように、声を出す気力も無かった。自分達の名前がフルネームで認識されて居るのも何やら恐ろしかった。

「コーヒーはもう飲まないのなら、戻るよ。言われなくても御挨拶

「ぐらいはするものだよ」

小沢昌幸の言葉に、三人とも弾かれた様に立ち上がり、一斉に治に向かつて深々と礼をした。

一瞬、その整った顔が大魔王のように見えたのは、気のせいだろうか？　とも思ふのだった。

「会長は人知を超えた強大な力をお持ちだ。深い思いやりをお持ちで、魅力にあふれた本当に尊敬できる素晴らしい方だ。だから我々も日夜、真心を持って自らの仕事に励んでいる。君たちも御言葉を守って、精々ががんばるのだな」

帰りのエレベーターの中で、小沢が言った言葉に素直に共感する気分では無かったが、真実を突いているのかもしれない、とは思ふのだった。

自分達の職場に戻った三人は、やけに無口でクソまじめに仕事をするので、皆は驚いていた。

「ねえねえ、会長室で何が有ったの？」

「他言する事は禁止されているの」

仕事が終わった後で、周りの者が会長室での事を聞き出そうとする、と、三人揃って、この調子で口を割らなかつた。

気分的にげっそりして女子寮に戻り、賄いで夕食を済ませた後、三人は自分達しか居ないことを確認して、今度は共有のリビングでテレビをつけながらひそひそばなしを始めた。

「ね。今日の会長室で、頭の中に言葉が飛び込んでこなかった？」
康代が、重い口火を切った。

「考えが読み取れる、って言って無かった？」

「私たち三人の間以外で、会長と婚約者の噂は禁止する、会長命令
って」

三人は互いに顔を見合わせた。

「会長以外の、秘書らしい人たちの言葉も直接いくつか頭に飛び込んできたよね、あの人たち、エスパー？」

「康代もそう思った？説明つかないよね」

「私も康代と綾子に賛成だけど、こんな話しても誰も信じないだろうね。何か今になって、すっごく恐くなってきた」

「あ、思い出した！」

「何？俊美」

「うちの父親が『会長はあの時僕の言いたいことを十二分に分つて下さって、たちまちのうちに悪者どもの処分を適切に決められた。本当に神のような方だ』って、酔っ払うと時々言ってるのよ」

「俊美のお父さんって、支社の経理の不正を東京本社に直訴して、それを認めてもらったんだよね。それでもって経理の責任者になったんだっけ？」

「うん。そう。五年前の話だけど、ウチの両親、御褒美で初めての海外旅行に行かせて貰ったんだよ。給料もかなり増えたみたい」

「うっうっ！それって、俊美のお父さんの意識を読み込んだせいかもね」

「絶対、康代の言うとおりだと思う。俊美のお父さんの言う神って言うよりか、むしろ……」

「大魔王！」

三人揃って、同じ言葉を発したので、思わず吹き出してしまった。

「ともかく、小沢さんの言う通り『会長は人知を超えた強大な力を

お持ちだ』って事で、大魔王様に真面目にお仕えしないと大変な事になりそう」

「綾子が綺麗に纏めてくれましたって事だね。それにしてもさ、大富豪で美中年でも、頭の中身を全部読み取られるって、きつくない？」

「白羽さん、良く耐えられるね。それとも、よっぱど心も綺麗で、大魔王様がメロメロとか？」

「アハハハ、メロメロかあ！それ、有りかも！」

「私は白羽さんに特別な力があつて、大魔王様が意識を読めないのかもしれないって思ったんだけど」

治は、恵瑠との夕食を終えて自室に戻った所だったが、三人が自分を奇しくも『大魔王』と呼んだ事に対して、驚かされていた。

「治さん？どうしました？」

「例の三人娘が、また噂をしている。私が大魔王で、白羽さんにメロメロだってね。当たっているだけに、恐ろしいな」

「まあ！メロメロなんですか？」

「そうだよ。知らなかったの？」

「私は治さんにメロメロですけれど」

「うれしい事を言ってくれるね」

暫く三人娘の事は忘れて、治は婚約者との甘い時間を楽しむ事に決めた。

確かに、奇しくも三人娘達が推測したように、魔王は番つがいである最愛の存在の意識だけは、読み取る事が出来ない。だが、自分を悦びに燃えるその美しい瞳で見つめ、甘い吐息を漏らして居るのだ。自分は想われている、愛されているのだと実感できる。

立ち上る秘めやかな水音、肉の弾けあう合う音、悩ましい嬌声…

…

その瞬間、魔王の豪奢な寝室は、愛し合うもの同士の間にも艶めいた波動に満ち溢れていた。

44 会長は大魔王？（後書き）

黄色いバナナをポチっとお願いします。更新の励みです。

45 背伸びと釣り合い(前書き)

コンビニで季節限定商品を見つけると、つい欲しくなります。
今回も最後は頑張ってます。ぎりぎりR15遵守です。

45 背伸びと釣り合い

「あれえ……やっぱりここにも無いや」

いかにもがっかりしたと言う感じの子供の呟きが聞こえて、恵瑠はふと、前のスナック菓子ばかり置いた棚を見た。

「おや！ウリエル君じゃない、何を探していたの？」

「えっとね、七夕の時期に限定のお菓子って、それだよ僕が探してたの」

「え？これが欲しかったの？じゃあ、良いよ。ウリエル君に譲るわ。どうも最後の一個だったみたいだね」

「ええ？そんなの悪いって……」

コンビニのレジのそばで押し問答するのも店に迷惑だろうと思い、恵瑠はウリエルに半ば強引に菓子を手渡して、店を出た。

コンビニの場所は家と大学のちょうど中間地点で、恐らく父が大学の職員であるウリエルの家族もこの近所に住んでいるのだろう。

「待って！白羽さん！」

支払いを済ませたらしいウリエルが、走ってきて呼び止めた。

「今から家に帰るところなんだ。その公園で、これ、一緒に味見しない？」

ウリエル・ヤングは小学校の下校時から、夕方五時まで大学内で運営されている学童クラブで過ごした後、家に帰る途中でコンビニに寄ったらしい。大抵は研究棟にこもっている父の所に行くのだが、今日は学会の所為で珍しく留守なのと言う。

「家に帰っても、一人？」

「うん。母さんは緊急の手術でいつ戻れるかわかんないって」

「お夕飯はどうするの？」

「七時には、父さんが戻るからそれから食べるんだろうな」

恵瑠が何時も楽しみでのぞくコンビニの最新情報を伝えるサイトで、この限定商品の事を知って、買ってみようかなと思ったという話をする、ウリエルは

「僕はメーカーサイトの最新ニュースで知ったんだ。僕、このキャラが好きで、キーホルダーとか消しゴムとか鉛筆とか、ほとんど全部集めてる」と言った。

「あ、今着てるTシャツもひよつとして関連商品？」

「これは、母さんが僕が好きなキャラの付いたシャツをたまたま見かけて、買ってくれたんだだけだね」

『ぽやぽや熊』と言うちよつと間抜けで眠たそうな顔つきの熊のキャラクターは、小さな頃から恵瑠のお気に入りだった。祖父母と一緒に暮らした家の自室の押入れには関連グッズがどっさりある。治の邸で暮らすようになってからは、子供っぽいと思われるのが嫌で、そうしたグッズとは縁を切っていたが……

「この眠そうな顔が良いよね。ベッドに有ると実に気持ち安らぐよ」

小学一年生にしてはこましゃくれた物言いに、恵瑠は吹き出した。もともとウリエルは大天使が転生した存在だから、大人びていて当然なのだが、やはり愛らしい外見には不似合いだ。

「私はね、高校生になっても『ぽやぽや熊』のぬいぐるみを抱っこして寝てたの」

「それはそれで、かなり変だね」

ウリエルは笑われたお返しと言わんばかりに、ニコリともせずと言った。

「まあ、いいさ、ともかく！譲って貰いつ放しと言うのは僕の気がすまない。悪いけどさ、そのベンチで味見に付き合つてよ」

前世の強引で強権的な性格が影響しているのかもしれない。なかなかに迫力のある俺様ぶりだ。

「ここに座ればいいの？」

「アジサイも見ごろだし、悪くない場所だろ？」

確かに青いガクアジサイが沢山咲いている。

ウリエルはコンビニの袋から菓子を取り出し箱を空けると、恵瑠に食べるように促した。小さな熊の形のクッキーにクリームをはさんだその菓子は、根強いファンも多い。

「あれえ、面白いね。熊がみんな星を持ってるデザインになってる」

「味は普段通りだなあ。でもこの箱が七夕限定の感じのデザインで好きだ」

「中にお願い事を書く短冊が入ってるって、コンビニのサイトでは見たけど……」

「あ、これかな」

小指程度の大きさのビニール袋の中に丸めた紙のようなものが、菓子の箱に入っていた。広げて見ると『ぽやぽや熊』の地模様の入った短冊だった。

「わっ、可愛いね！」

「白羽さんに上げようか？」

「貰っても飾れないから、良いよ」

「あのおじさん、こう言う趣味に理解が無いの？」

「そ、そう言う訳じゃないと思うけれど、なんかその、私のほうが子供っぽいって思われたくないみたいね……」

「ふ〜ん、ちょっと無理してるんだね。背伸びしてるって言う方が当たりか」

小学生にしては随分と鋭い指摘で、恵瑠は少しばかりムツとした。

「ウリエル君！」

「あは！悪い。じゃあ、僕行くわ。短冊は仲良しの子に上げる」

「それが良いわ。じゃあね、ご馳走様」

帰り着いてすぐ、ウリエルにコンビニで菓子を譲った話を横島にすると、意外な返事が返ってきた。

「その菓子は、海外でも良く売れておりまして、特にアセアン諸国では大変な人気商品です。昨年からは南米でも売り出しておりますが評判は上々です」

「ひょっとして、あのお菓子の会社は……」

「見かけ上は昔からの部下の方が筆頭株主ですが、実は旦那様の会社と言つてよろしいかと」

「へええ……」

「限定商品が御入用でしたらお申し付け下さい。邸に届けさせますから」

「な、なんだか気が引けます」

「若いお嬢様方に評判がよろしいようでしたら、まとめて買い取つて、方々に差し上げるのも悪くないかと思ひましてね」

「そ、そうですか？横島さんの御判断にお任せします」

治は九時少し前に帰りついた。帰宅が八時を超える時は、先に夕食を取つて置くように言われてはいるが、やはりできれば一緒に食べたいのだった。

「待っていてくれたのかい？」

「今日は練習が休みでしたし、一人で食べるのはやっぱり寂しいですから」

「あんまり夜遅くに飲み食いさせたら、美容上好ましくないかな？でも、少しぐらいいは酒も付き合ってくれるよね」

「はい」

「本日は和食でございます。極上のアワビが手に入りましたので水貝に致しました。鰹はもも悪くはございませんでしたので、椀物でお出しします」

横島が極上と言い切るだけあって、見事なアワビだった。

「このコリコリとした歯ざわりがたまらないな」

治も思わず上機嫌になる。

後は鰹のたたきに、走りの枝豆、小エビの唐揚げ、冬瓜の含め煮や、夏野菜のてんぷら、おかひじきのゴマ和え、と言った所で、夏の季節感を十分に楽しんだ。

食後はいつもと趣向を変えて、冷たい玉露が出された。

「座敷の夏のしつらえが出来たようで、今夜は布団を敷かせて置いたよ。風呂から出たら浴衣に着替えるのも悪くなさそうだろ？」

湯上りに浴衣が用意されていたが、身長に合わせて有り、おはしより無しの対丈ついたけだった。

「こんな風で、良いのでしょうか？」

恵瑠が自分で着ると、何だかうまく形が決まらない。

「フツ、どうせすぐ気崩すけどね、一応最初ぐらいいは形を決めておくか」

柔らかい素材の細帯一本だが、治が締めると襟がちゃんと決まった。

生地は藍染の絞りらしい。確かに治の言うように「良い肌触り」だが全く下着も無しに着るのは、恥ずかしい。普通の旅館の寝巻き用のものは身八つ口が縫い塞いであるが、これはしっかりあいている。

「身八つ口は女の着物にしか無いね。着付けを直すのに便利だから必要だなんて言うが、実際問題そこが開いて居る方が涼しいだろう？」

それはそうかもしれないが、なんとも胸の辺りが心もとない。

ほのかな明かりに浮かぶ夏布団はぴったりと二つ並んで、なんとも艶かしい。

治は恵瑠を後ろから抱きしめた。

「身八つ口からこうして手を入れるのは、男の楽しみだと思うのだよ。いつもアリエルは綺麗だが、こうすると大人びて艶めいているね」

「本当ですか？私、早く治さんにつりあうような大人になりたいんです……ちょっと背伸びしてるかもしれないけれど」

「私は自分がもう、若くないのが気になる。何時もアリエルから若々しいエネルギーを貰っていると感じているんだよ。アリエルは日を追うごとに艶やかに魅力的になって来ている。君が私につりあわないんじゃないくて、私が君につりあわないのではないかと、心配でたまらなくなる」

「キスして下さい」

若々しい柔らかな二本の腕が差し伸べられ、熱を帯びた口付けの応酬が始まる。

身八つ口の中に納まっていた手の動きは、次第に大胆になる。

「アリエルはどこもかしこも、本当に綺麗だ。どう？これは気持ち良い？」

「……あつ、気持ち良い、気持ち良いです」

「素直な子には、ご褒美を上げないとね」

涼やかなしつらえの部屋で、二人の熱を帯びたやり取りが続く。或る時は甘えるように、或る時は拗ねる様に……熱を孕んだ二つの体が弾けるのも、もう、間近に思われた。

「どうか、どうか一緒に……一人は嫌……」

「……ああ、分っている、分っているよ」

低く短い男の呻き声が漏れ、同時に女のしなやかな体は反り返る。

「君は……ずっと、ずっと私のものだ……」

「ずっと、ずっと、一緒に居ます……」

二人は同時に声をあげ、深い愉悦を分け合うのだった。

45 背伸びと釣り合い（後書き）

黄色いバナナをポちっとお願いいたします。
更新の励みです。

46 茶道と夏の着物

「そうそう、形が出来てきましたね。いや、姿勢が良くていらつしやるし、飲み込みも早くていらつしやるから、この分ならもうすぐ正式な茶席でも戸惑わないで済むようになりますよ」

この所毎週のように、私とアリエルは着物を着て連れ立って、ベルゼバブこと富原創一の邸で、茶道の稽古を受けている。あれも忙しいので、無理はするなど言っているが「せつかく慣れておいでになったのです。出来る時には、なるべくさせて頂きたい物です。お二人の御都合がつかなければ、当然休みになりますから」と言い返されてしまった。確かに、慣れてきた所だから中断しない方がよいのだとは思うが……休日二人きりで寝室に籠りきりなどと言う事は、当分出来そうにない。まあ、着物を着付けてやるのは苦にはならないし、洋服と違う風情のアリエルと出かけるのは嫌いではないので、構わないのだが……少し残念だ。

夏場の着物は涼やかな方がよいのだが、どうにも難しい。どうしたって暑いものは暑い。

今日もきつちり紅藤色の無地の紵に白地にトンボを散らした紵綴れの帯を締めて居るので、時々可愛そうなほど汗をかいてしまっている。可能な限り楽な着付け方をしてやるのだが、それでも洋服よりは動きにくそうだ。良く似合ってはいるが……時折目立ったためようにそつと額を拭いてやることになる。そうした時の少し張り詰めて上気した顔も愛らしい。

アリエルは悪戦苦闘しながらも以前よりは着物に慣れ、最近は何れもベルゼバブが言うように、どうにか着物を着て畳の上で様々な所作を

こなせるように成って来た。最初は襖のあけ方一つにも、一々冷や汗を流していて、見ている私までハラハラさせられたものだ。

普通茶道の初心者わらわは割り稽古と呼ばれる点前をするために必要な所作を、細かく分割して、基本になる動作を一部分づつ練習する事から始める。だがアリエルの場合、自分が亭主として茶会を開いてもてなすより、まずは茶会に招かれてまごつかない事が主な目的なのだ。従って、客としての心得から集中的に学ばせる事にした。その方が実践的だと言うベルゼバブの考えに私も賛成だった。

まずは見苦しくない席入りが出来、懐石・菓子・濃茶・薄茶が危なげなく頂ける事を目指している。特に懐石の作法の稽古は日本料理全般のマナーに通ずる部分も有るので、真剣に行われた。このような特殊な稽古は、よその茶道教室ではまず受けられない。教える側のベルゼバブが採算を度外視している事と、アリエルには嫁入り道具や資格としての免状が必要無いと言う特殊な条件があつて、こうした規格外れのレッスンが受けられるのだ。まあ、レッスンに名を借りたもてなしを受けているのだと考えた方が正しいだろう。

最初アリエルは濃茶に驚かされたらしい。回し飲みをするのもその濃さも「未知との遭遇でした」と言うから、本当にびっくりしたのだろう。私とアリエルだけが客の役で、主人であるベルゼバブが最後に「お相伴いたします」と挨拶して、都合三人で飲む形を取っている。これも非常に変則的な練習法だが、茶道に凝っている財界人が本当に親しい者を自分の茶室に招く場合は、これに近い形になるわけで、アリエルにとっては非常に実践的なのだ。

五月五日の立夏から茶道の世界では道具も夏のものに変わる。冬に使っていた床に仕切った炉は閉じて、風炉と呼ばれる茶釜を火にかけて湯をわかす道具を使うようになるのだ。本来は『初風炉』の

茶会を開いたりするものだが、まだアリエルが不慣れなのと、富原創一自身が家元の『初風炉』に参加したため今年は見送りとなった。

六月のこの時期は菓子も茶花も爽やかで涼やかなものを選ぶ。ベルゼバブの用意する菓子は何時も季節にふさわしく趣のあるものだが、今日の饅頭もアリエルを喜ばせた。菖蒲饅あやめまんと言うアヤメの花の焼印を押し、伸びやかな葉を一葉ずつ筆で描き上げたその老舗の逸品は、細やかで丁寧な仕事ぶりが流石だと感心させられた。

「大学が夏休みの時期に、朝茶をいたしましょう。ね？」

「朝茶って何ですか？」

朝茶はおおむね暑さの厳しい時期に、午前六時頃からはじめられる朝の茶会だ。通常の懷石は一汁三菜だが、朝茶は生魚をさけ、魚類の焼物も省いた一汁二菜の献立にすることが多いようだ。

毎回ベルゼバブが出してくれる懷石は、実質休日の昼食になっているが、朝茶の場合は朝食になるというわけだ。一汁二菜で十分だが、ちよつと贅沢にする場合は強肴しいだかなと言う酒をすすめるための料理を追加することも多い。時にはこの強肴が一品どころか、二品・三品と追加され、朝茶本来の一汁二菜がかすむ事も有る。まあ、朝茶の強肴なら精進物だろうが、凝り性のベルゼバブだから、何か考えが有るのかもしれない。

「今日のお料理、あの、しらすの卵寄席ですか？とても美味しかったです」

確かに私も非常に旨いと感じた。滑らかな仕上がりの卵としらすの蒸し物と澄まし汁の相性が実に見事なできばえだった。

「おお、お口に合って何よりです」

「こちらで頂くお料理、どれも美味しいですね。何だかヘルシーな感じですし」

「やはり、旬の素材を吟味して調理してくれているのだろうな。彩りも美しいし。御亭主の心遣いの細やかさを何時も感じるよ」

これほど細やかに色々配慮されてしまうと、なかなか「二人で寝坊していちゃついていたい」とは、前世の息子であつても言い出せないものだ。まあ、息子達の中でも飛びぬけて魔力の強い彼には私の魂胆などバレているとは思うが。

（はあ、バレておりますよ。七夕の茶会とでも思いましたが、お二人でいちゃいचनाさる方がふさわしいかと思ひましてやめました）
アリエルに読み取られないようにブロックをかけてこんな言葉を向けてくる。実にはかなわない。

（母上は結構お疲れですから、それこそ御一緒にお昼寝なさればよろしいかと）

（疲れているか？）

（やはり着物は御負担のようです。でも、優しくして差し上げれば大丈夫ですよ）

（わかった。汗もかいているから風呂にでも入れるか）

（ああ、それがよろしいでしょう。いやはや、父上は愛されていますね。もう、イチャイチャでもベタベタでもなさって下さい）

この前世の息子は、私には読み取れないアリエルの意識が読み取れるのだ。その彼が言うのだから恐らくは本当なのだろう。

最後の薄茶が済んだら、早々に待たせていた車で邸に戻った。

サリエルはぬかりなく風呂の準備をして居た。

「さあ、疲れたろう？風呂に入つてさっぱりしたら、一緒に昼寝しよう」

するとアリエルは、ほっとした顔つきになった。

「良いんですか？」

「今日はもう、特に予定も無いよ」

着物を脱がせてみると、相当汗をかいているのがわかる。

「暑かったろう？着物は似合うけれど、夏はやっぱり浴衣程度が楽だな」

「治さんは、余り汗をかかれませんか」

「そうだなあ、普段スーツを着ているのと大差ないかな。それに比べれば女性の夏の洋服はずっと身軽だから、ギャップが大きいんだろう」

大して悪戯も仕掛けしないで、おとなしめにして風呂を出るとバスローブ一枚で寝室に行く。

「さて、寝るんだからこれは脱ぐだろ。寝床でバスローブは着るものではないし」と言いつつ、下着もネグリジェもパジャマも出さない。必然的に裸で、と言う訳だ。

「あ、あの、まだ夕食があるし……」

成程、アリエルの頭の中では夕食が済んでいれば、こういう体制も構わないが、まだ済んでないうちは横島が誰かに呼ばれるのを気にしているのだ。

「横島は『お二人でごゆっくりなさって下さい。夕食は軽めのものに致しますのでどうぞ時間は気になさらず』と言ってくれたよ」

「ええ？そうなのですか？」

「大体、風呂を準備して、その小さな冷蔵庫にアリエルの気に入っている銘柄のミネラルウォーターを多めに入れておいてくれたのだ。まあ、軽く準備運動をして水分は十分に取って、休めって事だ」

「あ、そういえば、お水のみたいです」

栓を抜いて、グラスについでやると、実にうまそうに飲んだ。相当喉が渴いていたようだ。

「ベルゼバブにも言われたしな」

「何をです？」

「風呂のあとは、イチヤイチヤ、ベタベタしろとさ」

アリエルは、真っ赤になった。

「サリエルにしろ、ベルゼバブにしろ、私達の気が更になじんでくれたほうが、己の力も増大するのだから、まあ、期待されているのだよ。だから……」

バスローブを脱がせてしまうと、さっさとベッドに抱え込んで入った。

「だから、今更なのだよ。せいぜい期待に応えて気をなじませる事にしよう」

いや、とか、恥ずかしいとか言ったが、本当に嫌な訳ではないのは明白だから、この際無視した。

問答無用でキスを浴びせ倒して、その後は予定通り、と言うわけだ。

事が果てると、アリエルは心地良さそうに寝息を立て始める。

（サリエル、夕食はかなり遅くなりそうだ。本当に軽くて十分だからな）

（承知いたしました。どうぞ時間は気になさらず、旦那様も御一緒にお休みなさいませ）

確かに、私も心地よい疲れに満たされていたので、サリエルの配慮に甘えて眠らせてもらった。

二人が揃って、ごく軽い夕食を取ったのは、結局日付が変わる寸前だった。

47 七夕の前に（前書き）

日本の神話は大胆で面白いみたいですよ。最近、全然違う解釈の仕方が出てきているようです……

47 七夕の前に

「やっぱりあのパワーは大したものだ」

東京五社の一つであるこの神社について、以前治さんがそんな風に言っていたのを思い出した。私は一度も行った事がないけれど、御本家の伊勢神宮は「大変なパワースポット」なんだそう。唯一絶対を唱える神が日本で余り勢力が振るわないのは、この神宮のおかげらしい。

明治時代に伊勢神宮の遙拝殿ようはいでんとして作られ、昭和になって今の場所に移されたこの神社はそれほど大きくは無いが、何というか清らかな気配に満ちている気がする。神前結婚式と言うものが始まったのはこの神社で、縁結びのパワースポットとして女性誌にも度々登場している。

まずは、手水を使い参拝。

先輩達によればすごく混雑している日もあるそうだが、今日は待たずにお参りできてラッキーなのだそう。すいているとは言っても、若い女性の参拝客が次々やってくる。正月は毎年殺人的な混雑で、盆踊りも非常に賑やかなのだそう。

「あのねえ、ここのお守りがどれもすっごく可愛いの！」

お姉さんも自分もこの神社にお参りして、お守りを持ち歩くようにしたら初恋が目出度く成就しそうだと言う剣道部の先輩に誘われて着いて来たのだが、本当に素敵なデザインのお守りばかりだ。

二人の二年生の先輩と翼と私、みんな決まった相手はいるけれどまだ結婚はしていない。

「結婚するまでに、もっとラブラブ度を上げたいよね」

「私は恙無く彼と結ばれたいな」

「結ばれたいだって！きやゝ」

「あれ？先輩方、まだ結ばれてないんですか？」

「翼ちゃん、貴女みたいに高校時代からすでに結ばれちゃった人みたいには行きません！同じ年の彼とゆつくり清らかな交際からスタートしたんだから。でも、この夏は初めて泊りがけで旅行に行くの！がんばらなきゃ！」

「私は結ばれたばかりなの。翼ちゃんや恵瑠ちゃんから見れば初心者もいい所だけど、それでもラブラブで幸せだからいいの！」

何か話が変わなほうに転がって来た。

「翼、変なコト言い出さないでよ」

「確かに先生や馬飼野さんは、初心者じゃないからなあ」

「だから、翼、そう言うのをやめてよ……」

「年上の上手な人に可愛がられちゃうのも、羨ましいけれど、二兎追うものはって言うじゃない？」

「そうそう。嘘っていつかはれるしね」

「誠実でひたむきなのが一番よね」

「治さんもひたむきですよ」

なんかちよつとむかついたので、反応してしまった。だって、どんなに忙しくても、時には会社に私を泊まらせても、朝夕の食事とベッド……お風呂もだけど、私と一緒にしてくれるんだから。

「先生もああ見えて、結構誠実」

「そうよね。貴女達しよつちゅうキスマーク付けてるから、濃厚に愛されてるのね」

「あははは……」

こんな話をされては笑うしかない。

剣道の練習着に着替える時に、どうしても見られてしまうのだ。気をつけてはいるのだが。

明日は七夕だ。例年七月七日の夕方から始まる御祈祷が大人気らしいので様子を聞きにきたのだけれど、社務所の方の話では受付は当日のみで夕方から開始の上、二時間待ちも珍しくないと聞いて、翼と私は諦める。既に婚約しているし、同居だし、平日だから先生も治さんも仕事で忙しいはずだ。

「私達は、来ようね」

先輩達は並んでしつかり御祈祷を受けるそうだ。

「まあ、せっかく来たんだから」と名物の願い文を書いた。神様へのお願いの手紙みたいなもので、四色の綺麗なレターセットみたいなものだ。封をするための紐がついている。是非実を結んで欲しい心からの願いを書くといいらしい。みんなそれぞれ真剣に悩んで書き上げてから、願い文を納める箱に入れ、帰る前にまたついお守りに見入ってしまう。スズランの花形のも欲しくて買ってしまった。後は……

「私これ買う！」

翼が言うので、私も釣られて買う事にしたのが『縁結び幸せ小槌』。何と言うかものすごくラッキーな雰囲気なので、欲しくなった。小さな打ち出の小槌の形のが二つで一組になっている。

「一つは先生に渡すの」

翼は何だか楽しそうだ。私も片方を治さんに渡したいなと思った。

地下鉄の駅で皆それぞれ別れ、私も急いで帰宅した。いつも通り横島さんが迎えてくれる。

「あ、笹飾りですね、何だか嬉しいな。幼稚園以来です。こんな本格的な飾りは」

横島さんが教えてくれたが、笹飾りは七夕の前の夜から飾り始めるものなんだそうだ。

「折り紙など、柄にも無く少し凝ってみました。あと三十分ほどで旦那様が戻られますが、御一緒に短冊をお書きになりますか？」

「私、書道はからきしだめで、かな釘もいい所ですから……」

「何、こうしたものは御気持ち籠れば、それでよろしいかと思えます。やはり、後ほどお持ちいたしましょう」

部屋で冷たいミネラルウォーターを飲んでいたら、治さんが予定より少し早めに戻ってきた。

「一緒に風呂に入って、浴衣を着て、夕食。それで良いよね」

嫌だなんて言わせないって感じがした。実際、別に嫌ではないけれど、以前浴衣を着たときに結構恥ずかしかったかななんて、思い返してしまった。

「ああ、この浴衣も似合うな」

私は和服の事は、と言うか和服の事もわからないが、治さんは「普通の振袖を着付ける事ぐらいは出来る」らしい。どこで覚えたのやら、聞きたいような聞きたくないような……

「今日は白地に手書きでバラを描いた洋風な趣の柄だが、明日は純和風にしよう」

こんな浴衣もあるんだなと思うような、白地に赤やピンクで華やかにバラが描きだされて居る浴衣には、鉄御納戸色てつおなんどと言つらしいが、ダークがかった青緑の兵児帯を合わせた。

「兵児帯の方がアリエルが食事をしやすいだろうから」と言う事だったけれど、柔らかな素材の帯なので確かにきつくはない。

夕食は和食で、竹かごに季節の素材を美しく盛り付けた前菜から始まって、涼やかなガラスの鉢に入った冷たく冷やした蒸し物とか、笹の葉っぱでくるんだ小さなお寿司とか、どれもとても綺麗で美味

しかった。

「箸使いが美しくなったな」って、治さんにほめてもらったのが嬉しい。

余りお酒は飲まないで、二人で真面目に短冊を書いた。と言っても、私は一枚だけだが。治さんは達筆で、本当に色々出来ちゃう人なんだなって今更ながら驚かされる。

治さんに『縁結び幸せ小槌』を見せると、何だか酷く面白がってくれた。

「やはりこれは日本の神話に関わりが深いのだろうな」って言う事が真面目な割りに、何だかニヤニヤしているのだ。

「これは、出っ張った方が私の分だろう」と言って、すぐに自分の携帯に取り付けてくれた。「幸」と言う漢字が、一つは浮き彫りで出っばった形で、もう一つは掘り下げてへこんだ形で付いているのだ。二つの凸凹はぴったり合わさる構造らしい。私も治さんに倣ってへこんだ方を携帯につけた。

「日本のどんな神話に関係有るのでしょうか？」

「古事記の最初の方にあるイザナギ・イザナミの国生みの話だろう」

「そういえば、大きな柱を挟んで立ってる男女の神様の絵馬がありました」

「フツ、まさにそのシーンだな。明日大学の図書館辺りで古事記の注釈が出ているような本でも見てみたらどうだい？自分で調べた方がきつと楽しいよ」

結局、教えてはもらえなかった。

その夜は、割合と大人しめで二人とも眠ったが、寝る前に治さんが「今夜はまあ、前夜祭だな」なんて不穏な事を言ったのだ。「七夕当日がやはりメインだろう。神社もそうなんだし」とも……

翌日、講義の合間に言われたように古事記を見てみた。無論原文は無理なので、書き下しと現代語が出ている本を読むだけだが、結構該当しそうな場所を探すのに苦労した。高校時代、古典はどちらかと言うと苦手だったのだ。

「あ、これかな？」

是に其の妹伊邪那美命に問曰ひたまひけらく、「汝が身は如何にか成れる。」ととひたまへば、「吾が身は、成り成りて成り合はざる処一処あり。」と答曰へたまひき。爾に伊邪那岐命詔りたまひけらく、「我が身は、成り成りて成り余れる処一処あり。故、此の吾が身の成り余れる処を以ちて、汝が身の成り合はざる処に刺し塞ぎて国土を生み成さむと以為ふ。生むこと奈何。」とのりたまへば、伊邪那美命、「然善けむ。」と答曰へたまひき。

現代語の注釈を読んで絶句した。二人の神の会話はこんな具合なのだ。

「貴女の体はどうなっている？」

「私の体はだんだん出来上がって結局たりない所が一つあります」

「私の体はだんだん出来上がって結局余った所が一つある。だから私の体の余った部分を、貴女の体の足りない部分に差し入れて塞ぎ、国を生もうと思うが、どうだろう」

「それがよいでしょう」

何とも大胆な……治さん……だから「出っ張った方が私の分だろう」って仰ったんですね。今夜がメインって……もう何だか、昼間から大学図書館で勝手に顔が赤くなって、困った。

48 五色の糸

昨夜アリエルが私にくれた『縁結び幸せ小槌』なるものの半分は、古くからこの国に宿る神霊の力と多くの乙女らの強い願いが一つになった独特のパワーを放っていた。仕事の途中でも、つい触れたくなってしまうのは、それから感じられるアリエル自身の思いの力の所為だろうか。

今日は七夕だ。新暦だから梅雨の時期と生憎重なるが、昨日アリエルが訪れた神社は、たとえ雨が降ろうとも毎年多くの会社帰りの女性達が好ましい異性との出会いあるいは恋愛の成就を願って、祈禱を受けるために長蛇の列を作るのだ。

私の会社も今日は正面のロビーを始め、人目につきやすい場所のいくつかに笹飾りを置いている。我が社の女性社員の中にも、あの神社に今日は参拝しようとしているものが居るのだろう。

サリエルが「若い女性に人気の商品のようにです」と言う事で、昼休み直前になにやら大型トラックに積んだ大量の菓子を全社員に渡る数持ち込んだようだ。何かと思えば七夕の時期限定のスナック菓子だった。聞けばこれも七夕のラッキーアイテムと看做されているらしい。

「この熊のキャラクターの柄が入った短冊が、特別なおまけで入ってるんです」と、幾人かの女性社員が嬉しそうに話していたので、まあ、喜ばれたのだらう。別に、なんと言う事も無いクリームを挟んだ小ぶりなクッキーなのだが……アリエルはこのキャラクターが大好きらしい。その事をサリエルに教えられるまで私は知らなかった。

もつと早く知っていたら、限定生産のぬいぐるみでも邸に持ち帰ってやったものを……

アリエルの思念だけが読み取れないとは、何とも皮肉だ。

「旦那様に子供っぽいと思われるってしまうのを気になさってます」と言うが、事実未成年で若いのだから多少は子供っぽくて当たり前なのだ。実家のアリエルの部屋にまで行っていないながら「キャラクターグッズで埋まった押入れ」に気がつかなかった。少々情けない気分ではある。

「旦那様、邸の方に本来は販売促進用のものですが、このキャラクターの七夕祭り向けのペアのぬいぐるみが届いております。御自身でお手渡しなさいますか？」会長室に菓子を届けたついでに、サリエルがそんな事を聞いてきた。

「ああ、そうさせてもらうよ」

気が利きすぎるというのも、些か気恥ずかしいものだ。

腕によりをかけて昨日以上に料理長のニスロクが旨い物を出してくれるらしいので、気合を入れて定時に上がるように仕事をこなした。

秘書連中に半ば面白がられていたのは感じていたが、好意的なものだし、その件に関して口にするのも些か気恥ずかしい。まあ、以前は共に夕食を取る相手も共に眠る相手も居なかったのだから、旨いものもそれほど旨いとも感じられなかった。

共に暮らす相手が出来ると言う事が、これほどまでに暮らしを変えられるのだと日々実感させられている。幾度も住処を変え、国を変え、時代を超えて生きてきたくせに、今ほどその事を強烈に感じた事は無かった。互いの気が大いに高まりつつある今、近い内にアリエルの条件さえ整えば、是非、子を授かりたいとも思っている。

邸に帰り着くと横島が気になる事を言った。

「お昼休みの頃でしたか、大学においでの時から何やら気が乱れていらつしゃいます」

このごろのアリエルは以前より力が強くなつた所為か、他者に読み取られたくないと感じた想いは知らず知らずブロックをかけられるようになっていく。本人に自覚は無いらしいが、さすがのサリエルが手を焼く強固さとは、一体何が如何したものやら。

「このぬいぐるみでも渡して、お嬢様のご機嫌伺いをしてみよう」

部屋に戻ると、アリエルは『古事記』の現代語訳と注釈付きの文庫本を読んでいた。昨夜私の言つた事が気になつたらしい。「おかえりなさい」と言つてから顔が真っ赤になつたので、理由は見当が付いた。なるほど、サリエルにだって知られたくないのは当然だ。

「この二つのぬいぐるみは七夕の限定品なのだが、受け取ってくれるかい？」

ぬいぐるみを目にすると、ぱああつと目に見えて嬉しい表情が浮かぶ。なるほど、本当にこのキャラクターが好きらしい。

「私、小さい時から、この熊さんたちが好きなんです。祖父母と暮らした家の押入れにも、沢山この熊さんのグッズが仕舞い込んであるんです」

牽牛・織女と言う設定なのだろう。むくむくコロツとしたぬいぐるみに中国風に見えなくも無い少々微妙な衣装を着付けてある。それなりの愛嬌はあるが、こうした類のものをどっさり身の回りに並べたいと言う欲求は、私にはどうも理解しがたい。

風呂に漬かりながら、アリエルが言うには、寂しい時にぬいぐるみの熊を抱きしめると穏やかな気分が眠る事が出来たそうだ。

「今は私と言うものが隣で寝ているから、以前のようなぬいぐるみの必要は無いのだな」

アリエルは私の顔を見て、如何答えるか悩んだようだったが、小さな声で「はい」と答えた。

「私では抱きしめにくいかもしれないが、しがみ付けるから、構わないよね」

ひざの上に乗せてやると、彼女の方からしがみ付いてきた。軽くキスをするつもりが、つい深々とむさぼるように舌を絡め、口腔内を隅々まで嘗め回すようなまねをしてしまう。

「尤も私はアリエルの熊の役目だけでは、気がすまないがな」

取り敢えずは、夕食を取らねばならない。少々名残惜しいが、せっかく浴衣も用意したのだ。アリエルを抱きかかえて風呂を出た。

昨夜と趣を変えて、藍染の杜若柄かきつばたの浴衣に朱に金糸で青海波を縫い取った帯を合わせた。見かけよりうんと柔らかな帯なので、体への負担は少ないだろう。食堂に行くのに手を繋ぐと、アリエルの表情が幼い子供のようにあどけないものになった。

夕食の席に着くと天の川に見立てたそうめんの両岸に、一対の海老しよんじょを配置した先付けに始まり、短冊形の食器に趣向を凝らした酒の肴を盛って出される。

赤と青一対の江戸切子のグラスに冷やしたスパークリングタイプの日本酒を注ぐと、アリエルは

「まるでシャンパンみたいなお酒ですね」と喜んだ。変に甘くないし、日本酒らしさを残しながらきめ細やかな泡が微妙に刺激的で、すっきりと軽い味わいの悪くない味だ。

鱧の葛たたきの椀物には短冊をかたどった野菜が添えられ、他の料理も皆七夕にふさわしい演出がされている。

サリエルがずっとアリエルの事を心配していたので、大丈夫だと言う事とぬいぐるみは気に入ったらしい事を伝えたと、ほっとした様だった。

アリエルがほろ酔いになったあたりで酒を切り上げた。最後に奈良の三輪山のあたりの「麦縄」と言う古の唐菓子^{からがし}の形をとどめるものと水出し玉露が出された。

「これに似たような菓子が昔は旧暦の七月七日に食べられていたらしい。堅いが味は悪くないね」

「これもおまじないですか？」

「瘡^{かさ}よけ、と言うから、マラリアにかからない為の呪いだっただろうな」

アリエルも堅いものをゆっくり噛み締める内に、意識がハッキリしてきたようだ。

今夜は七夕にふさわしく梶の葉に五色の糸・笹竹の床飾りを置いた座敷で眠る事になっている。

「さて、アリエル、昨日の古事記の話はもう分ったのだよね」

「ええ」

「大らかで、良いだろう？ 今から私の『成り余る処』でアリエルの『成り合わぬ処』を挿しふさぐのは如何かとお伺いを立てさせて頂きたい。あの話に出てくるような柱は無いけれどね」

「もう！」

「今も神宮の『心の御柱』に巻く五色の糸は、七夕飾りのもののルーツなのかもしれないな」

「由緒は全然知りませんでした、綺麗なものですね」

「神の宝とされたものを飾り付けるのにも使った様だよ……だからね、今夜のアリエルの髪は五色の糸で作った紐で結わえてあるのだが、気がついて居たかな？」

「まあ……そうだったんですね。私、御夕食に夢中で」

私がさっさと着物の帯を解きはじめると、アリエルは顔を真っ赤

にした。

「五色の糸で飾られた私の宝物だからね。思いきり可愛がりたいたいものだが、姫君の御都合は如何だろうか？」

「明日は講義は午後からです」

「其れは、良かった。それにしても美斗能麻具波比みとのまぐはひせ為むと言う表現は、何とも大らかで美しい表現だね」

美斗は「御所」麻具波比は「まぐあう」の意味らしい。

太古の二柱の神の婚姻はそうして成立したのだ。

「あの神様達はお互いに素敵だつて褒め合つてますね」

「褒め合うというより、褒めずにはおれないぐらい愛し合つていたのではないかな。私だつてアリエルを褒め称えずにはおれないよ。

こんなにも綺麗なのだから」

事実、豊かさを増した柔らかな乳房も滑らかな下腹も、なだらかなラインを描く腰も全て魅力的で、一つ一つキスをして褒め称えずには居られない。

魅力的な其処は、既に十二分に潤っている。

「治さんに抱いて貰うのは、何時もとて幸せなんです。愛してます」

「じゃあ、今夜もうんと幸せになろうね。愛してるよ」

我々も二柱の神に倣い、心ゆくまで互いを愛し合つたのだった。

49 霊験あらたか（前書き）

タイトルの言葉は、あんまり近頃聞きませんが、そういう神社や寺は、ありがた〜い感じがします。

49 霊験あらたか

「昨日、私達二人でお参りしてきたわ！すつごく混雑したけれど、家に帰るとすぐに彼から電話があったの！」

二年生の先輩二人は、本当に昨夜、あの神社で七夕のご祈祷を受けてきたらしい。

「早速電話が有って、良かったじゃない」

午後の講義がすんで、恵瑠は顔なじみの学生が良く集まる学生食堂のテーブルで、翼や剣道部の二年生の先輩二人と一緒に冷たい缶ジュースを飲んでいた。

「だから、私は今日は練習はパスね」

どうやら、今から映画でも見て夕食と一緒に食べようと言う事らしい。先輩も付き合っている彼も同じこの大学の学生で、年も同じで、出身地も近いらしい。

「今日は、顧問はお加減が悪くてお休みよね。私も休もうかな。彼が来てるかも知れないし」

この先輩は、お互いの部屋の合鍵を交換したらしい。携帯で連絡を入れているようだ。

「あ、彼、うちに来るわ。やっぱり、練習休むね」

二年生の先輩二人は、もともと剣道部では戦力外なのだが、それでもまとめて休まれると、翼も恵瑠も気が抜ける。

「ねえ、練習真面目に出る？蒸し暑いし、やる気出ないね」翼にしては珍しい事を言う。

「どこか行く？」恵瑠は帰る事も考えたが、治が戻るまでには随分時間が有る。

「もう一回あの神社に行つて、触り損ねた御神木に触つてこようか？」

「え？何それ」

何でも、拝殿のそばにある大木の周りを三周すると良いと翼は聞いているらしい。

「御神社つて、午前中に参拝するのが基本じゃないの？」

治が以前、そんな事を言っていたような気がするのだ。

「でも、午後に行つて罰が当たるつて訳じゃ無いでしょう？」

それは確かに翼の言う通りなのかもしれない。

「禍々しい気配は無いよね、あそこ。気持ちが良い所だつて思った」

「じゃあさ、いこいこ！」

翼につられて、恵瑠はついていった。

今日もまた、女性の参拝客がかなり居る。神社に大繁盛と言うのも変かもしれないが、なかなかの人気なのは確かだ。

「御神木つて、拝殿の右手奥つて言うから、あれだね！」

「どっち向きに回るの？古事記の例に倣えば、女は右から、男は左から回るつて事になりそうだけど……解説も無いね。それとも本当は男女ペアで回るのが良いのかなのかな？」

「さあ……回んなくても、撫でるだけでも願いがかなうつて聞くよ。この樹はパワー有りそうだよ。撫でる事にする？」

「うん。撫でてみよう。なんか感じるね。不思議な力が有るなあ。悪いもんじゃないのはわかるけれど、何だろう？」

「わかんないや。悪くないんだから、それで良いじゃない？」

翼が言う事も尤もな気がする。大体自分の力や治の力だつて、訳はわからないのだし……

不思議な樹を撫で、そつと頬を寄せてみる。昔々、何かこれに似たような事が有つて、子供達が沢山居て……子供達が沢山？？居るのかしら？何だか彼がそばに居て、とても幸せだったみたい……

「恵瑠！恵瑠ちゃん！どうしたの？」

「なんか一瞬、昔々の記憶が蘇ったみたい。ボンヤリしたものだけどね……」

「恵瑠！恵瑠ちゃん！携帯、鳴ってるよ？」

「ん？ああ、ありがと」

治からメールだった。こんな時間に珍しい。

「仕事を立て込んで、邸に戻れない。一緒に夕食も食べたいから、今夜はオフィスの方に泊まらないか？明日の講義に困らないように準備してからおいで。待っているよ」

「なんか、嬉しいメール？」

「うん。オフィスの方でお泊り」

「よかったねえって、あれ？私もメールだ」

「なあに？デートのお誘い？」

「夕食を久しぶりに外に食べに行こうって。帰ったら準備しなきゃ」

地下鉄の駅でそれぞれ別方向の路線に別れ、恵瑠は治の居るオフィスに向かった。

（さっきからアリエルの気配をいつもより強くはつきり感じるよ。

何が有ったのかな？）

（あの例の大神宮の御神木に触ってきました。翼に誘われて今日も出かけたんです）

（へえ……凄いな。ああ、夕食はフレンチにしたよ。結構期待できそうだ）

（それは、楽しみです）

地下鉄の乗客たちは、並外れて美しい若い女性が何とも幸せそうな笑みを浮かべているのを目にして、自分まで癒される気分になるのだったが、彼女が何を思っているのかは、さっぱりわからないのだった。

一方で、治はアリエルを見つめる幾人かの意識の中に、不都合なものを見出して、それを忘れさせるために些か力を使っていた。「芸能界にスカウトしよう」とか「尾行してどこの誰か確かめてやりたい」とか「ああ言う人と結婚したい」とか……

「アリエル、君はもつと自分の魅力を自覚しなきゃ」

差し迫った危険ではないにせよ、もう少し用心深くないといけないのではないか、と治は思う。

（ああ、彼女の気配が次第に上ってくる）

治は九割方終えた契約書の翻訳に最後の弾みがついた。

「会長、やはりおいでいただけるとなると、お仕事の能率も上がるようですね」

「ああ、アラビア語と中国語の読み書きが両方出来るのは社内ですだけだから、仕方が無いさ。待っていてくれ、あとわずかです上がるからな」

「申し訳ありません。産油国と中国と現地の言葉と全てがお分かりになるのは会長だけです」

目下、アフリカ東部で産油国の投資を受けて、中国との合併企業が新たな工業団地を作り出す計画を進めている所だ。しかし治以外、どこの国にもスワヒリ語・アラビア語・中国語・日本語、の四つの言語が全て使いこなせる人材がない。やむなく共通語の英語で話を進めるが、デリケートなニュアンスは互いに伝わらず、深刻な問題を引き起こしかねない。治はトラブルを未然に防ぐべく、四者間の調整役を担っているのだ。

待ちわびた彼女の気配が自室の直前にまで至った瞬間、治は必要な作業を終える事が出来た。

「治さん、お邪魔します」

「ああ、良く来てくれた。ちょうど今、一区切りついた所だ。後は、海外からのメールの返事を待つて居る所なんだよ。先に飯にしよう。今夜は久振りのフレンチだ。メールの件が有るから、食事時のアルコールは抜きだ」

そういうわけで、飲み物はバドワだった。

「パリ辺りじゃ、これが一番人気のミネラルウォーターだよ。完全に天然の発泡水だから炭酸の感じが柔らかいだろう？」

「何時も飲んでいるのより、口当たりがもっと柔らかいですね」

どうやら輸入量が日本ではまだ少な目な銘柄らしいが、本場では一番人気と言うだけ有って、食事にも良くなじみそうだと、恵瑠は感じた。

前菜は軽くゆでたピーマンにトマト・海老・アボカド・ハム・鶏肉などを軽いクリーミーなソースで和えて詰め、冷たく冷やしたものだ。

次にクレソンとジャガイモの冷たいポタージュが出た。

メインの魚は『若鮎のポアレ』で、丸のままの鮎をそのまま多目の油でカリッと焼き付けてあり、おろしてなかった。中の肝のほろ苦さと緑色のソースの相性が抜群で、ソースの滑らかな舌触りときめ細かい鮎の身の繊細さに、肝の苦味は良いアクセントを添えていた。

「今日はがんばって、魚が上手く食べられるかな？背骨の取り扱いがポイントだよ。以前教えたように、骨付きの魚料理をひっくり返すのは和・洋・中いずれの場合もマナーとしてはアウトだ」

前回、治に教えられた注意事項を守って、どうにか骨付き魚の正しい食べ方が出来て、恵瑠はほっとした。肉は牛フィレ肉の網焼きに温野菜を添えたもので、別に食べ方は難しくなかった。

デザートはレモン風味のゼリー・キャラメル風味のアイスクリーム・ピスタチオのサブレの盛り合わせで、コーヒーで終わる。

「メールが終わったら、向こうへ行くよ。カクテルでも付き合ってくれるかい？」

「はい。楽しみにしてます」

恵瑠はプライベートな居住空間の部分で、使用を許してもらっているPCを使って、明日の講義に関係しそうな項目について調べた。海外の学術誌の日本向けサイトは毎日チェックしている。英語の原文で正確に理解する学力はまだ、無い。治のように専門的な論文が読みこなせるようになりたいが、勉強量が不足だと感じる。十分に読めないのだから、書くほうはまだまだだ。

「日本語の論文を翻訳しようと言う発想では、まともな英語の論文は書けない。パラグラフごとのまとまりに注意しながら、自分の考えなり主張なりの根拠を示す、そんな感じかな」

治は海外の有名学術誌から論文の寄稿を依頼されたりするらしい。それを恵瑠は大学で知ったのだったが、自分は彼の事をまだまだ何も知らないのではないかと思うには、十分な距離感だった。

愛しているし、愛されているとは思うけれど、相手が考えている事の半分も理解できないような、お子様な状態は早く脱出したい。

恵瑠はそんなあせりを、近頃は自覚し始めていた。

「熱が入ってるね」

気がつくと、治が背後に立っていた。

「私は区切りがついたのだけれど、どうする？軽く飲まないか？その後風呂で良いかな？」

恵瑠は治が激務の合間に自分を呼んでくれた気持ちに応えたかった。自分の勉強はこの人の隣に立てる者となるためのものだと思う

し……だから、二人の時間は何より大切なのだと思っている。
「あ、明日の予習は済んでます。お付き合いさせてください」
恵瑠はためらい無く、PCの前を離れた。

49 豊験あらたか（後書き）

眠い所為か、変な文を書いてしまっているかもしれません。三箇所は気がついて直しましたが、まだ有りそうですね。こっそり教えていただけると、感謝感激です。

50 隣に立つ者（前書き）

カクテルは色々面白い名前のものが有りますね。

50 隣に立つ者

御神木に触れてきたと言うが、そのせいなのだろうかアリエルの気配が濃く、強く感じられるようになった。優しい光を感じさせる美しい独特の波動が一層輝きを増した、と言えば良いかもしれない。PCで何か熱心に調べ物をしているようだったので、少しためらったが、先ほどの調子では待っていてくれたのではないかと思われた。ここは思い切って「軽く飲まないか」と誘う。

小さなバーコーナーで、彼女のためにカクテルを作った。ドライジン・ドライベルモット・チェリーブランデーを同量加え、ミキシング・グラスに入れてステアする。

「綺麗な赤ですね。このカクテルは何と言う名前なんですか？」

「Kiss in the Dark」

隣に座って、ちょっと照れたらしい愛らしい顔をじっと見つめると、決まり悪そうに視線を外して、カクテルを飲む。

「甘い割りにアルコール度数は高めだから、ゆっくりお飲み。香りも悪くないだろう？」

「ええ。口当たりがよいので、知らないとすぐに飲んでしまいそうです」

「私は、ザルなのでね。少々コニヤックでも追加するよ」

「ここから見える夜景って、綺麗ですね」

「確かに高さは十分あるから、下手なホテルのスカイラウンジより良い眺めだと思うな」

「コニヤックって、強いですよ」

「そうだな。度数は四十度程度のものが多いけれど、これは五十八度だよ。ブランデーの中ではやはり、コニヤックが外れが無くて安心感がある。旨ければアルマニヤックでもペルーのピスコでも、スペインのオルーホでもイタリアのグランプでも、何でも飲むよ、私

は。酒に関しては博愛主義者だ。女性は君しか愛さない事に決めるけどね」

真っ赤になって黙り込んでいたが、「本当ですか？それ」と聞き返した。少し大人になったのだと感じる。

「無論本当さ。私は好みはうるさいほうだと自覚しているけれど、私の身も心も満たしてくれるのは君しか居ないのだとちゃんと承知しているよ」

「そうなのですか？私……自信が持てないんです。私はまだ子供っぽいし……治さんの隣に立つのが、本当に私で良いのになって、本当はもっと美しくて賢いふさわしい人が居るんじゃないかって、つい思ってしまうんです」

「私は君しか抱きたくないし、欲しくないよ。暮らし始めた頃からずっと可愛かったけれど、最近は綺麗でドキドキさせられる。日を追うごとに艶やかに美しくなっているのに、自覚は無いのかい？」

「治さんが、そう言っ下さるのなら、そうなのかなって、ちょっと思いますけど……」

「思いつきり愛し合えば、自信も出そう？」

「エツと……えつと……もう一杯、カクテルを頂いたら、頑張れます、きつと」

「頑張らなくても良いんだ。自然体で十分なんだから。でも、もう少し酒が入った方が固さが取れそうなら、作るうか」

コニヤックにホワイトラム・ホワイトキュラソーを同量加え、レモンジュースを入れてシェーカーでシェイクした。

「治さん、何だかプロっぽいです。本職のバーテンさんみたいで、カッコいい！」

シェーカーを振る姿を褒められれば、私もまんざらでもなかった。ふつ、お褒めに預かり光栄です。本日のナイトキャップBetween The Sheetsで御座います、お嬢様」

「えつと……えつと……」

「飲んでごらん、甘さの中に爽快感があって、悪くないと思うよ。」

それを飲んだら、ベッドの前に風呂に入ろう、どう？」

「はい」

声は小さいけれど、ちゃんと返事をしてくれた。

風呂も一人で入れば、せいぜい体を洗うだけの場所だが、愛するものと二人で入ると丸で意味合いも違つて来る。互いの体の状態が自然にわかり、その先を如何すべきか適切な答も見えて来る。体調が今一つな時や疲労が目立つ時は、穏やかに抱きしめあうだけに留めるし、受け入れ態勢が十分なら遠慮はしない。

ともかく無理なく、可能な限り長く彼女と一緒に暮らして行きたいのだから、彼女の方ももっと自然体で居て欲しい。確かに……ついこの前まで高校生だった未成年者に対するものとしては、私の行為も欲求も過剰なのかもしれない。でも、近頃は色々な意味で大人になつてきたから、将来に期待して良いと思つている。

「今夜は、受け入れ態勢は十分？」

「大丈夫です。明日の講義は午後からですし」

「思い切り愛し合つたら、きっと熟睡できる、そんな気がするんだ。結構神経を張り詰める仕事が続いたからね」

「じゃあ、気持ちよく眠れるように協力させてください」

「お言葉に甘えさせてもらうよ」

体を拭き髪を乾かした後、バスローブを着ようとするアリエルの手を、私は留めた。

「このまま、ベッドにダイブしたい気分なんだ」

もう、後は言葉のままに彼女を抱えてベッドインする。

さすがに時間無制限とは行かないが、今のこの瞬間何者にもセーブされないで、自分の欲望を素直に彼女にぶつけてみたかった。

「キスして、キスして下さい」

可愛い願いに応えて、私も情熱的にキスをする。彼女の体温が上

がり、呼吸が早まる。私は愛し合うことに關しては妥協しないし、貪欲だと思ふ。ひたすら自分が貪る様に抱く事も出来なくは無いが、それではまるで満足出来ない。アリエルが深い歓びの中で、意識を手放すような状態にならないと、私自身も満たされないのだ。同じタイミングで果てる事ができれば、最高だが、その前に幾度かアリエルを上り詰めた状態にまで導く必要が有る。

必要が有る、と言うと悲壮に聞こえるが、そうでは無い。神であつたころの能力が蘇つてきている今なら、いきなり相手に絶頂感を与えてしまう事も出来るのだが、一つ一つの手順を踏んだ末に辿り着ける満足感とは程遠い。

「愛している、愛しているよ、アリエル」

この言葉がまぎれも無い真実である事を、彼女の心にも体にも魂にも刻み付けるように、私は奮闘する。技巧を凝らし、力を尽くして、いとしい彼女と共に高みに上るべく、全力を尽くす。そして、二人の意識は共に高みに到達出来たのだった。

「愛してます」

甘い吐息と共にその言葉を囁いた直後アリエルは意識を失い、私の腕の中で穏やかな寢息を立て始めた。こうして肌を合わせ、甘いけだるさの中に意識を手放す心地よさは何物にも変えがたい。私自身もまた、程なく深い眠りに入った。

柔らかな優しい手が私の額を撫ぜ、唇にキスが落とされて、私は目覚めた。

「おはようございます」

アリエルはまだ私の腕の中に居て、彼女も私も共に裸のままだ。朝の光の中でそれを確認出来るのは世界中で私だけに許された特権だと思ふと、今の幸せに大いに感謝したくなる。

「おはよう」

頬ずりをしようとしたが、髭剃りがまだだ。私もキスを返し、彼女を抱きしめる。

「しっかりお休みになれました？」

「とても気分良くてぐっすり眠れたようだ。アリエルのおかげだね。ありがとう」

「あの……」

私の欲張りな下半身のそれが既に頭を擡げ始めている事を少し迷惑がっているのか、とも思ったが、その件ではなかったらしい。

「私、夢を見ました。貴方と私がどこかとても綺麗な泉の水の中で抱きしめあっていて、その周りに小さな可愛い子供達が沢山、本当に沢山いて、何だかとても幸せな気分なんです。辺りには甘い優しい香りが満ちていて、私達は幾度も幾度もキスを繰り返している、そんな夢でした」

「女神の時に君が、私との愛の記念に生み出してくれた子供達のことを思い出したのだね。子供達の数はい出せるかい？」

「小学校か幼稚園のクラス分以上は居たみたいですけど、正確な数はわかりません」

「そうか。子供らは両親である我々が人界に降りたので、皆それぞれ今は人界で過ごすようになってる」

「ひょっとして、この会社にも居るんですか？」

「ああ、居るよ。皆良い子達で、今は有能な人材だ。いつの時代、どこの国で暮らしても、すぐに子供らが助けてくれたので、私は大きな苦勞をしないですんだ。それも皆、アリエル、君のおかげだよ」
「どの人がどの子だってわかると嬉しいんですが……最初にこの会社に来た日に、私を母上と呼んでくれた方たちですよ……」

「きつと、その内それぞれの子の名前も思い出せるだろう。君の力が又大きくなった証拠だね。本当に良かった」

私のかげがえの無い存在が、本来の力を回復しつつ有る。その事

実は私自身にとっても、非常な吉兆と言って良さそうだ。柔らかな朝の光の中で見る彼女はいつにもまして美しく、私は昔を思い出して、またキスをするのだった。

51 恥すべき過去（前書き）

ええっと、昔色々あったようです。あれはまずかったんじゃない？
？とつい思ってしまっ、そんな話ですね。

51 恥すべき過去

「治さんって、一体どこでスワヒリ語なんて勉強されたんですか？」

朝の食事を一緒に取りながら、アリエルは私に尋ねた。

かつてスワヒリ語の発祥の地の港を本拠地にして、アラビア半島との間を行き来するダウ船と呼ばれる帆船で交易を行い、大いに富を蓄えた商人達が居た。主な商品は香料・象牙・そして奴隷だった。私はいくつかのスルタンの後宮に、オダリスクと成りうるような極上の女奴隷を納める商人として知られていたのだが、それをそのまま今のアリエルに伝えるのは、ためらわれた。

「今は世界遺産になっている港町にね、住んでいた事があるのだよ」
かつてヴァスコ・ダ・ガマが訪れたと言うその町は夕日の名所であり、石造りの美しい町並みで知られている。

私は、かつてその町では女奴隷を美しく育て上げる名人として知られていた。そうした愛玩用の奴隷の人種は多彩で、混血も多かった。イスラム圏の宮廷では肌の色以外の基準の方が重きを置かれていて、白・黒・黄色、三種類の異なる肌の色の美女を取り揃えてハレムに置くのがいわばステータスのようになっていたのだ。

「旦那^{フワナ}、お探しの白い娘が見つかったよ。やせっぽちだが、しばらく旨い物を食わせたらもう少し胸もどうにかなると思う」

別の港を本拠地にして奴隷を扱っている男が、そんな話を持ってきた。まだ幼いその娘は、さるポルトガル商人が奴隷女との間に設けた娘らしかった。商人が亡くなり、跡取りの息子は本国に戻る事にしたらしいが、奴隷の生んだ子供はあくまで奴隷扱いで、妹とは見做されなかったのだ。私は肌が白く乙女ならば高値で買うと伝え

た。

数日後、男はその少女をつれてやってきた。慣わしとして、男と私の目の前で素っ裸にされて商談が進められた。酷い話だが、当時はそれが当たり前だった。

「ほら、女としてはまだまだだが、悪くないだろう」

「確実に乙女のままだろうな？」

「無論だ。こんな貧弱な体じゃ、抱く気にもならん。月のものも来ていない。だが、旨い物を食べれば肌に艶も出るし、胸も育つ。

旦那の所じゃ女達に旨い物を食わせて、毎日風呂に入れて肌を磨くんだろ？後三年もすればオダリスクも勤まりそうじゃないか。」

「言い値で買い取るよ。オダリスク向けじゃ無さそうだが、手元において置くのも悪くない」

直ちに私は黄金で代価を支払い、男はホクホク顔で帰っていった。

風呂に入れて食べさせて、夜、閨に連れて来るように世話役の女奴隷に言いつけると、「こんな小さな子をお抱きになるのですか？」とぎょつとしたような顔で言われた。

「いきなり無体な事はしないさ。それに、この子は他所には出さない。ずっと手元に置く事になるだろう」

その言葉を聞くと、世話役の女はほつとしたらしかった。

「ここのお邸は、そこらのスルタンのハレムより良い暮らしが出来るんだよ。良かったね」

少なくとも、ハレムの勢力争いで毒を盛られるなどと言う事は無い。

その子が他ならぬアリエルだった。スルタンの後宮に送る者は私の寢所には呼ばない。逆に呼ぶ事でスルタンの命令で奴隷を集める場合でも、送るように命じられる事も無くなるのだ。

どうやら、ポルトガル人の父は娘を大切に育てていたようだ。父が亡くなると、いきなりやって来た『兄』がこの子と、この子を生んだ母親を奴隷として扱い、売り払ったと言う事らしかった。話す言葉はポルトガル語で、色は抜けるように白く、ポルトガル貴族の姫君でも通りそうな気品ある顔立ちなのに『奴隷』に落とされてしまつて、シヨックを受けたのだらう。裸に剥かれて見ず知らずの男達に体を見つめられ、時には無遠慮に体中、それこそ陰部まで触れられるのだ。大人の女でも辛いのに、あのような十代半ばの幼さでは耐え難い恐怖だったに違いない。

……だから、やはり、まだ今はそんな阿漕な商売をしていた頃の話で、打ち明ける気にはなれない。あの奴隷商人だった頃は、まだましな方だ。あれよりも更に打ち明けにくい酷い状況の中で私のしでかした恥ずべき事柄の数々は、口にするのもためられる。

「治さん、如何されました？」

「ん？ああ。つい、昔の事を思い出してね。いつの時代も君は魅力的だったよ、アリエル。でも、今の君が一番素敵だな」

「それ、本当ですか？」

「ああ。力自体は女神であつた頃が一番強かつたのは確かだが……あの頃は無かつた様々な魅力が今の君には有るのだなと、しみじみ思うよ。それはそうと自分の過去生は、今どのぐらい思い返す事が出来るのかな？」

「神であつた時と、天使になつてからと、ローマで女奴隷だった頃と……それ以外はまだ全く」

「そうか。きつと、そのうち思い出せるようになるさ。随分辛い時代もあつたからな」

「その、スワヒリ語と関係が有るんでしょうか」

「ああ」

「治さんって、沢山の言葉が使いこなせるみたいですけど、みんな

なそれぞれ、住んで居た場所や時代に関係が有るんですか」

「まあ、そうだ。だから未だにラテン語の読み書きが自由に出来るわけだ。それでヨーロッパの大学を出た連中には、ちよつとばかり特別に見てももらえる。あちらでは長い間知的階級の必須教養だったからね」

「何だか、治さんばかり、うらやましいです。私はどの国の言葉も思い出せません。自分の子供の存在すら正確に思い出せないのですし」

「覚えて居たく無いもの、思い出すのも辛いもの、そうしたものから自由なのは、必ずしも悪い事ではない」

恐らく、私の言葉の陰気さ、沈鬱な雰囲気が彼女を驚かせたのだろつ。

アリエルは私の顔を見つめ、息を呑んだ。

「ああ、驚かせてしまったか」

「何だか、私、無神経な事を言つたみたいで、ごめんなさい」

「いや、別に君が悪いんじゃない。昔の自分がしかした事が、たとえそれが過去生や記憶があやふやであつた状況であつた時にせよ、やはりあれはまずかつたとか、もう少し別のやり様が有つたとか、反省したくなる事もあるのさ」

「それは、私に関係が有る事ですか」

「君の事以外で、そんなに悩む事は何も無いよ。悩む必要も無いし」
「なら、大丈夫ですよ、きつと。私は今、ここにこうして居るので
すし、治さんを愛していますから」

アリエルは、私の手を握つて私の顔をじつと見つめた。その目は確信に満ち、力が有つて、私を勇気付けたい、励ましたい、そんな風に思ってくれているらしいと感じる事が出来た。

「今の私は、君に愛されているんだね」

「ええ、そうです。だから、昔何が有つたのか知りませんが、絶対大丈夫です。私は治さんを愛していますから」

その声はあの「旦那様、お慕いしています」という儚げな少女の言葉と同質のものでありながら、より強くより純粹でより確かだった。

「それを聞いて、安心したよ。時々、ふっと心配になるのさ」

「治さんの心配の種にならないように、頑張ります。治さんをしっかりサポートできるような、ちゃんとした大人になりたいです」

「頑張り過ぎなくても良いんだ。でも、君の気持ちは嬉しいよ。ありがとう」

気がつくと、二人とも席を立って、テーブルの脇で互いにキスを始めていた。互いが間違はなく互いを誰より一番必要としていると言ふ確認の作業のようでもあり、思わずこみ上げてきた激情の迸りを共有しているようでもあった。……だが、ドアがノックされた。朝食の時間はもう済んだのだ。

「おはようございます、会長、そろそろお時間ですが」

「続きは、今夜、邸に戻ってからね」

私が囁くと、アリエルは真っ赤になりながら頷いた。

朝のミーティングの後、私は、私の最愛の存在がこの建物を離れてゆくのをデスクの窓から見送った。彼女の後姿は若々しく爽快で、瑞々しい波動に満ちているようだった。少なくとも彼女は幸せだと感じてくれていて、彼女なりに力を尽くして私を助けようとしてくれているのだ。その事がはつきりと感じられて、私は嬉しかった。

「会長、今日は一段と気合が入っておられるような気がいたしますよ」

「そうかな。さっさと仕上げて、今夜は邸でゆっくり過ごせるようにしたいものだ」

「週末ですからね。きつと母上もお待ちでしょう」

「何やら曜日の感覚が狂っていてね……そうか、週末だな」

それからは、細かなニュアンスの受け止め方の違いを意識しながら、神経を張り詰めた国際的なメールの遣り取りが続き、その後は重要な国際電話やネット会議も有った。

確かに、望んでそうなったわけでもないが、昔の記憶が全て残って居ると言うのも、こうした仕事をこなす場合は便利だった。素直にそんな風に思えたのは、朝食後のアリエルとの会話のおかげだろう。

ともかく、なすべき事が全て滞りなく済んで、私は予定通り邸に戻る事が出来たのだった

51 恥すべき過去（後書き）

黄色いバナナをポチっと思います。更新の励みです。

52 ブワナ

「ねえ、ブワナって単語、どこの言葉かな、何語？」

「ええ？また急に何？スワヒリ語でしょ、『ジャンボ・ブワナ』って歌があるよ。タンザニア？ケニア？ああ、何だか両方のバージョンが有ったかな」

翼に聞いた所では、ブワナと言う言葉は英語で言うとミスターとか、時にはマスターとか言う意味合いらしい。男性一般に対する敬称だと思えば、大体間違いないようだ。

「スワヒリ語のふるさとで世界遺産の港町、ってわかる？」

「ザンジバルのストーンタウンだと思う」

それだけ聞けば、後は自分で調べられる。治さんの陰気くさい表情からすると、何か昔、気分の良くない出来事が有ったらしい。それもどうやら、私の過去生に関係が有るみたいだ。大学図書館で本を漁ると、色々出て来る。

「古くからインド洋交易の要衝であった……アラブの商人が十世紀ごろから住み着いて、大航海時代にはポルトガルが占領……その後オマーン？……ああ、アラビア半島に有ったなあ、そんな国が……イギリス・ザンジバル戦争の後イギリス領……ザンジバル革命……タンガニーカと合併してタンザニア連合共和国……ふーん。昔から奴隷貿易、象牙・金の輸出、東西交易の中継で栄えてきて、奴隷制度廃止後はクローブ栽培が盛ん……」

この中では、奴隷貿易が一番気分の悪そうな話だと感じる。今朝から気になってたまらない言葉がBwanaと言うスワヒリ語だ。自分が誰かを呼ぶ時にその言葉を使ったような、そんな気がしてな

らない。夢を見たと言つのではなくて、勝手に言葉が飛び込んできたような感じがする。

翼が教えてくれたような意味なら、やはり私が治さんをそう呼んでいたのだろうか？

「何だか知っている場所のような気がする」

「何、さっきから、世界遺産の写真集を見て唸ってるの？ザンジバルシティー旧市街・ストーンタウン？午前中からこだわってるね。何かひっかつかつてるの？」

「この町並み、と言うか、この建物の雰囲気なんだけど、なんかなじみがある場所のような気がする」

「それ、昔、その人間だったって事じゃないの？」

「やっぱり？」

「治さんに、聞いたら？ハッキリするんじゃない？だって、ずっと恵瑠を見て来たんでしょ？」

「そうだよねえ……」

治さんに聞けばハッキリすると言う翼の言葉は尤もなのだが、今朝の様子からすると嫌な思い出が有るのかもしれないし、本当に聞いて良いものかためらってしまう。

そうだ、横島さんに聞こう。我ながら名案だと思う。剣道部は九月まで大きな試合の予定も無いし……稽古はパスさせてもらおう。

「何、休みなの？ああ、治さん、今日の稽古会にはいらっしやらないだよな」

「うん、そう。それも有るけれど、横島さんに聞いておきたい事も有るし」

「横島さん？何で？」

「治さんの事は、うんと昔の事も色々知ってるから」

「ふーん。聞かれたら、お家で何か御用らしいって言っておくわ。

ま、蒸し暑くなってきたし、当分試合も無いし試験は近いし、サボ

る人は多いだろうね」

ああ、そうだ。七月は前期の定期試験の時期だ。恐らく抜かりは無いと思うのだが、なるべく良い成績を取って治さんを安心させたい。頑張らなくては……。私はサツサと帰って、横島さんに話を聞いて、後は勉強をしようと決めた。図書館で借りたい本だけ借りると、もう家を目指して歩き始めた。

「お帰りなさいませ」

横島さんは、玄関の前庭で、花の手入れをしていた。

「わあ、赤と白、ピンクもあるんですね。何の花ですか？」

「ハイビスカスです。花言葉は『繊細な美』とか『常に新しい美』などと言うのがございますねえ。南国の花ですから、秋口まで頑張つて咲いてくれるでしょう」

「あの……」

どう切り出すか困ったが、やはり横島さんはある程度察したみたいだった。

「ザンジバルの邸には、ハイビスカスが年中咲いていました。時々カメレオンが姿を見せる事も有りましたが、アリエル様はお嫌いでしたね。毒は無いのですが、かの地では不吉な生き物とされておりましてね。良く伸びる舌で目をつぶされるとか、邸の女どもが言うのを信じておられたのでしょうか。見かけますと、震えておしまいになつて、良く、旦那様や私にしがみ付いておられましたよ」

「そんな事が有ったんですか」

「あの頃の事を気にしておいでなのですが、何かございましたか？」

「今朝なんです、治さんが陰気な顔をされたんです。あんな表情を見たのは初めてだったので、私、驚いてしまって……。スワヒリ語について話していた時なんです……。よほど嫌な思い出が有るのかなと心配になりました」

「はああ……それは、恐らくあの頃の御自分の商売の事を、思い返されたのでしょうか」

「やっぱり、貿易ですか？」

「さようでございます。奴隷貿易ですね。あの時代は、まあ、珍しくも有りませんでした。が、旦那様は各地のスルタンの宮廷に出入りを許された大商人でした。今とは価値観も道徳も違うのですから、昔の事を余り気になさなくても良いと、私は思うのですが……」

「治さんが、奴隷商人だったんですね？」

「ええ。そうですが、そういう時代でも、貴女様の事は本当に大切にされてました」

「私、その頃は治さんを何と呼んでましたか？」

「まあ、皆と一緒に『旦那様』でしたね」

それにしても、治さんは何をそんなに気にしているのだろうか？横島さんが気にしなくても良いと感じている事なのだろうか？

「多少不機嫌になられても、やはりお聞きになりたい事は、直接御自分で旦那様にお尋ねられたらよろしいと私は思います」

それから、横島さんはアイステイと、見た事の無い揚げパンかドーナツのようなものを出してくれた。

「マンドジと申します揚げ菓子です。今の日本の小麦粉は質が良すぎまして、現地のものより随分穏やかで上品に仕上がりますが、これはこれでよろしいかもしれませんね。使うスパイスは地域差があります。ザンジバルではココナッツとカルダモンが入るのが普通でしょうか」

ほんのり甘くて、ココナッツの風味がする。三角のドーナツと言う感じだ。

「美味しいですね。ちよつと癖になる味です」

「お心の中につかえている事は、そのままになさらず、素直におっしゃればよろしいかと思えます。貴女様が心から御心配なさって、尋ねられる事なら、旦那様も悪いようにはお取りになりますまい」

「……わかりました。頑張ってみます。それに、このマンガジもありがとうございます」

「これは、ニスロクのした事です。昔の事もふくめてすべて、旦那様を受け止めてさしあげる事のできる方は、貴女様だけですから、ニスロクなりに昔のよすがと言ったつもりで作ったので御座いますよう」

夜、比較的早い時間に治さんが帰ってきた。

難しい仕事がつましく行ったみたいで、ほっとしたらしい。

「ちよつと、飲みたい気分なんだが、付き合ってくれるかい？」

夕食の時にそう言われて、結構しっかりワインを付き合った。

入浴後、寢酒にちよつと付き合う。

「どう？コニヤックは？」

「美味しいですけど、やっぱり強いですね。どうしたって、ゆっくりとしか飲めない感じ」

「チエイサーに水を飲むのは、有りなんだが、飲む？」

「下さい。ちよつと喉が渴く感じです」

冷たいミネラルウォーターが、やっぱりお風呂上りには一番良いかな……正直言って、コニヤックはまだ敷居が高い感じがする。確かに香りはよいんだろうけれど……

「香りを楽しむには、常温が一番だとは思っけれど、こういう飲み方は、どう？温度が上がるよ」

口移しで飲まされると、香りが強いみたいだけど……

「この飲み方だと、お酒の事なんてどうでも良くなってしまうです」「ふっ、そうだね。確かにもう酒はどうでも良くなってきた」

「あの……」

「どうしたの？」

「ブワナって、呼んでませんでした？私。多分、ザンジバルでの事なんじゃないかと思うんですが」

治さんは、重苦しい表情になって、溜息をついた。

「何か思い出したの？」

「それだけしか、思い出せませんでした。だから、ザンジバルがど
ういう場所なのか、今日ちよつと調べました。それと……横島さん
が、各地のスルタンの宮廷に出入りする奴隷商人だったって教えて
くれました」

「そこまで分っているなら、私がなぜ嫌な顔つきになるか、見当は
つかないか？」

「横島さんが言うには、私は大事にしてもらっていたみたいですし、
私の中で薄ぼんやりと浮かんた感情は甘くて切ない感じがしました。
でも、それだけなんです」

「大事にはしたね。でも、今にして思えば人間扱いでは無かった。
幼かった君に随分と無理をさせたよ。定めし今なら未成年者に対す
る性的虐待、とも言うべきかな」

「でも、時代的なものとか、文化的なものって有るじゃないですか。
少なくとも、私はブワナと呼んだ人を慕っていたのだと思います」

「実の兄に奴隷として売り飛ばされ、母親とも引き離された。買い
取った私に捨てられたら、どんな恐ろしい運命が待っているか分ら
ないと思つて居ただろう。主人に気に入られる為なら、何でもした
だろうな。それ以外に安全に生き延びる方法がとりあえず無いのだ
から……」

「それだけじゃ無いはずですよ。やっぱり、ブワナは愛されていたと
思います」

「ならば試すか？あの頃、私が君にやらせていた事を、今、またや
つて貰おうか」

「やってみます。何をすれば良いのですか？」

耳元で囁かれた内容は、確かに私は未経験でハードルが高かった。
「さあ、頑張ってくれ」

ああ、この人はやっぱり魔王様なのだとは納得していた。そして今まで感じた事の無い、不思議な高ぶりを覚えるのだった。

53 変貌

そのような行為に耽っている時ですら、彼女の顔は美しいのだった。

私の記憶に有る同じ魂の波動を帯びた儂げで幼い顔立ちとは、似ていても随分と雰囲気が違う。形の整った高い鼻梁から漏れる悩ましげな吐息も、軽く顰められた形の良い眉も、揺れているまろやかな双臀も、彼女が自分の意思でその行為を行っているのだと、私に雄弁に伝えているようだった。

ああ、そうか。君はかつての君が私を『本当に』愛していたと伝えようとしてくれているのか。こんな破廉恥な行為でも、私を喜ばせるためなら別に嫌がらず、いや、むしろ喜んでやっていたのだと、そう言いたいのか？

今まで閉じていた目が開いて、私の目を見上げる。美しいその瞳は強い光を宿していて、笑いを含んでいるようにも、得意満面と言うようにも見える。まるで悪戯な子供のようだね。そんなに面白いのか？

そうだな、自分で「頑張ってくれ」などと焚き付けておいて、いざ、君が頑張り始めたら、驚いてしまって、酷く興奮しているよ。ああ……悪くない……やけに上手いじゃないか。癪に障るよ、アリエル……

私はぴんとそそり立っている乳首の片方にどうにか手を伸ばすと、強く摘んで押し潰してやった。

「あっ」と声が漏れて、彼女の口が外れ、私の動きは自由になった。次の瞬間、私は彼女を膝の上に横抱きに抱え上げた。美しい双臀は

私の膝の上でむくむくと動いている。彼女は抵抗していると言うより、驚いているのだろう。

「悪い子だ。私を狼狽させるなんて」

口をついて出た言葉が、あの頃の自分の意識に繋がる。

「どこもかしこも君はとても綺麗だって、自覚は有るかな？無性にぶってやりたくなったよ」

瑞々しい張りの有る尻を優しく撫で摩ってから、一発、二発、平手でひっぱたいた。実に良い音を立てる。

「え？え、あの」

「びっくりした？」

「は、はい」

今度はベッドの上に押し倒して、彼女の上に覆いかぶさり、顔を見下ろすと涙目になっている。なぜ尻をぶたれたのかわからないのだろう。

「びっくりさせられたお返しだ」

「あの、いけなかったですか？ごめんなさい」

「別に怒ってない。でも、君に翻弄されっぱなしも癪だから、ビツクリさせて主導権を奪還、と言った所さ」

それから、深いキスを交わしながら、彼女の良い所を丹念に刺激してやる。

「本当に、怒っていません？」

「ああ。ただ単に尻をぶつてみたくなっただけだ」

「そんな事って、有るんですか？」

「有るよ。こんなに綺麗な尻なんだから、たまには真っ赤に手形を付けてみたくなる。キスマークみたいなものさ。確かに多少はマニアックな趣味だけどね、でも、君がやった事程度には普通だろう」

「私のお尻で良かったら、いつでもどうぞ」

「じゃあ、その内、真昼間に会社で服を着たまま、なんて言うのも頼む。近頃は神経の張り詰める仕事が多くてね。きつと良い気分転

換になるはずだ」

「そ、そんなの……」

「ダメなのかい？」

だめじゃないですけど……恥ずかしい、と彼女は呟くと、自分から私にしがみついていた。恥ずかしいから、余計にそそるんだと応じてから、キスを浴びせ倒して追い上げる。

「その内、君に翻弄されっぱなしと言うのも悪くないと思うようになるだろうが、まだ、主導権は渡せない」

「私には荷が重いです」

「いやいや、君は大いに将来有望だよ」

成長する有望株は、今夜もまた新しく一步前進した。少なくとも私はそう感じた。

「私、やっぱりザンジバルに居た頃も、旦那様を愛していたと思うんです。何だかその頃の自分の感情が時間を飛び越えて、今の私の中に入り込んできたような気がするんです」

「そうか。なら、そうなのだろうな。あまりに若いうちに病で亡くなってしまったからね、体の弱った子供に無理を強いてしまったのではないかと、後から反省したりしていたのだよ。ん？何か言いたいのか？」

「本当に反省はされてるんでしょうけど……」

「けど？何？気になるじゃないか」

「その、気分転換ですか？エロオヤジ、入ってるな……なんて思います」

「ふっ、何を今更。女奴隷を扱う商人なんて言う職業的エロオヤジの成れの果てなんだよ。入っているどころか、そのものさ。年中不埒な事を妄想しているんだよ」

アリエルは少し顔を赤らめて私をちよつとにらんでいたが、急に表情を和らげると「それでも、構わないです」と呟いて、体を摺り寄せてきた。

「若いうちに亡くなったって、どの位一緒に暮らしたんでしょうか？」

「私の所に来た時に、十三歳だったらしい。あまりに痩せていて、もつと幼く見えたけれど、毎日食事をきちんと取るようになったら、すぐに娘らしい体つきになって、月の物も来たよ。ずっと私は寢床を一緒にしていたけれど、三年目になると咳をして血を吐くようになった。結核だったのだろうが、当時は治療法だって何も有りはない。別れの時が迫って居るのを毎日見つめ続けるのは、切なかった。自分は病で死なない体なのは自覚していたから……あの子が消え入るように息を引き取ったのは、十八歳だった」

やせつぽちな体で、あの子は幾度も「抱いて下さい」と言ったものだった。結核は性欲を亢進するなどと言うが、どうなのだろう？ 死の恐怖が孤独を恐れる、あるいは生殖へと意識を向かわせる、そう言った事なのではないかと私は思う。

体に負担をかけると知りながら、私はその願いを撥ね退けなかった。受け入れても拒否しても、恐らく死期は大差無いと思われたならば、せめて孤独だと思わずに居てくれた方が良く、そんな風に思ったのだ。

「あのあたりの墓は何とも簡素なものだが、それでも私は墓を守るようにハイビスカスの花を植えた。そして次にアリエルの魂が生れ落ちる場所の気配を探り続け、その気配の方向が僅かながら感じ取れた時、私はサリエルやニスロクと共にあの町を去ったのだ」

「次はどこだったのですか？」

「それもまた、アリエルの記憶が十分に戻れば判る事だ」

それにしても、ローマからザンジバルにいたるまでの転生の記憶は抜けているようだ。年代順に記憶が復活すると言うものでも無さそうで、その辺りは私にも興味深い。

「ザンジバルに来る前の事は、思い出せないのだよね？」
「ローマとザンジバルの間にも、色々有ったのですか？」
「ああ。そうだよ。だから、どういう条件で記憶が目覚めるのか、私も不思議に思う」

「今回は、スワヒリ語に関する話が引き金のような気がします」
「ならば、関係有りそうな話をアリエルが私とすると、目覚めるのかな？」

「そうかも知れませんか」

「順番から言うと、ローマのすぐ後が必要な気がするよ」

「そんな事出来るでしょうか？」

「試す価値は有るかもしれないな」

サリエルやニスロクと共に、ローマよりずっと東の国に移り住んだ事を先に思い出すべきか、それとも神であつた頃や天使にされてしまった頃の事を先に思い出してもらふべきか、悩む。まずは魂が覚醒した者達と相談するべきだろうか。

「やっぱり、子供達に相談した方が良さそうですね」

「そういえば、明日はベルゼバブの所で茶道の稽古か。確かバルベリトも来るのだよね」

「ええ、その予定です」

「ならば、あの二人の意見を聞いてみようか」

「確かにそれが一番確かも知れませんか」

明日のアリエルは鴉色とぎと言うのか柔らかなサーモンピンク系の色無地に、柳色に金銀系の濃淡で織り出された雪輪模様の紗の袋帯で、出かける予定だ。小物に至るまで私が見立てた訳だが……

「着物は暑いかな？やめておくかい？」

「せっかく見立てて頂いたのですし、着物も着慣れないといけませんよね」

「じゃあ、頑張るか。先ほどの頑張りとは、随分方向性が違うけどな」

「……でも、どっちも頑張った方が良いでしょう？」

「頑張りすぎると……まあ良い。さっきみたいなのも楽しいよ。無理さえしなければ、アリエルのやりたいようにやってくれて構わないんだ」

「本当に？」

「その……ぶつたのは、ちょっとした脱線と言うか、楽しみと言うか、その範囲だよ」

「もう、本当にビックリしました」

「そうか？私のほうがビックリさせられたと思うよ」

明日のアリエルは、お淑やかに着物を着こなして楽しませてくれるだろう。そのときどきで驚くほど変貌するこの美しい我が魂の番に、私はこのごろは驚かされる事が多いと感じている。

54 脚下照顧（前書き）

脚下照顧は「履物をそろえなさい」と言う意味も含めて、禅宗のお寺の玄関なんかで時折見かけますね。宗派はあんまり関係無さそうです。

54 脚下照顧

「いやあ、良くお似合いだ。こんなに素敵に着物姿が拝見できるなら、無理をしてももつと真面目に通えばよかったですなあ」

バルベリトが手放しでアリエルの着物姿を褒めた。

何時もはにこやかな亭主役のベルゼバブが、今日は時折何やら難しい顔をしている。それにしても、ベルゼバブの着物の懷から、奇妙な波動を感じるが、何だ？

「そうそう、サンダルフォン・メトロンの兄弟を朝茶にお招きしますよ。父上のお話を伺っていたら、母上にどの時期の過去生を知って頂くべきか、と言う課題が見えてきましたが、私は何事も原点が大切だと思います」

ほほう？それで、今日の掛け軸は「脚下照顧」なのか？

「……それでベルゼバブはあの百目鬼兄弟ひゃくめくを招待するのか」

「ええ。あのお二人は母上の御着物姿に大喜びすると思います。父上としては御不快ですかね？」

「美しいものは誰が見ても美しい。あの二人なら、さほど腹も立たんよ」

「……あの、お軸の言葉は何と読むのですか？」

アリエルは知らなかったようだ。

「キャツカシヨウコ。脚下を照顧せよ、とは禅の言葉でして、自分の足元を良く見ると言う意味です」

「ベルゼバブは母上が神であられた頃の事がまず基本、そういう考えなのか？」

「バルベリトの考えは違うのか？私は何事も、原点・基本・出発点、そうしたものが極めて重用だと思うが」

原点が大切にしても、何かそうした記憶を引き出すきっかけとなるような物なり事柄なり、心当たりは有るのかとベルゼバブに尋ねると、懐から五センチ四方程度の大きさの粘土板のかけらを取り出し、私に手渡した。奇妙な波動は、これから出ている。それにしても世界最古のアルファベットなどといわれる文字でしるされたこの文章を自由に読みこなせる人間は、世界でも五人と居ないだろうが……

「確かに、あの頃の物だ。しかも不思議な力を帯びているな。これを一体どこで？」

私の問いに対してのベルゼバブの答えは、こうだった。

「アラビア語圏の或る国の小さな海沿いの町に残る遺跡を以前フランスの調査隊が発掘いたしました。そこはかつてはオリエント世界を代表する港でした。そうです。父上の大神殿に守護されたあの街です。つい最近、かの国で我が社の自動車の販売代理店を立ち上げる話が有りまして、そのついでにかの場所へ立ち寄った際、ふと目について拾い上げました」

「元来は私に捧げられた大神殿であつたらしいが、祈る人々の呼び掛ける名はベルゼバブ、お前のものだった。まあ、だからお前の神殿と言つて良からう。眺めの良い場所に立っていたから、様々な場所からやってくる船も良く見えたのを思い出すよ」

「この粘土板はかの街に居た、私の友人の個人的な図書館に納められていた物です。遺跡の中で私が気になった場所がたまたま、その図書館のかつての所在地だった、と言う事のようにです」

「兄上、それが一体どのような意味を持つとお考えなのか？」

バルベリトが珍しく『兄上』と呼びかけている。それは、ベルゼバブの話を彼が重大な物として受け止めているという事に他ならない。

「父上のもう一人の妻であつた狂える女神、恐ろしき伯母上が、現在この人間世界に降臨している可能性が有ります」

「人の世に降りる以前から、あれと私とは妻でも夫でもない。はっきりそれは言い渡して有る」

「ですが伯母上はそれを受け入れてはおられない。それでも父上が母上を追つて人界に入られて以降、ずっと魔界でそれなりに落ち着いてお暮らしてしたが……」

「この粘土板が伝える事が真なら……兄上……」

バルベリトは粘土板を見て冷や汗をかいている。

「今生の母上は大変危ない」

何時もは陽気なベルゼバブには珍しい沈鬱な口調に、アリエルは何が何なのかまるでわからない、そんな表情をしている。

「父上、ひょっとして母上は伯母上の事も、御自身との係わり合いについても覚えておられぬのですか？」

ベルゼバブは自分で言い出しておいて、少々慌てている。

「そうだな。だが、お前があの神殿がかつて有つた場所の近くで、そのような物を拾うという事自体、大切な知らせとも言ふべきだろう。その図書館を持っていた男は、確かお前が初めて友とした人間で有つたよな」

「はあ。人の短い命に不似合いなほどの力のある魂を宿した男でした。どこぞに転生しておれば、また付き合いたいものです」

「兄上の友となるような男、やはり特別な力が有つたのでしょうか」
「予言の力が有つた。そして、この粘土板は我らが母上の危機をお救いするための警鐘でも有る」

「兄上、ここは、やはり母上に御説明申し上げるべきでは？御記憶

が無い様だから、お辛い話でも有ろうし、如何したものかな」
バルベリトの言葉はもつともだった。

「そうだな。やはり、父上が御説明下さい。御夫婦の機微に関わる事でも有りますし。一服召し上がって、後は御邸で御二人きりでお話下さい。その後の事は、また、明日にでも伺えば、私は構いませなので。私はこの粘土板を書き記した男の魂を探ってみます。頼りになる男です。このかけらを拾った時から、既に日本に転生してくれて居るのではないかと感じております」

それからベルゼバブは姿勢を正し、流れるような作法で我々に茶を振舞った。

「母上、私が不用意にお心を騒がすような事をあれこれ申しましたが、やはり、はつきり思い出されたほうが良い事なのだと思います。父上の御気持ちは、ずっとずっと昔から母上にのみ向けられておりますから、その点は決してお疑い無きように」

別れ際、ベルゼバブはアリエルにそのように言い、私には密かにこんな言葉を伝えてきた。

（父上に母上以外の妻が存在した事自体、受け入れがたくお感じのようです。伯母上の呪いと恐ろしいまでの執着についてお話なさるべきだと思いますが、出来ましたら、その、うんと愛でて差し上げるとよろしいですな。何とも差し出がましい申しようですが）

魔界の隠された女王にして私の妹であり、かつては妻でもあった、戦いと殺戮の女神であったアナト。

自らの息子が私に対して不敬で有ったと言う理由で、些かのためらいも無く殺してのけた狂気の女神でも有る。

「我が背の君、あなた様こそが私の宝、私の憧れ、私の全てなのです」

血に塗れたその美しすぎる顔は、禍々しかった。

かつては私に対する強い執着故に、もう一人の妻で妹でもあるアリエルを殺害しようと幾度も試みたものだった。アリエルが天使にされてしまった以降は、魔界で落ち着いていたようだったが、アリエルの人界における最後の転生が近いと知って、再び不気味な動きを始めたらしい。

あのアナトがこの人界に降臨し、最後の転生を迎えたアリエルの魂の殲滅を企んでいる……ならば、私も総力を上げてアリエルを守らなければなるまい。

帰りの車の中で、私は震えているアリエルを固く抱きしめながら、確かに自らの足元を良く見直すべきだと強く感じていた。

55 妄執（前書き）

お久しぶりです。ゆっくりですがちゃんとラストまで、更新します。

「我が背の君、相も変わらずその者を傍らに置いておいでですね。あなた様の傍らに有るべきなのは私だけですのに。その者を永遠に滅すれば諦めていただけるかしら」

似ている。声も姿も。アリエルに……だが、何と禍々しい気配を背負っている事か。私の夢の中にまで勝手に入り込んで腹立たしい。「アナト、立ち去れ。再びこのような事をするならば、私もただではおかない」

「フッフ、背の君はお優しいからそのようにおっしゃっても、結局のところは何もなさいませんでしたわ」

「魔界から出る事を禁じていたであらう」

「番をしていたはずの者たちも今はおりませんの。うるさい者は片づけてしまいましたし、私を恐れる者はしもべとなりましたから。まずは背の君が私からお取り上げになった記憶を取り戻して見せましょう」

魔界のそれと知られた剛の者を番人に付けた筈なのに、気配を探ると確かに消滅していた。人の時間で約四千年ばかり、任せきりにしていた。私の監督不行き届きだ。だが、それほどの者が命を魂を失う瞬間の苦痛の波動も何も感じなかったのだ。……それに取り上げた筈の私の真名に関する記憶も、アナトなら取り戻してしまいうだろうか？ なかなかに恐ろしい話だ。

「あら、私はそのような無様な殺し方は致しませんの。苦痛を感じずるいとまも無く瞬殺ですわ」

「ほう」

瞬殺か。魔界で一軍の将たる者が、一瞬で魂まで消滅させられたとは……恐ろしい奴だ。

「背の君のようにお強い方は無理ですけど」

「さあ、どうだろうな。私もアリエルもいつその事瞬殺して、お前が全ての魔物に君臨するの？」

「そのような事に興味は御座いません。背の君に私の想いを受け入れて頂ければ、それで十分なので御座います」

「お前の『想い』とやらは禍々し過ぎる。とても無理だ。そのような物を受け入れるくらいなら、いつその事私が消滅した方がましだ」

「つれないおっしやりようですこと」

「私はお前が心底嫌いだ。思っただけで吐き気を催す。憎ければ私の命を狙えば良からう。今のアリエルはお前の事など何一つ覚えていないのだから」

「まあ、これほどお願いしておりますのに」

「アリエルに手を出せば、ただではおかんぞ」

「まあ。ならば、アリエルを必ずや殲滅致しましょう。魂のかけらの一つも残りませんようにすっかり綺麗に片付けて御覧に入れます。そうでも致しませんと私の方を振り向いては下さらないようですから。お怒りにせよなんにせよ、無視され続けるよりずっとましですもの」

「……おさむさん、治さん？　どうなさったの？　うなされてらしたわ」

アリエルの声だ。アナトと似ているのになぜこうも、受ける感じが違うのだろう。魂の目指す志向性の違い、私に対する『想い』の有り方の違い、そこがこうも真反対であるとは……何とも不可思議だ。光があるためには闇が必要……なのかもしれない。だが、アナトを傍らに置くことなど有り得ない。出来ようはずも無い。考えただけで腹立たしく、危険で不愉快極まり無い存在をどうして愛する事など有りえようか。アナトの『想い』は我が災厄の源であり、唯一絶対神による排斥よりも厄介な危険である。

「アナトが夢に入り込んできたのだ」

「戦いと殺戮の女神で、かつては私の姉だったと言う？」

「そうだ……」

「そのう……一夫多妻って状態もなじみが無いんですけれど……私も……妹であつたのですよね。それなのに妻でもあつた……そうなんですよね？ そのう、人間とは……違うんでしょうけど、近親相姦って言う事ですか？」

「神にも悪魔にも、人間のような近親相姦と言う概念自体も禁忌も無い。互いが愛しければそのように縁を結び子をなす。それだけの事だ」

「アナトと言う方との間にも子供が居るのですよね」

「息子と娘が居たのだが……アナトによって消滅させられた」

「ええ？ 自分の子供を？」

「ああ」

「どうしてまた……」

「息子は父たる私に対して敬意が足りず、行いが無礼だと言う理由だった。娘は……美しく愛らしかったが、私がその姿を見ると微笑むのが許せないとの理由だった……」

「そんな……そんな理不尽な」

「私が一番微笑みかけるのがアリエルに対してだから……アリエルは狙われるのだな。実に理不尽だ」

「……私を狙うのは嫉妬心の有り方として、理解は出来そうですが……消滅させると言われて『はい、そうですか』とは参りません」

「当然だ。嫉妬も恋心を掻き立てる刺激になる程度ならば、ご愛嬌だが、アナトの凄まじい感情は神としても悪魔としても度を越している。あれほど禍々しい気の持ち主であるから、人の姿かたちで長く人界にとどまるのは無理だ。少なくとも、これまでは無理だった。転生をした経験がこれまでは全く無かつたのだ。当然、人に対する

共感もまず成立しない。あの性分では有るし……ひたすら荒ぶる女神であった頃の猛々しさを純粹に保ち続けていた。混じり気の無い悪意、あるいは殺意、そうした存在だ。だが、どういう経緯が有ったのか、よりによって人の形を取ってアナトが、あのアナトが転生したのと言う。人の心の動きを知った上で、どのような悪辣な手を使って我々を狙うのだろう……厄介だな」

「悪意や殺意の塊の癖に、治さんを愛しているのですか？」

「あれは愛などと言うものではないな。凄まじい執着ではあるが。不愉快極まりない厄介な強い感情だ」

「そうは仰つても、かつては妻であつたし……転生したとは言え、昔のままの、妹であつた頃の感情だってそのまま生きて居る可能性は大きいですね？」

「その昔のままと言うのが、実に危険なのだよ。アリエル」

アナトは古の神としてのありようを保ち続け、魔界の力を取り込むという形で長い時間存在し続けて来た。恐らく……唯一の妹にむけた強烈な憎悪と、夫であり兄である存在を自分だけの物としたいという渴望はいかに時を重ねようと薄まりもしないし、穏やかな形で落ち着くと言う事も無い……そのような形でもたらされる平和をアナトは常に拒絶していたのだし……平和な状態でもたらされる穏やかな落ちつきも、アレには墮落としか感じられないのではなからうか？

「サンダルフォン、メタトロンの兄弟達の知恵を借りよう」

「そういえば百目鬼さんのご兄弟は、以前音楽とお二人の作品をコラボレーションさせた展覧会を七月に開くっておっしゃってましたね」

「ああ、そうだったな。会社の方にオープニングイベントの招待状が届いていたよ。一緒に出かけようか」

「ええ。是非」

兄のサンダルフォンが画家、弟のメタトロンが彫刻家の芸術家兄弟は何やら新境地を切り開いたらしい。

「アリエルは是非着物でおめかしして行かないとね」

あの二人が言うには、アリエルの着物姿は非常に芸術的なインスピレーションをもたらしてくれるとかで、きつと期待しているのだろう。紹介者であるベルゼバブが「母上には和服で美しく装って頂きたい」とわざわざ念押ししていたぐらいなのだから……

「ええ。是非……あの御兄弟はかつては巨大であつた三十六枚羽の天使なのですよね？」

「ああ。アナトを打ち滅ぼす為に、天使達の持つ力と同質の物が恐らくは必要だ。ルシファアの導きにより私の内にも天使と張り合えるような力が生じてはいるが……」

残念な事だが……アリエルとの間に子が生まれるほどにはまだ我々の縁が深まつてはいない。今のタイミングで子がいると逆にアナトに狙われかねない。心配だ。だがしかし、人として生まれたとしても、私とアリエルの子なのだから常の人の粹には納まらない存在であるのも確かだ。ベルゼバブやバルベリトは、生まれる子の力も借りなければ、アナトとの対決を乗り切れないかもしれないと言う。とりわけベルゼバブは我々の子に大いに期待しているらしく、こんな風に言つたのだ。

「父上と母上の御子です。並みの存在の訳は有りません。きつと最もふさわしく、最も母上のお力となりうる時期を自ら選び取るのではないのでしょうか？　いつ御子が授かつてても良いように常日頃からお二人が細やかに思いを交わされる事こそ、最大の防御となりうるかもしれませんぞ。私のかつての友も、その御子の導き出す縁につながつて姿を現すかもしれませんし」

疑う訳ではないがアナト転生の予言を残したベルゼバブの『友』、人の短い命に不似合いなほどの力のある魂を宿していたという男が、

今この日本に本当に転生しているのだろうか？　ベルゼバブの予知能力は高い。ああまで言うのだから、こちらとしてもあてにして良いのかもしれない。だが……その『友』は我々の子供が存在した方が出会いやすいと言う事の様だ。

「予定より早めに子供を作ろうか、どう思う？」

「私は大学を卒業できれば、一年ぐらい休学しても構いませんけれど」

「剣道部も明日あたりから試験休みだね。八月上旬までかな？」

話をしながら手の方は抜かりなく働いて、アリエルの官能を煽る。「ええ、そうです……ああ……」

大阪で初めて愛し合ってから、まだ数か月だがどこか少女めいた愛らしさの勝っていた胸の膨らみはすっかり手になじむようになり、豊かさも増した。まだ恥らうてうねらせる腰が何とも愛らしく艶めいている。手を下に動かしてくの字によりり立てた脚を摩り、もうすでにたつぷり露を含んでいる肉のとじ目をそつと愛撫する。

「……んっ……ああ……」

「そんな、唇を噛みしめないで。聞いているのは私だけなのだから。柔らかい唇をくすぐるように舌を差し入れてやると、待ちかねたように熱い舌が絡みついてくる。春からすれば随分な進歩だ。唾を流し込んでやると、やるせなげに喘ぎ、喉を鳴らして飲み込む。腰も、より深い悦びを求めるように自然と動き始める。」

「そうそう、その調子だよ」

私の動きにつれてアリエルは、アッ、アッと可愛い喘ぎ声を漏らしはじめている。のけぞって花びらのような唇を半ば開き、艶やかな黒髪を振り乱して桜色になった顔を切なげに振っている様子はいじらしくも愛らしい。やがてじれったそうな睨り泣きが始まり、その声が高くなってきた。

「よしよし、じゃあ、ここにまたがって」

アリエルの上体を次第に抱き起して、脚を大きく広げて私の胡坐

をまたがせる。

「は、はずかしい」

完全にまたがらせた腰をぐっと胡坐の中に抱き込む。

「抱っこされるの、嫌いじゃないんだろう？ ん？」

アリエルの息遣いが荒い。声が出ないという感じだ。私の物に体が馴染むまで突き上げるのは控えて、強く抱きしめて口を吸ってやる。前から滴るもので濡れている後ろの菊の蕾にそっと触れてやった。

「んッ、ッッ……」

ふさがれた口の奥から悲鳴が漏れる。身悶えが激しくなり私の物が強烈に絞り上げられる。投げ出していた白い脚が腰に激しく絡み一旦口を放して上体を大きく反り返らせ、また激しくすがりつく。それに合わせてこちらにも突き上げを激しくする。

体を振るように身悶えして泣き声を吹きこぼした。合わせてしたたかに爆ぜると、アリエルは私の肩に噛みつきながら一声高く泣き、ガクツと一気に崩れた。

「さあ、子供は出来ただろうか？ どう思う」

アリエルは意識を取り戻したが無言だ。顔を真っ赤にして、自分から口を寄せてキスを求めた。それに応えてやりながら、先ほどからの激しい行為の名残をとどめた辺りを、指で弄ってやると腰を揺らめかせ、再び啜り泣きを始めるのだった。

56 愛咬（前書き）

ええっと、何か微妙ですが、後半ベッドシーン（苦笑）

56 愛咬

すっかりクーラーの効いた美術館の中ならば真夏でも着物を着るのもさほど暑苦しくは無い。御茶席では立居振舞も色々気を使うが、そんな面倒事もない。

『百目鬼兄弟展』のオープニングセレモニーは大盛況だった。

治さんが言うには「そろそろ僕らが結婚する予定なのだとお披露目するべきかもしれない」との事で、報道関係者がいても堂々としていれば良いのだと言われた。概ね経済界ともゴシップ記事とも関係ない美術・文化関係の記者やカメラマンばかりのはずだから、大した事も起らないだろうとは言われたが……

「何もわざわざポーズまで取ってやる必要なんて無いからね」

事前に治さんにそんな事を言われたが、誰にもそれらしき人には声をかけられなかった。

「明日あたり、ゴシップ系の新聞に出そうと考えている記者はいるなあ。まあいい。圧力をかけておくから」

私には感じられないけれど、治さんにはそんな思惑を持った記者がいると感じとれるみたいだ。私の気がつかない内に結構な数、写真を取られていると耳打ちされた。でも、発行部数の多い新聞は大抵圧力をかけられるらしいから、少なくとも一般人である私の顔をマスコミにさらさないようにするぐらいの事は出来るらしい。

「ねえ、何か強い視線を感じませんか？」

「視線？ 視線だけかい？」

「ええ。それだけです。気配も何も感じないのです」

「アリエルが感じるのに、なぜ私には感じられないのか……」

治さんの表情は暗くなった。

「アナト……でしょうか？」

「恐らくは」

「なぜ、私には視線が感じられるのに、治さんには感じられないのでしょうか？」

「あれの力だろう。私の探りを回避する事ぐらいたやすくやってのけるだろうから……やはり、既に我々の近くに人として存在しているのだろうな」

私たち二人が顔を見合わせて、溜息をついていると、百目鬼の御兄弟が声をかけてきた。御兄弟は紋付に羽織袴姿だった。以前お会いした時もそうだったが、よほど特別な事情でも無い限りいつも着物を着ておいでらしい。日本とは随分色々違う場所で生まれ育った方たちなのに、着物に対する思い入れは深そうだ。

「お出で頂きまして、ありがとうございます。艶やかな御着物を拝見できて実にうれしいですぞ」

「ようこそお出で下さいました。御着物姿でお出で下さって、本当にありがとうございます」

「お二人に喜んでいただけで、良かった。な」

私はなるべく穏やかに微笑もうとしたのだが、アナトのことが気がかりで何処か引き攣った顔になった。

例によって百目鬼の御兄弟はお二人揃って話し、風変りなハーモニーが響く。奇妙と言えば奇妙だけど、なぜか明るい楽しい気分になるのは、お二人の人徳かも知れない。

「ああ、あの厄介な方ですね」

「ああ、大変でしょうが」

お二人は同時に不思議な微笑を浮かべて、私たちを見た。

「何、我々も見張る事に致しますよ。勝手なまねをされるのは嫌ですから」

「見張り役は得意なのですよ、我々は。平和な暮らしを脅かす禍々しい気配は御免です」

御兄弟と私たちの四人は自然にゆっくり歩いて、不思議な形の彫刻と背景のようにして置かれている大きな絵の前に出た。

「彫刻はかつての我々兄弟の姿。真の姿を写しております」

「絵はこれまでの過ぎ去った長い時間と、これからまだまだ続く未来を示しています」

確かにそのブロンズ彫刻は治さんによれば「かつてのサンダルフォン・メタトロンの姿そのまま」の極めて写実的な彫刻なのだが……美術系の記者たちは「抽象的」な作品だと誤解しているらしい。

「こんなにたくさん羽が生えている天使と言うのは、造形的にはバランスが微妙ですな」

「かつての姿は、正直な話、作り手のデザインセンスに問題が大有りですな」

「デザインセンスが悪いと言う理由で、神を批判する天使なんて我々だけですかな」

「デザインセンスだけではなく、バランス感覚も問題ですな」

「そうそう。唯一絶対と天使にも人間にも言わせすぎです」

「唯一絶対なんて、絵空事です」

ずいぶんとまた、お二人の立場にしたら過激で危険な事をおっしゃっている。それだけ、唯一絶対神を名乗るあの神のグループと現在とは距離を置いていると言う事なのだろう。

「この国は八百万の神がおいでだ。だからこそ美しい」

「この国に身も心も馴染ませるのは心地良いですな」

「ですから我々は着物が好きなのでしょう」

「着物は良いですぞ、実に」

なるほど、着物でこの日本の神々と自分の心身を馴染ませる、そんな効果を感じておられるのかと、初めて合点が行った。治さんも頷いて「私ももっと着物を着ようかな」と言っている。

絵の方は彩り豊かで、じっと見つめていると忘れかけていた様々な過去の出来事が思いだされそうになるのだが……結局は思いだせないのだ。だが、大きな白い繭のようなものは、バルベリトを生んだ時に私が包まれていた繭を描いているように思った。

「そうですね、その通りです」

「その調子で、他も思いだせると良いですな」

お二人は不思議な光を帯びた視線を一瞬、私の上に向けた。『私が色々思い出すことを望んでおいでなのだろうか？ あるいは思い出すべきだと考えておいでなのだろうか？』

「お二人はこの頃の事も御存知でしたか」

治さんは少し驚いていた。

「我々、これでも千里眼ですからな。あの時は、ただ見ていただけでしたが」

「美しい思いの交わりと新たな高位の神霊の誕生ですからな。実に印象的でした」

「あの頃からでしたな。見ているだけではイヤになったのは」

「見ているだけでは言葉や思いを交わせませんからな」

「お二人が絆を取り戻されて、更に新しい絆が生まれる。それは実に良い事です」

「不躰にならない程度で宜しいのですが、我々にも見せていただきたい物だ」

「昔も、あなた達お二人がおいでの場合には、美しい気配があつた」

「今は昔とはまた違う、心引かれる気配が有りますな」

「うるさく物騒な存在がやってきそうですが、今のお二人なら大丈夫だと信じております」

「我々も及ばずながら、お役に立ちたいと思っておりますよ」

どうやらこの、絵も彫刻も、そして流れてくるゆったりした音楽も、御兄弟の力がみなぎっているようだった。『私』の覚醒が目的と言つわけでもないだろうが、覚醒を促す働きが有るらしい。御兄弟は「作りたいように作ったら、こうなってしまうただけのことですが」と笑つておられたが……

家に戻るとすぐにシャワーを使い、早めの夕食を済ませた。夏の太陽は沈むのが遅い。早めに寢室に籠り、夕日の差し込む中、当たり前のように二人で愛し合った。

「あの御兄弟の『不躰にならない程度』と言うのはどの程度だと思つ？」

「さあ……」

「一部始終を見ているとは思えないが、私たちの互いの気配、波動、そんなものを『美しい』と感じておいでのようだ。わざと見なくても見えてしまうのかもな……」

「恥ずかしい」

あのご兄弟が美しいと感じたにしても、何か覗き込まれているかもしれないと言うのは、やはり恥ずかしい。

「確かにアリエルは恥ずかしいかもしれないな」などと自分がその原因を作った張本人の癖にその事は何とも思っていないというような口調だ。声が穏やかで口調も平静なのに、どうしても行動は淫らで激しいのだろう。

「お願い。お水が何か下さい。ちょっと休みましょう」

「水はいつものミネラルウォーターで良いだろう？」

すぐに飲ませてはくれたが、口移しだ。休みの方は認めてくれる気は無いらしい。若いのに何を言う。夜はこれからだよ。そんな事を言いながら、繋がったままの体を解こうともしない。

「……許して……」

「許すも何も、本当はアリエルだって物足りないはずだ。もっと自分に正直になりなさい」

「……だって、だって」

「恥ずかしがりやだな。もっと思い切って、のめりこんで……ね？」

最後の「ね？」は反則だ。熱く囁かれて耳朶を甘噛みされて、私の内部は自分でも良く分からないような動きを始める。何とまあ……欲張りなのだろう。全てを一滴残らず飲み込み、銜え込み、絞り上げようとする。

「そつだ。その調子だよ」

声の調子からすると、明らかに喜んでくれている。だから、これで良いのだろう。幾度か小さく波が来て、大きな波の後に意識を飛ばす。するとそのたびに、また呼び戻されて……クタクタなはずなのに、まだ欲しい。

「もしも子供が出来たら、面倒事は出来る限り私が引き受けるよ」

無我夢中で何が何なのかもう、わからなかった。治さんの声は穏やかに落ち着いている。でもどこか、先ほどまでの強烈な熱っぽさをまだ帯びているように思う……そうであって欲しいと自分が願っているせいかもしれない。我を忘れてしまったのが自分だけと言うのは、恥ずかしすぎる。子供？ 実感は無い。無いけれど、目の前のこの人が望むなら子供が欲しいと思った。

「……恥ずかしい」

幾度も獣じみた声を上げて、ひどく恥ずかしい形で乱れに乱れた

……

「何が？ 何も恥じる事など無いだろうに」

頬を寄せたその肩に、噛み跡が残っている。先週も噛んだ同じ場所だ。

「ああ……ごめんなさい……こんなに血が出るほど噛んでしまった」

「気にする必要など無い。感じてくれたからだろう？」

「痛みませんか」

「気にならないよ、全然。アリエルが強烈に感じてくれた証拠だから、寧ろうれしいさ」

「あっ……だ、だめっ」

「いけないの？ 明日はまだ休みだろう？」

悪戯な指先は冷めかけた熱を、また煽る。嫌ではないけれど……ちよつと、怖い。

「気が、気が変になっちゃいそうなんです」

「なつても構わないじゃないか」

「なつても構わないのだろう。だけど……」

「恐い……恐い……自分がどうなってしまうのか……ああっ」

自分でも知らなかった感覚、快感、思いもかけない激しい感情。もうとても無理と思っていたのに、私の体は貪欲だった。

「感じてくれているね」

返事なんて出来ない。ただ、機械仕掛けの人形の様に首をかくがくと振るのが精一杯……気が付くと夜が明けていた。どうにか運ばれた朝食を食べて体を清めた後も、昼も、そして夜も、一日中ベッドとバスルームを行き来しただけで終わってしまった。

「互いにいっぱい体に印をつけあったね……ほら、ここにも、そしてここにも」

キスマークのつけ方も知らなかったのが、遠い日のことのような気がしてくる。

「ああ……服を着た時に、見えてしまわないかしら」

「アリエルが私を欲しがってくれた証拠なのだ。皆に見せびらかしてやろう。肩が一番噛みごたえが有るかい？」

面白がっているような、楽しんでいるような声……

「は、恥ずかしい」

体中で甘え媚びてしなだれかかっている自分に気が付く。素肌と素肌を合わせる心地良さに浸りきる。もう離れたくない。多分もう離れられない。誰にも譲りたくないし、誰とも分け合いたくない。私だけの大切な人……

「こうして抱いていてあげよう。おやすみ」

自分が主人に媚びる愛玩動物にでもなった様な気がする。大好きな御主人様に抱きしめられるのは、ペットにとっては至福の時間だろう。散々煽り翳った同じ手が、優しく背中を撫でている。さすがに明日は平日だから、もう穏やかな眠りの態勢に入るのだ。

「おやすみなさい」

言いたい事はたくさん有るような、何も無い様な……ほっとした

のに、何か物足りない。丸一日互いに貪りあうように愛し合ったのに……でも、夢を見る事もできそうもないくらい疲れた。疲れたけれど、幸せだった。

57 絶叫（前書き）

かなりエログロです。ナンセンスかも。

「実に、実に腹立たしいですわ」

相変わらず夢の中のアナトは血にまみれていた。

「なぜ未だにお前は血まみれなのだ？」

「氣に入らぬ者、怪しからぬ者は片端から片づけておりますから」

「人として転生したのであるう？ そのような禍々しい氣配がきつ

い人間が傍に居れば、私もアリエルも感じ取れそうなものの、

お前の視線以外何も感じられない。さすがと言うべきか」

「困った者だとお考えなのですね」

「無論だ」

「哀れとは、お感じになりませんか？」

「冗談がきついな」

だが、これほど禍々しい魂を宿した人間は一体どこにいるのだろうか？

アリエルは視線だけをいち早く感じ取った。私が感じ取ったのはアリエルに促されてから随分後だ。

「なぜアリエルが、真っ先にお前の視線を感じたのだろうか」

「元は同じ存在から生じた姉妹ですから」

そこで夢は途切れた。そして、苦しげなアリエルの呻き声で目が覚めた。

「いやあ！ いやあよ、血まみれ、血まみれだわ」

アナトの仕業だ。間違いない。

「アリエル、アリエル、悪夢から目覚めなさい。私はここに居る」
震える手が夢の禍々しさを伝える。美しい目が開き私の顔を確認した途端、その目に悦びと安堵の色が浮かぶ。まるで暗闇の中に明るい光がさすような……そんな眺めだと、ふと思う。

「ああ、よかった、御無事で」

私が血まみれになって死んでいる夢を見たのだろう。

「アナトは私も殺す事に決めたのかも知れないな。まあ、殺されるつもりは全く無いが」

「とんでもない、とんでもない話です。憎い私だけでなく、愛しているはずの方を殺したいなんて」

「アナトが考える独り占めの仕方は、そういう形なのだろう。たとえ殺したとしても、アナトが私の愛情を得る事は未来永劫無いのにな」

すると冷え冷えとした、怒りに満ちた……ぞつとするほどの怒りに満ちた静かな声が、いきなり脳裏に響く。

「未来永劫？ 未来永劫？ 未来永劫ですの？ 生まれ変わり死に変わり、何万年の時を経たとしてもですの？」

「ああ、ああ！ そうだ！ アナト」

私はヒタヒタと押し寄せる不快な波動に思い切り逆らって、叫んだ。

「未来永劫、絶対に有りえないのだ！」

許せない、許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない！

アナトの怒りが膨れ上がり巨大化し、周りを押し包み、私に向かって放たれようとした瞬間、真っ白い羽が私を包んだ。

「だめよ。この方を傷つけてはだめ」

その言葉と共に、怒りの波動が粉々に砕け散った。

ブシューッ

何かが弾け、破れるような音がしたと思うと、大量の血が当たり一面に降り注いだ。

「……つつっ」

小さな呻き声が漏れたかと思うと、腕の中のアリエルの体は力を失い、がっくりと私の上に身を投げかけた。思わず抱きすくめると、その呼吸が、鼓動が、何と停止している。純白の巨大な羽は血に塗れている。

「アリエル！ 目覚めよ、アリエル！」

私は必死になって、呼びかける。次第に羽は輝きを失い、血が腐臭を放ち始める。

「いけない、羽が……」

羽のひどい穢れを一刻も早く浄化しなくては……

「アリエルが、アリエルが、アナトの血に汚された！ 頼む、頼む、助けてくれ」

私の放つ必死な波動に、アリエルの『子供たち』全員が応えた。ことにベルゼバブとバルベリトは、真っ先に応じて、すぐさま強力な念の力を送ってくれた。

「ありがとう、ありがとう、皆、ありがとう」

『子供たち』の力を結集して血の穢れが消えると、アリエルは目を開けた。

「良かった。無事で良かった」

「私……アナトに……襲われたのですよね」

「ああ。呼吸も鼓動も止まって、本当にあせったよ。でも、子供た

ちの力を送ってもらって穢された羽根を淨めることが出来た。どこか苦しいところは無いか？」

「大丈夫みたいです。でも……」

「でも？ どうした？ 何でも遠慮しないで、本当のことを教えてほしい」

「アナトは、本当に私が憎いんですね。そういう負の感情を強烈に浴びたことがないので、驚いてしまいました……あの……アナトは、どうなったのでしょうか？」

「わからない。わからないが、皆も手分けしてアナトの気配を探ってくれるはずだ。一部の友好的な天使にも、協力を仰ごうと思う」
「アナトがいかなる形でこの人間界に出現しているのか、まるで分っていないのだ。ただ人の形を取っているという以外、何も……アリエルの身の上に何か危険なことが起こらないかと思うと、不安でたまらない。」

その夜は互いを抱きしめあって眠ったが、心なしかアリエルはやつれて見える。

「昨夜は大変だったから、今日の剣道部の練習は休みなさい、ね？」

「大丈夫だと思いますが、そうおっしゃるのなら、やめておきます」

「誰かに大学でも一緒に居てもらうようにしなくては、どうも心配だ。ボディーガードをつけようか？ 無論ただの人間ではないよ。」

神霊にも魔物にも慣れているスペシャリストだ」

「私は……翼と一緒になるべく居るようにしますし、遠出はしないことにします。そうすれば横島さんも私の居場所はわかるでしょうし」

「私が心配でならないのだよ、アリエル。会社なんてずっと休んで一日中一緒に居たいぐらいなのだ」

「ならば……お任せいたします」

アリエルは私の心配ぶりを、大げさだと思っているようだ。

「決して大げさではない。くれぐれも用心しておくれ」

朝食が終わったので、席を立とうとすると、横島瞳と言うかサリエルが、珍しい人物の訪問を伝えてきた。

「ウリエル・ヤング様がおいんです。旦那様と恵瑠様に緊急のお話がお有りだそうです」

中身が大天使ウリエルである日米ハーフの小学生は、非常に気難しい顔つきをしてこう言った。

「おはようございます。血まみれのアナトの件で、お話が有ります。少しだけお時間を下さい」

聞けば、昨夜はアリエルが襲撃を受ける以前に、三人の天使が同様な襲撃を受けたらしい。

「本命は恵瑠さん……アリエルさんで、昨日襲われた下位の天使達は言わば予行演習と言つか、テストと言つか、そうした意味合いでしょうが……」

ウリエルは一瞬、言葉を失った。

「亡くなった三人は、髑り殺しとしか言いようのない酷い状態でした。余りに凄まじい遺体の破損は、僕が修復しましたが、魂は砕け散り、再び命が戻る事は有りませんでした」

ウリエルは脳裏に浮かんだ酷い情景を、私に隠さなかった。内臓も飛び散り、骨も砕かれており、羽も毫り取られていた。まさに髑り殺しだ。ウリエルと後二人の天使がひどい遺体を修復したが、そうでなければ、大騒ぎになったであろう。天使と言う存在が実在することを、今の人間達には少数の例外を除いて明らかに出来ないからだ。

「今朝の新聞に『三人の女子高校生、相次ぐ謎の変死』と有ったが、あれか？」

「ええ。天使は元来性を超越した存在ですが、それでも人に転生する場合はより馴染みやすい性を選びます。アリエルさんと魂の有り様が似たものが狙われました」

「どうやら天使たちはあれを『血まみれのアナト』と呼ぶようだ。まさにその通りとしか言いようがない。」

「あなたの力と恐らくは似た性質なのでしょうが、方向性が違うとかくも禍々しく胸糞悪い事になるんですね」

「奇妙な事を言う。私は魔界の者だ。そちらからすれば、アナト同様胸糞悪かろう」

「あなた方お二人の波動は、天使が魅かれるほど澄んでいます。あなたが元来は力ある神であったと言う事が、素直に納得もできるのです」

アナトの行方を探るのに天使達も協力を惜しまないと言う申し入れには、驚いた。驚いたが、昨今の状況を思えば、不思議はないのかもしれない。

「アナトはきっと、アリエルさんを狙いに必ず現れるでしょう。昨夜のような遠隔操作的な攻撃では目的を果たせないと思ったでしょうから」

確かに、ウリエルの言う通りだ。だから、アリエルの周囲を見張るらしい。アリエルには危害を加えないというウリエルの言葉を私は信じているが、かつての状況を考えれば思いもよらない展開だ。

その日一日アリエルの話では、ウリエル配下の天使はアリエルの周囲を見張っていたらしい。夕食の後も、自然アナトの話になった。

「アナトが現れると、確信を持っているのだろうか？ 私も今夜はまた表れるような気がするよ」

「それにしてもアナトは、一体どこでどんな人に生まれ変わっているのかしら」

「さあ、なあ」

「思いもよらない人になっているって事は、無いでしょうか？」

「たとえば？」

「幼い子供とか、逆に老人とか……あるいは男性とか？」

子供と老人は私も考えた。あくまで少女と老婆だが。性別を変化させる……あのアナトなら可能だろうし、やりかねない。男の方が、純粋に戦闘能力だけを考えれば有利だろう。

「本当に男になる道を選んでいたら……もう、治さんとの関係の修復は諦めているのかもしれないね」

諦めるなど、有りえるだろうか？ 幾度考えても答えはノーだ。

「諦めて欲しいが、恐らく無理だ。だが私も諦めはしない。しつこさを比べたら、私の方が勝つだろう。生まれ変わり死に変わり、時には私のことなど綺麗さっぱり忘れてしまわれても、諦めずアリエルを追い続けたのだから。それに、自分の子供を殺すような愚か者には、子らの母に寄せる気持ちの強さも理解できない」

私は近頃はごく自然に寄り添うようになったしなやかな体を、強く抱きしめた。すると、アリエルも私を抱きしめ返し、こう言ったのだ。

「キスして、キスしてください」

私は言葉の返事の変わりに、早速深々と口を合わせた。舌と舌が熱く絡まり合い、互いの唾液が行き来する。もうこうなれば、互いの思いのままに互いを求め合うのみだ。

「愛している。命有る限り。生まれ変わっても、絶対にアリエルだけを愛し続ける」

「嬉しい、嬉しいです。愛しています、私も誰よりもあなただけを心から」

生まれ変わり死に変わりしても尚、失われる事の無かつた我々の
 思いの絆は、いかなる存在も断ち切る事は不可能なのだ。

「不可能、不可能ですか？」

抱きしめていたアリエルの体が激しく硬直し、芳しい香りが血腥い匂いに取って代わろうとする。

「ああ、不可能だ。私が愛するのはアリエルのみ。決してお前ではないぞ！ アナト」

愛しい存在の顔が、あの憎むべきアナトの顔とぴったり重なる。
だが私は怯まない。絶対に。

「これと私はこれほどに、似ておりますのよっ ああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あつ！」

私のものが体内に深々と挿入された瞬間、凄まじい絶叫が上がった。

「ええい、私が思うのは、求めるのはアリエルだけだ。滅せよ、アナト！」

私の背中から、全ての羽が出現した。

「ギエエエエエエエエエエエッ！」

天地が裂けるかと思われる程の叫び声上がり、何とアリエルの背中から新たな羽が出現し、私の羽と交わった。そして強烈な浄化の力がその羽の交わる空間に集結し、純化し、最大限に強まった。

「おのれ、ぐあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああッ」

恐らく、それが、あのアナトの最後の声では無かつただろうか？

58 懐胎（前書き）

年を食った孝行息子の視点です。

58 懐胎

「果たして良き者が生じるのだろうか？」

「悪しき者が息を吹き返すのだろうか？」

「分らん」

「全く、分らん」

「だが、いずれにせよ、生じるべき者だ」

「たとえ、悪しき者であっても、生じなくてはならないだろう」

朝茶にお招きした百目鬼の御兄弟は最初のんきに八寸の朝顔独活の出来栄えを褒めながら「梅酢で染めた仄かな色合いが実に良い」とか「色が濃くなるにしたがって味の加減のだんだんに濃くなるのも絶妙だ」とかおっしゃっていたのだが、急に顔色を曇らせ、深刻な様子でお二人で掛け合いを始められたので驚いた。

「ベルゼバブ殿はいかがお考えか？」

「あなたは何と言つてもお二人のお子なのだし、長らく人の世界で知恵を深められた。どう見ておられる？」

母上……この六十過ぎの肉体を持った富原創一と言う存在が、女子大生を母上と呼ぶと、皆私が狂ったと思うだろうが、あの白羽恵瑠として存在している若く美しい方は、紛れも無く私と言う存在を生み出した母上・アリエル様の転生なさった姿なのだ。その、恵瑠様の御様子が何か奇妙なのだ。今朝になって急に体調を崩されたので朝茶を欠席すると父上からご連絡を頂いたのだが……母上は本当に力が弱っておられるのが、波動からも感じ取れる。

「お二人は我らが母上が懐妊したと、お考えですか？」

百目鬼のご兄弟は、重々しく頷かれた。

「さよう。間違ひなかつた」

「胎内からきわめて強い、新しい波動が生じている」

その様子を見て、今は羽根山太郎を名乗る「弟」のバルベリトがこう言つた。

「お二人は、我らが母上が胎内の存在を、無事に子として出産できるとお考えですか？」

百目鬼御兄弟、いや、サンダルフォン・メタトロンのお二人と言うべきだろう。お二人はいつもはにこやかなその顔に、何とも難しい厳しい表情を浮かべられた。

「無事か否かは、我々では何とも」

「生易しい事では無いのは確かですが、後は何とも」

「おお、そうだ、ルシファーに尋ねられたら如何か？」

「あれなら天界も魔界も人界も、良く事情が飲み込んでいる。意見を聞かれるべきだ」

なるほど、では、呼び出そうかと考えた次の瞬間、庭先に気配が降り立つた。

「いやあ、早い」

「誠に素早い」

御兄弟に素早いと言われた当の本人は、魔界の王者としての気配を漂わせている。瞬間転移の直後も呼吸一つ乱していない。そして悠然と、いや傲然と言つべきか、我々の方を見やり、開口一番こう言い放つた。

「御老体方がお呼びの様だから、まかり越したまでの事。傲然と言

うほど不遜でも不敬でも無いつもりですが」

そうやって、こちらの腹の内など手に取るように明らかだと言いたいのだろう。まあ昔からの事だが。

御兄弟は微笑を浮かべられて、言い訳がましく応じられる。

「傲然は傲然でも、ベルゼバブ殿は傲然屹立と言っべき揺ぎ無い頼もしげな様子を思い浮かべられたのだ」

「そうそう。大天使でもあつたし、魔界の王者であるし、人でもある。そんなルシファアは実に頼もしい」

御兄弟の言葉は緊急事態の中でも、何処かのんびりして聞こえる。いささか気の短いバルベリトは既に苛立ちをあらわにした。

「ルシファアがすぐ来たと言う事は、一大事と言う事ですぞ。早く本題に参りましょう」

「まあ、待て、バルベリト。ルシファア殿、どうぞお上がりください。まずは茶でも一服して頂いてから、皆で話し合いましょう」

百目鬼の御兄弟とルシファア、バルベリト、そして私と言うメンバーが、共に語り合っていた頃、母上の身に異変が起きたようだった。

「アリエル！ アリエル！」

父上の動揺の大きさは徒事ではない。

「急ぎ、あちらへ参りましょう」

バルベリトは苛立っている。

「一応サリエルと言うか横島さんに話を通じておこつ」

「何、あの人なら十分気配を察しているはずですよ。いきなり部屋の中と言うのが不躰だとお感じなら、移動先を玄関前になされば良

「かろう」

ルシファアのその声に応じて、サリエルの言葉が意識に流れ込んできた。

「どうか、居間の方へどうぞ。主ともども皆様をお待ちしております」

なんと、あの小学生のウリエルも先程急に父上を訪ねて来たらしい。

「ならば、もう宜しいですな。皆で瞬間移動しましょう」

ルシファアが自然に音頭を取って、皆、茶室の中央に集まり一斉に力を放った。

「ほぼ千年ぶりでありましたが、無事なようですな」

「錆付いても降りませんでしたか」

御兄弟の少々能天気な会話も、父上の沈うつな表情を見て、すぐに止んだ。

「皆、おいでいただき、ありがとう……」

そこまでおっしゃって、言葉が止まってしまった。顔色が悪い。

「母上の胎内に……アナトが居りますか？」

私の言葉に父上は頷かれた。

「ああ。アナトは是が非でもアリエルと私の子として転生する気の様だ」

「元のアナトとは、かなり波動は違いますが……」

「それでも、母上のお体をこれほど弱め、父上をこれほどに憂えさせる者は、やはり邪な存在だろう」

私の言葉に割って入ったバルベリトは、強烈に怒っている。

「邪なものなら、それなりに魔王の中の魔王たる父君に敬意を払うべきであるよな」

ルシファアは何事か考えが有るようだ。

「王よ。あなたのあの厄介な元の妻で元の妹であった存在を、今度こそ全く別の存在に転生させる好機なのではなからうか？」

「アリエルは恐らくルシファアの考えと同じ事を思っているようだ。だが、今アリエルの意識は失われ、アナトの意識も感じられない」

ここは……父上はお嫌だろうが、母上が眠っておいでの場合にお邪魔させていただき、胎内の新たな波動と母上の意識、そしてアナトの意識を皆で探り、判断した方が話が早いと思った。

「そうだな。それが良い。横島、皆様を御案内してくれ」

百目鬼兄弟から小学生のウリエルまで全員ここに集った者が母上の眠るベッドを囲んだ。

「アリエルは、お前達には何か言ってはこなかったか？」

「いえ、私もベルゼバブも何も母上の御意思を感じ取る事が出来ません」

バルベリトは悲しげに言った。すると、ルシファアが巨大な羽を出現させた姿で母上の額に手をかざし、その意識を探り始めた。

「ベルゼバブ、バルベリトのお二人にすら感じ取れないとは……アリエルの意識は、今、我らに感じ取れないどこぞで、眠っている……いや、アナトの意識と戦っているのやも知れない」

「ルシファアよ、アリエルが戦っていると感じるのか？」

「……うむ。そのようだ……必ず勝つ積もりだと、待っていて欲しいと、そう言っているようだ……ん？」

「どうした？」

「今のままでは……アナトが蘇り、自分は消滅する。力添えが欲し

いと……ベルゼバブ殿、今私の手の内に掴んだこの意識の端を握るのだ」

ルシファーに言われるままに私は、その微かな光る糸のようなものを、気を入れてしっかり掴んだ。

「そうだ。そして、もう一つの手で、あなたの父上の額に触れてみるのだ」

失礼致しますと声をかけて、父上の額に触れる。

「な、何だこれは」

電気がビリビリするような感覚が走る。

「バルベリト殿、兄上の体に触れて、その苦痛の半ばを引き受けて差し上げる気は無いか？」

「父上、母上のお為なら、喜んで」

バルベリトが肩に手を置いた途端、痺れが大きく緩和された。

「我ら天使の力を持つ者の力を集め、注ぎ込みますが、天使の力と相性が良くないベルゼバブ・バルベリトの御二人には、大変な苦痛を伴いましょう。お覚悟は宜しいか？」

「ああ。大丈夫ですぞ」

私もバルベリトの言葉に頷く。

「ベルゼバブ殿は決して手をお放しになりませんように。我らの力が放たれた瞬間、一番お苦しいのはあなたが、大丈夫だろうか？」

私は再びうなずいてみせる。

「ならば、参りますぞ。さあ、皆さん。力を思い切り、私に向けて放ってください。私はそれを一つに纏めてベルゼバブ殿に送ります

から」

どうやら天使の力を魔界の者に有効な様にルシファーの中で転換し、それを更に人たる存在に有効な形に私の力で転換するのだろう。「いや、少し違う、ベルゼバブ殿。あなたが受け取った力を転換なさるのはあなたの父上で、それを更にあなたは母上に送り込む役割も果たすのだ。つまりあなたは私と父上・母上の間を繋ぐ役目をする事になる。まあ、高圧送電線か何かのようなものかな」

「ルシファーよ、私とアリエルの最初の子を、高圧送電線とは、ずいぶんな例えだ。まあ、言いたい事はわかったが」

父上は、苦笑いされている。私は落雷並みらしいこれからの衝撃を覚悟しながら、随分なルシファーの言い草に呆れながらも、やはり可笑し味を感じていた。

「まだ、笑う元気がお有りか、ベルゼバブ殿。では、参りますぞ、では」

全身を貫くような電撃としか言いようの無い衝撃を受けながらも、母上の意識の糸と父上の額から、手を動かす事無く耐えた。

「さすがだ。よう耐えられた。もう、手を離して下さって宜しいですぞ」

「送電線程度には、役に立ちましたかな」

ルシファーにそこまで言った途端、体中の力が抜け、意識が飛んだ。母上は……本当に御無事だろうか？

59 粘土板の主

「アリエル、苦しくはないか？」

もうアリエルは丸三日、意識を失っている。苦しげだった呼吸は安らかになり、時折口元に笑みが浮かぶのは楽しい夢でも見ているからだろうか？

そんな中でも声をかけると、小さく口が開き、何か答えようとする様だ。どうやらうんと小さな声で「大丈夫です」と答えてくれて
いるらしい。

背中の羽は顕現したままだ。子らの力のおかげで純白に戻り、背中に折りたたまれているが、四枚の羽は大きい。アリエルは腹を下にして、枕を抱え込むようにしてうつぶせに眠っている。アリエルの子供達全てと我々に力を貸してくれた者たちの加護と力を受け入れる為にも羽は必要なだろう。

「羽が有る状態では、人間の医者には診せられないしな……」

それにおそらく、ベルゼバブやバルベリト、そしてルシファーもだが、彼らが言うように、人の医術はアリエルにはあてはまらないから、病院に連れて行こうが往診を依頼しようが無駄だろう。

ベルゼバブは去り際に以前見せてくれた五センチ四方程度の大きさの粘土板のかけらを、私に託した。

「私は、この文字を記した者がどこぞに生まれ変わっていないか、探してみます」

粘土板の言葉は不思議な力に満ちていた。こんな言葉が読み取れる。

「力有る神である友は、死の床に居る私に向かってこう言った。『私を助けた善き友が、なぜ死なねばならないのか。なぜ、死の病から救われる事が無いのか。君こそ智者の中の第一であつた。友である私のために力を尽くし、知恵を尽くして苦難から救い出してくれた。それなのに、なぜ無慈悲な死神は君を掴んで離さないのだ』と私は友なる神に、幾度生まれ変わつても友である事を誓つた。そして嘆かないで欲しいと言つた。人は死すべきもので有るのだから」

きつと、この粘土板を刻んだ「私」はベルゼバブが初めて友とした人間なのだろう。更にこう続く。

「死した後、想いが有り、縁が有れば、必ずや友たる神の助けとならんと、友たる神の父母の危難も救わんと誓う。その父の悩みを軽くし、その母の痛みを和らげ、悪しきものの力を減じ善き縁を強めんと」

そこで文章は一旦途切れていた。だが、そこまで読み終えた私は、なぜか気持ちが軽くなった。

「アリエルの痛みを和らげてくれるらしいよ。何処か痛むかい？」

思い返せば、バルベリトを生んだ時もベルゼバブは何くれと心配りを示した。あの時アリエルは随分力を使い果たし、背中に有った六枚の羽が減つて二枚になつてしまい、すぐ後に天使としてのアリエルの「死」が訪れたのだつた。再び人となつたアリエルとめぐり合うまでの長い間、忠実なサリエルや子供達を身近に感じてはいたが、それでもやはり私は孤独だつた。だが……アリエルは私よりももっと、大変だつただろう。苦しかつただろう。

バルベリトは「母上の御恩に報いるためならば、私は何でもいたします」といまだに言うほど、自分が生まれた時の出来事を強く意識しているらしい。

あの時の六枚羽は今有る四枚の羽ほど大きくは無かった。

（羽の数は二枚少ないが、大きくなって輝きを増したな。これは一体何を意味するのだろう）

（父上や我々との縁が一層深まり、母上のお力が真に目覚める前兆かもしれないね）

つい今しがた、バルベリトの生まれたときを思い返していた所為か、バルベリトの意識はすぐに流れてきた。こうした場合、人としての彼の体は自分の家で眠っているように他のものには見えるだろう。すぐ後に兄のベルゼバブも意識を送ってきた。

（私は、その粘土板に言葉を残した友の生まれ変わりを探しております。きっと、母上のお力になれましょう）

（以前お前が言ったように、日本の内に人として転生しているのだろうか？）

（つい先程、それらしき魂の持ち主に行き当たりました）

なんでも、ふと思いついて試しにこの粘土板の文字を強く思い浮かべ念じていたら、強い反応を示した魂を感知したのだと言う。感知した魂を探ってみた所、かつての友に相違ないという結論に到達したらしい。

（おお、そうか）

（この都内に有る私立の大学で、考古学の教授なんぞやってますな。我らと同じ大学の卒業生です。本人は転生者としての自覚に目覚め

ていませんが、相変わらず調べ物やら調査やらが大好きなようですね……父上が経営しておられる電器メーカー協賛で、何か考古学のテレビ番組を近くやるようですね。その時のメインコメンテーターとして出演するようだ……待てよ……ふむ)

(おいおい、私に相談かと思えば、何を考えているのだ)

(彼は今、海外での発掘調査費用を負担してくれるスポンサーを探しています。考古学の調査は思いのほか大金が必要ですから。このご時勢で苦勞しているようです。その、彼が調査しようとしている遺跡と言うのが、まさに、その粘土板の出た所です)

フランスの調査隊が行った予備調査を受け継ぐ形で国際的な調査隊が編成され、日本の学者達が今回は主力メンバーとなるらしい。だが、当初資金負担を申し出ていた航空会社や新聞社が、業績不振を理由につい最近になって資金負担を断って来たようだ。既に調査メンバーも日程も固まっているので、責任者のその教授はあせっているらしい。

かんたぬき

(巫実友かあ。なんだか名が体を現しているような気がするな)

(親達が付けた名ようですが、異国の神として生まれた私と友である者の魂を宿しているとは、知らなかったはずですけどね)

大学の方は幸い夏の休暇に入っている。剣道部の方には体調不良で、合宿その他には不参加だと伝えた。出社してすぐにベルゼバブと連絡を取り、昼食時に昨夜話に出た番組のディレクターとも顔を合わせる。その放送局の筆頭株主は何を隠そう私自身だ。その番組担当のディレクターから連絡を入れ、発掘費用を負担するので今夜会ってほしいと申し入れ、巫教授・担当ディレクター・ベルゼバブ・私の四人でビルの近所の系列ホテルで会食する事になった。

「大企業グループのトップでお世話になっている放送局の筆頭株主

でも有る方から急にお呼び出しを頂いて、僕もいささか緊張しております」

そんな事を言うくせに、全然緊張していない雰囲気だ。日焼けした柔和な顔と、少し癖の有る白髪交じりの長髪の男が巫教授だった。ベルゼバブは以前、茶会で幾度か相席したと言う。何でも実家の巫家が古い家で、門弟数はさほど多くは無いものの茶道の家元なのだそうです。教授の弟が家元を継いだらしい。挙措動作に身についた折り目正しさと美しさが感じられるのも頷ける。

「でも先生はここのイタリアン、好きなんですよね」

ディレクターが会食の場所を此処にしようと言い出したのは、そうした意味合いだったらしい。

「こんなご馳走は初めてですけどね」

実によく飲みよく食う。だが決して下品ではないし、飲んでも乱れない。姿勢が良い。何処か宴会を楽しんでいる古代ローマかオリエントの王侯貴族のような趣がある。

一頻り、食事が済んでドルチェになった所で、私は巫教授に粘土板を見せた。無論教授は自在にこの文字を読める数少ない人間の一人だ。

（あなたはこの粘土板に見覚えがありますよね）

（確かに、初めてでは無いような気がします……っ！）

私が向けた問いに巫教授は反応した途端、一瞬意識が遠のいたらしい。

「先生？ 先生？」

ディレクターはそんな様子は初めて見たようで、驚いている。

「ちよつと、先程、調子に乗ってワインを頂きすぎたかな」

「私がキチンと責任を持って、先生を御自宅までお送りするよ」

いわば「部外者」であるディレクターが「それでは、後はどうぞよろしくお願い致します」と言い置いて席を立った後、私とベルゼバブは教授を誘って邸に向かう。

「あなた方と僕は、何か因縁と言うか、特別な御縁でも有るのでし
ようか？」

「ええ。そうです。昨夜ようやくあなたを見つけ出したので、一刻も早くお会いしたかったのです」

ベルゼバブが言っていると、教授は表情を改めた。

「見つけ出したのですか？ 僕を？」

「そうです。父上も私もあなたを探しておりました」

「父上？」

「ええ。この方は今の私より年若い御様子ですが、私と言う存在を生み出された父上なのです」

我々を乗せた車は、アリエルの眠る邸へ向かって走り出した。

60 六枚の羽（前書き）

教授の前世の名前は、古代オリエントの實在の人物から取りました。

60 六枚の羽

「こ、この方は？」

「私の妻だ」

「我が母です」

巫教授は目を見開いてアリエルの白い四枚の羽を食い入るように見つめ、更に私とベルゼバブに目を向けた。我々二人の言葉が真実である事を認めたらしい。

「その、僕の目と意識がおかしくなったのでは無さそうです。この若い女性の羽は作り物では無い。天使などという存在が実在するとは、思いもよりませんでした」

「実は私にも羽がありますが、天使では有りません」

私は自らの羽を出して見せた。

「な、なんと黒い羽が……」

「十二枚有ります。だが、私は天使ではない」

「父上は魔界の王なのです」

ベルゼバブも自らの波動を隠す事無く、あらわにした。昆虫類の支配者でもある彼は透明な四枚の羽を激しく蠢動させている。

「あ、あなたは……あなたは、あの粘土板の中に出てくる『友なる神』ですね。僕は……」

「この粘土板を書き記した我が友タヌワ殿の生まれ変わりだ。昨夜、夢の中での呼びかけにあなたが応じて下さった。間違いない」

「手助けしよう、ベルゼバブ」

私が声をかけると、ベルゼバブは巫教授の右肩に手を置いた。私は左肩に手を置く。すると教授は声を上げた。

「見えた、見えました。前世の私が、そうだ、確かにベルゼバブ殿にお約束したのです……おお、血まみれのアナトを抑えるのですね？」

「今、アナトはこのアリエルの胎内に我々の子供として存在している。だが、アナトを宿したアリエルはずっと昏睡状態なのだ」

教授は目を閉じた。一種の瞑想状態に入っただけ。彼の脳裏に数々のタヌワとしての記憶が蘇りつつあった。そして今度は、その蘇った記憶の数々を点検し分類し系統だてている。凄まじい速さだ。人としては度外れた能力の高さだ。力の覚醒を促したのは私とベルゼバブではあるが、受け手がこの『タヌワ殿』だからこそ、このようにすることが可能なだろう。

「……アナトの施した呪いを解かねばいけません。ですが僕は中東まで今すぐ移動などできません。今度発掘する予定の遺跡の中に、その、アナトが兄と妹を呪った呪いの護符が無傷で埋まっています」

「神には、その護符は壊せないのですよね」

「そうです。出来ません」

「悪魔はどうなのだろうか？」

巫教授は私の問いに向かって、はっきりとこう言った。

「無理でしょう。あなたは呪われた当事者でいらっしゃるようだし……魔王様、あなたはアナトの兄なのですか？」

「そうです。かつては羽など持たない神でした」

「では妹とは？」

「今ここで眠り続けるアリエルです。アリエルは……アナトにとっ

ても私にとってもかつての妹であり、現在の私の妻なのです」

「なるほど。古代の神々は姉妹を妻とすることは、珍しくなかったようですね……あなたの意識とこの妹さん、いや奥様の意識をつないで、一緒に護符の有る場所まで導ければ良いのですが、私ではそのような遠方の土地の地中深くに埋まった護符まで、自分の意識をうまく導けません」

「ですが……神は触れる事が適わない護符のようですね」

神には触れる事が出来ない。呪われた当事者は、無論触れられない。触れらるのは人間だけ、そんな護符らしい。

「ならば、こうすればいかがだ？ タヌワ殿……私があなたの意識を目標となる場所まで導こう」

「どうやって？」

「私がああ、遺跡となってしまった場所まで、ワープしましょう」

「そのような事が出来るのですか？ 出来るとして、誰かに目撃されたら厄介ではないですか？」

タヌワ殿は、半信半疑という表情だった。

「あちらと日本の時差はおよそ七時間か。こちらは深夜だが、あちらはまだ、暗くなりかけだな」

「ですが、人気のない場所です。私がいきなり出現しても、大丈夫かと」

「ならば、早速試すか」

「ベルゼバブ殿が、あの遺跡にワープされたとして、どうやって呪われている御二方の意識を私の物と結びつけて導けるのでしょうか？ 魔王様は大丈夫でしょうが、意識の無い奥様は……」

確かにそうだ。アリエルの意識を導き出せなければ、呪いの護符

は破壊できない。

「なぜ、私をお呼び下さらないのです、父上」

「王よ、私の手助けも必要であろう」

何と、バルベリトとルシファーがほぼ同時にあらわれた。

「私が向こうに移動するベルゼバブに代わって、子としての縁で」

「私が元天使であった者同士、金星の加護を受けた者同士のよしみで」

「御一緒に」

「共に」

そうか、その手が有ったか。

「ああ、バルベリトとルシファーの力を借りて、アリエルの意識を導き出し、私の意識と燃り合わせ、かの地まで導こう」

その言葉を耳にしたベルゼバブは、嬉しげに言った。

「では、お二人、父上と我が友をよろしく。私は今からかの地へ向かいます」

巫教授も、今は完全にタヌワ殿としての記憶を取り戻した所為か、突然現れた二人とのやり取りを、何のこだわりもなく、当たり前前の事として、受け入れたようだった。

「バルベリト殿が、我が友なる神の御兄弟なのは存じておりますが、もう御一方は？」

「ルシファーは、もとは天使であったのですよ」

ルシファアは皮肉っぽい笑いを浮かべて言った。

「墮天使、という奴です。前世のあなたよりも少しばかり後に、この方々の仲間になりました」

「さあ、さあ、ベルゼバブが目的地にたどり着き、護符を見出しましたよ。ほら父上も、御準備を」

バルベリトはちよつとばかり、気が短い方なのだ。

三人で昏睡状態のアリエルの意識の端を掴み出し、私の意識と撚り合わせたものを、かの地に到着したベルゼバブにすっかり握らせた。

「では、今度はバルベリトとルシファア殿の二人で、我が友タヌワ殿の思い浮かべた呪い解除の言葉を私に送り込んでください」

どうやらタヌワ殿の脳裏には、はっきりと神を呪う神による呪いを、完全に無効化する呪文が浮かんでいるようだった。あいにく私は呪われた当の本人なので、その呪いが読めはしないのだが……

「もう少し、もう少しですので、力を増して頂けますか？」

教授は、体中から冷や汗を流している。

「それは構わないが、人間のあなたに更に強い私の力が受け入れられようか？」

「バルベリト殿、それしか方法は無いのだ。やるしか無かるうが」

急に教授が呻き声を上げた。

「な、なんのこれしき……っ！　ぐつつ、くああっ！」

凄まじい雷に打たれたような衝撃が全員に走った。何かが弾け飛

んだ。

「やりました！ 見事に壊れました！」

ベルゼバブが興奮を伝えてきた。上手く行った様だ。その瞬間、アリエルの体が光に包まれた。

「は、羽が！」

「おお、見事な白い羽だ」

再び戻ってきたバルゼバブは、相当疲労の色が濃かった。さすがに羽は仕舞っている。

「おかえりなさい。目の前で見ても、ワープなさると言うのが今ひとつ、ピンと来ません。無論、あなた方が一つも嘘をおっしゃっていないことはわかるのですが、余りに非日常的な光景でして、これまでの意識と折り合いを付けませんと、なにやら自分の中身が混乱しているのです」

「ですが、教授、いやタヌワ殿、あなたの存在抜きでは、今夜の成功は無かったですぞ」

「成功したのですか？」

教授は心配そうに、アリエルのほうを見た。

「成功したはずだ。これまで存在した猛々しい感じの波動が消えた。穏やかに母体と今は調和している」

ルシファーは自分の見解に十分な自信がある様子だ。

「私モルシファー殿の見方に賛成です。ベルゼバブは、どう見る？ 護符の破壊を実際に目にしたのだろう？」

「邪悪な要素は、恐らく排除できた。だが、それだけでは恐らく母

上が元気になられるには、不足なのだ」

「その不足は、何をどうやって補うのか？」

「それはその、最早、我々の出る幕では無いと思うぞ」

ルシファーがバルベリトを見ると、バルベリトはハツとした顔つきになった。

「そう言うことだ。バルベリト殿。お邪魔なようだから、早く退散しようではないか」

一方、ベルゼバブは遠距離のワープでの往復で、少し疲れたようだったが上機嫌だった。

「タヌワ殿、私の家にお越しく下さい。久しぶりの再会なのです。飲み明かしましょう」

「宜しいので？」

「ええ。では、父上、失礼致します」

「おやすみなさい、魔王様」

「母上が早くお元気になれますように」

「皆、ありがとう。横島！」

「はい。車をお呼びしました」

横島は、教授はワープできないのでタクシーが必要だろうと、言われる前から気を利かせていたようだ。ちなみに我が家の運転手は、もう既に眠っている。

皆、挨拶をして、「明日も授業だ」と言う教員のルシファー以外は、タクシーでベルゼバブの邸へ向かう。

「これから、酒盛りです」

なにやら、そう言うベルゼバブは楽しげだった。

寝室の中にアリエルと二人きりの静かな時間が戻った。アリエルの意識はまだ戻らないが、羽は六枚になり、美しく輝いている。そして、その顔に微笑が浮かんだ。幸せな夢を見ているらしい。こう言う時、世界中の生きとし生けるもの全ての中で、アリエルの意識だけがどうしても読み取れないのがひどく残念だ。

「綺麗な羽だね、アリエル。真っ白だ」

私も羽を出したままで、アリエルに口づけた。

「今は、眠っていても、ちゃんと鼻で息が出来るんだね」

「……だって、あの時は……」

寝言を言っていると思ったら、なんと、目が開いたではないか。

「初めてだったんですもの……っつて、あれ？」

「ああ、良かった」

「治さん？」

「良かった、本当に、良かった」

「まあ！治さんの羽、久しぶりに見ました」

「ああ、アリエルの状態に合わせて、羽を出してみた」

「え？ あらまあ。私、羽が増えました？」

「ああ。六枚になった。大きくて美しいな」

「あの、アナトは……どうなっちゃったのでしょうか？ お腹のこの子、アナトですか？」

「その様だが、苦しくないか？」

「苦しく無いです。あれ？ アナトなんでしょうけれど、全然血なまぐさくなくて、穏やかな波動ですけれど……どうなっちゃったのでしょうか？」

「穏やかに同居するから、存在を認めて欲しい、と言う事の様だな」
「ふうん。なら、この子を産んであげなくちゃいけませんね……っあ？」

「どうしたのだ？」

「喜んでます。この子。元がアナトでも、ちゃんと生んであげよう
と思ったことを」

「そうか。仲良くやれそうか？」

「きつと、大丈夫です。ね？」

その夜は、互いに互いの羽を思い切り伸ばしながら、手を取り合
い、口付けを交わすだけに止めた。

だが、これまでに無い、玄妙な、深い悦びが私の中に幾度も幾度
も湧き上がり、やがて久しぶりの穏やかで安らぐ眠りに導かれてい
ったのだった。

61 胎動

「何だか大変だったらいいじゃない？ でも、元気そうで良かった」

「うん。心配かけてごめんね」

「恵瑠のせいじゃないんだから、仕方無いわよ」

翼は真面目に夏の間も剣道部の活動に励んでいたらしい。私は羽が大きくなって六枚になって以降、全然仕舞い込めない毎日が続いたが、今日になってやっとどうにか羽を仕舞い込むことが出来た。仕舞い込まないと、ベッドで寝る姿勢も制限されて、何かと具合が悪かった。それに、事情を知らない人間に、羽が有る姿は見せられない。見せた人は、おそらくパニック状態に陥るだろうし……その点、翼は自分も羽を持つ身の上なので、気が楽だ。

「でも、練習にみんなが揃わないと、なんだか寂しいねえ」

夏休みは皆、里帰りしたりバイトに励んだり、研究課題をまとめたり、就職活動に走り回ったり、事情はそれぞれだが、いつも道場に居ると思ってきたメンバーが相当な数、練習に来ないらしい。

「最初の年から、夏の合宿を休んじやったなあ」

入学してすぐから翼と一緒に夏の合宿の計画を練って、場所を確保したり連盟に所属しておられる先生方のスケジュール調整をしたり、色々やったのになあ……

「赤ちゃん出来たんだって？ じゃあ、来年だって無理かもしれないねえ。まあ、しっかりしたベビーシッターも雇ってくれそうだから、大丈夫なのかな？」

「そういう具体的な話は、全然してない」

「だよ。まだ、妊娠がわかったばかりなんじゃ、そんなもんかもね」

「でも、ちゃんとした方がよいよね。夏休みが終わったら、大学行きたいし」

「治さんの事だから、もう、とつくの昔に色々考えていたりして」

それは、そうなのだろうけれど、子供の話をするのは……とても気恥ずかしい。翼は平気なのだろうか？

「何で恥ずかしいの？ 結婚するつもりでもう一緒に住んでるんだし。多少予定より早いってだけでしょ？」

恥ずかしがる私が、おかしいのだろうか？

もともと、翼は高校生だった頃から星先生というカルシファーと「いけない関係」だったのだ。私たちより年季が入った付き合いだともいえる。私達も、前世のことを勘定に入れたら治さんの言うように、大変に年季が入っているわけだけれど、でも、私は生まれ変わる度に色々忘れるので、いつまでたっても恋愛初心者だ。

「前世の事って、今一つ現実味が無い。嘘だとは思わないけれど、どこかおとぎ話みたいに感じちゃうの」

つい、そんなふうに翼に言くと、頷いてはくれたが、そんなことは治さんに言わない方がよい、とも言われた。

「だってさあ……何回死んでも、一生懸命探し出して、そのたびに縁を繋ぎ直してきたんでしょう？ ものすごく深い愛情じゃないの。それを現実味が無いなんて……気の毒じゃない？」

確かに、それはその通りだと思うのだ。それでも、自分ばかり全部きれいさっぱり転生の度に忘れるなんて、不公平だという気もする。私と全部覚えている治さんとどっちが可愛そうなのか、いくら考えても良くわからない。

翼と一緒に昼食を付き合ってくれてから、しばらくして、真知子はやって来た。亡くなったお祖母ちゃんも大好物だった、懐かしい橋本屋の薄皮饅頭を持ってきてくれた。水出し玉露を横島さんが出してくださって、二人で美味しく頂戴した。

「ああ、やっぱりおいしいなあ、この薄皮まんじゅう」

真知子のお母さんが、私の好物だからと、氣遣ってくれたのだろう。

「今朝さあ、恵瑠のダーリンが家に電話してきてくれたんだよ。おめでただから、時間のあるとき、話し相手になって欲しいって。うちのお母さんも『恵瑠ちゃんの子供なら、すごく可愛いだろうねえ、楽しみだね』だって。私が、当分は結婚しない宣言をしたから」

真知子と彼の様な二十歳前の同級生同士のカップルでは経済的な自立もしないうちから、結婚は出来ない。子供なんて無理無理……真知子に言われて初めて、経済状況とか金銭の占める意味を改めて考えてしまう。

治さんが戻っていらしたので、真知子に知らせて下さった事のお礼を言い、翼や真知子と話した内容をかい摘んで伝える。

「今度、うちの社内に幼児のための施設を開こうという話が出てい

るんだが、真知子ちゃんは来年卒業したら就職先として検討しないかな？」

幼稚園と保育園の性質を兼ね備えたこども園、らしい。優秀な女性社員に結婚出産後も安心して働いてもらうための設備という位置づけの様だ。

「幼保連携型っていうのかな。系列の幼稚園と保育園から優秀な人材を募って、新しいタイプの施設を作ろうとしている。子供の教育に関しては妥協したくない社員のみんなも、納得するような設備にしたいんだよ」

「えっと、将来的に……この子も、はいります？」

「そうだね。そのぐらいのつもりで、本気で作るよ」

食事を済ませて、一緒にゆっくりお風呂に入る。

「やっぱりね、明日、医者に行こう。羽もこうして隠せているし」

「自分でも不思議なんですけど、こういう加減で出たり隠せたりするのか、今一つわかりません」

「おや、そうかい？ 羽が大きくなって六枚になったのだから、色々能力が高まっているはずんだけどな」

どうやら、この羽は、通常の肉体の部分と色々条件が違うみたいで、自分の体に生えている事自体、謎だ。明日予約してくれた産婦人科は「こちらの特殊事情に理解のある」女医さんだそうだ。

「ルシファーに教えてもらったんだ。その女医さん自身が、羽が有るって訳なんだよ」

「それなら、何かの拍子に羽が出ちゃっても、大丈夫ですね」

「人間の子供としての検査もした方が、その……アナトであった子供の状態が、よりはつきりすると言われたんだよ」

そう、血まみれのアナトであつたはずの存在から、禍々しい気配が綺麗さっぱりなくなっているが、いったいどうなっているのだろう？

「どうもアナトに見られているようで、ちょっとやりにくくも感じるしねえ。邪悪な気配も敵意もすべて失せたから、考えすぎかも知れないが……僕自身で色々行動をセーブしてしまつんだ」

ああ、だから、治さんはこのところキスどまりなんだ。何となく察していたけれど。

「監視しているってわけじゃ無いと思いますよ」

「ルシファーが言うには、この子が男なら、完全にアナトとは異質の存在に変化したとみてよいだろうと言つんだなあ……」

「そうですか。手を当てたり、気配を探ったりしても、治さんにも男女どちらかわからないのですか？」

「うん。普通はわかるんだけどなあ。やっぱり元が元だからかもしれない。手をかざしても、お腹を撫でてみてもはつきり感じ取れないんだ」

「私たちがキスしても、別に怒らないみたいですし、相当変化したように思いますけどね」

「そうかい？　じゃあ、この位は？」

浴槽の中で私を膝にのせて、キスをする。手は……感じやすいところを刺激している。

「大丈夫かい？」

苦しくは無いが、返事するのもなんだか恥ずかしい。

「恥ずかしいだけなら、大丈夫かな？」

そんなこんなで、おっかなびつくりだったが、一夜明けて私達二人はその「羽が有る」産婦人科の先生に診察して頂いた。

「やはり女の子ですか？」

治さんは一番それを気にしていた。

「いや、この形は……男の子です」

超音波診断のモニターを見ながら、ピンクのセルフレームの眼鏡をかけた先生はそう断言した。

「ほら、ここがはつきり上向きに突出しています」

あはは、やはりそう言う事で、男女を見分けるのだ。

「良かった。男か」

治さんはほつと胸をなでおろしていた。

「何か御事情が有りのように聞いてます。男の方が安全とか」

「ええ。そうなんです。血まみれのアナトの生まれ変わりですから」

「おやまあ。それは……大変ですね。でも、そのような気配は読み取れません」

「元気に生まれてくるでしょうか？」

「画像で見る限り、健全な状態です……失礼……」

一拳に先生の背中から真つ黒い羽が六枚出た。

「これが有ると、もうちょっと探りやすいでしょうか……ふうむ……ちよつとやんちゃかもしれませんが、邪悪ではないと感じます。可愛がつてあげれば、ちゃんとまともな息子さんに育つかと……ふう……」

先生は額から汗を流していた。

「それにしても、凄い力ですね、このお子さんも。それだけに邪悪だと大変でしょうが、綺麗な波動です」

「力が強いと、読み取りも大変ですか？」

治さんの問いかけに、先生は頷いた。

「そうですね。このお子さんのパワーは凄いです。他者の力の干渉を許さない性質が強いようです」

アナトは男の子になってしまったらしいけれど、強い力を持っているのは確かなようだ。でも、邪悪ではなくっている。一体どうなるのだろうか？

そんなに悪くない状態ではないかと思うのだけど……何か一波乱、有るだろうか？

62 新しい名

「王よ、アナトは無事に男に変じたようだな。あなたの妻は更に力を得たが、まだ十分覚醒していない。まあ、そういった所だろうか？」

会社で数か国語のメールのやり取りを終わらせて、一息ついてコーヒーでも飲もうとした瞬間に、ルシファーが急に現れたのだ。

「邸ではなくて、こちらというのは、珍しいな。いや、初めてだったか」

「そうだな。なかなかに使え勝手の良さそうなオフィスだ。そちらから富士山が見えるのも悪くない」

「うむ。富士山はやはり、この日本の地脈の力の要だからな。その力の恩恵は欲しいところだ」

「私の勤めている高校の屋上からも良く見えるが、ここの様に優雅にコーヒータイムを楽しみながらとはいかないのが、つまらない所だ」

味にうるさい男が文句も言わず飲んでいるのだから、我が社の最新型コーヒーメーカーと系列商社が取り扱うコーヒー豆もまあ、及第点なのだろう。

「それにしても、美人秘書が淹れてくれるのかと思いきや、あなたが自分で淹れて下さるとは」

「私の秘書はみな男だ。社長秘書は美人だが」

「ラウム殿か。美人には違いないが……ああ、そうか。アモン殿がここの社長であつたな」

社長を務めてもらっている大河亜門ことアモンとラウムの仲は、「羽」が有る連中の中では周知の事実だ。ルシファーはラウムの能力を認めてはいるが、昔から少し苦手だ。ラウムのセクシーダイナマイトボディーも、時に有無を言わさぬ鋭さで迫る言葉の迫力も「過剰」だと感じるらしい。どちらかと言えば少女っぽいタイプの方が好みようだ。

「フッフッフ、翼君とは結構楽しい事も有ったのだろうか？」

「まあな。少しばかり反社会的な方が、色事は楽しめる。まあ、あなたは糞まじめな方だから、何事もまずはあなたの妻が一番と言う事なのだが」

「本気の相手でなければ、虚しいばかりではないか。だからルシファーも今は大層真面目なのだろうか？ 真面目なルシファーというのも、なかなか新鮮味が有るな」

「王がそのようにおっしゃるので、まじめに仕事に戻ろう……そうだな。アナトを抱え込んであなた方は生きて行く事に決められたようだが……いや、まあ、部外者が何か言っても始まらんが……」

「案じてくれているのだな。ありがたい」

「いや、その……」

「真実、ありがたいと思っているよ。ルシファー」

「あなたという方は……全く魔界にふさわしくない方だ。だが、そういう方だからこそ、私はあなたを信じられるのだがな。大丈夫だろう。あなたとアリエルなら。さすがのあのアナトも根負けした、そういう事だろう。ああ、そう言う事だ、間違いなからう。では、王よ、私でも何かお役に立てそうなら、いつでも呼んで頂きたい」

「わかった。感謝する。ありがとう」

「では、これから授業なので、失礼する」

あのルシファーが真面目くさって高校の授業……全く、似合わない。だが、それこそラウムではないが、過剰にフェロモンをばら撒

いている様なタイプのくせに、律儀で生真面目なところも有るのだ。あの頭が固い、魔界の者と言えばすぐに有無を言わさず排除しようとする大天使ミカエルとは双子なのだから、外見が瓜二つなだけでなく、方向性こそ違い、自分を守るべきと感じた対象に対するひた向きさは、同質なのかもしれない。

ルシファーは高校の教師という職を気に入っているようだし、黒井翼を大切に思っているのも確かなのだ。

「悪魔の方が、よほど善良で律儀だと思わないか？」

家に戻ってから、アリエルに話すと、アリエルも頷いた。

「少なくとも私の知っている悪魔の皆さんは、立派な方ばかりですね。でも、天使であっても百目鬼の御兄弟や、ウリエル君は良い友人という感じがしますけれど」

「だが、その律儀なルシファーが心配して様子を伺いに来るほど、アナトを子供として育てるのは、難しいのかもしれない」

「でも……この子は……生じるべき者です」

「そうか、アリエル自身がそう感じるのだな。百目鬼の御兄弟が、以前同じような事をおっしゃったようだが、善悪何れの存在であっても、生じるべき者らしい」

「元のアナトは悪い事をたくさんしたのでしょうが、色々な方々のお力で魂を浄める事が出来たようですし、実際穢れた波動は何も感じませんし……男の子になっちゃったんですし、完全に生まれ変わるのだと思ってあげたいのです」

やはりアリエルは慈悲深い。

血まみれのアナトの魂が浄化されたとはいえ、胎内の子供と不可分の存在となってしまうのだ。その事実をまっすぐに大らかに受

け止めている。私が同じ立場なら、気が狂うかもしれない。

「アリエルは、強いな。そして優しい」

母となるアリエルが子供を……アナトが変じた男の子を、受け入れるというのだ。私も父として、この子を受け入れなくてはならないのだろう。

「きっと大丈夫です」

「そうだと良いのだが……正直な話、私はまだ戸惑っているし、恐れてもいる」

「お父さんが治さんなのですから、きっと大丈夫、私はそう信じています」

「ならば、私も信じよう。アリエルの胎内で育つ子なのだ。きっと、多少いけない所が有ったにしても、育つ間にまともな赤ん坊になってくれるだろう」

私はアナトが殺してきたあまりに多くの命が、何か祟りの様な作用を及ぼさないか恐れてもいる。アナトの私に向ける激しい執着、狂った愛は、私に少しでも無礼である者・敬意が足らないと見なした者は、どこのだれであれ殺してしまったのだ。自分の子、そう、私との間の子までも……切り刻むことをためらわなかった。

私は……血の臭いを嫌悪している。アナトはどこでどう取り違えたものか……「私」の名で建てさせた神殿で人身御供を求めた。それが私の力を増し、アナトに対する私の愛情が深くなると勘違いしていた。幾度もやめさせようとしたのに。

「アリエルですね？　そのような事を言うのは、アリエルのせいなのですね？」

違うと言っても、アナトは、自分のしている正しい事にアリエルが横槍を入れるとますますかたくなに思い込んで行くのだった。

「この子は……思い込みの激しい、怒りっぽい子だったりしたら困るな」

「アナトの性格……ですか？」

「うん。幾ら私が人身御供を人間に要求することを止めさせようとしても、言う事を聞かなかった」

アナトは元々は人の魂の重さを、価値を、まるで理解できていなかった。ただ貴重なものだから崇めるべき神に供えさせる、そうした発想だったのだ。

私に決別されて以降のアナトなら……人の魂のすごさ、特に短期間で高い霊格を備える事も可能な事も、天使にも悪魔にも転生するその自在さも、恐らくは理解していたはずだ。だが、私が人界に留まり続けるうちに、アナトなりに考えを変えたのだろう。

かつてのアナトなら、人として転生するなど有りえないと考えていたから。人は神よりはるかに劣る愚劣な無価値な存在と侮っていたから。

それが、まあ、色々有って力でねじ伏せられた形とはいえ、こうして安らかにアリエルの胎内に納まっているというのは……アナトは今度こそ本当に生まれ変わるのかもしれない。

アナトは……幼いころは本当に可愛らしかったし、性格は禍々しくなったが、姿形は美しかった。この子は……息子……どの様な姿形だろうか？

「はつきり男の子だとわかっているのですから、名前を決めても良

いのではないかと思います」

「ふむ。名前を決めて呼びかけてやるのか」

「ええ。そうすれば……私たちの願いを込めた名前を自分の物だとお腹の中に居る時からわかっていたら、きっと私たちの願いが通じると思います」

それから入浴の間も食事の間も寝床に入ってから、ずっと名前のお話をしていた。

「横島さんが言うように、穢れを浄化する名前が良いでしょうね」

「うむ。そうだなあ……じゃあ、浄めるという事で、きよし、としようか。漢字は決めてないが」

「いつその事、浄化するの浄の字をとって、ジョー、はどうかなあ

……よその国の人にも覚えてもらいやすくないですか？」

「ふーん、浄くん、か。悪くないな。じゃあ、そうしよう」

「あ、字画とか全然わかりませんが」

「私は気にしない。言霊の力は信じているのだが、字画はあんまりぴんと来ないな」

「でも、ちよつと気になるので、姓名判断のサイトなんか覗いてみませんか？」

PCを立ち上げ、検索結果のトップに出てきたサイトで「馬飼野 浄」を占うと、予想外の良い結果だった。

「ええ？ 驚きました。良いですね」

「どれどれ、健康に恵まれる。サッパリした温和な人柄で信頼される。努力を惜しまない強運の持ち主。災いを最小限にする吉相。結婚運・家庭運とも良好。晩年も安泰。全然アナトとは違うな。よし、これで決めよう」

アリエルは非常に気に入ったようで早速腹部を撫でながら、「君は浄クンだよ」と早速語りかけている。通常の人類なら気が早すぎる行動だろうが……普通の子ではないのだ。もう、意味は理解しているのかもしれない。

「アリエル、今、そのお腹のあたりから、綺麗な金色の波動が一瞬見えた」

「え？　そうですか？　浄くん、ご機嫌いいの？」

再び、金色の波動が見えた。

「見えただろう？」

「ええ？　見えないです」

はて、いったいどういう意味合いなのだろうか？

「悪いものではない。いや、むしろとても良いものだと思ったが……」

「どうして、私には見えないのでしょうか？」

「ううむ。なぜなのだろうなあ」

明日あたり、息子たちにでも聞いてみるか？

それとも、ルシファーに尋ねるか……

何の危険性もなく、穏やかに過ごしているだけだから、誰も急に慌ててワープしてきたりもしない。緊急事態なら、皆とるものもとりあえず、駆けつけてくれるのだが……

やれやれ、アリエルがすねてしまった。

「アナトはやっぱり、私なんて母親だと認めたくないですよ、きつと……」

「これこれ。名前を決めようって言ったのはアリエル自身だろう？」

この子はその名が気に入ったのは間違い無いのだから、すねない
でくれよ」

「だってえ……」

「きつと、そのうち、アリエルにも見えるようになるさ」

だが、なぜ私にしか見えないのか、理由は判然としなかった。

63 コスモスの咲くころ

「母子手帳を発行してもらおう都合もあるから、入籍はしておこう」

治さんは用意万端整えてくれて、私はただ言われた書類に署名したのだったが、横島さんが私の後見人になっていたのは知らなかった。

「だって、ほら、配偶者は後見人となれないからね」

そういう説明をもらうまで、全然知らなかったのだ。

「裁判所関係で……悪いおじさんにたぶらかされて、ひどい目に遭う未成年って訳じゃないことを納得してもらうのに、ちょっと面倒だったりするんだが」

そこもちゃんと抜かりなく手配できていたみたいだ。だが、確かに、わずかな期間の差だけど、私が成人しているかどうかで、相当に法律的な面倒くさは違ってくるのだと、今回よく分かった。二十歳なら、本人同士が合意して書類に記入捺印で、OKなのだから、やはり未成年はいろいろ面倒だ。

素敵な中年にメロメロになっちゃった十九歳は……って、口走しかけたけれど……治さん、結構年齢差を気にしているみたいなのでやめた。

初めてのキスの時の事を思い出すと「たぶらかされた」という表現には、あてはまる気もする。でも、たぶらかされた本人がとても幸せなので、結果オーライなのだ。

大学の連中には「馬飼野夫人」とか言われてからかわれちゃっ

たけれど、イヤではない。大学のすぐ傍のイタリアンレストランで、普段着でOKのビュッフェ形式のパーティーを開いて、大学関係者やビジネス以外の付き合いで親しくなった人たちに、結婚の報告をした。私は白いドレスとブーケで皆さんをお迎えした。

それにしても、美味しいランチを出すと学生仲間で評判のこの店のオーナーが治さんだったとは、全く知らなかった。オーナーでもあったこの店のシェフが、不況で経営に失敗したのを助ける形で、治さんが店を買い取り、借金を肩代わりしたらしい。シェフはオーナーではなくなったが、かえって料理に専念できるようになった。そういった事情の様だ。

「美味しい料理を出す店が消えてしまうのは、惜しかったからね」

資金源は治さんのポケットマネーだそうだが、そういう話を聞くと、やっぱり治さんはお金持ちなのだなと思う。だが、大金を持っていたって、有効に使い人助けをするように使うのって、難しいだろう。でも、私の旦那様は、それがごく自然に出来る素敵な人だ。ともかく、お店は気軽に温かい雰囲気、料理はとてもおいしかった。お客様は皆大満足だったと思う。

「これで、結婚式としては十分だって気がしますけれど」

私がそう言うと、治さんに「とんでもない」と却下された。ビジネスやら財界やら考えると、更にもう一度ちゃんとした式も必要らしい。

「仮にも魔界の者の婚姻にキリスト教式はありえないからね」

「ああ、そうですね。無宗教ですか？」

「神前式、が良いと思うよ」

当人同士の心が明るく素直なら、地元の神様の御加護を頂くのも悪くないと治さんは言う。異国の神だった存在が、日本で人間となつて幸せに暮らすために、力を貸して頂けるよう、御挨拶をするという感覚らしい。

「日本の神様はどここの誰などと差別をしない。あくまで心が清らかであるかどうかが一番なのが実に凄い」

入籍以降、毎月母子手帳を持って、治さんと土曜日に検診に行くようになった。

「どうやら、つわりは無い様だね。結構な事だ」

「この子、親孝行なんですよ、やっぱり」

「まあ、これまで散々迷惑はかけられたわけだがな……」

「前世の記憶は失っているのかもしれないですから、あまりその、過去の悪行についての話は、やめませんか？」

「せっかく更正しようとしているのに、意欲をくじくかな？」

「前世を覚えているなら……確かに治さんのおっしゃる通りでしょうけれど、もつとまっさらな状態なんじゃ無いかという気がするんです」

「まっさら？」

「ええ。何も無い、真っ白な状態。完全な過去との決別、そんな感じなのではないかと」

「だが……アナトのこれまで為して来た事を嫌というほど覚えていく、忘れようが無いと言う者は魔界にも天界にも多数居るのだ。自分だけがまっさらなつもりでも、それは通るまい」

「じゃあ……魔界にも、天界にもこの子を許さない、あるいは憎む者が多いって事ですか？」

「……完璧に異なる性質、異なる人格を明確に示せば、考え直してもくれようが、大切な存在をアナトに殺害された者たちの恨みが生

半可な事で消えるとは思えない」

検診の度に超音波診断の画像を見ると、浄君は確実に成長しているのがわかる。季節は確実に夏から秋へ移り変わった。浄君は……前世の罪を背負わなくてはいけないのだろうか？

私にはまだどうも、そのあたりの事がわからないのだ。

大学からの帰り、久しぶりにウリエル・ヤング君に会った。時々一緒に話をする小さな公園も、もうすっかり涼しくなっている。花壇にはコスモスが咲いていた。相変わらず小学生にしては分別臭い顔つきだったけれど……今日の話題は真剣で重いものだった。

「アナトは私が意識を失っている時に、三人の天使を殺害したらしいって聞いたわ」

「うん。でも、いいの？ そんな話をして。妊娠中の女の人にふさわしい話題じゃないと思うから、やめておこう」

「でもね……」

「ああ、そうか。お腹のその子供が、アナトの転生した存在なんだね……そうだなあ……」

前世の罪をどこまで背負わなくてはいけないのか、大天使のウリエル君も迷っていた。

「どこまで罪を背負うべきなのかしら？ アナトは凄まじい数の人だけではなく、神も天使も悪魔も殺しているのよね」

「うん。天界・魔界を問わず血まみれのアナトの名前は、みなに知られているからね。だが、そのアナトが人間の男の子になったって知っている者は……ほんの一握りだけだ」

「ウリエル君、天界の天使達には黙っていてくれるんじゃない？」

「まあ、その、必要のない限り、そんな話はしないことにしてるから……でも、正面切って問いただされたら、うそを言う事は僕には

出来ないよ」

「……たとえばミカエルなんかは、どうなの？」

「ミカエルは、そんな話は僕にはしない。僕が君たちと敵対するつもりが全く無いのを知っているから」

ウリエル君って、私達のせいで天界の連中の中で微妙な立場に立っているのかもしれない。

「いや、そのミカエルだって非常に微妙な立場さ。だって、ルシファールと双子で、姿形も瓜二つなんだから。それにあれほど力の強い双子の間には、僕なんかのわからないような微妙な共振というか、共鳴というか、そんな関係が有るみたいで、知りたくなくても嫌でも互いの秘密が色々わかつちゃうらしい」

「じゃあ、私のお腹にいるこの小さな男の子が、元はアナトだったって知られているのね？」

「ほぼ間違いないね」

「でも、狙いにも、様子を見にも来ないわよ」

「みんなもわからないんだよ。本当は何が正しいのか。ちよつと前なら、僕たちの信じる神の御言葉に従えば、それで間違いない、そう思っていた。毛筋ほどの疑いも無く信じてきた。だけど……この多神教の国である日本は、僕たちがこれまで正しいと信じて来たものが、あやふやで根拠の無いものだったと気づかせてしまった。日本という国の発展は、この世界の価値観を大きく変えてしまったんだよ」

「じゃあ、治さんと私の事は……」

「当分、静観するって事じゃないの？」

「そう。じゃあ、この子は無事に生まれてくれるかしら」

「サンダルフォン、メタトロンのおっしゃっていた事は、事実なんだと思う……」

「善悪いずれにせよ、生じるべき……って事？」

「そうだね。だから、その子は生まれるべくして生まれるだろう」
そういう時のウリエル君の表情は、小学生じゃなくてやっぱり大天使の物だと思う。

家に戻って、ウリエル君との会話について治さんに話した。

「生じるべきだから、生じる……そうか。そうなのだろうな……ア
ナトの力は強大であつたから、生じると決めたのだから、生じるの
だろう。願わくば、似ても似つかぬ『サツパリした温和な人柄』で
あると良いんだが……」

先日の姓名判断の結果が、治さんも気になっているのだ。

「温和……だとよいですね。私、治さんが穏やかで優しいから、今
まで幸せに暮らしてこれたのですもの。その幸せが、もつと大き
く育ってほしい、そんなふうに思います」

「だが、それにしても……平和すぎて、怖いな」

「恐いですか？」

「子供たちの中で力有る者が生まれるときは、いつもアリエルの身
の上に何がしか普通ではない事が興ってきたが、今度はどうなのだ
ろう？ 羽が大きくなって六枚になったのは、確かにかなり大きな
変化だ……だが、これだけで済むとは到底思えない」

「でも、禍々しい恐ろしい事がおこると言う気は、全然しないので
す」

「アリエルの転生が今度で十一回目だ。そして、変則的では有るが、
人として私の子供を胎内に孕んだのは、今回が初めてだ。そのよう
な特別な事情で生まれてくる子供が、何を背負い、何をもたらすの
か……やはり怖いよ」

「治さんが怖がってしまったら、お腹に抱えている私は、どうなる
のです？」

治さんは、はっとしたような顔になった。

「すまない。アリエルが人として初めて生んでくれる子供を『怖い』などと言って」

「私……アナトの記憶がありません。だから、怖くないだけなのかもしれない。でも、アナトがいかにも恐ろしい存在であったのか、今日のウリエル君の顔を見て、少しは分かるような気がしました」

一緒にお風呂に入っても、なんだか気難しい顔をしている。

「どうしましたか？ ほら、ここに、縦じわが寄ってます」

「いや、なんだか自分でも、さつき自分の口走った言葉が許せないのだよ。子を産むアリエルの方がずっと大変なのに……」

「でも、実際、アナトは怖かったのでしょうか？」

「……だが」

「良いんです。治さんはゼーんぶ覚えてるから、どうしたって怖いつて思うのが当たり前なんです、きっと。でも、私は生まれ変わるたびに全部リセットしちゃうというか、忘れちゃいますから。忘れるって損だなんて思っていたのですけれど、嫌な事、怖い事も覚えていないって言う所は悪くないのかもしれないですね」

「……なるほどな。アリエルは強くなった。羽の大きさや、数の事もあるが、何より心が強くなったようだ。私は、過去の痛みに囚われているので、あまりに大きなアナトの変化が正確に理解できないのかも知れない」

「毎日、浄君に話しかけてあげたら、どうでしょうか？ 生まれてきたら、一緒に仲良くやろうとか、良い家族になりたいとか、新しい気持ちで新しい良い関係を作ろうと思っているとかな……」

「ならば、今、さっそくやってみようか」

大きな治さんの手が、優しく私のお腹を撫でた。

「生まれてきたら、家族の一員として歓迎する。一緒に良い家族を作っていききたい。どうだ？ 出来るか？」

「あっ？」

「どうした？」

「何か、動いたみたい？」

「どれどれ？」

「あれ？ 気のせいかな……」

真剣に私のお腹を見つめて優しく撫でる治さんの様子を見て、私達はきつと新しい家族になれる、そんな確信が湧いてきたのだが……気が早すぎるだろうか？

64 転変

「やっぱり白無垢は良いなあ」

「お腹に子供がいると、もう無垢ではないですから……ちょっと気が咎めます」

アリエルは顔を赤らめている。腹に子供が居ても、やはり風情は無垢の乙女だ。ホテルの中ではあるが、しかるべき神職を招き、本式の神前結婚式の形を取った。アリエルの親類縁者も皆集まって貰い、厳かだが温かみの有る良い式になった。

この式を通じて、私達夫妻はこの日本国の神々に夫婦となる事の許しと、承認を願い、受け入れられた。すべての地球上の国家の中で、一番かの「神」の力が薄いこの日本を、太古から支えてきた神々の力は絶大なものが有る。私とアリエルは、太古の神でも天使でも魔物でもなく、あくまで日本に暮らすものとして、この国の神々の導きと加護を心から願ったのだ。

その事が後で思いもかけず、私達を守ってくれる事となったのだが、この時はそこまでの意識は無かった。

披露宴には世界に散っている私とアリエルの「子供」ほぼ全員を呼んだ。古代の神であつた我々が、今度はこの国で人間として新たに強く深い縁を結び直した事を、皆に良く知っておいてもらう必要があつたのだ。

恐らく、見た目には「政財界の名士を招待した」それなりの財界人的な式に見えただろう。だが実はまったく意味合いが違ふのだ。羽の無い者、部外者、マスコミは一切シャットアウトした。

「真知子を呼べないのがちょっと、残念だけどなあ」

羽に関する事情を知らないアリエルの幼馴染に事情を教えて結婚式に招待しても構わないとは思ったのだが、気軽な報告会の方にはすでに出席して貰ったことも有って、友人の方からそれとなく遠慮すると言ってきたようだった。

「色々気を使わせるのも、嫌ですしね」

アリエルは納得はしているが、やはりさびしいと言う所のようであつた。

式が済んでからしばらくして、彼女には我が家に滞在してもらつた。若い女性同士らしく買い物や食事を共にして穏やかな時間を一緒に過ごしたようだ。彼女が帰る際、私からもういつでも気軽にアリエルに会いに来てくれ、と言う言葉を添えると「御言葉に甘えて、そうさせていただきます」とにこやかに言葉が返ってきた。その心の中も穏やかな友達としての温かい感情だけが見て取れた。アリエルが特に大切な友として考えるのも、納得できる。

「冬休みにでも、また会おうね。クリスマスとか」

「そうだね、恵瑠、きつとまた来るよ。結婚して幸せになったせいなのかな。なんか恵瑠の内側から光がさしてるような気がする」

「ええ？ そう？」

「うん。なんかキラキラしているよ」

そんな言葉を残して、彼女は去ったが、実際、特別な力の持ち主ではない一般人である彼女にもアリエルの力が感じられるほど大きくなっているのだと思われた。

「アリエルの羽が大きくなったのではないか？ ここしばらく見ていないが、私に感じられる力が強まった気がする。自分ではどう思

う？」

「自分では分かりません。でも、この子と一緒に幸せになりたい。そう思います」

「そうか。この子は……完全にアリエルの息子となったのだろうか？」

私が抱き寄せると、アリエルは自然に腕の中に納まる。互いの目と目を見つめ、呼吸が交じり合う。するとごく自然にアリエルの羽が大きく開いた。開くと同時に金色の光がこぼれる。

「綺麗だ。とても綺麗だ。羽が無かった頃も美しかったが、今の美しさは確かに光が満ちているような、そんな美しさだね」

「そうですか？ 私の何が変化したのでしょうか。治さんの羽も見せて下さい」

「ああ。そうしよう」

私も久しぶりで羽を広げる。すると金色の光の粒が私の黒い羽に降り注いだ。

「この金色の光の粒は何なんのだろうな。アリエルの力だろうか？」

「治さんを大好きな私の気持ち……なんじゃないでしょうか？」

「そうなのかい？」

「アナトは色々と困った存在だったのでしょうか、治さんを愛していた気持はとても強かったのですよね、きっと。私が治さんを愛している気持と、そのアナトの一番大切な気持ち共鳴して増幅したのかも知れません。私が必ず何が有っても治さんを守りたい、助けたいと思う気持ちと、アナトの愛情がきつと一つになったのです。

アナトは……私に治さんを任せることにしてくれたのだと思います」

アリエルの愛情にアナトの力が不可分な形で融合し、強力になっ

た……そんな所だろうか？

「治さんの羽、輝いていますね」

「確かに、そうだな」

「金色の光の粒を取り込んで、輝きを増したのですよね、きっと」
「なるほど、そうか」

部屋の中に小さな虹が出来た。

「虹が出来たんですね」

「ああ。アリエルは人であって、人ではない力を取り戻したようだ。
久しぶりに、空を飛んでみないか？」

「久しぶりって、どのくらいぶりですか？ 私、前世の記憶が無い
ので……」

「四千年ぶり、かな？ もう少しかな？」

「いきなり飛べるものですか？」

「私がしっかり抱きかかえているから、飛べなくなったら私の力で
戻ろう」

深夜の空中散歩は、アリエルにも、そして私にも新鮮な喜びをも
たらした。二人で抱き合って、高く空に登り、大都会の豪華な夜景
を足元に見ながら、口づけを交わし、羽を思い切り伸ばし大きく羽
ばたかせる。

「ああ、本当に生きているんですね。あなたと。これからもずっと
ずっと、御一緒に生きていきます」

「いつどこに生まれ変わろうとも、私の魂はアリエルと共にある。
もう決して離れるものか」

熱い誓いの口づけを交わした直後に……思いもかけない事件がお

こり、幸せな空中デートが一瞬にして砕け散るなどと誰が予想しただろう。

時ならぬ雷鳴がとどろいた。雷を操る力はかつての私の物だった。それを取り上げたのはあの天界の「神」だ。大天使と付き従う小さな天使の一団が姿を見せた。

「汚らわしき魔界の物ども、今日こそ目にもの見せてくれる」

「私達はただ、空を散歩してただけだ」

「空はお前たちの領分ではない。たとえここが不信心者が山をなす穢れた地であろうとも、お前たちがあたかも神の御使いのごとく羽を持つて高き所に登り、愛の言葉を交わすなど、有り得ぬ。悪魔は悪魔らしく、地を這い、地獄にもぐり、浅ましい肉の交わりを持つて、自分たちのけがらわしい思いを遂げればそれでよからう」

「汚らわしいだと？ ミカエル、貴様にどのように言われる筋合いは無い」

そうだ。ミカエルだ。間違いない。ルシファーに瓜二つな面差しの天使。金の髪と青い目、手には悪魔と悪魔に従う人間を情け容赦なく切り捨てるための大きな剣を腰から下げている。ミカエルの目は激しい怒りに燃えていた。

「貴様らのために、ウリエルまでが」

「ウリエルは、我々を正しく理解してくれている。そしてルシファーは大切な友だ」

「許さん」

人間としての剣の修行の賜物だろうか、私もアリエルも、いささか血迷った大天使の剣を幾度かすり抜けた。小さな天使たちに至っては、私達を攻撃する力をまるっで持つていないようだった。

「戻るぞ」

「はい」

魔族の強力な結界を張り巡らした邸に急いで戻ろうと、アリエルの手を引いた瞬間、ミカエルは有るうことが、アリエルめがけて剣を投げつけた。

「いやああっ」

「アリエル！」

アリエルを抱きかかえようとした瞬間、その体が私の手をすり抜けた。おびただしい血の匂いがする。なんとアリエルの体には深々と剣が突き刺さっている。

「アリエル！」

私の叫びが、世界中に散る子供らの意識を覚醒させたのは確かだった。アリエルの羽が一層大きく開き、落下が止まった。子供らの加護の力が働いているらしく、アリエルの出血は止まった。だが、ひどい。背中から一刺しではないか。

「待ちなさい。馬飼野治」

驚いたことに、振り向くと古事記か日本書紀の中から抜け出てきたような姿の女神が居た。白く輝く雲の上に乗り、柔和な笑みを湛えて私を見た。

「我が名のもとに、夫婦の誓いを交わしたそなたたちを護ってしんぜよう。この異国の神の使いは、主のもとに送り返しますぞ」

「その、光る卵のようなものが……ミカエルでしょうか？」

「異国の名は、ようわからぬが、そのような名であるようだ。ともかくも、不埒な事をこの日の本ですることは認められませぬ。こやつは、ここから追い出します」

その女神は卵に息を吹きかけると「異国の神の物は、その神の元に戻れ！」と叫びざま、遠くに投げた。

ミカエルは、どうやらその言葉通り強制的にあの、神のもとに戻ったようだ。

「つ、妻は？どうなりましようか？」

「馬飼野恵瑠とその子は、我が宮にて癒しましょう。次の満月の夜に根の国と常世の国の境目に迎えに来なさい」

「そ、それは一体、どこでしょうか？」

「そなたには、わかるはずじゃがな」

その言葉だけを残すと、アリエルを自分の乗った雲に乗せ、大変な速さで西の方角に飛び去った。

邸に戻ると、もうすでにベルゼバブ・バルベリト・ルシファーが、横島ことサリエルと共に沈痛な面持ちで私を迎えた。

私が事の経緯を説明すると、皆は少し表情が明るくなった。

「根の国と常世の国の境とは……」

「そつした伝説のある土地と言えば」

「有力候補は島根か和歌山か」

「それとも、もっと違う場所だろうか？」

それにしても、アリエルの気配が全く読み取れない。あの女神の「宮」に居ると言う事なのだろうか？

「王よ、あなたにならわかるはずだと……その女神が告げたのだな？」

「ああ。確かに、そう取れる言葉を残したが」

「満月の日に、女の神々は力が満ちる事が多いのではないですか？」

「確かに、サリエル殿の言うとおりだ。それにしても、我が双子の片割れがとんでもないことをしてかして、実に実に腹立たしい」

ルシファールは自分とური二つのミカエルを許し難く感じているようだった。

夜が明けてから、私と私の子供たち、そして企業体の総力を挙げてアリエルの行方を探し求めたが、全く手がかりは無かった。

「旦那様、苦しい時の神頼みと申します。結婚式の時に祝詞をささげた大神様に心を込めて、祈られたらいかがでしょうか？」

横島の意見ももつともだと思い、私は急遽休みを取って、古代から尊崇を受けてきた社に参拝する事にしたのだった。

65 満月

季節は次第に冬へ向かう。私は幾度か起源が文献で明らかではない程古く、強い力の感じられる神社を数箇所訪れ、アリエルと息子の無事を祈った。特別の「神託」なり「お告げ」なり有るかと思つたが、特に何も無かつた。ただどういうわけか、アリエルは無事で元気だと信じる事が出来た。

アリエルが姿を消した新月の夜からおよそ二週間の間に、十一月も半ばとなつた。正直言つて、隣に誰も居ないベッドで眠るのは辛かつた。アリエルと再会するまでの三十数年間、ずっと一人で眠つていたはずなのに、慣れとは恐ろしいものだ。孤独な寢床では様々な夢を見た。幸せな夢も辛い夢もあつたが、大半は過去の思い出だつた。それが、いよいよ約束の満月の夜が迫つていると思つて寝た所為だろうか、奇妙な夢を見た。

あの女神と似たような雰囲気、そう、古代のこの国の貴人の身なりをした連中が雲に乗つて、何処かに集合している。何やらお祭り騒ぎが始まるのだろうか？ 何処かで海鳴りの音が聞こえたような

……

「神有月の望月の空」

そんな言葉がさつと自分の中に飛び込んできた。神有月……と言ふからには、場所は特定できたが、それで正しいのだろうか？

「明日の夜はどうやら満月のようです」

「そのようだな。だが、場所は……」

「夢で啓示をお受けになつたのでは？」

「神有月の望月の空……と言う言葉だったな」

「さようで。でしたら、やはり……何でしたら、お二人でごゆっくり温泉でも？」

「そう、上手く行くと良いが、手配だけ頼むか」

横島は話が早い。もう頭の中に東京から関西に出て、そこから飛行機、更にハイヤーかタクシーと言う旅程とおおよその到達時間を割り出し終わっている。自力で真夜中に目的地に飛ぶ事も考えたが、人間としての移動方法のほうで、他の霊的に力の強い連中に知られる事無く移動できる。先日のミカエルの件が有るから、用心した方が良いでしょう。

「ルシファア殿と翼さんに付き添いを頼まれてはいかがでしょうか？ ミカエルの件がご心配でしょうから」

「そうだな。では、そう願おうか」

「神有月の望月の夜が、心しき物となりますように願ひまして、心当たりの宿を手配いたします」

どうやらルシファアは「普段真面目」なので「家庭の事情」で急に有給をとっても大丈夫らしかった。教員仲間には「遠方の親戚の家にどうしても行かなくてはいけない用事が出来ました」と言ったようだ。

「土産の手配も頼む」と横島に念押ししたらしい。あのルシファアが職場の同僚達に土産、何やら不似合いなような気もするが、真面目に務めているなら、当然かも知れない。

当日の朝、新幹線のホームで待ち合わせた二人は、いかにも似合のカップルだった。

「先生、サングラスなんかしちゃって、芸能人みたい」

翼君は笑うが、ルシファアは下手なテレビタレントよりよほど存

在感が有る。

「東京関西間はやはり、JRですか」

「飛行機の乗り継ぎだと、二時間以上空港で待つ羽目になるようだ」

座席はグリーン車を四人分取ってある。

「わ、グリーン車ですか。私初めてです」

翼君は弾んだ声を上げてから、ごめんなさいと私に謝った。

「いや、謝る必要は無い。楽しい日になるという予感が有るのなら、結構な事だ」

「私、今朝、変な夢見ました。変じゃないか。恵瑠が出て来て『そろそろ紅茶が飲みたいな』って言ったんです」

「話はしたのか？」

「いえ。ただ、妙にリアルでした。本当に向かい側に恵瑠が座つてたためいきついてる感じです」

私もルシファーも一度でも行つた事が有る場所には、瞬間的に移動できるが、そうでなければ飛ぶか、普通の人間と同じ手段を取るしかない。

「初めての土地ではあるが、様々な霊的な存在が集結しつつあるのは感じられるな」

ルシファーの職場の同僚だった教師が今日これから向かう土地の出身者で、家族の介護問題などが有って、関東の学校をやめて出身地の高校の教員に転職したそうだ。

「そいつの意識を読んで、それを足掛かりに少し探りを入れるとか
なりの事が読み取れる」

「なるほどな。ならば私も今夜厄介になる予定の旅館の料理長を探

って見よう」

「一時期、あなたの邸で二スロクの指導を受けていたのだったか？」
「そうだ」

大西録太郎こと二スロクは、この国でも食通たちの間でそれと知られた優れた調理人だ。元々が魔界随一の料理上手であっただけに、当然と言えば当然の評価だが。時折人づてに若い調理人を鍛えてほしいと頼まれるが、指導し甲斐の有りそうな者しか引き受けないのだ。それだけに二スロクが「一人前」と認めた料理人ならば、その料理は大いに期待できる。だが……

「あなたの妻はきつと大丈夫だ」

「そう思うか？」

「根拠と言えるほどの根拠はないが、目的地が近づくにつれ、波動がごくわずかに感じられはしないか？」

「確かに……」

名古屋を過ぎ、滋賀県に入ったあたりから、非常に微弱な気配を感じる。落ち着いた穏やかな波動だ。

飛行機に乗る頃にははっきりとその波動がアリエルの物だとわかるぐらいになっていた。

飛行機を降りてハイヤーに乗ると、最初にこのあたりで最も大きく格の高い社やしろに参拝する。

「少し回り道ではあるようだが、おそらくはこの方が良い」

私の意見にルシファーも賛成した。

「このあたりに各地から高位の神霊が参集している。王の仰るよう

に筋を通しておいた方が、やはりよいだろう」

神社は特別な祭りの期間であるだけに、平日であるにもかかわらず、かなりの数の人々が参拝していた。かなり遠方からも参拝客がバスツアーで訪れて来ているのだ。

私達も一般の参拝者としてアリエルの無事を祈念した。

（宿で身を清め、戌の刻を回ったら再びおいで願おう）

ただそれだけであつたが、私もルシファーも翼君も同時にそのメッセージを感知した。

「宿に戻つて、身を清める必要が有るんですね」

「恐らく大都会で、色々な邪気を帯びてきたのを払い落とした方が
良いのだろう」

「王よ、この地の温泉は神靈的にも恐らく特別な意味合いが有るの
ではなからうか？」

ルシファーの言う事ももっともだった。急いで旅館に入り、この
地の地脈から湧き出てくる温泉に身を浸すべきだろう。

「でもまあ、あれだよ。夜までは温泉に浸り、ゆっくりしてくれれば
良い。まずは昼か。この近所にワイナリーが有つて、うまい昼が
食べられるそうだ。翼君、ステーキとワインで良いかな？」

「もちろん、でも、恵瑠が居ないのに……」

「何、腹が減つては戦は出来ぬつて言うだろう？」

運転手にも食事代とチップを渡しておく。ハイヤーは一応宿に着くまで借り切りの約束だ。地元のワインとステーキのランチ、土産のワインやケーキなどを買ひ、早めに宿に入った。

「夕食は恵瑠が戻ってからにしましょう」

翼君なりの気遣いだろう。

「では、そうさせてもらうけれど、何か食べたければ軽食なり、デザートなり頼んでくれればよいからね。大抵のものは部屋係の仲居さんがどうにかしてくれるはずだ」

部屋番号を言ってもらえば全部私のつけになるようにしてくれる様に、話は通してある。

「では、夜七時にロビーに集合だ」

とった部屋は二つ。一つは私とアリエル、もう一つはルシファーと翼君の為に、共に離れの特別室で専用の露天風呂が有る。寝室はゆったりとしたベッドが二つある。和と洋のいいところ取り、というコンセプトらしい。この地域でも有数の巨大な露天風呂に入ってみる。どうも、部屋の露天風呂はアリエルと一緒にじゃないと余り入る気がしなかったのだ。それから、ベッドでぐっすり眠った。

依頼しておいたコールサービスで起こされるまで、全く目が覚めなかったのが驚きだった。

「何やらすっきりした顔つきをなさっている」

ロビーですでに待っていたルシファーにそんな風に言われたが、確かにすっかり疲れがとれた感じがする。羽で飛ぶのは不測の事態も考えて控える。昼に依頼したのと同じハイヤーの運転手が来てくれた。

「今夜は何か夜に特別の神事が有りましたっけ」

「いや、お告げが有ったのでね、信じて行ってみるんだよ」

「大神様のお告げですか？」

「たぶんね」

へええ、と運転手は納得したようなしないような顔つきになった。

「うちの婆さんが、大神様のお告げは、何をおいても身を慎んでお受けしなければいけないと言っていました、自分は生まれてこの方幾度も参拝してますが、お告げを受けたことは無いですよ」

「そのお告げは我々三人が一度に聞いたのでね」

「へええ！」

なんだろう。凄いですね。そんなことを呟いた後は、無言で目的地まで運転を続けた。

「今晚中に戻らなかったら、帰ってくれて良いよ」

「いえ、よろしいですよ。次の予約も入っておりますし」

じゃあ、とチップを渡して少し遅めでも待っていてもらう事にする。

三人で揃って大鳥居をくぐった。間もなく参拝終了時間だ。

(こちらへ)

何かに呼ばれた。三人揃って呼ばれた方の神木の影に回り込むと、そこに大きな白い雲が浮いていた。

「さあ、御乗りなさい。あの人を迎えに行くのでしょうか？」

我々は羽も開かないのに、ふわりとその雲に乗る事が出来た。大

変な速さで夜空を進む。

「さあ、ここです。馬飼野治、あなたが一人で妻を迎えに行きなさい」

促されて雲から降りると、黒々とした大きな岩が見えた。

「岩の傍の桃の木の下に居るはずです」

私は思わず駆け出した。あれは「千引きの岩戸」というあの世とこの世の境目の岩だろう。

「アリエル！アリエル！」

「治さん！」

確かに傍らの木の下にアリエルがいた。

「良かった、無事で」

「ええ」

結界と思しき二本の大きな石の柱にしめ縄を渡した所まで戻ると、もう、そこに白い雲は無かった。

「よかった！ 恵瑠、一緒に戻ろう」

「我々も雲から降ろされましたよ」

「ハイヤーの待っている所まで、自分たちで飛んで戻れば良いって言われました。恵瑠、紅茶が飲みたい？」

「うん、すごく。ずっと白湯か日本茶だったもん」

「一体、今までどこにいたのかな」

「実は私にもよくわかりません」

「王よ、積もる話は宿に戻ってからが良くはないか？」

四人はそれぞれ翼を広げ、私はアリエルと手をつないで、先ほど

のハイヤーを待たせた場所まで飛んだ。

「ありゃあ、綺麗なお嬢さんだ」

「私の妻だよ。迎えに行ってきたんだ」

「お神社にですか？」

「まあね。どう説明すれば良いのかわからないが、そんなところだ」

運転手は奇妙な顔つきをしたが、何も聞かなかった。

「食事は四人一緒が良いかな？ それとも部屋ごとにするかい」

「どちらも一長一短という感じがして、私はちよつと迷う。」

「そちらの御都合に合わせる。我々は単なる付添だからどちらでも構わない」

「久しぶりだから、お二人でゆっくりなさったら？ 帰りの新幹線で長い話もできますから」

車が走り出してすぐ、部屋ごとに配膳しておいてくれるように宿に連絡をした。

「紅茶もすぐに飲めるよ」

「まあ、うれしい」

私はアリエルの腕に腕を絡めた。これで楽にテレパシーで会話ができる。

（今までどこにいたのかわかるかい）

（全然わかりません。そもそもここってどこなんですか？）

私が県名と具体的な地名を告げると、アリエルは驚いていた。

（さっきの場所、あの世とこの世の境目なんですか？）

（うん。神話の黄泉平坂の候補地の一つだよ。あの岩が境目らしい）
（桃の木から動かないようにって、言われたんです。それから、人の世界に戻ったら、まず最初にお風呂に入って身を清めてからにしなければいって、幾度も言われました。それが済むまでは水一杯飲んではいけないそうです）

（ふうん。たまたま泊まる予定の所は、良い温泉に入れるよ）

運転手は私達の会話は感じ取れないだろうが、感じ取れるルシフアーと翼君は、考え込んでいた。

先ほどの神の様子を思うと、アリエルを雲に乗せる事を拒絶した、そういう訳だろうし……アリエルは何かのつぴきならない穢れを帯びた、と言う事なのだろうか？

6 6 浄化（前書き）

バカップルなイチャイチャ話です。

66 浄化

「どれ、診せてごらん？　そう、こちらも、そうそう」

ひどく心配そうな声で言葉をかけられながら、私は衣類を脱がされ、あつという間に全裸にされた。抱え込まれるようにして、温泉の湯が次々と溢れている湯船に入る。

「うむ」

背中を向けて私を湯船の縁に立たせた状態で、治さんが背中の状態をチェックしている。

「背中是完全に治っているね。今度はこちらを向いておくれ」

恥ずかしいけれど今度は治さんと真正面から全裸で向き合う形になる。

「手をよけて。そうだ。そうだよ、アリエル、私に全部すっかり診せて」

食い入るような強い視線で体中を見つめられると、どうしたって体中がカツと熱くなる。

「ああ、よかった。ひどい傷だっただろうに、完全に治った様だね」

今度は抱きしめられる。まだ、ちゃんと湯にも浸かっていない状態の内から、のぼせてしまいそうだ。気がつくといつのまにやら治さんの膝の上ですっぽりと納まるように抱きしめられていた。

「ああ……」

自分でも耳にして恥ずかしいような濡れた声が、つい漏れてしまった。

「体を洗うか」

治さんの手は、どこまでも穏やかに優しく私の体を洗う。でも、私のほうが物欲しげにつき、その部分を見つめてしまうと、「クスッ」と笑われて、ひどく恥ずかしい。

「顔が真っ赤だ、アリエル。妊娠中でも穏やかにゆっくりなら大丈夫だから」

肌越しに感じ取れる治さんのそれは、硬く熱い。治さんは私の右手をそれへと導いた。

「私だって、欲しくてたまらないのを、ちょっとばかり自重しているんだよ。わかるだろう」

別に命じられたわけでもないのに、私の右手はつい、それを握り、しごきはじめてしまう。教えられた強さで、スピードで、丁寧……

「積極的だね、アリエル、そんなに私が欲しいのかい？」

まるで小さな子供にお菓子が欲しいのかどうか問うような、余裕の有る優しい声だ。でも優しいその声が欲望に濡れてきているのがしっかりと感じられる。その事が嬉しい。

「欲しい。治さんが、欲しいの」

以前の私なら口には出来なかった言葉も、今なら口に出来る。

「なら、続きはベッドで」

湯船が庭の露天で、洗い場とシャワーが続き、それにかなり大きな目のベッドが二つ並んだ寝室が続く。かなり遅めの食事が配膳されている気配も、ドアの鍵をしっかりと締めると、さほど気にならない。

「配膳が済んだら、またすぐに二人きりだから」

治さんは、明らかに私を感じさせて満足させる事に専念して……可愛がつてくれた。治さん自身の満足は、とりあえず「食事の後で良いから」と言われたので、それに甘える。つい、声が出そうになると、丁度のタイミングで口を口で塞がれた。

「可愛い声を聞くのは、食事を取ってからにしようね」

その声だけで、また更に体温が上がるような感じた。

現金な物で、とても食事どころでは無いと直前まで思っていたくせに、いざ、食事を目にするると強烈に空腹を意識する。鯛や「七珍」と呼ばれる近所の湖で取れるワカサギや鯉、ウナギ、シラウオ、等々どれも美味しい。十一月なのに、もうコタツだ。このあたりは東京より冬が来るのはかなり早いらしい。

「もう、コタツなんですね」

「昔ながらのしきたり通りなら、旧暦十月の亥の子の日にコタツを出すものだよ。もう過ぎているから、出ていても不思議はない」

「コタツを出す日が昔はすっかり決まっていたなんて、全然知りませんでした」

「差し向かいでコタツ、悪くないねえ。こっそり足を伸ばして悪戯もできるし……」

「悪戯ですか？」

「知らないかな『炬燵がかり』とか『炬燵がくれ』とか」

はつきりと意味は分からないが、おそらくセクシャルな話だ。それも恐らくかなり恥ずかしい……つい、顔が赤らんでくる。

「言葉の意味が分かりません」

「でも、ニュアンスは伝わった？ ん？ また、じっくり教えてあげよう。ほら、好きだろう？ 和牛のたたき」

私の好物を意識してくれたらしい。確かにとろけそうな美味しいお肉だ。

「私はこの大粒のシジミが、特に気に入ったな」

たしかにびっくりするほど美味しいシジミ汁は、何だか体中に染み渡るような感じがする。ちょうど松葉ガニの漁が始まった時期だそうで、甘い身をつい、意地汚く穿り返してしまふ。その様子をまた、治さんに笑われてしまった。

「よしよし、これは、こうするんだよ」

何をやらせても治さんは上手だ。落ち着いた優雅な動作で、一番食べやすい脚部分は綺麗な長い形を崩さず、カニみその美味しい部分も器用に取り出してくれた。至れり尽くせりって言う感じで世話を焼いてくれる。

「ほら。食べなさい」

何だかお父さんみたい。

「何、どうしたの？」

「お父さんて、こんな感じなのかなって、思ったんです」

すると、治さんはクスツと笑った。

「私の考えが読めたら、そんな言葉は出てこない筈だよ」

そして、じつと私の顔を見つめた。彫りの深い貴族的な顔立ちの中で印象的な強い光を放つその眼は、世の中の大抵の人間の考えている事を読み取ってしまう。私の考えだけは読み取れないと聞かされてはいるけれど、本当なのだろうか？ 私の何もかもが全部を見透かされているような気がしてならないのに……

「そ、そうなんですか？」

「ああ。でも、ちゃんと食べて、食後の紅茶も楽しんで、それからで、もちろんいいんだけどね」

それから、また、治さんはちよつと笑った。

「今までどう過ごしていたの？ あの女神に何をどうしてもらったのかな？ 傷は綺麗に治っているし、元気なようだから、困った状態ではなかった様だが」

全然どこにいるのかわからなかったのだけれど、ずっと白い光につつまれているような感覚が有った。強烈な光ではなく、木漏れ日

の様な優しい感じの光だった。そして意識が回復してから、幾度か御飯を食べさせてもらったのだけど、全部が和風というか、大昔から日本に有ったのじゃないかなと思うような食事だった。

「新鮮なお魚を塩焼きにしたり、おこわか御赤飯みたいなものも出たし、山菜の和え物にはクルミなんかも入ってましたねえ。白木の御膳に笹とか蓮とかの葉っぱがお皿代わりになってました」

「紅茶は出ないか」

「白湯か水か、時々お茶、でしたね」

「居た場所はどんな場所だった？」

「白い光の結界で出られない、床も壁も天井も白木造のどこか神社の建物の中みたいな感じの場所でした」

神様が神様の眷属なのかわからないが、幾人かのいかにも日本神話の世界から抜けてきたような姿の方たちが光の壁から現れて私の面倒を見てくれた。皆言葉少なく、何の説明もしてくれなかったが、私には不安が無かった。

「どういう訳か、不安感はありませんでした。毎日、日を追うことに体に力が戻る感じがしたのです」

「翼君と夢で話をしたのかな？ 紅茶が飲みたいって」

「ええ、確かに、そんな夢を見ました。するとその日に場所を移りました。何でもそれまでいた場所はお腹の子供とは相性が良くないそうで……」

移った先はもっと結界の光が弱い場所だった。結界から外を覗いたら、巨大な蛇がぐるっと建物を囲み、ムカデやヤモリやコウモリがどっさりいてびっくりした。

「その時、これまでの神様と違う雰囲気、ちょっとだらしなない感

じの汚れた衣装を着た神様らしき方が『子の魂が目覚めた。どうやら前世で凄まじい数の命を奪ったようだ。ひどい穢れは抜けたが、高き位の神と共にいるのは難しいぐらいの穢れは帯びている。人の世と馴染むためにしばらく待て』と、そんな風に仰って、それから何か祝詞の様な言葉を唱えました」

「どんな言葉だった？」

「はっきりわかりませんが、幾度も『あらみたま』という言葉が出ました」

治さんに教えてもらったのだが、神道の方の概念で神様の荒々しい側面を荒霊あらみたまと言うらしい。

「天変地異を越し、疫病を流行らせ、人の心を争いに駆り立てる様な神の作用をそのように呼ぶようだ」

人を加護し、豊かな実りをもたらすのは和霊にぎみたまという神の魂の別の側面なのだそうだ。

「もともとアリエルとアナトは魂が一つであつたのかもしれない。神道的な概念でいう荒魂がアナトで、和魂がアリエルだったのだろう。様々な神気や霊気を帯びるうちに、それぞれが独立した別々の存在になった……そういう事なんじゃないかな」

同じ神の別の側面を、別々に宮を立てて、それぞれ独立した別個の神として祀るのは、日本の神道では珍しくないが、治さんや私がそもそも生じた土地でも当たり前の事だった。

「私の神像は二人の性質の異なる姉妹の女神と共に祀られてきたが、姉のアナトが荒魂であり、アリエルが和魂としての働きを担っていたのだ」

「荒魂には災厄をもたらす以外の良い働きは、無いのですか？」

「いや、そんな事はない。荒魂は新しい物を産みだし、物事を前進させる作用も持つのだ。だから、その力をアリエルが包み込んで、うまくこの世界と馴染ませれば、きっとアナトの転生もうまくいくのだろう」

「ええ、きっとそうですね。二つ目の蛇やムカデに取り囲まれた場所に移ると、それまで見なかった夢をたくさん見ました」

「どんな夢だい？」

「それが……ジャンクフードと言うかファーストフードのハンバーガーやドーナツ・ポテトチップス・ポップコーン、そのほかもあるのスナック菓子……そんな食べ物を物凄い勢いで、食べまくっている私自身の姿を見たんです」

それで、ものすごく太って、肌に吹き出物が沢山出来る、そんな夢だった。

「そりゃあ、また、奇妙な夢だねえ」

「ええ。でも確かに、イヤというほどジャンクフードを食べてみたい気持ちは、私の中にあるような気がします」

「今も、食べたい？」

「うーん、今はお腹がいっぱいだから、食べられないです」

「じゃあ、お茶を飲んで落ち着いたら、食後の運動をしよう」

「運動？」

「そう。ベッドで。さつき気を使ってくれたように、確かに私はまだ、お預け状態なんだよ」

今夜は一滴もお酒を飲んでいないのに、その言葉でカツと体が熱くなる。気が付くと後ろから抱きしめられて、膝の上に乗せられた。背中中に確かに熱いものが、あたる。

「おや、まあ。顔が真っ赤だ。この体勢で交わるのが『炬燵がかり』だよ。わかった？」

「じゃあ……『炬燵がくれ』は……？」

「おや、知りたいのかい？　ありていに言えば炬燵の中に交わった部分を隠している対面座位だな」

耳を軽く齧られながら、そんな恥ずかしい事をしれっと言われて、情景が頭に浮かんでしまった。

「いやあ……」

「嫌なの？　今からベッドに行こうと思ったんだけど」

治さんはわざとだろう。首筋や耳に落としていたキスを止めて、胸を愛撫し始めていた手を外した。

「意地悪」

「おやまあ。意地悪か」

私は治さんの手を取って、胸に導いた。

「嫌じゃありません。嫌じゃありませんけれど……恥ずかしいんです」

「恥ずかしい事は、嫌い？」

私は恥ずかしくてたまらなかった。でも、首を横に振ると、治さんはフツと笑った。

「今からいっぱい恥ずかしい事をしてあげるよ。わかった？」

「……はい……」

治さんは機嫌の良い笑い声をあげてから、私を抱きかかえて、寝室に入った。

67 必要な穢れ（前書き）

また、いちやっています。

67 必要な穢れ

「いやだって言うのは、口だけだよね」

「そ、そのう」

白い肌がぼつと桜色に染まるのは、決まりが悪いからだけでも無さそうだ。互いにベッドに横になり、向かい合わせになりながら、私は片脚をアリエルの真つ白い脚の間に差し入れた。小さな愛らしい乳首はツンと堅くそそり立っている。

「どう見ても喜んでるようにしか見えない。違うかな？」

口に出すのが決まり悪いのか、可愛く首を横に振り、それからおずおずと遠慮がちに私にしがみつく。

「離れていた間、ひどく寂しかったよ。無事で居てくれるのは、何となく感じ取れてはいたのだけれどね」

すると、私の背中に回った手に力がこもった。私は極上の肌触りを楽しみながら、アリエルの片脚を軽く持ち上げ、私の腰に絡ませるように促す。すると可愛い顔が私の胸にぐつと押し付けられ「ほうつ」と言う感じの声が漏れた。互いの脚の絡ませ方が上手い具合に行ったおかげで、私の物は深すぎず浅すぎず、ちょうどこの位置で停止している感じた。

「どう？ 悪くないだろう？」

あえて口に出して感想を求めるのは、少しばかりあくどいかも知れない。

「何も言ってくれないと困るなあ。アリエルの思念だけは読めないのだから」

読めなくても、こんなに互いに至近距離で、ましてや裸で体を繋いでいるのだ。まず読み間違いは無いはずだが……先程からアリエルの内部が複雑に蠢いて、私のものを押し包み絞り上げているのだし……

「ねえ、どう思っているの？ ちゃんと言っておくれ」

「こ、こんな状態で……恥ずかしい」

「恥ずかしいだけかい？ どう？ これなら、はつきり形を感じるだろう？」

彼女の内部の蠢きに応じる形で、少し位置を変えてみる。すると、呼吸が荒くなった。

「い、意地悪」

アリエルの体が熱くなり、やがて秘めやかな水音が立ち始める。

「ずっと流れている温泉の湯の音に紛れてはいるが、聞こえるだろう？ こうして動くたびに立つ音が」

ほつれた黒髪をかき撫でてやりながら耳元に囁いてやると、無言でうなづく。そして、更に体は真っ赤になり、アリエルの方からキスを求められた。互いの舌と舌が絡み、唾液のやり取りをする内に、二人の間の水音も一層あからさまな物になってくる。だが、どこまでもゆっくりとした調子を崩しはしなかった。

子を孕んだ体にふさわしく静かに、だが、あくまで情熱的にその夜は過ぎて行き、私たちは互いの体を絡ませたまま心地よい気だるさに包まれて眠ったのだった。

夜が明けて朝食の後、飛行場に向かう前にお世話になった「大神様」の社に一行四人揃って参拝した。ハイヤーはなじみになった同じ運転手を依頼した。

「やはり、この社は神気が凄まじく高まっているな。このような場所が存在する事が案外この国の底力なのだという気がするが、王よ、あなたはどう御覧になるのだ？」

「近代国家の中に、このような場所を内包しているのが確かにこの国の強みなのだと思う。この力のすごさは、ただ事ではない。これからは私の企業グループももっとこちらの社に繋がりを持つべきだと考えるよ」

ルシファールとそんな話をして、拝殿に向かうと、四人揃ってほぼ同時にテレパシーによるメッセージを受けた。いや、この場合お告げを頂いた、と言うべきなのかもしれない。

（そなたらと、そなたらの子が末永くあまねくこの国で、この国の者として在る事が出来ますように願っていますぞ。もろもろの厄介ごと、まだ無いわけではないが、そなた達ならば大丈夫。豊かな実りを得る事が出来よう）

そう告げられても私は心配で、つい重ねて問うた。

（妻の穢れはどうになりましたか）

（大事無い。胎内の荒魂は無事に人となるであろう。穢れは我らの神気と相性は悪いが、その荒魂が人の世に在るためには欠かせないからだ）

それだけを告げて、メッセージは途切れた。時間にして、拝殿で拍手を打ち、祈るごくわずかの間の事だった。相変わらず参拝客は多い。その人ごみをかき分けて、待たせたハイヤーに戻るころには、私達四人の中に有ったもろもろの不安や心配事は、すっかり消えていた。

「大神様のお告げは、頂けたのですか」

「ああ。私達の子孫は末長くこの国に存在する事を認めて頂けたよ
うだ」

「へええ、それは、本当に良かったですね」

親切で穏やかなこの運転手とも、もうすぐ別れる事になる。今回の旅ですべてが順調に運んだのは、この運転手との出会いもかなり貢献していると感じた私は名刺を渡し、こう言い添えた。

「東京に出る用事が有ったなら、ここに連絡をしてくれ。何か役には立てるだろう」

飛行機でも新幹線でも、アリエルと翼君の若い娘らしい弾んだ楽しげな会話が続いた。

「ジャンクフードって、確かに栄養的には感心しないのだろうけど、たまに滅茶苦茶食べたくならない？」

「私この前、コンビニの肉まんが死ぬほど食べたくて、大学から走って買いに行ったよ。そうしたら、最後の一個をギリギリでゲットできた」

「間が悪いと、また出直しだね。あれ。冷凍をアツアツにするまで一時間ぐらいかかるらしいもん」

「コンビニの中で一時間は、ヤッパきついな。イトインコーナー

「有る店も有るけれど、そこで別のもの食べ始めたら、肉まんがどうでも良くなっちゃったりするんだよね」

「揚げ物は、コンビ二でもファミレスでもお店によっては相当油がきつくない？」

「うん。確かにお店で出来不出来が有るね」

ファミレスと呼ばれるような店を私は余り利用した事が無いが、営業時間が長く年中無休の場合も有るので都合が良いのだろう。学生達はちよつとしたミーティングルームがわりにしたり、論文やレポートを纏めるのに使ったりする事も多いようだ。肝心の料理は、アイデアや見た目は悪くないが、残念な仕上がりが多いように思う。大抵こうしたチェーン店は外部のセントラルキッチンなどと呼ぶような集中調理施設で加工・調理された食材を使っている。店で行うのはたとえば肉類なら焼くだけ、スープ類は温めるだけ、といった具合になっていることも多い。セントラルキッチンでの処理が完璧でも、店での最後の仕上げで台無しと言う場合も有るわけだ。

「同じ系列チェーンでも、随分お店によって味が違うわよね。油の処理の仕方が、かなり違うと言うか……」

「中華風の炒め物になると、油が多すぎる事も珍しくないみたい。恵瑠、知ってる？あの部活で一緒の……」

こんな風にファミレスの中華のメニューの話題で盛り上がっている。

（二人とも中華料理が食べたいのかねえ）

（確かに、そのようだ。あなたは余りお気に召さないか？）

（別に、美味しい中華なら付き合うが、正直な話自宅の料理が恋しいな）

（二スロクに中華を頼むか）

（それも悪くは無いが……）

私はルシファーにまともな中華が食べられるホテルでの夕食を提案した。

（ついでに君達二人はスイートルームを頼んでおくから、ゆつくりすればよいじゃないか）

（確かに、明日は休みの最後だが）

私からアリエルと翼君にも話をして、新幹線を降りたら迎えに来ていた車で、私の経営する企業グループがやっているシティーホテルに入った。

「去年、腕の良い中華の調理人をスカウトしたおかげで、料理は悪くない。点心専門のスタッフも居るから、色々楽しめると思うよ」

お嬢様方は盛んに新幹線の車内で「大阪名物のブタ饅を食べ損ねた」だの「神戸の南京町のどこそこの餡饅が絶品」だの「某中華料理チェーンの餃子は値段の割りに美味しい」だの言っていたので、喜んでくれたようだ。特に常時百種取り揃えている点心類が好評だった。

「わあ、金魚そっくりの餃子だあ」

「ウサギの格好のお饅頭、かわいい〜、おいし〜」

「ふかひれ入りだよ、これ、スープがじゅわって」

「海老がプリプリだよ〜」

「なにこの唐揚げ、めちやくちゃ美味しい」

「この春巻き、好きだな〜」

（女の子たちは上機嫌のようだな）

（やはり純和風の連続は堪えるのだろうか。私は一向に構わないのだが）

（彼女たちはやはり未成年ですから、我々おじさんとは感覚も違うでしょう）

（ルシファーが自分を『おじさん』にカテゴライズするとは、少々驚いた）

（あなたよりは若いのは確かだ）

（人を年寄り扱いか。何と言うやつだ）

（事実、魔界でも人界でも、あなたは間違いなく最長老の部類に入る方だ）

（おいおい）

（いつまでも若々しい御様子で、結構なことだが）

にぎやかな夕食が終わり、私とアリエルは邸に戻った。バラの花を浮かべた湯にゆつくりと浸かると、ようやく無事に戻ったと言う実感に浸れた。

「中華料理を私が食べたくてたまらなくなったのも、何かの作用でしょうか？　翼はどちらかと言うと私に付き合ってくれた感じでした……」

「ずっと油気の少ない食事が続いたから、だけではないのかな？」

「和食の時は、あまりこの子の存在を意識しませんでした。中華をワイワイ食べていると、この子が何だか喜んでいそうな気がしたんです」

「まだ、胎動には早いだろうか？」

「胎動じゃなくて、気配、なんだと思いますけど」

「神社でのメッセージに関係が有るのかもしれないな」

「人の世に在るためには欠かせない『穢れ』ですか？」

アリエルの腹をそつとさすってやっても、特に胎動も気配と言え

るほどの物も感じない。微かに別の命が息づいて居る、そんな感覚が存在するだけだ。

「昨夜は、おとなしかったよね」

「私達にちよつと遠慮しているのかもしれませんが。もてが、その、アナトですし」

「邪魔をすると、私に嫌がられると知っているかな」

「嫌ですか？」

やはり、こうした場合、子を孕んだ母親ほど父親には実感が無いわけ……

「アリエルと愛し合うときは、どこの誰にも邪魔をされたく無い」

「嫌でも、そのうち、お腹が大きくせり出してきちゃうと思いますけど……」

「それは、それで一向に構わないんだ。むしろ、そういう姿も貴重な期間限定のものだから、しっかり見せて欲しいし」

また、下腹を手でさすってやる。やはり、子の気配は有るのだが、おとなしい。どう考えるべきなのだろう？

「ああ……」

艶めいた声が上がって、気がついた。知らず知らず片方の手で膝の上に抱きかかえたアリエルの乳房を刺激していたようだ。好機を逃すまいとさつさと風呂を出て、寝室に急いだ。後は「妊婦にも安全なやり方」で愛し合う事に専念したのは言うまでも無い。

68 大神殿

「巫教授がコメンテーターを務める番組がもうすぐ始まるよ」

どうにかギリギリ単位の取得が出来そうだという目途が立ったその週末、治さんがそんなことを言った。

「中東の発掘で何か大発見が有ったんですよ」

「かつての大神殿の一部と、他ならぬ巫教授の前世の邸が出てきた」

「へええ、えつと……タヌワってお名前でした？」

「そうだ。ベルゼバブの友となった初めての人間だった」

なんでも大神官でその都市国家の行政官でもあった、そんな人だったらしい。

「神である存在の言葉を正確に聞き取り、それを膨大な数の粘土板に刻んだのだが……大半がその後失われたはずだ」

「でも、発掘調査で、何か出てきたんですか？」

「メールで知らせてきたのは神像だな。かつての私と二人の妹にして妻であるアリエルとアナトの姿が刻まれている」

パソコンを立ち上げて、送られてきたメールの画像を見せて貰った。素朴な作りの塑像だった。立ちあがって棒を振りかぶる男の神と、その両脇にうずくまるようにして座っている二人の女神の姿が表されている。可愛らしい顔のあたりの金彩と目元がはつきり残っている。

「この、棒を振りかぶっているのが治さん？　ですよね。何だか目元の感じが似てます」

「サリエルには、この振りかぶった姿が実際の私のくせをよく表していると言われた」

「あ、そうですね。剣道で上段の構えをしたときの感じ……足の開き方とか、肘の曲げ具合とか……この三人の神の名前、巫先生は何と呼んでいるのですか？」

「フフフツ、内緒だよ」

「あ、治さんの本当の名前、今度こそわかるんじゃないですか？」

「巫さんが呼ぶ名前は、あくまでヒントにしかない。当時もすでに正しい名前は忘れられていたのだよ。どう言っ訳かアナトの名前だけは正確なんだけど、アリエルの名前も異なる名前になっている」

「アシュトレト？」

「これは……呪いを含んだ、あの唯一絶対神を信じる連中が勝手につけた呼び名だ」

「治さんの名前は、こんなに昔から忘れられていたのですか」

「そうだ。名を秘める事が自らを守る事に繋がるのでね」

何とまあ、こんなにも昔から治さんの本当の名前は秘められていたのだった。

「アナトは、当然知っていたのですよね？」

「知っているはずだが、正確に呼べない。私の名前は優しく呼んで貰わないと正しく呼んだ事にならないのだよ」

「優しくですか？　なぜ、アナトには呼べないのでしょうか？」

「アナトは殺戮行為を止めなかった。幾ら私が注意しても聞かなかった。いつしかアナトは私の真名を呼ぶ事が出来なくなっていたんだ」

「私には呼べるのでしょうか？」

「呼べるはずだ。幾度生まれ変わっても、いつも必ず呼べるようになるのだから」

そうこうするうち、テレビの番組が始まった。

「巫先生、この遺跡は随分大きいんですね。どうしてこれまで知られていなかったんでしょう？」

質問する司会者は、遺跡の大きさにまず驚いたようだった。

「この神殿に祀られた神とは異なる神を信仰するグループなり都市国家なりに責め滅ぼされたのでしょうが、この神の偉大さはそれなりに恐れられていたようで、意図的に埋められたようです」

「埋めたのですか？」

「粘土質の土で巨大な人工の丘が出来上がるほど、大量の土を盛ってますね」

「なぜ破壊もせずに、埋めたのでしょうか？」

「どうやら崇りを恐れたようです」

幾つかの粘土板がこの大神殿の崇りについて記述しているのだそうだ。

「まだ完全に解析が出来てはいませんが、これから研究が進めばもっと色々興味深い事がわかってくるでしょう」

当初、この遺跡のある土地に工業団地を作る予定だったが、どうやら変更になりそうだということも番組の中で紹介されていた。

本当は巫教授は前世の記憶が戻ったのだから、粘土板の文字もスラスラ読めるはずなのだが……治さんや私に関わる事柄については、当分伏せておいて下さるらしい。

番組放送の翌日、巫教授を我が家にお招きした。『息子達』と言うかベルゼバブである富原さん・バルベリトである羽根山さんにも来て頂いた。後は星先生と言うかルシファーと翼のカップルも招待

に応じてくれた。

「結構お腹目立ってきたよね」

「うん」

翼に悪気が無いのはわかるが、他の人も居る所で指摘されると、何だか恥ずかしい。

「出産予定って いつだっけ？」

「五月の連休ごろ……ですよね、治さん」

「少なくとも、医者はそう言っているよ」

治さんがそう答えると、ベルゼバブ・バルベリトのお二人もこう応じる。

「いよいよですなあ」

「全くです。いよいよですなあ」

巫教授は食事の間終始にこやかにしておられたが、デザートが済むとこんな事をおっしゃった。

「あの例の呪詛の護符と言うか粘土板ですが、どう処理しましょうか？ 呪詛の効果はあの時無効化出来た筈なのですが、粘土板自体はこうして原型を止めています」

ジャケットの内ポケットから取り出した粘土板をテーブルの上に乗せた。

「これは完全に砕いた方が宜しいでしょうか？」

「一体、なんて書いてあるのですか？」

私の問いに対して、教授は治さんの方を見て尋ねた。

「御説明しても構いませんか？」

「大丈夫でしょう。よろしくお願い致します」

「お許しを頂いたので、ご説明させていただきます」

この粘土板は以前私が気を失って寝込んでいたときに、皆さんが協力して力を尽くして呪いを無効化した護符である事に違いないと思われる事と、テレビでも紹介された神像と一緒に埋められていた事、埋まっていた場所が大神殿の最も重要な祭壇のすぐ傍である事をまず説明なさった。

「さて、肝心のまじないの文章ですか、こうです」

『アナトはアリエルでありアリエルはアナトである。故に兄であり夫であり主である神との絆は絶対永遠なり。三つの神の魂はもとは一つにして不可分なり。いかなる存在も三つの神の魂を引き離すことは適わず、打ち砕く事も適わじ』

私にはそれが呪いだとは、到底思えなかった。

「これが本当に呪いのまじないなのですか？」

治さんも同様に感じたらしい。

「呪いでもなんでもなく、至極当たり前の事を述べているだけのよ
うな文ですね……」

そこにコーヒーを持ってきた横島さんが話に加わった。

「つい先ごろ、この邸にも本格的な神棚を設けました。そこで皆様でお祈りをなさって、お告げをお待ちになったらいかがでしょうか？」

「なるほど、それが良い」

真つ先に巫先生が賛成なさった。御実家が古いお家柄で、御兄弟が神職を務めておられる所為らしい。

皆さんを神棚が有る座敷にご案内して座っていただいてから、昨年十一月に起った事件について、治さんが教授にかいつまんで説明した。

「それ以来、必要を感じまして、こうして神棚を設け、大神様に朝夕御挨拶申し上げています」

「なるほど、以前は感じられなかった神気のようなものが感じられるのは、そのせいですか」

皆で一緒に拍手を打ち、大神様に祈った。

（これほどに強い力で呼び出されては、無視も出来ぬな）

大神様の気配が神棚に確かに感じられる。

（その板、今は何の悪しき気配も帯びておらん。毎朝朝日をあてた後、神棚に安置するが良からう）

（まだ朝日を浴びておりません今は、いかが致しましょうか？）

（今清めたゆえ、大事無い。だが、明日の朝になったら必ず朝日を当てるように）

（朝日を当てますのが一日でも途絶えましたら、どうなりますか？）

（そこもとら三人の内誰かに悪しき事が起ろう。胎内の子が無事に

生まれたら庭の最も日当たりの良い場所に埋めよ。埋める際は袱紗に包み、白木の箱に納めるように。その場所に桃の木を植える事ができれば最上じゃ」

座敷に居た皆に大神様と治さんのやり取りは感じ取れたはずだ。

「なるほど、まじない自体は呪いではなかったのですか。ですがアナトの神としての有り様から、あのようなトラブルになった……そう考えればよいのでしょうか？」

「今はあの騒ぎが嘘のように、静まっていますな」

「アナトはアナトなりに決まりが悪いとか、遠慮しているとか、そうした事でしようか？」

治さんは、遠い昔を振り返っているようだった。

「うむ……『アナトは麗しく、アリエルは愛らしく』かつてはそのように言われたものだったよ。事実アナトは敵の返り血に塗れていても、輝くばかりに美しかった。アナトは勇猛で感情の表現も激しかった。いつの頃からか人間に子供を生贄とすることをアナトが強要するようになって、私はアナトから距離を取るようになった。人間を生贄とする事をやめさせようとしても、聞く耳を持たなかったのだ。更に私との間の息子をアナトが殺したことで、完全に私の気持ちが離れてしまった。だが、やはり……アナトはアリエルと共にあるべきなのだろう」

巫教授はその話に深く頷いていた。

「テレビで紹介したあの神像は、あなたと二人の妹であり妻である存在の像なのだと思いますが……今も基本的な関係は変わらないと言っ事でしょうか？」

「どうなのでしょう。そもそも、アナトには二度と一緒に暮らすつもりは無いと言い渡して訣別しました。分かれて暮らした時間は随分と長かったですし……そう、優に四千年は分かれていたことになりましょう。そうした事を思うと、あの神像のように私とアリエルとアナトが一緒に雲に乗って仲睦まじく出かけた頃に戻れるとは、正直言っと思っています」

やはり治さんはアナトを受け止め切れないのかもしれない。

「……ですが、アナトは息子に変わりました。しかも人としてのアリエルと私の間の初めての子供として胎内にいるのです。あの戦闘的で、女としての力行使するのにもたぬ彼女が、男の子に変化した……大変な変化です。それに、私もアリエルも今は羽を得ています。あの神像の時代には雲で飛んだものでしたが……我々も天使達との戦いの中で、変質せざるを得なかったのです」

「アナトに羽は有るのでしょうか？」

巫教授はアナトの有り様は、羽に現れると考えて居るようだ。

「アナトの羽を見たことは有りません。ですが生えたとしたら黒でしょうね。でも、もう、我々の子供に変わったのです。黒い羽根が生えるとは、私には思えません」

私の脳裏に突然、治さんと私と小さな男の子と一緒に空を散歩している様子が浮かんだ。男の子の羽根は、純白だった。

69 三人

「奥様の無事御出産、おめでとうございます」

邸のもの一同の祝いの挨拶を受け、私は病院に向かった。羽有りでも、臨機応変に対応できるスタッフばかりを集めた我が企業グループの傘下の病院でアリエルは、無事、男子を出産した。

「アリエル、気分はどう？ お産は大変だっただろう」

「思ったほどつらくありませんでした。普段から運動する癖をつけていたおかげでしょうか、それともこの子のおかげでしょうか？」

「恐らく両方かな。それはそうと先ほど出生証明書も出来たから、今日、出生届を出してくるよ」

「よろしく願います。これが母子手帳です」

出産に立ち会った医師と助産師の印が押してある事を確認する。私も出産には立ち会った。

「標準体重なのか。出血、普通となっているが、あれで普通なのか。やはりお産は大変なものだなあ。名前は以前から決めているように浄じやうじで良いよね」

「ええ。もう、そう呼んでますし」

ちょうど新生児室からその浄が運ばれてきた。すやすやと眠っている。

「とても、もとがアナトだったとは思えない無垢な波動だな」

「浄君、お父さんですよ」

アリエルが声をかけると、眼が開いた。乳児の目がいつからはっ

きり人の顔を認識するのかわからないが、今この瞬間、私はこの浄に見つめられていると感じた。

「今日はお前の名前をちゃんと役所に届けてくるよ。浄という名前を気に入ってくれるといいんだが」

「全然泣かないで、お父さんのお話をちゃんと聞いているのね。えらいわあ」

アリエルは、胸を開いて、乳房を消毒し始めた。それが終わると、浄を抱きかかえ、口に乳首を宛がう。

「お乳の出は、どう？」

「まだ、おそらく十分じゃないでしょうけれど、浄君は一生懸命吸ってくれるから頑張らないと」

大学の方は前期は無理をしないことにして、後期にやれる範囲で単位を取る事にしたらしい。

「大学は、留年することになっても焦るんじゃないよ」

まあ、甘い大学ではないので、留年も覚悟した方が良くかもしれない。

「翼に見てもらって、色々点検したんですが、おそらく今年はギリギリ行けるんじゃないかなと思います。前期はお休みだらけになっちゃいますけど、レポート提出で出席の代わりにして下さる先生もおられますから」

「だが、そのレポートも子育てしながらではきついよね。邸の方に浄の世話をするスタッフを二名、迎え入れたよ。明日ここに連れて来よう」

「凄いですね。二人もですか？」

「一人は五十代で小児科の看護師の経験もある子育てのベテランだ。もう一人は三十代で幼稚園教諭としての経験も有リイギリスのナーススクールを卒業して、住込みの育児経験もある人だ。二人とも我が社の社員の家族で、本人たちは自覚していないが、私達のこれまでに生んだ子供たちの子供にあたる」

恐らく、アリエルをかなり助けてくれることになるのではないかなと思っています。

「私は恵まれてますねえ。そんな強力なスタッフが助けてくれるんですから」

「私がそのスタッフを探してきたんだが」

「あ、もちろん、治さんが一番強力な助っ人です」

「アリエルが育児疲れでやつれたりしたら、私が困る」

「そうなんですか？」

「当たり前だ」

浄は満足したらしい。アリエルがげっぷをさせて、おむつを替えると、また眠り始めた。

「あの……治さん？」

「何だ？」

「何だか拗ねてませんか？」

「拗ねてる？ 私が？」

「じゃあ、いいんですけど……私が一番愛してるのは治さんですかね。浄君には内緒ですけど」

そついうと、少し背伸びをして、私にキスした。

「ああ、良かった。やっぱりご機嫌が直った」

アリエルにそんな風に言われてしまつて苦笑する。自分でも知らず知らずの内に拗ねていたのかもしれない。退院までまだ、幾晩も一人さびしく寝なくてはならないのがつらいのだ。

「その…… やっちゃいけない事はしないから、退院したら同じベッドで寝ても良いよね」

「真夜中の授乳が有りますよ。治さん、お仕事に差し支えませんか？ それに…… お風呂は無理で、ざつとシャワーを浴びるだけです……」

「いや、隣にアリエルが居ない方が嫌だ。授乳は親の務めなんだから、私にも手伝える事はするし」

朝の回診やら色々せわしくなつてきたので私はさつさと役所に向かい、出生届を出した。それから、かねてから世話になっている造園会社で桃の木の移植をどうするか相談した。

「花桃の実は八月ごろに熟します。実がなり終わつて、お礼肥をあげてしばらくしてから植え替えましょう」

「具体的には何月ごろでしょうか」

「そうですね、十一月に入つてすぐぐらいはいかがでしょうか？」

梅雨前に植えて植え替えられないものでもないが、十一月の方が安全なのだという。

「ならば、急いで梅雨前に、お願いしたいのですが」

我が家にはサリエルもいる事ではあるし、おそらくどうにかなるだろう。

色々せわしく準備をしていたら、思いのほか早く日にちが過ぎて、アリエルは無事に浄をつれて退院できた。それから数日の間の様子を見ている限りでは、新たに雇い入れたスタッフ二人の働きはかなり期待できそうだ。少なくともアリエルが不安を感じるのが減り、つかれきってしまう事を防ぐのに役立つてはいる。

「私はこうして隣にアリエルがちゃんといてくれる、それだけで穏やかな気分で眠れる」

「でもやはり、夜中うるさいでしょう？」

「あまり手助けできなくて、心苦しいだけだよ。うるさいなんて、とんでもない」

夜中に授乳で起きるのは全然気にはならない。普通の人間の男は母乳の匂いに郷愁なり安らぎなり感ずる物らしいが、残念な事に私は母乳を飲んだ経験が無い所為か、アリエルの乳くささに少しまだ戸惑っている。別に不快ではないし慣れたが、アリエルが母親になったのだとイヤでも意識させられる。本人が随分気にしていた入浴の問題は新たに最新型の全身シャワーの装置を取り付けて、かなり緩和できたと思う。

「十箇所のノズルから細かい霧状のシャワーが出て、体中を包み込む感じで、お風呂に浸かったような感覚に近いですね。気に入っちゃいました」

元来は介護用の商品で、車椅子に乗ったままの人間が冬でも暖かくシャワーを浴びる事が可能だ。髪は私が美容院に有るような洗髪台を使って洗い、乾燥から仕上げまでしている。

「治さん、まるで美容師さんみたいですわ、とても気持ち良いで

す」

そんな風にアリエルが言ってくれるので、まずまずかも知れない。出産で髪が痛んだ事も考慮して、特別な専用シャンプーとトリートメント剤を使っているおかげもあってか、アリエルの髪はいつもどおり艶やかだ。

「乳房のマッサージもしてもらえるので、私恵まれてます」

新しく専門的な技量のあるスタッフを雇い入れた効果は、確実にあるようだ。乳房のマッサージも素人がキチンと正しくやるのはなかなか難しいのではないかと考えて、事前に対策を練っておいたのが良かったようだ。

「よかった。心配したほどやつれたりはしなくて。でも、まだまだ体は疲れやすいのだろう？」

「やつれたって感覚は良く分かりませんが、何かと言うと疲れやすいのは困りますね」

「無理をしてはいけないよ。疲れたら、すぐに横になりなさい」

庭の一番日当たりが良い場所には、例の粘土板を袱紗に包み白木の箱に納めたものを埋め、その上に桃の木をしつかり植えた。園芸に詳しいサリエルが世話をするおかげで、ちゃんと根付いてくれるのだ。

「やれやれ、一安心といった所か」

「植え替えの直後でも、この分なら実がかなり実るかもしれませんね」

「何か使い道は有るのか？ 花桃の場合、実は食べられないのかと思っていたが」

「果実酒にできます。あとはジャムに加工できましょう」

「ほお。それは楽しみだな」

サリエルに言わせると、なかなか悪くない風味の様だ。

「特別な意味合いのある桃なのですから、実を召し上がる方が厄払いになるかもしれません」

それは、確かにその通りかもしれない。まだ、非常に小さい青い実を見て、これから迎える季節を思った。

「来年の春には桃の花が楽しめるのか。悪くない。悪くないな」

「この木は白・ピンク・赤の三色の花が咲くものです。御三方の御縁を強固にするには、まことに似つかわしいと感じます」

夜、その話をアリエルにすると急に育児書をめくり始めた。

「ああ、九か月から一歳だと……ハイハイやつかまり立ちをして、少し言葉も出てくるみたいです」

「そうか。あの桃が咲くころには話をするようになるのか」

「もしかしたら、もっと早いって事も考えられるでしょうか？」

「どうなのだろう。体の仕組みや口の動きが伴わないと、頭で理解しても話せないだろう。恐らくいろいろな事が普通の子供より早いだろうが……一応体の発達段階は通常の子供と大差ないのではないだろうか」

まあ、そうは言ってみたものの本当の所はわからない。何しろ、元が元なのだから……

「要らざるざる心配……ならば良いのだが」

「……そう言えば、治さんて浄を抱っこしませんね」

「ん？ ああ。そういわれてみれば、そうだな」

「元が元だから、嫌ですか？」

「そう言つつもりは無かったが……」

「お父さんに受け入れてもらえない子供って、やっぱり上手く育たないかも」

「いや、すまない。そんなつもりは無いんだ。本当に」

「じゃあ、目を覚ましたら、一度抱っこしてあげて下さい」

「う、うん。わかった」

アリエルにしては強い調子、強い語気だ。確かに、息子として生まれた存在を、きちんと受け入れられない父親というのは実に問題だろう。

しばらくして、授乳時間になり、アリエルは浄を抱いて乳房を含ませる。美しい光景だと思うが、これまで浄を抱っこしようという気にはならなかった。というか、母親のアリエルしか見ていなかった。

「ほら、抱っこしてあげてください。あなたの息子なんですから」

どうも我ながらぎこちない。自分がこの存在を抱くのは、どこか場違いな気がする。そんな違和感がぬぐえなかったが……驚いた。実際抱いてみたら、全く異なる感情が自分の奥から湧いてきたのだ。

「確かに、この子は私の息子なのだな」

穏やかな安らいだ気分が抱いている腕越しに伝わってきた。じつと顔を覗き込むと、眼が開いた。アナトの眼だ。幼く無垢であった頃のアナトの眼そのものだと感じた。

（今度は穏やかに平和に生きる事が出来るだろうか、息子となった

アナトよ)

つい、そう呼びかけてしまう。

まだ生まれてひと月と経たない乳児の顔に、微笑と見えなくもない表情が浮かぶ。

「あ、浄が笑った！　ね、笑いましたよ」
「そうだな」

この日ようやく、私はこの存在を息子として受け入れることが出来るという確信が持てたのだった。

70 黄金の雲

「その浄君の御顔を見てから、強烈にこのようなビジョンが我々の意識に焼きつきました」

「この作品はそのビジョンをそのまま形にしたというだけの事です」「非常に気に入った作品ではありますが……」

「こちらのお邸に置いて頂くのが筋で有るような気もいたしましてな」

「さよう、さよう。やはりここが一番ふさわしい場所の様な感じがいたしましてな」

日曜日の午後に、いきなり百目鬼の御兄弟がおいでになったのは驚いたけれど、持ってきてくださった作品は彫刻の背景に絵画を組み合わせたもので、あの古代遺跡で見つかった治さんと私とアナトが雲に乗って出かけるときの姿を現した塑像にどこか似ていた。

「ありがとうございます」

治さんは深々とお二人に一礼した。百目鬼の御兄弟の作品は人気があり、各自治体や有名企業などからの依頼も多いらしいのだが、あいにくと寡作で、注文を受けていただけたとしても出来上がるまでに何年も待たねばいけないというのが、常識らしいのだ。それが、こんなにも短期間で作品を持ってきて下さるというのは、めったにある事ではない。ましてやこちらが注文したわけでもなく、作者のお二人が自発的に制作なさったのだ。その点でも珍しい作品だと言える。

「これは、今の私たち家族三人ですね。何だか楽しい雰囲気が好きです」

私がそういうと、お二人は頷かれた。私の腕に抱っこされている
浄はまだぎこちなくしか動かせない小さな腕をふり、作品を指さそ
うとしているようだった。

（雲、雲、金色の雲、みんな、一緒！）

頭の中にいきなり、こんな言葉が飛び込んできた。

「まあ、浄！ お話ししようとしてくれたのね」

治さんも、百目鬼の御兄弟もこの言葉を感じて、ちょっと驚い
た様子だ。

「おお、気に入ってくれましたかな？」

「そうですね。わかっていただけたようすな」

「浄はこれが気に入ったかな？」

あの遺跡から出土した神像とそっくりの腰布と冠を身に着け、上
半身は裸で大きな胸飾りを付けている男性が治さんで、白い貫頭衣
をまとい花輪を頂いた女性とその腕に抱かれている赤ん坊が私と浄
なのだろう。

「三人揃って出かけた時の楽しい気分はそのままに、新しい家族と
して私たちはこれから生きて行く……そんな私達にふさわしい作品
ですね」

治さんの言葉に、皆、頷いた。

皆で和やかに夕食となった。

「おおおっ、ちらしずしですか。いやあ、よろしいすな」
「おかずも色々ありますぞ」

めいめいが好きなように取り分けていただくようなスタイルにしたのだ。このちらしずしは私がこの邸で暮らすようになった初めての日に食べた想い出の味でもある。季節の魚のお刺身、青菜の和え物に胡麻豆腐、茶わん蒸し、全部私が白羽の家に住んでいたころ、祖母に作ってもらった懐かしい味だ。具だくさんの味噌汁は、以前百目鬼の御兄弟がお好きだと伺っていたので、調理場の太西さんの心遣いだろつ。

「こんなに美味しい物を食べずに、昔はどのように生きていたのか、不思議な気がします」

「何でも味噌汁にすると旨く感じます」

百目鬼の御兄弟は色々なものを味噌汁に入れて召し上がるようなのだ。

「制作の間は味噌汁と握り飯で食事は終わりです」

「余りに御馳走を食べすぎると、頭の働きの鈍くなりますが、まずいものを食べると制作意欲がしばみます」

「レタスを入れますとな、なかなかにうまいですぞ」

「アボカドがなかなかに美味しいのです。完熟したものが良いです」

「アスパラガスも良いですぞ。薄く切りましてな、さつと火を通す程度ですが」

「春は菜の花が」

「夏はオクラやトマトも良いです」

「秋はやはりキノコだ。サンマのつみれも捨てがたい」

「冬は白菜とかタラとか、これもうまい」

浄は離乳食が始まったところだ。天然の良いだしで煮た野菜類なら美味しそうに食べる。無論裏ごしをしてやるのだけれど。大人用

の味噌汁から取り分けて、茶こしや小さなすり鉢でつぶせば大丈夫みたいだ。

「おお、味噌汁の具がお好きかな？」

「我々と話が合うかもしれないな」

お二人の言葉を理解しているのだろう。浄は機嫌が良い。ひとしきり食べ終わった後で、少し席を外して失礼して母乳を飲ませたら、気持ちよさそうに眠り始めた。

「奥様、あとは私達にお任せください」

浄の世話係の二人にあとはお任せして、私は席に戻ることにしたのだが……

「あれ？ 金色の何かが見えた」

「何ですか？」

「何か見えましたか？」

世話係の二人には何も特に見えなかったらしい。席に戻ると、百目鬼の御兄弟と治さんはお酒を飲み始めていた。ちょうど御兄弟が以前好きだとおっしゃっていた銘柄の日本酒が有ったので、冷でお出したようだ。

「これはうまい」

「いくらでも飲みたくなりますぞ」

「厚揚げにネギ味噌とは、また、乙ですな」

「エビとエリンギの組み合わせですか。うまいな」

非常に盛り上がっていたのに、三人とも急に話を止めて私を見た。

「おや？」

「おや？」

「アリエル、何か有ったのかい？」

何がどうしたのか私にはさっぱりわからない？

「私に何か変なものでもついていませんか？」

「そうじゃないよ。だが、ごらん、金色の波動がアリエルの体から出て、私に届いた」

「ついさっき、浄の部屋で金色の何かが見えたような気がしたのですが」

百目鬼の御兄弟はニコニコなさった。

「めでたい、これはめでたい事だと思いますぞ」

「さよう。昔、あなた方がそろってお出かけの折には、このような金色の波動が度々感じられたものですぞ」

「黄金の花びらを振りまくように見えましたな」

「そのうち、もっとたくさん出る様になるかもしれませんな」

治さんは、一瞬難しい顔で考え込んだようだったが、すぐに元の表情に戻ってからこう言った。

「まだ浄がお腹にいた時は、アリエルは金色の波動が見えないって言っていたよね。それが見えるようになったのなら、かなりの進歩じゃないだろうか？」

百目鬼の御兄弟はその治さん御言葉に「めでたい、めでたい」「実に結構な事ですな」などと口々に仰った。

お二人が帰られて二人きりで寝室に入ると、治さんが言った。

「あの作品自体、不思議な力が有るようだ。私の力が何だか増幅されたように感じるのだよ」

「私は……わかりませんが、金色の波動がようやく見えるようになったのは、大きな変化です」

「あの作品を見たとき、どう感じた？」

「楽しい気分になりました」

あれ？ ここはどこだろうか？ 一瞬で二十一世紀の日本とは全然様子の違う世界に出た。妙に土地が平らで、日差しが強い。大きな河がゆっくり流れている。空気は相当乾燥しているようだ。パジヤマ姿の治さんについて歩く。屋外をこんな格好で歩くななんて、何だか間抜けている。どうやら草の生えている所をめざし、日陰を探しているようだ。

「驚いたな。ここは我々の生まれ故郷ではないか」

「そうなのですか？」

「ほら、ナツメヤシが実っている」

「え？え？」

「ほら、あそこだ」

葉っぱが勢い良く伸びて、幹がごつごつした、いかにもヤシって感じの木から、何か房状に固まって垂れている物が有る。

「木の上で乾燥したんだな。うまい具合に食べごろじゃないか」

治さんは羽を広げて実の高さまで体を持ち上げ、一房切り取ってきた。着地するとすぐ羽は仕舞い込まれた。

「お食べ。この赤く完全に熟して少し糖分が結晶化してるのが、特にうまいよ」

私に美味しそうな粒を渡してくれようとしたとたん、自宅の寝室に戻っていた。

「おや。元の部屋に戻ったか」

「一体、なんだったんでしょうか？」

「百目鬼の御兄弟に頂いた作品の力かな？ それしか原因は考えられないが」

「それにしても、ナツメヤシの実はちゃんと持ってきたんですね」

「本当だな。皆に食べさせてやるうか？ まだ、大抵のものは起きているだろう」

食堂に行くと、横島さんと大西さんが待っていた。調理場の人たちも揃っている。

「懐かしいですね。デーツとは」

横島さんが嬉しそうに言うと、大西さんがこれまた嬉しそうに言った。

「早速、アーモンドを入れましょうか。クルミでもピーナッツでもナッツ類なら何でも宜しいのですが」

実を枝から外し、更に種を抜いて、そこにアーモンドを詰めてくれた。私が一番好きなナッツがアーモンドだからだろう。

「そうだ、アリエル、ナツメヤシは母乳の出を良くするのだよ。さらには妊婦にも産後の体にも良いときている。ぜひ食べなくてはいけないな」

安眠を誘うカモミールティーとアーモンド入りナツメヤシをゆくり食べる。そうこうする内に刻んだナツメヤシの実を混ぜ込んだ生地の手トケーキが焼けた。さらに滑らかなペーストをバニラアイスにかけて物も出た。

「ナツメヤシって、色々美味しい使い方があるんですね」

「昔はただ、生の熟したのと、干したのを食べたただけだな」

「私、その頃の事は何も覚えていませんけれど、これを食べたらか大切な事が思い出せるかな」

初めて食べた物ばかりだったけれど、大西さんの腕前のおかげだろう。どれもとても美味しかった。食堂に居た人皆と、分け合って食べた。

「召し上がってからお休みになると、良い夢を御覧になるかもしれませんね。何しろ特別なナツメヤシですから」

横島さんも何だか嬉しそうだ。

「百目鬼の御兄弟の力があの作品に籠っているのだろうなあ。いきなりなので先程は驚いたよ」

「でも、楽しい素敵な事でびっくりするのは、悪くないですよね。

あの作品の波動はとも明るいですから、悪いことを巻き起こすとは私には思えません」

「私もアリエルの意見に賛成だよ」

「私もあの作品で困った事が起るとは思いませんが、浄様のお力も大きく作用しているのは確かでしょう」

「ああ、浄の分、とって置けばよかった！」

私が思わず言うと、大西さんがちゃんと加熱したペーストを取ってあると言ってくれた。

「明日、パン粥にでも混ぜて差し上げたらいかがでしょうか？」

なるほど、それならあの子でも食べられる。ほっとしたら、何だか急に眠くなってきた。

「眠ったらまた、びつくりするような事になったりしますかねえ……」

あまりに物騒な所に出たら、どうすればよいのだろう？　ちよつとばかり心配だ。

「私にもどうなのか分からないが、悪い夢にはならないと思うよ」
治さんが言うと、横島さんと大西さんも頷いた。

それから寝室に戻って歯を磨きなおして、眠ったのだが……今度の夢では治さんも私も浄も、あの作品と同じ身なりだった。三人で川の字になって、涼しい木陰の青草の上に寝転んでいるのだ。緩やかな優しい風にはほのかにナツメヤシの実の甘い香りが漂っている。

「ああ、何だか幸せ」

夢の中でそんな事を呟いて、私は深い眠りに入った。

「んー、困ったな」

「どうしたの？」

「レポートの題材さがしなのですけど」

大学の単位取得に関わる大切なレポートらしい。だが、アリエルはまだ相変わらず夜中の授乳に起きる毎日で、あまり無理はさせたく無い。幸いにして、私の仕事での知識が役立ちそうだ。

「これは社内的な学習会で使った資料だが、統計的な資料以外は大半使えるんじゃないか？ 私が書いた文章だから、著作権だのなんだかんだの問題は全部クリアできているわけだ。使った資料や参考文献のリストも有るから、使えば良い」

「丸写しみたいになつては、気が引けます」

「普通の学生では無関係なはずのあれやこれやに関わっているのだから、構わないではないか。ただでさえ寝不足気味なのだから。無理をしたら体を壊すから、この程度の事で役に立つのなら、せいぜい丸写しでもなんでも利用しなさい。教養課程で足を引っ張られていては、先に進めないし。自分で言うのもなんだけど、参考資料はかなり使えると思うよ」

先に単位を取ってしまったから、時間の余裕のある時に見直せばそれで十分という私の言いぐさが、少々気に入らなかったのだろうが、それでも不承不承「丸写しみたい」なレポートで切り抜ける事にはしたようだ。三年生に進級する目途は立った方が良く、割り切ってくればよいのだ。

「後は、第二外国語ですね」

「中国語にしたんだったよね」

「ええ。話す人間の数が一番多い言語なので」

「前世の記憶が蘇れば、私のように自由に使えるようになるはずなのだな」

「そうなんですか？ 私達、中国にも住んでいたことが有るんですか？」

「うん。全然思い出せないかい？」

「中国語が、とっつきが良さそうと思ったぐらいで」

二回転生した場所の言葉であるから、現代とは多少異なっているとはいえ、親近感が有って当然なのだが。

「余り楽しい場所では無かったけどね」

「苦労したんですか？」

「二度目のほうだけど、どうにも君が病弱で、私も年中ハラハラしっぱなしだった。最後は血を吐いて君が亡くなってしまったんだよ。ザンジバルで暮らした頃が続いて、また結核だな。他にもあの社会ならではの特殊事情が色々あって、互いの想いは深かったのについて男女として結ばれることは無かった」

アリエルはじつと私の顔を見た。

「何だい？」

「その、結核で死んじゃった時の私って、なんていう名前でした？」

「王静蕾、ワン・ジンレイ 私はいつも阿蕾アレイとよんでいたな」

リ・ユンタン
李雲台としての記憶は二十数年かそこらの短いものだ。清にアヘンが入り始め微妙に国勢が衰え始めたころの地方の素封家の息子で、とくに有名でもなんでもない人物で、アリエルの転生先を見定めたら、すぐに死んでしまったのだから。

「ひょっとして、ザンジバルの次の転生先でしたか？」

「そうだ。病弱なカルマは、ずいぶんしぶとくてね。この日本でようやく健康になれたみたいだね」

阿蕾が亡くなった朝は、雪が深かった。葬式の日も雪だったし。

そのあとすぐに私が酷い風邪で死んでも不自然ではないくらいには寒かった。こんな事を考えて眠ったせいだろうか。

「おや？ これは李家の離れだな」

ふと見ると？^{カン}の上に敷いた布団の中に居て、隣に静蕾が横になっているが、目を覚ましていた。

「あれ？ 治さん、ここって中国ですよね」

こんな事を言うとは、隣の静蕾の中身は日本で結婚したアリエルなわけだ。ああ、会話が日本語だから、静蕾の訳が無いか。

「うん。前世の君の部屋の寝台。真冬はこっぴうカンて言う、熱を通した寝台で眠ったもんだよ。布団を上げてここでちよつと食事したり、親しい人間なら一緒に座り込んで茶でも飲んだりしたものだ
が」

「一緒に布団で良く寝ていたんですか？」

「この程度の事はしたけどね」

私は抱きしめて、額にキスをした。ちゃんと静蕾だったころの朝鮮人参の入った煎じ薬と白檀と茉莉花の香りが微妙に混じった香りがする。

「当時の中国で、こんなことをする仲って、どう言う関係でした？」
「どう言うつて……婚約者だった。というか、対外的には妻だつて言つてた。式を挙げていないだけさ。だが本当に寝ていただけなんだ。ザンジバルの時とは違つて」

「それって、反省なんですか？」

「どうなんだろうなあ」

「このまま眠つたら、どうなるんでしょうか？」

「日本に戻るんじゃないか」

「戻らなかつたら？」

「大学は留年だな」

「もう！ 真面目に言つてるのに」

「真面目に言つてるさ。恐らく大丈夫だ。こうやって抱いておいてあげるから、安心して寝なさい」

「あ、待つて、明かりをつけてくれませんか？」

私が火打ち石でろうそくをともしたら、アリエルは面白がつた。確かに二十一世紀の日本では珍しい。

「ほら点いたよ」

「治さんの顔が見たいんです。うはは、本当に辯髪なんですね」

とあるアニメのキャラクターみたいだと面白がる。

「そりゃあ、そこその名家の坊ちゃんだもの。当たり前だろう」

「髭が、思いの外似合うじゃないですか」

「そうか？」

「日本でも、伸ばしてみます？」

「いやあ、こんな髭は変なやつだと思われるのがオチだよ」

「なんか、残念。髭に触らせて下さい」

それから互いの着ているものや、私の辮髪の先についている真珠と金の飾りを弄って面白がっている。

「私の顔がどんな感じか見えないのが、ちょっと残念」

「毎日鏡を見て、ため息ばかりつくから、この部屋から鏡を失くしてしまっただ。手元には無いよ」

そう言えば痩せ衰える自分の顔を鏡で見て、静菫はよくため息をついていたものだ。

「いい加減、寒いから、布団の中にちゃんと入りなさい」

「外は雪ですか？」

「ああ。多分ね。氷点下なのは間違いない」

「見たいなあ」

「出入り口は侍女が居るはずだし、窓は外からも鎧戸でしっかりと締めているから、景色は無理」

するとその時、ドサツと言う音がした。その後はまた、しーんと静かだ。

「今の何の音でしょう」

「雪が木の枝か何かから落ちたのだろう」

「た、確かに寒いですね」

「だろう？ だから、こうやってちゃんとくつついてないと」

寒い。そんな事を言っただけでアリエルはびったり体を近づけた。あの静菫ならこんな行動は考えられない。同じ魂が元になっていても人格の現れ方は色々なのだと、また新たな感慨が生じた。

「おやすみ」

気が付くともう、腕の中の少女は深い眠りに入っている。私もつ

られて眠りに入った。そして、目覚めた翌朝は、いつも通りの二十世紀の日本の我が家だった。

「おはようございます」

「おはよう。無事に戻ったようだね」

あの作品が家の玄関ホールに飾られるようになってから、奇妙な夢はこれで二度目だ。

「あれ？ これって」

アリエルが驚いている。手の中に握り込んでいたものは李雲台の辮髪の手につけていた真珠の飾りだ。

「あつちの雲台が慌てているかもしれないな。親の形見だから」

「ありやあ。じゃあ、返してあげないと」

「どうなのだろうな。昨夜の私は雲台そのものだったから」

「あれは入れ替わってるんでしょうか？」

「じゃあ、こっちに雲台と静菫が居たのかな？」

「だとしたら、何かやっぱりなくなっていたりしません？」

部屋を見渡しても、特に異常も感じられなかったが……

「あ！ やっぱり無い」

「何が無いんだ？」

「写真立てというかフォトフレームです。写真館で撮った」

「初宮参りの時に、三人で撮った写真か！」

大判の写真もネガも有るのだが、L版サイズでアリエルが透明な樹脂製の写真立てに入れてベッドの枕元に置いていたものが、その

写真立てごと無くなったみたいだ。たしか地震対策も考えて、ガラスではなくアクリル樹脂を選んだのだったと思う。

「あんまり高価でもない樹脂製で、この真珠と引き換えなら申し訳ないみたいなものですね」

「熱に弱いのをわかつているかな？」

自分で過去の自分の意識に呼びかけるのは奇妙な感じだが……どうやら、意識は繋がっている。

「どうですか？」

「どうも、この世界の知識はそのままあちらの側にも伝わったようだ」

となると、こちらはどう変質してくるのだろうか？

「浄が何か考えているのでしょうか？ だって、百目鬼の御兄弟が顔を見て浮かんだビジョンであの作品が出来て、その作品がこの家に来てから、リアルな前世の夢を見るのですから……」

そのアリエルの言葉が真実を突いていると、私は感じた。

「浄が過去のよじれを直したがっている。あるいはより自分にとって都合の良い未来を手にするために、何かやろうとしている」

「治さんみたいな言い方をすると……悪いことを企てているように聞こえちゃいますけれど……それなら、百目鬼の御兄弟が力を貸すでしょうか？」

「それも、そうだな」

私は未だにアナトを許せず、その為に浄を信じられないのかもし

れない。

「おっしゃるように過去の何かを変えたがっているのだとは、私も思います。でも、それは、あの作品の様な私達でいるためのじゃないでしょうか？」

親子三人、仲睦まじく有るために……そうなのか？ 本当になのか、浄？

その夜、また、夢を見た。

場所はあの静菴の部屋だ。だが、今度は昼間で、どう言う訳か人の気配が無い。窓を開けてみると、外は一面の銀世界だ。

「ここにあつたのか」

問題のフォトフレームは、火の気のなくなつた？^{カン}から少し離れた窓辺の飾り棚に置かれていた。親子三人の写真を見て雲台と静菴は次の世で自分たちが無事に夫婦となり子を儲けると知つたわけだ。すぐ横に幼い子供が桃の実を抱えた姿の小さな翡翠製の人形が置かれている。良く見るとフレームの下には幸福を招くとされるコウモリ柄の赤い錦の布が敷いてあるのだ。

どうやら、同じ光景をアリエルも夢に見たようだ。

「もう一枚、焼き増した分が残ってましたから、写真はここに飾つて……その隣にこの真珠を置きましょう。そして下には宝尽くし模様の端切れを敷きました」

「これは、あの振袖の端切れだね？」

「ええ。作って頂いたけれど、まだ着る機会が無いですね」

「そう言えば、出産育児でバタバタして、成人式の振袖の記念写真、

撮り損ねたなあ。妊娠しなかったら園遊会なんかも行く予定が有ったんだけど、ちょっと残念だ」

「きつとまたご招待いただけますよ。でも、振袖は無理ですけど」

「ごく若い既婚者は、振袖だって非常識だとは言わないよ」

「そうなんですか？」

「そりゃあ、茶会なんかは無理にしても、パーティーとかレセプションなら、まだまだいける」

朱色のぼかしに金糸の刺繍で彩られた華やかな振袖なのだ。大きな会場でも一際華やかに目立つだろう。そうだ写真だけでも撮らなくては。

すぐに週末にうちの系列ホテルで一番腕の良い美容院につれて行き、髪を整えて振袖を着付け、これまた腕の良いホテル専属のカメラマンに写真を撮らせた。折角だから振り袖姿を見たがっていた百目鬼の御兄弟とベルゼバブとバルベリトを食事に招待した。浄にも離乳食メニニューを用意して参加させる。

「浄君のおかげで素敵な振袖姿を拝見できました。いやありがたい」
「浄君に感謝ですぞ。いやあ、眼福、眼福」

百目鬼の御兄弟の言葉を聞いていると、浄の存在が祝福すべき良きものだと思え始める気がしてくる。

「おや、雪ですぞ」

「おお、雪ですな」

「立春過ぎに、珍しい」

ホテルのレストランの大きな窓から、外の庭園の様子が手に取るように見える。

雲台と静養も、やはり雪景色を見ているのかもしれない。ふと、
そんな気がした。

71 雪（後書き）

ええ、静菫が正しいです。ぶれてすみません

72 満一歳

私が大学二年生の春に生まれた浄は、このほど無事に満一歳を迎えた。身近な人だけで、ささやかにではあるが、初めての誕生日を祝った。治さんより、百目鬼の御兄弟や邸のスタッフの方が喜んでるように見えるのが、気になるといえば、気になった。無論、私がそう感じただけのことなのかもしれない。治さんは、いつも優しく細やかな愛情を私に示してくれるのだから……

あの粘土板の上に植えた桃の花がちょうど綺麗に咲いている。二年生の時期は休学も考えたが、単位登録は治さんが代わりに諸々の手続きをしてくれたし、後期に単位取得を集中させたいし、時にはレポートを写させて貰ったり、追試を受けたり、翼や剣道部の皆が助けてくれたり、二人の浄のためのスタッフの力もフル活用したいし、どうにか乗り切れた。

「中国語が急に出来るようになって、びっくりしました。前世の記憶のおかげですね」

「浄が生まれて以降、アリエルの前世の記憶は、かなりはつきりしてきたようだな」

「でも、ラテン語もポルトガル語もわかりません」

「スペイン語は？ フランス語に英語、アラビア語は？ そうそう、最初の中国大陸での生活は思い出せた？」

「いえ、全然」

「ふうふうむ」

「最初の中国大陸って、いつの時代なんですか？」

「後漢だよ」

「なぜか一度も、そんな夢は見ても……浄の因縁とか、事情とか、そんなものが関係していたりしないでしょうか？」

「たとえばどんな」

「それは、私もわかりません。そのうち浄が自分で話をしてくれるんじゃないでしょうか？」

最近の浄は、言葉を少しばかり発する。治さんを「おーむたん」、私を「える」、横島さんは「よーたん」と呼ぶのだが……私達夫婦をお父さんとか、お母さんと、呼ばせるべきなのだろうが、私は敢えて訂正しようとも思わなかった。世間的な常識からすると変なのかも知れないが……

「恵瑠だけが呼び捨てなんだな」

「もと妹だからでしょうか？」

「うーん」

「最近、直接浄が、意識に話しかけてきませんか？」

「いや、私にはさっぱり」

なぜ、治さんには話しかけないのだろうか？

浄を抱っこして、桃の木の所に行く。ここだと一番浄が話しかけやすいらしい。

（おーむたん、おこってる）

（怒ってるかなあ。私にはそうは思えないけれど）

（まだ、おこってる。ごめんしないと、だめ）

（ごめんするのは、どうやればよいの？）

（おでかけ！）

（お出かけ？ どこへ？）

（さいしょのおうち）

（昔、治さんや私たちが神として存在していた場所かしら？）

浄は思念を私に送った後は、かなり疲れるらしい。今も眠ってしまっている。

「おやおや、これから夕食の時間なのに、眠ってしまったか」

「私達、『さいしょのおうち』に出かける必要が有るらしいのです。浄がついさつき教えてくれました」

「何？ 浄が？」

「ええ。そうです」

「私達が神であつた場所だろうか？」

「そう聞き返したら、眠ってしまいました」

それでも、夕食の時間にはやはり起こす。大西さんの料理はおいしいので、浄も食べ始めるとぐずりかけだったのが直った。

「どるま！ どるま！ おいしい」

スプーンを振り回して、もっと欲しいとねだられたのは中をくりぬいたピーマンに、挽肉・みじん切りのたまねぎ・ハーブ・お米なんかを詰めて、トマトベースのスープで煮込んだものだった。

「やはり、あのころの御馳走に近い感じの物ですから、喜んでいただけようですね」

大西さんは、心得顔でニコニコする。

「懐かしい味だな」

治さんもなじみの味らしい。

「これ、ドルマっていうものなんですな」

どこか昔食べたような気がするのは、本当に私も昔食べたからなのだろう。私だけが綺麗さっぱり、過去生の記憶を失くしているだけのことで……

「こちらの魚も、あちら式の焼き方です。日本風にお醤油をかけて下さっても美味しいですよ」

「ふっくら塩味の焼き魚って感じだけど……この魚、なんですか？」

かなり大きな魚だが、腹開きじゃなくて、背開きというのが変わっている。

「鯉だろう」

治さんは、こっちも記憶に有る料理らしい。なぜか珍しい事に、眉間にしわが寄っている。何か不愉快な記憶でも有るのだろうか？ふと、そんな気がした。

「さようでございます」

大西さんも治さんの表情が、気になるようだった。明らかに、普通ではない。料理自体は淡泊で、なかなか美味しい。治さんは、全然手を出さないが、鯉が嫌いと言っはずも無いし、何なのだろう？ 浄は魚の身をほぐしてやると御機嫌で食べた。

「ますぐーふ、ますぐーふ、ね？」

「そうですね。坊ちやま。マスグーフですよ」

火の回りに杭を立てて、その串と串の間に開いた魚を挟み込むようにして焼くのだそうだ。原始的だけど、なかなか美味しい焼き

方の様だ。その大西さんの説明の間、治さんの眉間のしわはますます深くなった。

「坊ちやま、デザートはクルミと人参の入りましたケーキですよ」

「あちらのものより、かなり甘さ控えめだねえ」

「優しい味ですね。ほっとする甘さで、おいしい」

「うん、おいちい」

飲酒を禁止している宗教の信者が今では多いせいか、猛烈に甘いケーキが好まれる傾向が強いそうだ。

「私は日本風のアッサリした甘さの方が、もう馴染んでいるけどね」
「大西さんがこのメニューにしたのは、何か理由が有ったんですか？」

「坊ちゃんの御顔を拝見していて、昔住んでいたあたりの食べ物が懐かしくなりました。作りました」

浄の顔に触発された人、第二号と言う事らしい。

横島さんが「あちら式のコーヒーになさいますか？ それともエスプレッソでしょうか？」と尋ねると、治さんは「ドリップが一番飲みたい気分だ」と言う。あちら式というのは、いわゆるトルココーヒーらしい。甘さが重いので、私も治さんに合わせてドリップ式の無糖ブラックにする。ケーキの甘さとちょうど良い感じのバランスだ。

「浄、おやすみ」

今は浄は、生まれたときからお世話になっているスタッフと一緒に部屋の寝ている。

浄の部屋は、そもそも私が大学に入学してこの家に移り住んだと

き、使っていた部屋だ。

「私の部屋の鍵は何時でも開いているからね。では、おやすみ」なんて、ついこの間まで高校生だった女の子に言うような人と隣り合わせの部屋だったのだから、私に前世の記憶が丸で無くても今の状態になるのは当然かも知れない。

「前世の事をすっかり忘れているアリエルと、新しく絆を結びなおす時は、いつもドキドキする」

そんなふうに治さんは言うが、それでも最初から予定調和の設定を思い浮かべる事ができる立場なのだから、私ほどはドキドキしないと思うのだけれど、どうなのだろう？

それにしても、浄の「おーむたん、おこってる」という言葉は、どう考えたもののか。

「アナトが人間の世での我々二人の暮らしの中に入りこんだ事など、これまで無かったから、戸惑う」

治さんのこんな言葉からも、面食らっている状態なのは伺い知れる。でも、もう、生まれて一年たつのだ。

「治さん、浄の事、どう思ってます？」

「まあ、頑張って息子をやっているとは、思うよ」

「息子をやっている……ですか」

「全くの無垢な幼子だとは、やはり思えない。あの目は幼い頃のアナトそのものだしな。過去の悪行を綺麗に忘れて息子として認識するのは、正直な話、難しい」

私は先ほどの浄の伝えてきた『おーむたん、おこってる』とか

『ごめんしないと、だめ』とは、具体的にはどういう事だろうか、治さんに尋ねた。

「私はまだ、怒りを含んだ目で、時折あれを見るかもしれない。無意識だとは思うのだが。私はアリエルとは違って、過去の細かな事もすべて覚えているのだから、どうしたってそうなる。謝罪すると言うよりは、楔か過去の因縁の浄化が必要だとは、私も思うが……だから、その為に私達が最初に生じた土地に三人揃って出向く必要が有るのではないかな」

「だから、その場所に関係の有りそうな夕食の献立を、大西さんに作らせた……作らせたまでは言い過ぎかもしれませんが、そういうメッセージを出した、そんなところなのでしょうか？」

「今夜の食事は、間違いなく我々の生まれてきた場所なり、状況なり見つめなおすことが、三人にとって必要だと言いたかったのではなからうか？」

治さんは、今でもめったに浄に触れない。抱く事も稀だ。細やかな気配りはしてくれるが、それは母親の私の負担の軽減、そういういた方向性での気配りなのであって、浄本人のためとはいえない。

この人の事細かに記憶しているというアナトの悪行の数々を、私は綺麗さっぱり忘れている。腰まで血につかるほど凄まじい数の人間に対して虐殺行為を行ったとか、息子を殺したとか、話だけは聞いたが。

「全部覚えていって、大変ですね。全部忘れてしまえる私は、やっぱり治さんより随分と楽をしているのかもしれませんが」

「アリエルの場合、忘れていからこそ、今こうして浄の母親役が可能なのだろう」

「治さん、私に教えないでいるアナトの許し難い悪行って言うのが、有るんじゃないませんか？」

「有る。だが、おそらくこのまま知らない……いや、忘れている方が
良いのだ。だから今のアリエルに話す気は無いよ。知れば辛いだ
ろうから」

私に向けられる優しい穏やかな目……こんな感じで治さんが浄の
事を見る日は、あるいはずっと来ないのかもしれない。それにし
ても、楔……どうやって、何をやると楔になるのだろうか？

こんな事を考えながら私と治さんは体を寄せ合って眠ったわけだ
が……ヒントなのだろうか？ 夢を見た。

大きな河がゆったりと流れている。河原のたき火の火で夜に食べ
たドルマが大きな土鍋で煮えていて、別のたき火で、おそらく鯉な
のだろうが、背開きにされた魚が杭の間に挟まれて、焼かれている。

「さすがに、本場物は違うかな？」

夢の中で、私はそんな事を言った。すると背後に浄を腕に抱いた
治さんが居た。

「浄もこの魚みたいに、焼くか」

「ええ？」

「実際、私とアリエルの一番最初の子はそういう目にあわされたの
だしな。それをどうして、忘れる事なんて出来るだろうか。無理だ
よ」

「ええ？ それって」

「アリエルは事細かになんか、事情を知らない方が良いんだ。だが、
アナトであった頃のこれがしでかしたことは、他にも有るのだよ色
々と。よくもまあ、ぬけぬけとここに居られるもんだと、時折怒り
がわくのは、今の私にはどうにも出来ないよ」

治さんは浄を放り投げた。すると、すっぱり私の腕に治まった。

「今は……アリエルの腕の中に居る事を許すだけで、精一杯なんだ。わかるな、浄。完全な浄化のためには、あと十回かそこらは生まれ変わらないと、おそらくは無理だ。私はそう考えている」

「浄は……アナトだった時に、自分がしたことは覚えているの？」

「ちよつと、おぼえている」

幼い子供の口調ではなかった。

「どこまで、思い出したのだ、浄。何かの拍子に、全部を思い出すと、人間として普通に生きてゆくのも辛くなるだろう。その意味では浄、お前は気の毒だとは思うよ。だが、いずれは過去と正面から向き合わねばなるまいな……そうでなくては、この魂の浄化は出来ないはずだから」

治さんのその言葉に、父親らしい優しさは見られなかったが、真剣な苦悩が感じられて、私はそのことに希望を感じても良いのではないか、そんなふうに感じたのだった。

夢であつて、夢ではない、恐らく重要な意味合いを持つ夢は、そこで途切れた。

73 原点回帰（前書き）

もうすぐ終わります。

73 原点回帰

浄が言う所の「さいしょのおうち」に一度は三人で訪問する、いや、この場合は帰る必要が有るのだろう。夢で見て以来、私とアリエルそして浄は意識的に毎日デーツ、つまりナツメヤシの実を食べている。私自身が夢を経由して持ち帰った分が無くなる寸前に、最初はベルゼバブ、次はバルベリト、その次には百目鬼兄弟、そして昨夜は何とルシファアが夢経由で手に入れたというデーツを持ってきたのだ。

「王よ、どうやらこの実は、あなた達三人の良い関係を新たに作り上げるために必要らしい」

「やはり、そう考えるべきなのだろうな」

「それにしてもなかなか美味いと思うが、あの夢で実を取ってくる場所は何処なのだろうな？」

「我々の生まれ故郷だとは思うが、時間的にいつであるのかは見当もつかない。ルシファアは何か気が付いたのか？」

「そうだなあ。もしかして……」

「もしかして？」

「あなた方が生じる以前の時空ではないか、そのような気もする」

私はルシファアの言葉を否定も肯定も出来なかった。ろくに判断材料も無いからだ。だが、アナトなら可能かも知れない。ルシファアが引き上げてから、私は念を集中させ今現在の浄ではなく、アナトの意識に呼びかけた。

「答えよ、アナト」

隣室から大きな泣き声が聞こえた。浄だ。

「お、治さん、浄が、浄が、真っ赤になって怒ってます」

私はアリエルから浄を受け取った。体全体を強張らせ、私の顔を

見て睨みつけながら泣き続ける。やはりこの顔はアナトそのままだ。
「アナト、いないの！ 浄なの！」

「アナトに向かって呼びかけては、いけないのか？」
「めっ」

大きな混乱が引き起こされパニック状態に陥る、と言った所なのだろうか？

「浄はきつちり過去と決別して、新しく生まれ変わりたいと言う事なんじゃないでしょうか？ 治さんの呼びかけが強すぎて、反応してしまったのが悔しいみたいです」

「浄は、完全に生まれ変わりたいのだな？」

私の問いかけに対して、浄はコクリと頷いた。

「ねえ、私達の『さいしょのおうち』に行かなくちゃいけないのかしら？」

アリエルの問いかけに嬉しそうに微笑む。

なるほど、原点に立ち戻る事が重要か。やはり。

「今夜は、親子三人川の字になって眠りましょう」

アリエルが当然のような口調で、そう言ったので私は慌てた。

「二人で浄をはさんで眠るのか？ 私の隣はアリエルではないのか？」

「一晩だけですよ、きつと。だから、治さん、お願いします」

あまりにこだわるのは、それこそ大人げないとアリエルに思われちゃう。

「いやだなあ。治さん、凄く難しいお顔ですね」

「怖いお顔、めっ、め、よ」

二人にほぼ同時にこんな事を言われてしまった。

皆で夕食を味わった後、ゆったりした雰囲気の中でアリエルは浄に絵本を読んでやっていた。このところは日課になっている。二人が見ているのは、非常に精密な挿絵で地下鉄について分かりやすく解説した絵本だ。

「ほお、地下鉄の通る線路の上下がこんな構造だとは、私も知らなかった」

他にも『電気』とか『自動車』とか、技術的な事や設備や機械の構造が興味深く絵で説明されているシリーズのようだ。非常に面白い。私も欲しいぐらいだ。

「面白いですか？ 私もこの絵本の説明を見るまで、よくわかっていなかった事が沢山ありました」

「どれも今の社会の基盤となる技術で、我々が最初に生じた場所には全く存在しなかった物ばかりだな」

聞けば最初にアリエルが書店で見かけて『自動車』のタイトルが付いた絵本を買ってやったら、大いに浄が喜んだので、同じ絵本作家のシリーズものを揃えたと言う事のような。

「自動車と言えば……」

「以前、巫先生が出演された番組で紹介された遺跡ですけど」

「自動車関連の工業団地を造る予定だった場所だ」

「私達が最初に生じた場所とは、あそこは違うのですよね」

「違うが、すぐそばだ」

「そうなんですか？」

「川筋なども変わっているから、わかりにくいだろうが、三人で本気になって探せば、すぐ見つかるだろう。バルベリトを産んだ場所でも有るから、一緒に行った方が、もっと話が早いだろうか？」

「もうずいぶん昔に廃墟になった神殿でしたよね。綺麗な泉が有りましたっけ」

「ああ。そうだ。バルベリトだけではなく、あの折に色々助けてくれたベルゼバブも連れて行くか……」

「皆さんスケジュールが合わせられるでしょうか？ 財界人としての活動がお忙しいでしょうから」

確かにベルゼバブもバルベリトも忙しい体ではあるが……恐らく私達に協力は惜しまないだろう。話を終えて灯りを消したがどうも

寝つきが悪い。川の字で眠るなどという経験は初めてなので、アリエルと浄が気持ちよさそうに寝息を立て始めても、私はうまく眠れないでいた。

「無邪気な顔で眠っている所は、当たり前前の乳児だな。どこまでそれを信じてよいのやら」

当然ながら眠っている二人からは何の返事も無い。

「三人で初の海外旅行に出かけるべきだと、そういう事か？　ワーブでは無理なのだろうな。浄の能力が未開発な訳だから……」

こっそり起きて、寝酒でも煽ろう。こんな事は、久しぶりだが結婚前は別に珍しい事では無かった。書斎の小さなバーカウンターで何か作ろうと酒瓶を見ていた所、気配に敏いアリエルには気づかれてしまったようで、起きてきた。

「治さん、お酒でも召し上がるんですか？」

「ああ。久しぶりにどう？　授乳中だからまずいかな？」

「浄も一歳過ぎましたし、もうすぐ断乳です。一杯ぐらい大丈夫ですよ」

私はブランデーとキュラソーとペルノを取り出した。

「じゃあ、一杯」

「治さんのシェイクする格好、決まっていますよね」

「パジャマでスリッパじゃ変だけどな」

カクテルグラスに注いで、勧める。

「これ、ブランデーベースですよ。美味しい。何て言うカクテルですか？」

「気に入ってくれたようで良かった。これは『ドリーム』って言うのさ」

二人でゆっくり一杯飲んだ後は思いの外心地良い眠気がやって来たようだった。

「あれえ？　ここはどこなんだろうな？」

夢の中に簡単に入り込めた。空気が感じが明らかに日本とは違う。だが、今度はナツメヤシとは関係無さそうだ。水が湧き出て流れる音がする。引き寄せられるままに歩いて行くと、見覚えのある巨大な岩の三メートルほどの高さの割れ目から、清らかな水が湧き出て下の岩盤に流れ落ちていく。岩盤の窪みはちょうど大人が三人ほど入れそうな大きさだ。おや？

「アリエルもここに來たのか？」

「浄も一緒ですよ」

なんと二人は岩盤にたまった清水の中に入っていた。

「はじめのおうち！」

「そうだな。我々が生じたのはこの泉だな」

アリエルは驚いたようだった。

「ええ？　そうなんですか？　神様の場合、親って、どうなるんです？」

「父なる神と母なる神の想いがこの泉で三体の神の形となったのが、我々なのだ」

「両親はどうなっちゃったんですか？」

「人々にも忘れ去られ、天地の大いなる流れに還って行っただ。人として生きた経験が有るわけでもないからな、そのあたりは意外とあっけらかんとしたものだ」

「そんなものなんですか？」

「そんなものだよ。我々が生じたのは、両親の力より、この土地の力が大きいのだよ。聖地というか、パワースポットとも言つべき場所だな」

「へえええ……この場所って、今でいうとどこの国なんですか？」

私は中東のとある地名を挙げた。

「この泉って、かなり大きいし、そんな乾燥地帯では水量が豊かな泉って珍しいんじゃないんですか？」

「これは太古の姿だ。やつと人間が地球上に現れたばかりの時期にあたる。今はもはやこのような形では無い。此処には大神殿が建てられたが、やがてそれも忘れ去られ廃墟となった。アリエルがバルベリトを産んだのは、その廃墟の一角だ」

「ああ、そうだったんですか。更にあれから、ずいぶん時間がたつてますよね。じゃあ、今現在の現実のこの場所はどくなっているのでしょうか？」

「土に埋もれたのだらうよ。巫教授の調査が進めば、場所もはっきりするだろう」

「もうすぐはつきりする」

アナト、いや、浄が子供らしい高い声で断言した。

「へええ、そうなの？ 浄」

「そうだよー」

「そうなれば、我々三人で現実の世界でのこの場所を訪問する必要が有る。そうだな？ 浄」

「そうだよー」

三人が眠りから覚め、そろって朝食を終えた後、TVをつけると久しぶりに巫教授がニュース映像に登場していた。

「おい、あれって……」

「本当、浄の言った通り」

巫教授は「謎の大神殿が発見された」と言う興奮気味の記者に向かって、穏やかな口調で説明していた。

「もともとは水量の豊かな泉を中心とした聖地であったようです」
「そこに、このプラン図のような大神殿が建てられたのですね」

浄は画面をじっと見ていたが、大声でこう言った。

「行くの！ みんなで行くの、ここに」

どうやらそれが必要だと、私は納得し頷いていた。

74 再生した絆

遺跡は平らな小高い丘の上に有った。

「日本から随分離れているねえ。今更だが」
「でも、ここが私たちの故郷なのですね」

恵瑠はもうすぐ三歳の淨の手を引いて、広がる景色を見渡していた。治は淨のもう一方の手を取って、頭を優しい手つきで撫でている。かつての息子であるベルゼバブとバルベリトも、更には新婚のルシファーと翼もついてきたのだ。ルシファーは翼の大学卒業を待って、拳式入籍を果たした。

「不埒な高校教員に似合わない律義さだ」と治がからかうと、ルシファーは澄まして「翼に関しては、私は真面目で律儀なのだ」と応じた。今回の旅行は治たち家族三人の再生の旅であると同時に、ルシファー達にとっては新婚旅行でも有るのだった。

更には横島や大西、その他前世の記憶を明確に持つ会社で共に働くかつての「子供たち」もつれていったので、ルシファーに言わせると「新婚旅行というよりは修学旅行の様な」大きな一団になった。皆で連日発掘調査が続くこの遺跡を、訪ねたのである。

日本とは違い、乾いた風が吹く。

巫教授の参加している発掘調査団は既にかつての神殿のプランをほぼ完全に明らかにしていた。大きな礎石と石の柱、レリーフなどが次々見つかったのだ。あの、神聖な泉とその周辺の設備もかなりの部分が解明された。

「あなたも前世でその姿を毎日の様に見ていたはずなのだがな。御

記憶は？」

治が隣に立つた巫教授に語りかけると、教授は首を横に振った。

「はつきりとした記憶は有りません。ただ夜眠っている時に、このレリーフの男たちの様に髭を生やし、ゆったりした衣装をまとった自分が、泉の前で額づいて何か祈っている様子を夢に見ました。あの時の私は、友なる神の父である大神のお告げを聞こうとしていたのですね」

「当時のあなたは……私に何か話をしておきたい事があったのでしょうか」

「何でしょうね。今となつてはさっぱりわかりませんが」

「確か、雨乞いと豊作の祈願であつたかと思えますよ」

「ああ、なるほど！ あなたは水に御縁の深い方なのですよね」

「そうです。我が父なる神には鱗が有りましたし」

「当時の神としてのお名前が、どうしても思い出せません」

「このアリエルですら覚えていないのですから、無理も有りません」

その言葉に巫教授は驚いた様だつた。

「それは、また、どうしてなのでしょうか？」

「名に込められた力を勝手に探られたり、奪われたりするのを防ぐための措置ですよ。アリエルはそろそろ思い出し、我が真名を呼べるはずだと思うのですが……まだなのです。浄は記憶しているでしょうが、口にできないのです。他の子らは私を『父上』と呼ぶだけでしたしね」

「ならば、私が神としての貴方のお名前を思い出せず、呼びかける事が出来なくても、当然なのですね」

「ええ。必然なのです」

そこへ、ベルゼバブとバルベリトが現れた。

「父上、淨ちゃん是我々が面倒を見ておりますから、お二人で行くべき場所にお出で下さい」

「御夫婦だけの大切なお話を、どうぞなさって来てください。我々は教授のお話を聞きながら、先にあそのこのテントでコーヒーでも飲んで休憩する事にします」

「わかった。そうさせてもらおう」

発掘調査団はコーヒータムに入っていた。治たちは差し入れとして、アイスボックス入りの冷えたジュースやミネラルウォーターも沢山持ちこんだのだった。

「じゃあ、淨、みなさんとジュースでも頂いて、お休みしていなさい」

恵瑠が言い渡すと、淨はコクリと頷いて、ベルゼバブとバルベリトに手を取られてテントへ向かう。その様子は聞き分けの良い幼児そのもので、かつての凶暴な女神の転生した姿とは全く見えなかった。

テントからは死角になる大岩の影に治と恵瑠は進んだ。

「さあ、もう少しこちらへおいで」

治は、かつての泉の場所を正確に探り当てると、妻の肩を抱き寄せた。

「あ！」

恵瑠、いや、アリエルは一瞬雷に打たれたような顔つきになった。「どうした？」

「思い出しました。治さんの元々の名前を」

「ならば、口にしてみなさい。ひょっとして涸れた泉が蘇るかもしれないよ」

「そうなのですか？」

「ああ。だから、言ってみてごらん」

両方の手を固く握りしめ、緊張した面持ちで居る妻を宥めるように、夫は背中を摩った。

「さあ、多少発音が変でも構わないさ」

「ええっと……」

妻の口から、漏れ出た小さな音は夫の真名とは似て非なる物だった。

「緊張しすぎだ。昔の様のようになを樂にして、落ち着いて、ゆっくりでいいんだ。ね？」

妻は頷いた。そして、恐る恐るという感じであつたが、今度は正しい名前を呼んだ。

「もう一度、今度は普通の声の大きさで呼んでくれ」

妻は微笑みを浮かべて、再びその名を呼んだ。すると……

グラッ

「地震か？」

「ええ？ 地震ですか？」

調査隊のテントから人々が飛び出してきた。巫教授は皆をなだめた。もともと「修学旅行の様な」一団は、誰一人テントから動かなかつたのではあつたが……

「思い出したのだな」

ルシファーが言うと、翼とベルゼバブとバルベリトが頷いた。

「誰が何を思い出したのですか？」

こつ質問するものは、全くの部外者だ。横島も大西も巫教授も「

子供たち」も皆事情を理解していた。

「あなた方は、王の真名は御存知無いのか？」

ルシファアは珍しく生真面目な様子でベルゼバブとバルベリトに問うた。

「存じません」

ベルゼバブの答えはあつさりしたものだったが、普段口数が少なめのバルベリトは少し熱っぽくこう応じた。

「父上は『我が妻以外のいかなる存在も知る必要は無く、呼ぶ事も許さない』と仰せでした」

ルシファアは興味深く二人の様子を見ていたが、はたと思い至った。

「バルベリト殿は、ここでお生まれになったのでしたな」

するとベルゼバブとバルベリトは無言で頷いだ。この時、兄弟の脳裏にはバルベリトを産むにあたって両親、とりわけ母の苦勞が昨日の事の様に鮮明に思い浮かび、言葉が出なかったのだった。

テントを出て行った皆がゾロゾロと戻り始めた。すると、さざ波の様に驚きの声が沸き起こり広がった。

「おお、あれは、何だ？」

「雲だ、金色の雲だ」

「ここが神々の聖域だった場所だからか？」

騒ぎをよそに、アリエルとその夫は再び蘇った泉の前で、互いに互いを抱きしめあっていた。

「人として生まれ変わって、初めての事だな」

「ええ。そうですね」

「もう一度、呼んでくれないか、私の真名を」

「はい」

妻は頷くと、夫の耳に口を寄せてそつとその秘密の名前を呼んだ。すると夫は深い悦びの感情が泉の水の様にひたひたと自分を満たすのを感じた。

「愛している。愛しているよ」

「愛しています。誰よりも」

二人は生まれた場所で幾度も幾度も口づけを繰り返した。それがどの程度続いたものであったか……わざとらしい咳払いが聞こえて、二人は互いを見つめあつて微笑んだ。

「ルシファー」

「翼」

新婚の二人は浄を連れてきたのだった。

「新婚の我々よりも情熱的なお二人に、今更ながら驚きました」
「そろそろ浄君も仲間に入れてあげて下さい」

かつては禍々しく強力な女神であつた存在は、今は愛らしい男児となつて、両親である二人の間に立つた。

「ああ、確かにその通りだな」

「浄、あなたにとつてもここは特別な場所なのだね」

偉大な三柱の神は、生まれ落ちたこの聖地の力と呼応して、自らの力と互いのきずなを強めた。

「明日は日本に帰ろうな」

「ええ。浄も良かったわね、一緒にここに来ることが出来て」
「うん」

その後ろで、かつては天使で有り、のちに悪魔となった存在が、人として互いに強いきずなを確認し合っていた。

「王よ。あなたはやはり偉大な方だ」

その言葉に、呼び掛けられたかつての偉大な神であった存在は柔和な笑みを浮かべた。

「偉大なのは私ではない。私を産み出し支えた力こそが偉大なのだ」
「あなたはその力を何と呼ぶのか？」

「さあ、な。どう呼ぶべきか知らないよ。でも、それで良いのさ」

「あなたの名は、永遠に秘密なのか？」

「さあ、どうだろうな」

丘の遥か下から、現在のこの国の人間が交わしている様々な言葉が聞こえてきた。

「耳を澄ませれば、聞こえるだろう。元は私の名であったものが、今は大切な存在を呼ぶ言葉に変化しているのが」

「そうなのか？」

「あつ」

ルシファアは要領を得ない様子であったが、翼はその答えの意味を悟ったようだった。

「女の人が、自分の夫や恋人を呼ぶ言葉かしら？」

「ええ、そうよ」

アリエルはにこやかにほほ笑んで答えた。

「まなのちからがてんちにみちている」

幼い淨の指す真実の意味合いを、両親は十分に悟ったようだった。

「ああ、金色の雲が大きくなったな」

「三人で乗れそうな大きさになりましたね」
「のっておでかけしたい」

その日、黄金の雲を目撃した多くの人々は明るい楽しい思いに満たされたのであったが、それが三柱の古い神々が新たに絆を確かめ合ったおかげだと知る者は、ほとんどいなかった。ただ、古い古い神話を思い返した者がわずかに居ただけだった。

74 再生した絆（後書き）

今まで、お読み頂きましてありがとうございます。ここで、この話はひとまず完結と致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1841/>

魔王の純情

2011年9月8日20時17分発行